
夏恋 - minstrel song -

流季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏恋・minstrel song

【Nコード】

N8516K

【作者名】

流季

【あらすじ】

夢を捨てて選んだ大切な君。

大切な君との約束は果たせないまま…。

時は、ただ過ぎ去って行く。

遠い記憶を呼び戻し、もう一度君に言いたかった…

「ありがとう」

「ずっと愛してる」

そして…

「ごめんね…」

もう、会えない君へ…。

俺からのありったけの思いを込めて…。

声が枯れ果てても、伝えたい…。

今は遠い、愛する君へ—。

悲運の過去を持つ、主人公の静流。

その静流を取り巻く環境と、その周辺の人達との絆。

静流にとって、最愛の女性との運命の出会い。

そして、静流達を突如、襲った悲劇――。

悲劇を乗り越え、夢を叶えて、精一杯生き抜こうとする静流の物語。

Prologue

夏の終わり。

風が、少し冷たくなった。

あれから、5年が経った。

遠いあの時と同じで、今日も青い夏空だった。

君と約束したあの場所には、あの時の二人の面影は無く、一人、大人になりきれない俺がいた。

時間は、何事も無く過ぎ去った。

けれど、俺の時間は、あの時から止まったままだった…。

君の面影は微笑みながら、打ち寄せる波に静かに飲まれて行った…。

空を見上げた。

秋が、すぐそこまで来ていた。

潮風と波の音が、君の記憶を呼び戻す…。

遠い、夏の記憶―。

Chapter 1

―2001年、春。

高校を卒業してから、ずっと夢だった、プロのミュージシャンになろうと、友達やバンド仲間達と一緒に、

「バンドだ、ライブだ」

と、がむしゃらだったあの頃の事…。

本格的にバンドをやり始めた当時から、俺は自分自身の固定概念の中で、

「ロックバンドやるなら、こんなスタイルじゃないとな」

と、全身がモノクローム、もしくは黒っぽい服装を好んで着ていた。

首や、両手首、両手の指には、シルバーのネックレスや指輪、ブレスレット、さらには、両耳はピアスだらけ。

色だけに関して言うならば、モノクロームやシルバーは、子供の頃から好きな色であったので、服装については、元々からの好みも手伝っていたのかもしれないが…。

そして髪は、その時々で色を変えたり、切ったり伸ばしたりしていたけれど、結局は、耳が隠れるくらいの、少し長めの栗色の髪…、いわゆる、「地毛」の髪色で落ち着いた。

そんな、やりたい放題に自分の思うまま過ごして来た、ある日の事。

たまたま、開いた求人誌に見つけた、アルバイト募集の記事。

「ゲーセンか…。やったこと無いし、ちょうどバイト探してた事だし、面白そうだな。受けてみるか」

ほんの軽い気持ちで電話を掛けてみた。

「アルバイトの募集を見てお電話させて頂いたんですが…。まだ募集はされていますか？」

「はい。大丈夫ですよ。それでは、お名前をフルネームで教えて頂けますか？」

「あ、はい。霞静流と申します」

「では、面接をさせて頂きます。日程が明後日の午前11時からでもよろしいですか？」

「はい。よろしくお願いします」

「では、明後日の11時にお待ちしておりますので、履歴書をお持ちになって下さいね」

「分かりました。それでは失礼致します」

二日後に面接を受け、それから一週間もしない内に、バイト先から連絡が来た。

「霞さんでいらっしゃるでしょうか？私、アイビスIVISの田中と申します。先日は面接を受けて頂きありがとうございました」

「こちらこそ、ありがとうございました」

「今日は、検討させて頂いた結果、採用と言う事でお電話をさせて頂きました。もし、霞さんの都合がよろしければ、来週の月曜からでも来て頂けませんか？」

「はい。ありがとうございます。よろしくお願いします」

「では、月曜の13時にお店に来て下さいね。では、失礼致します」

「失礼します」

バイトはあっさり決まった。

少しの緊張と何か得体の知れない期待感で胸が膨らんだ。

そして、バイト初日ー。

「じゃあ、行って来る」

車に乗り、エンジンをかける。

「あれ…？何か変だ。ハンドルが重い…？」

いざ発進しようと、ハンドルを握った時の違和感を不審に思い、一旦、車を降りる事に。

「おかしいなあ…」

そう言いながら、運転席側の前輪に目をやった。

その時、俺の目に飛び込んで来た光景は…。

「あれ…？パンクしてるじゃん…。参ったなあ…」

そう言いながら、トランクを開け、ジャッキを取り出す。

ジャッキの動作確認の為に、2～3回、ジャッキのネジの部分を回す。

…が、ジャッキが壊れていたようで、上手くジャッキが持ち上がらない。

「くっそーっ！！ジャッキまで、ブツ壊れてやがるし…」

俺は、一人で文句を言いながら、苛立つ思いをぶつけるかのように、使い物にならないジャツキを、トランクの中に放り込んだ。

『ガシャッ』

だが、それで事が済んだ訳では無い。

当然、応急タイヤに履き替えるか、パンク自体を修理しない限りは、バイトに行けないどころか、車を動かす事すらままならない。

一旦、気を落ち着かせ、とりあえず、バイト先に車のトラブルの為に、遅刻する旨の連絡をする。

「すみません。今日からそちらでお世話になる霞と申します。ちょっと、車がパンクしちゃって…。30分くらい遅れそうです。すみません」

「分かりました。大丈夫ですか？」

「はい。直り次第、急いで行きますので」

「気をつけて来て下さいね」

「はい。ありがとうございます。失礼します」

電話を切り、俺は、ある「賭け」に出た。

それは、余りにも危ない賭けだった。

「このまま、あのガソリンスタンドまで行ければ…」

そう思い、俺は運転席に飛び乗り、キーを回す。

ハンドルをしっかりと握り、ハンドルを取られないように、なるべく、これ以上のダメージをタイヤに与えないように、慎重に車を走らせる。

少しでも操作を誤れば、「即、事故」と言う危ない賭けだった。

俺は、最悪の事態を想定しながら、神経がすり減るような思いで、近所のガソリンスタンドまで車をなんとか動かし、急いでパンクしたタイヤを修理してもらった。

「やれやれ…。やっと行けるぞ」

予定より、20分遅れでバイト先に到着。

「すみません。遅れてしまつて…」

「大変でしたね。じゃあ、こっちに来てもらえますか？」

（良かった。怒ってないみたいだ）

「じゃあ、この制服を着て下さいね。あと名札は、ここにありませんからね」

「ありがとうございます」

店長がフロアにいる、他のメンバーに俺を紹介する。

「今日から、一緒に仕事をしてもらう、霞君です」

「霞です。よろしく願いします」

「よろしく」

「じゃあ、霞君は、とりあえずこれをやってくれるかな？」

「はい」

先輩に付いて、早く仕事を覚えようと必死だった為、一日目はあつ
と言う間に過ぎて行つた。

それから二日後。

「霞君。今日は、ゲーム機を掃除してくれるかな？こんな感じで…、
こうやって…」

掃除の手順を、先輩が丁寧に教えてくれた。

「はい。分かりました」

「後、あそこにいる小野瀬君が休憩だから、これが終わったら代わ

ってあげてくれるかな？」

「はい」

言われた仕事を終わらせ、交代を告げる為に、彼の元へと向かった。

彼は、金髪とまでは行かないが、明るい茶色の短めの髪で、俺よりは少し背が高く、パツチリした目が印象的だった。

俺よりは背が高いと言っても、端から見れば、竜也の身長はすごく高いわけでもなく、標準的な身長だった。

「あの、休憩らしいですよ。俺、代わります」

「ああ、すみません。俺、小野瀬って言います」

「俺は、霞です。よろしくお願いします」

これが、俺と竜也の最初の出会いだった。

休憩が終わって、俺の方へ竜也がゆっくりと向かって来た。

「あ、休憩上がりです。手伝いますよ」

「ああ、すみません」

「霞君は何歳？」

「俺は20歳です。小野瀬君は？」

「俺、21。俺より1つ下なんだ。まあ、仲良くしような」

「はい。そうですね」

「あ、そうそう。俺と話す時は敬語じゃなくて良いから。年が1つ違うくらいで、あんまり変わらないんだしさ。下の名前は、何て言うんだ？」

「静流だよ。小野瀬君は？」

「竜也。呼ぶのは竜也で良いよ」

「分かった。俺の事は、静流で良いよ」

「よろしくな、静流」

「おう」

竜也の人当たりの良さに、俺は、何故か安心感を覚えた。

その日から、馬が合う俺達は、自然と二人で行動するようになった。

Chapter 2

翌日―。

初めて見る若い男が、バイト先の事務所へやって来た。

彼は眼鏡を掛けていて、一見、真面目そうな学生に見える。

「おはようございます」

俺と竜也は、その男を見て挨拶をした。

「あ、おはようございます。松岡です。よろしく」

その男は、微笑みながら俺達に言った。

「松岡君は、普段は何してる人？」

竜也は、松岡の素性を聞き始めた。

「大学生です」

松岡は、竜也の問い掛けに礼儀正しく淡々と答える。

竜也の質問は、更に続く。

「と言うと、20歳か21歳くらいかな？」

「はい、20です」

「そっかあ。静流と一緒に…。ちなみに、俺が小野瀬で、こっちが霞。後、俺達は、歳が離れてないから、敬語は使わなくて良いからさ」

竜也が微笑みながら、松岡に自己紹介を始める。

「それと、俺達を呼ぶ時は竜也と静流で良いから」

俺は竜也に続いて、松岡に微笑みながら言った。

そして更に、竜也がもう一言。

「松岡君って言いにくいし堅苦しいよな？松ちゃんはどうだ？」

「それで良いよ」

松岡は、笑顔で竜也に答えた。

「よろしくな。松ちゃん」

竜也は、嬉しそうに松岡に握手を求める。

それに答えるように、松岡も、

「ああ。よろしくね」

と、差し出された竜也の右手を握り返した。

「よしっ。仕事仕事っ。」

そう言いながら竜也は、急に張り切り、いつもはやりたがらない開店前の準備に真っ先に取り掛かった。

そんな竜也を見た俺は、

「そんなにやる気も無いくせに、何言ってるんだ？ 竜也？」

と、呆れた表情を浮かべ、それまで座っていた椅子から重い腰を上げて、ゆっくりと立ち上がった。

「失礼なヤツだな…。俺はいつでもやる気に満ち溢れてるよ」

竜也はそう言って、俺を横目で見ながら金庫から、布製の袋に詰められた両替金を引っ張り出した。

「はっ、どうだかね」

そう言いながら、俺は竜也が金庫から引っ張り出した袋詰めのお金を、片っ端から台車に乗せて行った。

「お前、信用してねえな？」

「当たり前だろ？大体、竜也は、口を開けば「ダルい」とか「めんどくせえ」しか言わねえんだから…」

俺は、竜也に一瞥をくれながら皮肉を言った。

「うるせえなあ…。良いじゃねえか…」

竜也の文句を聞き流すように、両替金を乗せた台車を松岡の所まで運ぶ。

そんな俺達二人を、呆氣に取られたように、苦笑いを浮かべながら松岡は見ていた。

「じゃあ、アイツはとりあえず無視して…。松ちゃん？この金を両替機に突っ込んで来て？」

「分かった」

俺は、松岡に仕事を頼み、すぐに掃除の準備を始めた。

そして一日の業務を終えて…。

仕事が終わる頃には、すっかり意気投合した俺達は、服を着替えようと仲良く更衣室へ向かった。

「松ちゃんは、どこに住んでんの？」

竜也が、松岡に問い掛ける。

「駅裏の近くだよ」

「へえ。俺と一緒にじゃん。ご近所だな。なあ、静流？」

それまで松岡と話をしていた竜也は、急に俺に話題を振って来た。

「えっ？何？」

「これから、松ちゃんの家に行かないか？」

竜也は、微笑みながら俺を誘った。

「別に、予定無いから行っても良いよ。松ちゃんが大丈夫ならね」

「俺は全然良いよ。一人暮らしだしさ」

松岡は、嫌な顔もせず、微笑みながら答えた。

「じゃあ、決まりだな」

嬉しそうな竜也を先頭に、着替え終わった俺達は揃って事務所を後にする。

「お疲れ様でした」

事務所から出て、社員用の出入口に向かう途中で、俺は急にある事を思い出した。

「あつ。俺、ATMで金下ろして来る。悪いけど二人共、先に行っててくれないか？」

「分かった。待ち合わせは、駅裏の国道の近くにあるコンビニにしよう。分かるか？ 静流？」

「それくらい知ってるって。じゃあ、そこへ行くよ」

俺と竜也達は、2階のエスカレーター前で一旦、別れた。

俺はそのまま1階までエスカレーターに乗り、ATMのコーナーへ向かった。

金を下ろして、待ち合わせ場所へ急ぐ為、俺は、人の波を掻き分けるように、社員用の出入口を目指して走った。

建物の外へ出て、広い駐車場の一番端の方へ止めた、自分の車の元へ向かった。

車に飛び乗り、タバコをふかしながらアクセルを踏み込む。

『ブウーーン』

国道の交差点に差し掛かった所で、信号待ちの渋滞に嵌まってしまった。

「くそーっ…。こうなったら…。良しっ」

俺は急遽、狭い住宅街の細い裏道へルートを変えて、渋滞を避けながら目的地を目指した。

待ち合わせ場所に着いた時には、既に二人が駐車場で待っていて、楽しそうに話をしていた。

「お待たせ」

「静流、遅せえよ」

竜也は、ゆっくりと立ち上がり、口を尖らせながら俺を見た。

「しょうがねえじゃん。渋滞してたんだから」

俺は、文句を言う竜也にしかめっ面で反論した。

「まあまあ、早く行こう」

松岡が俺達をなだめるように、苦笑いを浮かべながら間に割って入った。

松岡に促され、俺と竜也は気を取り直し、松岡に付いて行く。

「松ちゃんの家、ここから近いのか？」

歩きながら竜也は、松岡にアパートまでの距離を尋ねた。

「うん。歩いて、5分くらいかな」

「へえ。コンビニ近くて良いなあ」

俺達は、そんな話をしながら松岡の住んでいるアパートを目指して歩いた。

そして、暫くして松岡が口を開いた。

「あの水色の壁のアパートだよ」

松岡が指差した先には、どこにでもある2階建てのアパートが見えた。

「ホントにコンビニ近いんだな…」

俺達は、羨ましそうな表情で松岡を見た。

三人揃って2階の真ん中の松岡の部屋へ入る。

「へえ。結構片付いてるなあ」

中を覗いた俺と竜也は声を揃えた。

「まあ、入りなよ」

「ああ。ありがとう」

俺達は、松岡に部屋の中へ通された。

俺は、1Kのアパートの奥の部屋の隅に置かれたテレビの上に、茶色い紙切れが1枚飾られているのを見つけた。

「おっ。二千円札じゃん!!」

その当時、二千円札は、まだ出始めたばかりで珍しい時だった。

「なんだ？ 静流、二千円札見た事ないのか？」

「ああ。初めて見た。しかも、新札じゃん」

俺は、珍しさからつい興奮してしまった。

「ガキだな、静流」

竜也が俺を横目で見ながら皮肉を言う。

「ほっとけ」

俺は、しかめっ面をして竜也を見た。

ちょうどその時、松岡のケータイの着信音が部屋中に鳴り響いた。

「もしもし？ うんうん。えっ？ マジ？ どうしよう。参ったね…。う

んうん…」

俺と竜也は、松岡の様子を見ながら、

「トラブルか？」

と顔を見合わせた。

「じゃあ、また後で連絡するよ」

松岡はそう言って、一旦、電話を切った。

「どうしたんだ？」

俺と竜也は、深刻そうな電話の内容が少し気になって、松岡に問い掛けた。

「…実はさ、大学のサークルの交流会みたいなのがあってさ。メンバーが、ちょっと足りなくて…」

松岡は、少し追い詰められたような表情で静かに答えた。

「何人？」

「ええっと…。確か、二人って言ってたと思う」

松岡の答えに、竜也の目が急に光った。

「その飲み会には、女は来るのか？」

「10人くらいは来るはずだけど…」

竜也が、徐々に食らい付いて行く。

「マジか？それは、いつだ？」

「来週の土曜だけど…」

「来週の土曜か…」

竜也の魂胆は見え見えだ。

「俺達で良ければ、人数の穴埋めするぞ？」

竜也は嬉しそうに、松岡に人数の埋め合わせの提案をした。

(…はい?)

竜也の言葉を聞き、俺は自分の耳を疑った。

「それは助かる。じゃあ、そう連絡しとくよ」

「な、なんで俺まで？」

俺は、慌てて竜也に問い詰める。

「どうせ暇だろ？たまには、飲み会も良いぞ」

「どうせ暇って失礼な…。でも、まあ、たまには、そんなのも良いか…」

竜也の決め付けに、まともに返す理由も無く、俺も、暇潰しがてら

に行く事に決めた。

「じゃあ、来週の土曜だな。場所は？」

竜也の声が、心無しか弾んでいる。

「駅前の居酒屋」

問題がすぐに解決した松岡の表情も、どこか晴れやかだった。

「分かった。来週の土曜に、駅前の居酒屋な」

竜也が、しつこい程に松岡に確認を取る。

「ああ。頼んだぞ」

「分かった。任せろ」

竜也は、人助けをしたように得意気に胸を張っていたが、俺には竜也の下心が見え見えだった。

そして、話の区切りがついた事を確認して、俺が切り出す。

「じゃあ、そろそろ俺達は帰りますか？腹も減ったし…」

俺は、竜也の目を見て合図を出した。

「…そうだな。じゃあ、松ちゃん、また」

「ああ。またな」

俺と竜也は、松岡に見送られ部屋を後にした。

コンビニまで徒歩での帰り道、心無しか、竜也の顔が少し緩んでいた。

「竜也、何にやけてんだ？気持ち悪い…」

竜也の下心に漬け込むように、俺は皮肉を込めて言った。

「べ、別に、にやけてねえって…」

俺の皮肉に、竜也は焦ったように答える。

「あっははは。何焦ってんだよ？ やましい事でも考えてたんだろ？」

「別に、焦ってねえし、やましくもねえよ。じゃあ、また明日な」

竜也はそう言いながら、逃げるように自分の車へ急ぐ。

「あはは。ああ、また明日な。お疲れ」

「お疲れ」

そう言って、俺もゆっくりと自分の車に乗り、竜也と別れた。

Chapter 3

飲み会当日―。

俺は、昼間に少し用事があった為、早めに家を出た。

用事が済んだのが、夕方5時過ぎ。

約束の6時には、急げばギリギリ間に合う。

竜也から、電話が掛かって来た。

「静流。今、どこだ？」

「今、そっちに向かってるよ。竜也は？」

「これから、家を出る所」

「分かった。後でな」

「ああ」

電話を切り、近所のバス停に、タイミング良く来ていたバスに飛び乗った。

バスは20分程で、駅前到着。

バスから降りて、目的地の居酒屋まで走る。

バスの終点から5分程で、約束の居酒屋に着いた。

「いらっしやいませ」

若い女性店員が、明るい元気な声で迎えてくれる。

居酒屋には既に、学生達と思われる、賑やかな集団がいた。

「何名様ですか？」

「いや、先に来てる友達を探してるんですが…」

女性店員にそう言って俺は、竜也と松岡を探して辺りを見回した。

そして、ゆっくりと店の奥へと歩き出した。

（多分、それらしい奴らだと思うけど、ホントに大丈夫なのか…？）

店内の一番奥の席に差し掛かった所で、見慣れた顔ぶれを見つけた。

竜也と松岡だ。

「おっ！！静流。こっち、こっち」

竜也は嬉しそうに手招きをしながら、俺を呼ぶ。

「悪い、待たせたな…」

「いや、良いさ。それより、早く座れよ。乾杯するからさ」

「あ…、ああ…」

松岡に促され、俺は竜也の横に座った。

一番最後に来た俺が席に着いた事を確認して、松岡による乾杯の音が掛かる。

「じゃあ、みんな揃ったようだし…。俺達の初の交流会を記念して…」

「カンパーイっ!!」

全員が、それぞれのジョッキやグラスに口を付け、それぞれが好きなように酒を飲み始めた。

俺は、全力で走ったせいで喉がカラカラだった。

ジョッキに注がれた、真っ白な雪のような泡に塞がれた、黄金色の液体の中で、

『プクプク…』

と言う具合に、小さなシャボン玉のような無数の炭酸の泡が弾けている。

ジョッキは、その冷たさを物語るように、まるで、汗をかいているかのような結露を起こしている。

俺の手元の、その冷たくて美味しそうなビールの誘惑に負け、一気に飲み干し、渴いた喉を潤した。

『ゴクツゴクツ…』

「…ふはあっ」

そして俺の横に座っている竜也は、ビールに目もくれず、目の前に座っている女の子のケータイ番号を聞きだそうと必死に話を盛り上げようとしていた。

（おいおい…。コイツは…）

俺は、そんな竜也呆れた表情で見ながら、近くを通り掛かった店員を呼び、ビールの追加を頼んだ。

すると、ちょうどそこへ、松岡が会費を回収しにやって来た。

「どう？楽しんでるかい？」

松岡は、笑顔で俺に問い掛けた。

「ああ、まあ…。それよりも、松ちゃん？コイツどうにかしてくれよ…」

俺はうんざりしたような表情で、親指で俺の背後にいる竜也を指差した。

「…ま、まあ、良いんじゃない？」

松岡も、必死な竜也を見て呆れた表情を浮かべ、苦笑いをしていた。

そんな俺達に、気付いているのか、いないのか…。

竜也は、いつに無く一生懸命だ。

（駄目だ…コイツは…）

俺は、竜也を横目で、

『チラリ』

と一瞥し、そのまま無視するように、手元のジョッキを口元へ運んだ。

酔いが回り、少し気持ちが良くなって来た頃には、不思議と俺にも少しずつ笑みがこぼれていた。

ふと気が付くと、俺は自分の真後ろの席に座っていた女の子と話をしていた。

会話の内容までは、はっきりと憶えてはいないが、確かに笑っていたような記憶だけはある。

そして、そんな俺達の会話を邪魔するように、

「うおおおっ!! やったあああっ!!」

と、奇声を発する者がいた。

突然の大声に、俺は背筋が、

『ビクッ!!』

と、伸びる程驚いた。

(なんだあ? いきなり…)

そう思い顔をしかめながら、大声の出所を辿ると…。

大声の主は竜也だった。

自分のケータイを片手に、まるで子供のように喜び、はしゃいでいた。

状況から察するに、どうやら、やっと女の子の電話番号でも教えてもらったのだろう。

(まったく。うるせえなあ…)

両方の人差し指を両耳に当て、顔をしかめながら、俺はトイレへ向かった。

暫く経って、トイレから出た途端、俺は酔ったせいなのか急に足の力が抜けて足元よろめき、何かに躓た。

そして、その場へ崩れるように倒れ込んでしまった。

「痛ってえ…」

俺は、自分でも一瞬何が起きたのか理解出来なかった。

すると、俺のそれを一部始終見ていたかのように女の子が現れ、

そつと優しく肩を貸してくれた。

「大丈夫？」

「ああ…。ありがとう。少し酔ったみたいだ」

俺は微笑みながら、その女の子にそう言って、ゆっくりと自分の席へ戻った。

静かに席に座り、タバコを口にくわえて火をつけた、その時。

見知らぬ男が、目の前に座り、何か文句でも言いたげな表情で俺を見た。

「なんだ？」

俺はその男の目を見つめ、静かに問い掛けた。

「：アイツ、俺の女なんだ。手を出さないでくれないか？」

どうやら男は、自分の彼女が、転んだ俺に手を差し伸べた事が気に入らないらしい。

「ああ？ちゃんと見てなかったのか？別に、手を出した訳じゃ無いだろう。ただ、転んだ時に手を貸してくれただけだ。アンタも男なら、それくらいは目を潰れよ。大体、つまらねえ理由の男の嫉妬は醜いだけだぞ？」

俺はその男を一瞥し、手元のジョッキに手を伸ばした。

「…なら良いんだ。じゃあなっ!!」

その男は、俺の言葉を聞いて状況を理解し安心して、言い掛かりを付けてしまった自分の非を認めたのか、それとも、俺に皮肉を言われた事に対して図星だったのかは分からないが、そう言いながら立ち上がり、逃げるようにその場を離れて行った。

（いちいち、何しに来たんだ？ 小さい男だな）

と、思いながらも、

（いちいち、細かい事で目くじら立ててたら、それこそ、今のヤツと同類になっちまう…。まあ、気にすんな）

と、気を取り直して、またビールを口に運ぶ。

心の中にモヤモヤした感覚が残った俺の気も知らない、ただの酔っ払いと化した竜也は、

「静流。俺、番号ゲットしたぞ」

と、嬉しそうに話掛けて来る。

「ああ、見てたよ。良かったな」

「お前も、もっと盛り上がれよお」

（別に良いだろ…。俺には、俺のペースがある…）

そう思いながら、竜也を軽くあしらいビールを無心に飲み続けた。

それから、暫くは穏やかな時間が流れた。

そして、宴会の時間が残りわずかになった辺りで、松岡が全員に向かって大声で締め挨拶を叫んだ。

「そろそろ時間なので、お開きにします。お楽しみの所すいませんが、続きは個々にお願います」

（やれやれ…）

締め挨拶が終わるや否や、竜也は嬉しそうに俺にこう言った。

「静流、この後カラオケ行かないか？女の番号ゲットした事だしさ」

「ああ、別に良いよ」

俺は、

（このまま帰っても暇だし、それなら…）

と、竜也の誘いを簡単に受けてしまった。

「じゃあ、また、この前のコンビニに集合だぞ？」

「ああ、分かった」

俺達は、そのコンビニに向かった。

「あれ？竜也、どこ行った？」

居酒屋から出て行く集団に紛れて、竜也がどこに行っただのか分からなくなってしまった。

「まあ、良いか。さっき、あのコンビニって言ってたしな」

そう、眩きながら、タバコに火をつけた。

そして、待ち合わせ場所のコンビニへ、一人歩き出した。

15分程で、集合場所のコンビニに到着。

そこでは、竜也が既に待っていた。

「おっ？ やつと来たか」

「ちょっと、コーヒーとタバコを買って来る」

竜也に一言そう言って、俺は店の中へ入った。

店から出ると、竜也がケータイ片手に必死に電話を掛けている。

「何やってんだ？」

「いや、さっきの女の子に電話掛けてんだけど、繋がらなくてさ…」

（どうせ、そんな事だろう…）

そう思いながらも、買って来たコーヒーを竜也に渡した。

「サンキュー」

酒で火照った頬に、当たる夜風が心地良かった。

俺は、竜也が座っている駐車場の車止めの横にしゃがみ、タバコをふかしながら竜也の様子を黙って見ていた。

「どうだ？」

「駄目だ。電話に出ねえ…」

「まあ、諦めるんだな」

その時の俺は、心の中で、

「あれだけしつこかったんだ。まあ、聞かれた方は根負けするよな……。ただ、しょうがなく番号は教えた。それだけだ。仮に、相手から電話が掛かって来たとしても、無視するか、拒否すれば良いだけだしな……」

と、電話を掛け続ける竜也を見ながら、

「正に、その状況だな……」

と、笑いを必死に堪えていた。

そんな素っ気ない俺の態度と、電話を無視する相手に怒ったのか、
竜也は、

「お前は遊びたくないのかよ？」

と、俺に一瞥をくれながら言った。

「…別に」

俺は、その女の子と話した覚えは無いし、大体、遊びに誘う事すら考えてなかった為、竜也に何を言われようが、別に至って普通の心境だった。

むしろ、竜也の行動を見ている方が楽しくて付いて来たような物だった。

それから暫く時間が経った。

竜也も、やっと諦めたのか、

「帰るか？」

と、少し残念そうな表情を浮かべながら言った。

「そうするか」

俺は、竜也の残念そうな顔を見た途端、吹き出しそうになった。

「何だよ？」

竜也は、不審者をみるような目で俺を見ながら言った。

「別に、何でもない」

俺はそう言いながら、竜也から顔を背けた。

「さてと…。じゃあ、俺はタクシーで帰るから」

俺は逃げるように、タイミング良く走って来たタクシーを捕まえた。

「じゃあな。おやすみ、竜也」

「ああ。おやすみ」

そう言ってタクシーに乗り、竜也と別れた。

その後の事は、酒のせいではほとんど記憶に残って無かった。

翌日。

俺が目を覚ましたのは、昼を大きく過ぎた、3時頃だった。

ベッドからゆっくりと起き上がり、竜也に連絡を取ろうとケータイに手を伸ばした。

そして自分のケータイの電話帳を見て、

「ハッ」

とした。

「誰だ？この女？マユ？」

どうやら、酔っ払いながらも、知らない内に俺も番号を交換していたらしい。

「いつの間に…？」

自分の記憶を辿るが、よく思い出せない。

そして、酒に酔った上での記憶に無い番号交換なだけに、連絡を取る気も無く、

「即消去」

という結論に至った。

データを消して、竜也に連絡を取る。

『プルルル…』

「もしもし？竜也？今日、休みだろ？暇か？」

「ああ、ついさっき起きた所だ」

「暇だから、駅前に遊びに行かないか？」

「ああ、良いぞ。準備出来たら迎えに行ってやるよ」

竜也は、俺の誘いに素直に応じた。

しかも、迎えにまで来てくれると言うおまけ付きで。

「ああ、頼む」

電話を切り、俺はいそいそと外出の準備を始めた。

電話から一時間経って、竜也が迎えに来た。

「待たせたな、静流」

「いや、大丈夫だ」

駅前に遊びに行く途中、竜也の車の中で、昨日の出来事と、番号を消した事を話した。

「はあ？お前、バカだな。なんで消すんだ？もったいない…」

（うるせえなあ…）

「お前なあ？ 彼氏持ちでも、こっちに鞍替えって事もあるんだぞ？」

（どうせ、虫付きの女なんだ。興味も湧かないね）

そう思いながら、竜也の小言を聞き流すように頭の後ろで手を組み、外の景色を眺めていた。

その時は、これから自分の身に起こる出会いが、竜也の言っていた事になるとも知らずに…。

Chapter 4

俺と竜也は、駅前のデパートへ入った。

デパートの6階にある、広場のベンチに腰を掛け、暫く行き交う人を眺めていた。

俺は、竜也にこう問い掛けた。

「竜也、確かギター弾けたよな？」

「ああ、一応人並みくらいには弾けるつもりだけどな」

「そうか。良かった」

「どうしたんだ？」

竜也は、俺の問い掛けに不思議そうな表情を浮かべた。

そして俺は、そんな竜也に向かって、思い切って誘った。

「竜也、ウチのバンドに入らないか？」

「なんだ急に？」

竜也は、目を丸くして俺を見つめた。

「実はな……。ウチのギターが抜けたんだよ。とにかく、ある程度の技術を持つてるヤツを探しててな。やっぱり、ライブハウスとかで募集して応募に来た、初対面なヤツよりは、友達とか、友達の友達とかの方が良いだろう？」

俺は、竜也の不安を掻き消すように、微笑みながら竜也を誘った理由を言った。

「なるほどな」

理由を聞いて安心したのか、竜也も俺の話に真剣に耳を傾けた。

「だからさ。無理にとは言わない。でも、入ってくれると俺は嬉しいし、メンバーも喜ぶと思うんだ」

俺は、駄目元で竜也を誘った。

心の中では、

「断られても仕方がない」

とさえ、思っていた。

しかし、竜也からは意外な答えが返って来た。

「分かった。俺で良いなら引き受ける」

俺は、竜也の返事に耳を疑った。

「聞こえなかったのか？ やってやるよ。お前のバンドのギター…」

俺は、竜也のその言葉がとても嬉しくて、つい声のトーンが上がってしまった。

「ありがとう。さっそく、メンバーと顔合わせしたいんだけど、今

日の夜は空いてるか？」

俺の急な誘いにも、嫌な顔一つせず、

「別に構わないぞ」

と、竜也は微笑みながら答えた。

「じゃあ、一応、バンドのリーダーの俊哉に連絡してみる」

「分かった」

俺は、逸る気持ちを抑えて、俊哉に連絡を取った。

『プルプル…』

「あっ、もしもし？ 俊哉？ 一人、良いギターが見つかったぞ。今日の夜にでも顔合わせしたいんだけど…」

「……」

「ああ。分かった。じゃあ、夜にいつものファミレスな」

電話を切るなり、俺は笑顔で竜也に言った。

「竜也、OKだって。今日の夜9時に、駅前大通り沿いのファミレスで会おうって」

俺の気持ちは、嬉しくて高揚し、抑えきれなくなっていた。

「そうか。分かった」

竜也は、そんな俺を微笑みながら見ていた。

「このまま、夜まで時間潰すか？」

「そうするか」

俺達は、暫く駅前をブラブラして、夜まで時間を潰す事にした。

約束の21時を少し回って、俺達は大通り沿いのファミレスへ到着

した。

ファミレスの駐車場では、既に俊哉が待っていた。

「静流、遅いぞ」

全身黒づくめの服装で、腕組みをし、金髪で、まるでアイロンでも当てたかのようなストレートの長い髪の間から、鋭い眼光で俺を睨み付けた。

俊哉の身長は、180cmを超えている為、その鋭い目線で上から睨み付けられると、誰もが威圧されてしまいそうなオーラを放っている。

「ああ、ごめん。良い物無いか、駅前をうろついてたら遅くなった」

「…ったく」

俊哉が、呆れ顔で俺を見た。

「俊哉、新しいギターの竜也だ」

俺が、俊哉に竜也を紹介した。

「はじめまして。小野瀬竜也です」

「こちらこそ。俺は桜井俊哉です。よろしく」

俊哉は、さっきまでの、殺気立った表情と打って変わって、穏やかな表情で竜也と握手を交わした。

「よろしく」

「あれ？ 充は？」

俺は、俊哉に問い掛けた。

「ああ？ アイツ、さっきまでこの辺にいたんだけどな…」

俊哉は俺の問い掛けに、思い出したように辺りを見回した。

すると、ファミレスの中から一人の若い男が出て来た。

…充だ。

ボロボロのクラッシュデニムに、Tシャツ姿というラフな服装に、金髪で無造作にセットされた髪型、それと、唇の左側に通されたりング形のピアスと、両耳いっぱいの開けられたピアスが一際目立つ。

ただ、顔立ちは、どちらかと言うと、女性的な雰囲気すら漂っている。

「おっ、静流じゃん。あれ？その人が新しいギター？」

「そうだよ。竜也って言うんだ」

「へえ。そっか。俺は、朝霧充。よろしくね」

「小野瀬竜也です。よろしく」

「それはそうと、充？店の中から出て来たけど、どこへ行ってたんだ？」

俺は、充に問い掛けた。

「ん？ ああ、トイレ」

笑いながら、充は答えた。

「だって、静流が遅いから、我慢できなくてさ…」

笑いながら、充は答えた。

「まあまあ。立ち話もあれだから、中に入ろうぜ？」

いつまでもキリがない俺達の会話に割って入るように、俊哉が俺達を店内へ誘導する。

「そうだな」

俊哉の言葉を合図に、俺達四人は、揃って店内へ入る。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

「四人です」

「おタバコは吸われますか？」

「はい」

「じゃあ、あちらの奥の席へどうぞ」

案内された席に着く。

「ご注文がお決まりになりましたら、ボタンを押してお呼び下さいね」

「はい」

「何にする？」

俊哉は、メニュー表をテーブルの真ん中に広げ、全員のオーダーを聞く。

「とりあえず、腹減ったあ…」

充が、脱力したように言った。

「何でも頼めよ」

俊哉は、今にも餓死しそうな程の勢いの充に、素っ気ない態度で答えた。

「何しようかなあ？何でも頼めって事は俊哉のオゴリ？」

充は、期待を含んだ笑みで俊哉を見つめた。

「いや、充の自腹」

俊哉は、充の言葉を聞くや否や、意地悪な微笑みを浮かべ即答した。

「ケチーッ！！」

充は、俊哉の返答に大声で叫び、口を尖らせた。

一人、不満そうな充を一瞥して俊哉は言った。

「静流、お前達も何か頼めよ？」

「俺、あんまり腹減ってないしなあ…。俊哉は晩飯食ったのか？」

「いや、まだだけど。静流は、食欲ねえのか…。竜也は何にする？」

「俺も腹減ってねえしなあ…。じゃあ、ドリンクバーにでもするか
な」

「じゃあ、俺も」

竜也の答えを聞き、俺も一緒の物を頼む事にした。

「俺もそうするかな。あんまり腹減ってねえし」

俊哉のオーダーも決まった。

そして、まだメニュー表と睨めっこをして、オーダーを決めあぐね

ている充を、三人で見つめた。

「充、決まったのか？」

俊哉は、溜め息混じりに充に言った。

「うーんと…。ハンバーグも良いしなあ…」

「早くしろよ…」

俊哉の表情からは、そんな声が聞こえて来そうだった。

「まだかよ？」

「…じゃあ、唐揚げ定食とドリンクバー。もう、俊哉はせっかちなんだからなあ…」

充は、口を尖らせながら俊哉を見る。

そんな充を無視するように、俊哉は店員を呼ぶベルのボタンに手を掛けた。

「じゃあ、呼ぶぞ？」

そう言いながら、俊哉がボタンを押す。

暫くして、店員が俺達の元へやって来た。

「お待たせ致しました。ご注文をどうぞ」

「ドリンクバー4つと…」

俊哉が注文している所へ、充が割って入るように叫ぶ。

「唐揚げ定食っ！！」

店員は対応に困り、苦笑いを浮かべている。

「そんなデカイ声出すな。恥ずかしい」

俊哉は、充を退いた目で見つめながら、一言ぼやいた。

「良いじゃん、別に。分かるように言っただけだし」

俊哉のぼやきに、充はすかさず反論する。

そんな俊哉と充のやり取りを見た店員は、対応に困り果てたように、ただ笑っているだけだった。

全員の注文が済み、俺達はドリンクバーへドリンクを取りに行く。

そして、席へ戻りいよいよ本題へ入る。

「竜也は、ギター歴はどのくらいなんだ？」

俊哉が、話を切り出すように竜也に問い掛ける。

「そうだなあ…。始めたのは、中学の時からで、それに、前にバンドやってた事もあるんだ。その時のバンドは、たしか3年くらいやってたかな？後は、他のバンドのサポートで呼ばれたり…」

意外にも、経験が豊富な竜也に俺達は驚いた。

「へえ。結構経験積んでるんだな。ちなみに、今は、バンドとかはやってないのか？」

俊哉は、更に竜也に問い掛けた。

「今は、特にやってないよ。たまにサポート入るくらいで…」

「じゃあ、ウチの正式なギターとして迎え入れても大丈夫なんだな？」

俊哉の声が、弾んでいるのが分かる。

「ああ。俺で良ければ」

喜びを隠せない俊哉に、竜也は微笑みながら答えた。

「決まりだな。静流。良いギターを見つけたな」

俊哉は嬉しそうに微笑みながら、俺を見つめた。

「竜也がギターを弾けるって聞いた時に、ピンと来たからね」

俺は、微笑みながら得意気に答えた。

「竜也、ウチのバンドは、こんなヤツらだけど、ウチのバンドを代表して言うぞ。これからよろしくな」

俊哉は、新しく仲間に加わった竜也に、丁寧に頭を下げて微笑んだ。

「ああ。こちらこそ、よろしく。このメンバーとなら楽しくやれそうだ」

竜也は、そんな俊哉に安心したのか、微笑みながら俊哉と握手を交わした。

「良かった。じゃあ、今度、スタジオへ行って音合わせしないとな」

俊哉の提案に、

「賛成」

と、充は唐揚げを頬張りながら手を挙げる。

「さてと、いつやるかな？」

俊哉はケータイのカレンダーを見ながら、そう呟いた。

「俺はいつでもOK」

俺は、特に予定が無いので即答した。

「俺は、今週の金曜以外ならいつでも良いぞ」

竜也は、自分の予定を俊哉に告げた。

俺は、竜也の金曜日の予定が気になり、

「何かあるのか？」

と、問い掛けた。

俺の問い掛けに竜也は、嬉しそうに答える。

「女と会う約束があるんだよ」

「へえ。そりゃそりゃ羨ましい事で…」

俺は竜也を一瞥し、皮肉を言った。

「悔しかったらお前も女作れよ」

竜也は自慢気に俺を見ながら返した。

「ほっとけ」

俺は、竜也の嬉しそうな顔が少し羨ましく思い、口を尖らせそつぽを向いた。

「おい。充は？」

食事に夢中になっている充に、俊哉が問い掛ける。。

「ん？俺も、いつで…モッ」

食べながら返事をしていた、充の様子がおかしい。

急に、苦しくて今にも死にそうなくらいの表情を浮かべている。

どうやら、食べ物が詰まったらしい。

呆れ果てた顔で、俊哉がグラスに注がれた水を差し出した。

充は、それを急いで口元へ持って行く。

『ゴクッゴクッ…』

「ぷはあ…。ああ…。死ぬかと思った…」

充は、涙目になりながらそう呟いた。

そんな充に、俊哉は容赦無く突っ込む。

「ちゃんと生きてるじゃねえか。ったく、ガツついて食うなって」

「ああ、美味かった」

充は、俊哉の説教にもお構い無しで、嬉しそうに自分の感想だけを俺達に言った。

「人の話を聞けっ!!」

『パンツ』

俊哉の平手が、充の頭の天辺に、良い音を立ててヒットした。

「フギヤッ」

とうとう俊哉の雷が充に落ちた。

充は、頭を撫でながら、口を尖らせ俊哉を睨んだ。

さすがに俊哉は四人の中で、最年長だけあって、しっかりした俺達の兄貴的な存在だった。

俊哉は、クールな見かけによらず心優しく、常にみんなを気に掛けてくれていた。

そんな俊哉を、誰もが慕っていた。

「とにかくどうする？ 竜也が金曜以外OKなら、土曜はどうだ？ 俺は土曜の方が都合が良いしな」

「それで良いんじゃない？」

俺が言うと、竜也と充も口を揃えた。

「俺達も土曜で大丈夫だぞ」

「じゃあ、決まりだな」

音合わせの打ち合わせはまとまり、俊哉がそう締めくくった。

「話は変わるんだけど、俊哉は一体、何歳なんだ？」

突然、竜也が俊哉に問い掛けた。

「俺か？俺は24だ」

「へえ。俺の3つ上なんだ。どうりで落ち着いてる訳だ」

「なんだ、みんな俺より年下か…。竜也は、同い年くらいに見えたのにな…」

どこか悔しそうな表情を浮かべて、俊哉が呟いた。

竜也の質問は、充にも及ぶ。

「当然、充は静流と同い年だろう？」

「大当たり。ちなみに、静流とは幼馴染みなんだ」

充は、嬉しそうに微笑みながら答えた。

「まあ、充は、雰囲気から年下だろうなって感じがしたんだけどな」

竜也は、苦笑いを浮かべながら充を見つめた。

「ちなみに、バンド名は？」

竜也の問い掛けに、俺達は声を揃えた。

「B—^{ブレイヴ}Rave!!」

「B—Raveか。シンプルだけど、なんか格好良いな…」

「Braveって意味は勇気って意味の他に、立ち向かうって意味がある。音楽の世界において、色んな事に挑戦しようと考えてる俺達には、それは、すごく重要な言葉なんだ。それに、BraveのBを取ってみな？Raveって単語になるだろ。Raveの意味は「夢中」って意味だ。当然、俺達は、音楽に夢中。そんな俺達の音楽を聴いてくれる、ファンのみんなや、初めて俺達の音楽を手にとって聴いてくれた人達が、俺達に夢中になってくれるように…。そんな、俺達の気持ちや、願いを込めて付けた名前なんだ」

いつになく、俊哉のトークに力が入る。

「バンド名の話になると、俊哉は熱くなるよね。まあ、俺は、この名前好きだけどさ」

俺は微笑みながら、俊哉と竜也を見た。

「確かに、意味を聞いたら、すごく良いバンド名だ。よく考えてあるな」

どうやら、竜也も気に入ってくれたらしい。

ふと、時間が気になった俺は、自分のケータイの時計を見た。

時計は夜中の1時を回っていた。

「ちょっと、トイレに行ってくる」

そう言って、俺は席を立った。

静流がトイレに入った事を確認した俊哉は、静かに竜也に言った。

「竜也？ 静流の家の事とか、静流から何か聞いてるか？」

「そう言えば、静流からも誰からもそんな話、聞いた事無いなあ…」

竜也は、自分の記憶を辿りながら、俊哉に答えた。

「そうか。実はな…」

俊哉は静流の家庭の事情を、竜也に伝えた。

「えっ？ それ、マジで？」

「ああ。マジな話だ。これは、静流も絶対に知らないはずだ。静流の姉が、静流に話してない限りな。この話は絶対に、静流には秘密だぞ？」

「分かった。静流の家が、静流の姉ちゃんと二人暮らしなのは知ってたけど…。そうだったのか…」

竜也は、言葉を失ったようにうつむいた。

ちょうどそこへ、静流がトイレから戻って来た。

「え？何だ？何の話？」

「静流の姉ちゃんが美人だって話してたのさ」

充は、何事も無かったように淡々と言った。

「そうそう」

竜也と俊哉も、表情を一つも変えず、口裏を合わせる。

「ああ。遥姉ちゃんか。あの人、最近、彼氏の事でノロケまくりで、ウザいんだよな…」

俺は、つい姉の愚痴を漏らした。

そして、話を逸らすように、俊哉がケータイの時計を見ながら言った。

「もう2時か…。そろそろ帰ろう。明日も仕事あるしな。静流？ライブハウスのオーナーと仲良かったよな？今週の土曜の夜で、スタジオ一部屋貸してくれて頼んでくれるか？」

「分かった。言っとく」

「じゃあ、今日は解散」

俊哉の合図で、全員席を立った。

「俊哉のオゴリじゃないの？」

しつこい充。

まだ奢ってもらう事を諦めて無いようだ。

「しつこいな…。しょうがない。今日は、全員俺の奢りだ」

俊哉は充に根負けしたように、溜め息混じりに言った。

「やったあ！！」

三人は、両手を挙げて喜んだ。

「じゃあ、静流、頼んだぞ？」

「分かった。昼間にでも連絡しとく」

俺と竜也に見送られ、俊哉と充は、俊哉の車に乗って帰って行った。

「俺達も帰ろう」

竜也に促され、竜也の車に乗った。

家に着く頃には、夜中の3時近くになっていた。

「ただいま」

マンションの鍵を開けると、まだ部屋の明かりがついていた。

短い廊下の奥から、色白の肌に、長いストレートの綺麗な黒髪が印

象的な、まるで女優のような顔立ちの優しそうな女性が出て来た。

「静流？こんな遅くまで何やってたの？心配したんだから…」

（始まったよ…。姉ちゃんの心配性…）

「ああ、ごめん。竜也を俊哉達に会わせたんだ。竜也をウチのバンドに入れようと思ってさ」

「竜也君って、昼間に来てくれた子？」

「そうだよ。アイツ、ギターの腕が、なかなからしいからさ」

「そうなんだ。それならそうと、ちゃんと言ってくれれば良いのに…」

「だから、悪かったって」

「もう…、静流は…」

姉が小言を言っているのを後目に、俺はキッチンへ向かった。

姉は、俊哉と同年で、同じ高校に通っていた同級生だ。

それに姉が高校生の頃は、俊哉と付き合っていて、俊哉が頻繁にウチに出入りしていた為、俺と知り合い、俺が俊哉にギターを習い、俺が高校を卒業してからは、俺とバンドを組むようになった。

普段はクールな俊哉だが、実は、今でも姉に未練があるらしく、姉の話になると急に不機嫌になる事がある。

特に、男絡みの話は…。

「静流っ。聞ってるの？」

「聞ってるよ」

俺は、コップ一杯の水を飲み干して答えた。

「大体、俺も、もう良い大人なんだからさ、少しはほっといてくれよ…」

うんざりした顔で、姉の顔を見つめた。

すると…。

「静流？あたしがどれだけアンタを心配したと思ってんの…？」

姉は、いつもの穏やかな表情と打って変わって、俺を震え上がらせるようなオーラを放ちながら静かに言った。

（ヤ…、ヤバい…。姉ちゃん、マジギレモードだ…）

「あ、いや、だから悪かったって。今度からちゃんと連絡するからっ。ねっ？」

そう言い残して、俺は急いで自分の部屋へ戻った。

「あっ。こらっ！！静流っ！！待ちなさいっ」

「もう…。あの子ったら…」

遥は溜め息をついた。

部屋に戻った俺は、ほとぼりが冷めるまで閉じ籠もる事にした。

「姉ちゃん、キレたら話長いし、結構怖いんだよな…」

そう独り言を言いながら、俊哉から預かった新曲の音源を聴く為、パソコンを立ち上げた。

CDをセットして再生する。

夜中なので、ヘッドホンを耳に当てながら聞き入る。

「おっ。カッコイイ。どんな歌詞にしようかな」

と、一人の世界に浸る。

気が付けば、朝の5時を回っていた。

そっと部屋から顔を出す。

姉が、自分の部屋で寝静まったのを確認して、シャワーを浴びに行く。

（テーマは暗い感じでって俊哉は言ってたけど…。さて、どうするかな…）

その事ばかり考えた。

自分の部屋に戻り、眠りに就いたのは、朝の6時頃だった。

Chapter 5

昼過ぎに、俺は姉に叩き起こされた。

「起きて、静流。ねえ。静流ってばっ!!」

激しく身体を揺さぶられ、強制的に心地良い夢の世界から、現実の世界へと引き戻されてしまった。

「…んああ？何だよ、姉ちゃん…？」

俺はベッドに寝転んだまま、

「これでもか」

と、言う程に不機嫌極まりない表情で、姉をじっと睨み付ける。

そんな事はお構い無しに、姉はベッドから俺を引き摺り下ろそうと布団を引っ張る。

「今日は、買い物手伝ってくれる約束でしょ？夕方には、巧が帰って来るし。ほらっ！！早く起きて。行くよ」

「うーん…。そんな事、言った覚えはねえよ…」

そう言いながら俺は、ベッドから引き摺り下ろされまいと布団を思い切り掴み、必死に抵抗を試みる。

「嘘ばかりっ！！昨日、約束したじゃないっ！！」

姉は、抵抗する俺に反論しつつ、力いっぱい布団を引っ張る。

「約束した」、「してない」の押し問答と布団の奪い合いは、暫く続いた。

そして…。

結局は姉の強引さに根負けし、布団を全部剥ぎ取られ、ベッドから引き摺り下ろされてしまった。

「くそーっ…」

そう言いながら、寝ぼけ眼を擦り、ゆっくりと立ち上がって脱衣室の洗面台へと向かう。

「早くしなさいよ？」

ドアを開けっ放した、俺の部屋から姉が大声で急かす。

「はいはい…。あつ、そうだ…。ライブハウスにも連絡しとかないな…」

そう独り言を言いながら、洗面台の前に立ち蛇口の栓を捻ってぬるま湯を出す。

顔を洗いながら、

「我ながら、面白い頭になってんなあ…」

と、思いつつ鏡に映った寝癖だらけの自分を見つめる。

そして、蛇口の真下へ頭を突っ込む。

ぬるま湯を寝癖だらけの頭に被り、濡らした髪の水気をタオルで荒っぽく拭き取る。

洗面台の引き出しからドライヤーを取り出し、コンセントに繋いで、いそいそと髪を乾かし寝癖を直す。

髪が乾ききったら、最後に歯を磨き、部屋へと戻る。

部屋には、腕組みをして仁王立ちした姉が待ち構えていた。

俺はそんな姉を無視するように、床に散らばった服を手に取り、ゆっくりと着替え始めた。

「静流は、ホントにだらしないわね。そんなんじゃ、いつまで経っても彼女、出来ないよ?」

姉が呆れた目で、俺を見た。

「うるさいなあ…」

「あたしがいないと何も出来ないんだから、彼女になる子は大変だ

ね」

俺は、皮肉を言う姉をふてくされた目で一瞥した。

「早くしてよね？」

姉は、そう捨て台詞を吐き、俺を後目に部屋を出て行った。

「…ったく。めんどくせえなあ…」

ブツブツと一人で不満を漏らしながらも準備を済ませ、姉の後を追うように自分の部屋を出た。

「終わったぞ？」

リビングで待っていた姉に一言声を掛ける。

「じゃあ、行こっか？」

姉は、嬉しそうに玄関へと向かって行く。

俺は、姉の後をゆっくりと追い掛け、マンションの駐車場に止めた姉の車へと向かう。

そして、姉の車の助手席に乗ってすぐ、

(ライブハウスに連絡しないと…)

と思い出し、ケータイをズボンの後ろのポケットから取り出して、ライブハウスへ電話を掛ける。

「…はい。Sound Factoryです」

「あ。こんにちは。霞です。オーナーいますか？」

「ああ。静流君。オーナー、今出てるんだよ。何？ライブするの？」

「いえ、今週の土曜の夜9時くらいに、スタジオ貸してもらえませんか？」

「ああ。その日は空いてるから、大丈夫だよ」

「じゃあ、お願いします」

「ああ。分かった。開けとくよ」

「ありがとうございます。じゃあ、失礼します」

そう言って、俺は電話を切り、姉の車に取り付けてあるドリンクホルダーの中へ、ケータイを放り込んだ。

電話が終わるのを見計らったように、姉が突然、俺に問い掛ける。

「静流？ 静流は、彼女とか好きな子とかいないの？」

（いきなり何だよ？）

と、思いながら姉を横目で一瞥して聞き返す。

「別に。大体、なんでそんな事聞くんだよ？」

「別に。大した理由は無いわよ。ただ、可愛い弟の事は、お姉ちゃ

んとして知っておきたいだけよ」

姉はそう言って、微笑みながら車を運転していた。

（ほっといてくれ）

俺は、視線を車の窓の外へ向けた。

車窓に流れる景色には、青々とした木々と、初夏の清々しい青空が広がっていた。

夕食の買い物を終えて、マンションに着いた頃には、夕方の5時になっていた。

姉は、慌ただしく夕食の準備を始める。

「ねえ、静流。ちょっと手伝って？」

「ええー。ヤダよ」

「静流君、お願い。手伝って？」

姉が微笑みながら、俺に頼んだ。

姉が、俺に微笑みながら頼む時は、俺に大抵、無言のプレッシャーを与えてくる。

そんな姉の笑顔が、俺には異様に恐ろしく映った。

「はい…。やります」

(こ、怖え…)

「じゃあ、晩ご飯の下準備してくれる？」

「はいはい…」

俺は、渋々動くしかなかった。

と、ちょうどその時、玄関のチャイムが鳴り響いた。

『ピンポーン』

チャイムの音に、姉はすかさず反応する。

「きっと巧よ。あつ、いけない。もうこんな時間…。静流、ちよつと出てくれる？」

時計を見ながら、姉は慌てた。

時計は、夕方の6時を指していた。

「まったく、人使いが荒いんだから…」

俺は、ブツブツ文句を言いながら、ゆっくりと玄関に向かう。

『ガチャッ』

玄関のドアを開けると、ドアの隙間から眩しいくらいのオレンジ色の光が溢れ出した。

ドアを開けた先には、夕日に照らされた、背の高いスーツ姿の、短

い髪を立てた、まるで爽やかなスポーツマンのような雰囲気の優しい男の人が立っていた。

「ようっ!! 静流。久しぶりだな。元気か？」

巧さんは、元気良くにこやかに手を挙げ、俺に声を掛けた。

「お帰りなさい。巧さん。元気じゃないよお…。もう、姉ちゃんにこき使われちゃってさ…」

俺は、姉の愚痴をここぞとばかりにこぼす。

「はははは。相変わらず仲が良いな」

「笑い事じゃないよ…」

俺と巧さんが、玄関で立ち話をしていると、キッチンから姉が出て来た。

「お帰りなさい、巧。出張、ご苦労様」

「ただいま。遙。相変わらず、お前達は仲良し姉弟だな」

巧さんは、優しく微笑んだ。

「それはそうよ。だって静流は、可愛いあたしの弟だからね」

（ウゼーっ…）

俺は後ろを向き、顔をしかめた。

巧さんが笑いながら、大きな紙袋を姉に手渡した。

「お土産だ。仲良く分けてくれよ」

「ありがとう」

俺と姉が声を揃える。

「やっぱり仲良しじゃないか。はははっ」

「フフッ。立ち話も悪いから…。中に入って」

姉に促され、巧さんが部屋に上がった。

「ほら、静流も早く入りなさい」

「はいはい…」

そう言いながら、俺も中へ入った。

「晩ご飯作ってるから少し待っててね」

と姉が巧さんに一言言い残し、キッチンへ戻って行った。

巧さんは、外資系の商社で働く姉の婚約者で、俺にとっては、兄貴みたいな存在の人だ。

今回、半年間の海外出張から帰って来て、久しぶりに我が家で、一緒に過ごす事になった。

夕食の準備が整い、三人でテーブルを囲む。

さすがに、巧さんが帰って来ただけあって、姉も腕を振るっただけいい。

豪華な食事と酒が並ぶ。

「カンパニー」

三人で乾杯した後、姉が嬉しそうに巧さんに言った。

「巧、ちゃんと食べてた？ 久しぶりの愛情の籠もった料理だから、いっぱい食べてね？」

「嬉しいなあ。高級レストランなんかより、ずっと美味そうだ」

巧さんの表情も緩んでいる。

「もう、お世辞は良いから。食べて食べて」

「頂きます。…うん。美味しい。やっぱりレストランなんかより、遥
の手料理が一番美味いよ」

「もう。巧はいつも言う事が上手なんだから」

俺は、呆然として二人を見ていた。

（また始まったよ…）

そんな二人を無視するように、俺は、一人黙々と食べていた。

「静流？味はどう？」

「このスープ、もうちょっと塩が多い方が良いかもね。味が薄い。後、この唐揚げはもうちょっと、こう衣が…」

「もうっ。可愛くないんだから」

姉がムツとした表情で俺を睨み付ける。

「まあまあ。晩飯くらい楽しく食おうよ」

そんな俺達姉弟を見て、巧さんがなだめる。

「ところで、静流。最近、バンドはやってるのか？」

巧さんが、話題を逸らすように、俺の近況について問い掛けた。

「やってるよ。あ、そうそう。新しいギターが入ってさ。今週の土曜に音合わせするんだ」

「へえっ。良かったなあ。俺も、学生の頃にやってたからなあ。懐かしいな…」

巧さんは、俺の話を聞きながら、昔の事を懐かしんでいた。

「そう言えば巧さん、ギター上手いんでしょ？姉ちゃんが言った。今度聴かせてよ」

「おいおい。遥、変な事吹き込むなよ…」

巧さんは苦笑いを浮かべながら姉を見つめた。

「えーっ。だって前にあたしに弾いてくれたじゃない。巧、すごく上手だったわよ？」

「参ったなあ…」

巧さんは、照れ笑いを浮かべながら、後ろ頭を掻いた。

「俺も、巧さんのギター聴きたい」

俺も、ミュージシャンの端くれとして興味を持った。

「じゃあ、静流。ちょっとギター貸してくれ？」

「ああ、良いよ。ちょっと待ってて」

そう言う俺は、急いで部屋からギターを持って来た。

「ちゃんと手入れしてあるな。チューニングも完璧じゃないか」

巧さんは、俺のギターを手に取り一通りのチェックをしていた。

「そりゃ、もう。新曲のメロディー作ったりするのに使うからね」

得意気に俺は答えた。

「そうか。曲は何が良い？みんな知ってる「BELOVED」が良いかな？」

そう言いながら、巧さんはGLAYのBELOVEDを弾き始めた。

聞き慣れた、優しいメロディに、気が付けばいつの間にか、三人が声を揃えて、歌を口ずさんでいた。

「巧さん、上手だね」

「でしょう？」

何故か、姉が、得意気に俺に胸を張った。

「昔の事だから、ほとんど忘れてしまったけどな」

巧さんは、苦笑いを浮かべながら謙遜していた。

「そんな事ないよ。すごく上手い」

「おいおい。静流まで変な事言うなよ」

巧さんは照れを隠すように、俺の事も誉めてくれた。

「静流だって、なかなかの歌唱力だぞ。さすが、ヴォーカルだな」

「俺なんか、まだまだだよ。ボイトレとか、いっぱいしなきゃ」

そう言いながらも、俺は巧さんに誉められて、正直、心の中では嬉しかった。

「こりゃあ、静流が将来メジャーデビューするか？」

巧さんは微笑いながら俺を見て言った。

「そうなりたいね。そうなれるように、ライブとか、数こなしたりしないかね」

「頑張れ。お前の納得するまでやれば良い。俺は、応援してるからな」

「ありがとう、巧さん。俺、やれるとこまでやってみるよ」

酒を飲みながら、楽しそうに話をする二人を、遙は、嬉しそうに目を細めて、いつまでも見つめていた。

Chapter 6

巧さんが、帰って来た翌日―。

「あれ？ 静流、今日は早いじゃない？」

キッチンで、朝食の準備をしていた姉が、目を丸くした。

「今日のバイトは、早番なんだ」

時計は朝の7時を指す。

「あっ、そうだったね」

姉は、その事をどうやら忘れていたらしい。

「8時には出るよ」

俺は、そう言いながら、水を飲み干し、自分の部屋へ戻った。

着替えを済ませ、家を出た。

日曜日だけあって、車の量が少ない。

「これは、早く着くな……。まあ、良いか。遅刻するよりは……」

そう思いながら、車を走らせた。

バイト先には、20分程で到着した。

警備員室の前を、社員証を見せながら、通り過ぎる。

「おはようございます」

警備室にいた、中年の男性も笑顔で、

「おはようございます」

と、返してくれる。

俺のバイト先は、ショッピングモールの建物内にある為、早く来ても問題は無かった。

但し、開店までに、かなり暇を持て余すが…。

従業員用の通路から、普段は賑やかなはずの、誰もいない静まり返った売り場に出て、動きを止められた下りエスカレーターを逆に登る。

天窓からは、朝日が差し込む。

事務所のドアの前で立ち止まる。

「鍵、開いてるかな？」

そう思いながら、俺はドアノブに手を掛ける。

『ガチャッ』

既に、事務所には誰か来ているらしく、ドアの鍵は開いていた。

「もう、誰か来ているのか？一番乗りだと思ったのにな…」

そう独り言を言いながら、事務所へ入る。

薄暗い事務所の奥の方で、一瞬、人影が動いているのが見えた。

「おはようございます…」

(…誰だ?)

俺は恐る恐る、人影が動いた方を見つめながら挨拶をする。

「おお、静流。おはよう」

聞き慣れた声が返って来た。

事務所の中の人影の正体は、竜也だった。

「なんだ、竜也か…。早いな」

俺は、人影の正体が竜也だと言う事を確認出来て、心の緊張が解れたと同時に、安堵した。

そんな俺の気も知らず、竜也は、俺が口に出した些細な事に不満を漏らす。

「なんだとはなんだ。今日は、たまたま早く目が覚めたんだよ」

口を尖らせる竜也に、俺は苦笑いを浮かべながら言った。

「ははは。悪かったよ。「誰だ？」って思ったからさ…。今日の早番は…、俺と竜也、それと…、後は誰だ？」

「ええっと…、今日は…」

竜也は、俺の言葉に反応するように、事務所の壁に貼られたシフト表に人差し指を当てながら、今日の日付の早番のシフトを辿る。

「…ああ、松ちゃんだな」

竜也は、くわえたタバコに火をつけながら言った。

「そうか。じゃあ、開店準備は楽だな」

そう言いながら俺も、竜也に釣られるかのように、自分のタバコに手を伸ばした。

「そうだな」

時間がまだ余っている俺達は、タバコをふかしながら暫く、にこやかに話をしていた。

ちょうどその時…。

『プルルル…』

俺達の会話に水を差すかのように、電話の音が薄暗い事務所中に鳴り響いた。

「はいはい…」

竜也が急いで、事務机の上の電話の元へ走り、受話器を取る。

「ありがとうございます。IVISです」

「バイトの松岡です」

「ああ、松ちゃんか。どうした？」

「どうやら、電話の相手は松岡らしい。」

竜也の話の断片からは、電話の相手だけは分かったが、内容までは把握出来そうにない。

ただ、状況が状況だけに、簡単に推測する事は出来た。

（多分、休むんだろな…）

そう思いながら、俺は電話の応対をする竜也を、ただ静かに見ていた。

「店長、来てる？」

「店長は、今日は遅番だから、まだ来てないぞ」

「そうなんだ…。じゃあ、今日、熱があって頭痛いから休むって伝えといて…」

「分かった。言っとく」

「それから、俺、夏から就活するから、バイト辞めるよ」

「そうか。その事は、店長にちゃんと言っとけよ？じゃあ、お大事に」

そう言って竜也は、電話を切った。

「どうしたんだ？」

「松ちゃん、体調不良で休むって。後、夏から就活らしくてな。辞めるんだとさ」

「やっぱりそうか…。まあ、それはしょうがないな…」

「ああ。それと、話は変わるけどさ。松ちゃんの就活の話で思い出したが…」

竜也は突然、思い出した事を話し始めた。

「俺が、専門学校卒業する頃だったかな？就活してて、駅前をスーツ姿で歩いてたらさ…。いきなり、変な兄ちゃんに声掛けられたんだよ。何だと思う？」

竜也が、いきなり俺に問い掛ける。

「さあ？何かのスカウトとか？」

俺は竜也の話の内容を思い出しつつ、自分が考えられる全ての可能性の中から答えを探し出した。

「当たり前。しかもホストよ？ホスト。こんな初々しい、リクルートな俺を捕まえて、「君、ホストしないか？」って…。「ふざけんな！！」って言ってやったよ」

竜也は、苦笑いを浮かべながら当時の思い出を話した。

「はははっ。ホストならまだ良いじゃん。俺なんか、この前、自衛隊にスカウトされたぞ？しかも、幹部のオッチャン…。充と駅前に買い物行ってさ、行きで捕まり、帰りにも捕まったよ。かなりしつこかったぞ。「君達、自衛隊にならないか？公務員で安定してるしな。職だって世話出来るぞ」って。行きで断ったのに、帰りにも「よく考えてくれよな。もし、やる気があるなら、ここへ連絡くれたら良いから」って、ご丁寧の名刺までくれたよ」

俺は、つい最近の出来事を竜也に話した。

今、思い出すだけでも不思議な事だった。

「何故、俺達なんだ？」

と…。

そして、頭の中には必死に俺達を口説こうとしていた、自衛隊のお偉いさんの顔が浮かぶ。

「あっははは。オッチャン、新人集めのノルマかなんかで、相当焦ってたんじゃないの？」

竜也是大笑いをしながら、俺の話を聞いていた。

「笑い事じゃねえよ…。俺、逃げるのに大変だったんだからな？他にも俺達の前の方にも男は歩いてたんだぞ？そいつらはシカトで、俺達目掛けて一直線だぞ？ホント参ったよ…」

俺は思い出しただけでもうんざりする、あの日の光景が頭に甦り、口を尖らせながら竜也にぼやいた。

「ははは…」

竜也是、そんな俺の気持ちを察したのか、苦笑いを浮かべていた。

「おっと。もうこんな時間か。開店準備するぞ」

俺は、事務所の時計を見上げた。

時計は9時前を指している。

俺の言葉を合図に、竜也も頭の中を切り替えたように言った。

「ああ。やるか」

俺達は、いつものように慌ただしく開店準備を始めた。

開店まで、後、一時間。

開店準備をしながら、俺は思い出したように、竜也に言った。

「そうそう。音合わせの事なんだけどさ…」

「どうだった？スタジオ取れたか？」

竜也にとっては、俺達との初の音合わせなだけに、楽しみに思っていたのだろう。

開店準備をしている手を休め、そう言いながら真剣な眼差しで俺を見つめていた。

そんな竜也を見て、俺は竜也を安心させるように、

「今週の土曜の夜9時にスタジオ借りられたぞ」

と、微笑みながら答えた。

「それは良かった。じゃあ、予定通りだな。俊哉達には言ったのか？」

「いや、まだなんだ。実は昨日、姉ちゃんにこき使われてたからさ……。連絡する余裕が無くて……。昼休憩にでも連絡するよ」

俺は、楽しみにしてくれている竜也に申し訳ないと思ったが、竜也は、別に気にする素振りも見せず、ただ笑顔で、

「そうか。分かった。また、静流の家まで迎えに行けば良いか？」

と、俺の事を気に掛けてくれた。

「ああ、頼むよ。悪いな、竜也」

俺は、竜也の優しい心遣いが嬉しかった。

「まあ、行くついでだからな。平気さ」

竜也は、微笑んで俺を見ていた。

そして俺達はまた、開店時間に間に合わせるように、慌ただしく準備や掃除を再開する。

カウンターの壁に掛かった時計が、開店時間の10時を指した。

開店と同時に、エレベーターホールや、エスカレーターの方から、子供達や家族連れが群れをなして、俺達の店に流れ込んで来た。

日曜日だけあって、客数が多いのが目立つ。

「今日は、忙しいぞ？」

俺は竜也を横目で見ながら、不敵な笑みを浮かべた。

「ああ。そうみたいだな…」

一目散に、俺達がいるカウンターへ向かって来る子供達を見つめ、竜也は、溜め息混じりに言った。

常連の子供が、

「早くメダルを出して」

と、せがむ。

またいつもと変わらない、忙しない休日的一天が始まった。

俺達は、客の対応に追われながらも息を合わせ、いつもの慣れた仕事を淡々とこなして行った。

Chapter 7

土曜日―。

夜の8時を回った頃に、竜也が静流を迎えにマンションに来た。

『ピンポーン』

「はあい」

遙は玄関のチャイムを聞き、玄関へ向かう。

『ガチャッ』

遙がドアを開けると、ドアの向こう側で待っていた竜也が笑顔で口を開いた。

「こんばんは。静流、いますか？」

「ああ。竜也君。いらっしやい。ちょっと待っててね」

竜也を見て、遙も笑顔で返す。

そして、玄関脇の静流の部屋に向かって、大声で静流を呼んだ。

「静流ー。竜也君、来たわよー」

「ああ…」

部屋のドアの向こう側から、気怠るような静流の声が返って来た。

「さあ、入って」

遙は、笑顔で竜也を部屋の中へ通した。

「あつ、失礼します」

竜也は、遙に小さくお辞儀をして、静流の部屋のドアノブに手を掛けた。

『ガチャッ』

俺の背後で、部屋のドアが開く音がした。

俺がドアの方を振り向くと、そこには竜也が立っていた。

「おお、竜也。悪いな。まあ、その辺に適当に座ってくれよ」

俺は微笑みながら、竜也に部屋の床の上に転がっていたクッションを渡した。

「ああ、すまん。別に構わないぞ。どうせ、通り道だしな」

竜也は部屋の小さなテーブルの前に座り、タバコに火をつけた。

俺はテーブル上の灰皿を、竜也に差し出しながら言った。

「まだ、時間あるからゆっくりして行こう」

俺は作業する手を止める事なく、微笑みながら竜也に言った。

「そうだな。：それにしても、静流の姉ちゃん、美人だよな？」

竜也はタバコをふかしながら、思い出したように呟いた。

「そうか？」

俺は、ギターの手入れをしながら、竜也の言葉に耳を傾ける。

「ああ。それに優しいだろ？静流が羨ましいよ…」

竜也は、羨ましそうな目で俺を見た。

確かに、いろんな奴に言われる。

でも俺は、そう思った事は、一度も無かった。

俺は作業する手を止め、ギターをベッドに立て掛け、竜也の顔を見ながら言った。

「どこが？口うるさいだけだぞ？」

すると、突然、俺の背後で部屋のドアが開く音がした。

『ガチャッ』

俺がドアの方を振り向くと…。

そこには、ジュースが入ったグラスを2杯と、クッキーが盛ってある皿に乗せたトレーを持った姉が、静かに立っていた。

姉と目が合った瞬間、俺は背筋が凍りついた。

「…誰が口うるさいって？ 静流君？」

姉が只ならぬ気配で、俺を睨み付ける。

押し潰されそうな程の、異様なプレッシャーが俺に掛かる。

「い…、いえ、何でもないです…」

俺は思わずうつむいて、姉から目を逸らした。

（怖え…）

怯える俺を横目で一瞥した後、気を取り直したように姉は、竜也に言った。

「どうしようもない弟だけど、よろしくね」

姉は満面の笑みを浮かべ、竜也を見つめていた。

「いえ、とんでもない。こっちこそ、迷惑掛けてるし…」

竜也は照れ笑いを浮かべながら、姉を見つめて答える。

「フフフ。遠慮しなくて良いからね？じゃあ、ゆっくりして行っ
ね」

姉は緊張する竜也を見て、微笑んだ。

「ありがとうございます」

竜也は照れたような微笑みを浮かべ、姉に小さくお辞儀をした。

「じゃあ、ごゆっくり」

姉はそう言っていると、トレイをテーブルの上に置き、笑顔で俺の部屋を後にした。

「やれやれ……。なあ、竜也？」

溜め息混じりに言いながら、竜也を見た。

「ああ？」

竜也は出されたジュースを飲みながら、俺を見つめた。

「アレのどこが優しいんだ？見たろ？」

俺はうんざりした表情で、俺の背後にある、姉が出て行った部屋のドアに向かって、右手の親指で指を差しながらぼやいた。

「きつと口うるさいのは、お前の事が心配なんだよ。お前は、「たった一人の弟」だからだろ？優しいじゃねえか。それに怒られるのは、大体、お前が変な事言うからだろ？」

竜也は、グラスをテーブルの上に置き、苦笑いを浮かべていた。

「フンッ」

俺は、ふてくされながら一言だけそう発し、タバコに火をつけた。

そして暫くの間、竜也と世間話程度の下らない話で盛り上がっていた。

すると、不意に竜也が自分のケータイを見て、話に終止符を打つように言った。

「そろそろ行くか？今、8時半を回ったぞ」

俺は竜也の言葉を確認するように、部屋の壁に掛けてある時計を見上げた。

「ああ、そうだな。遅れると俊哉が、また怒るしな」

そう言いながら、俺達はゆっくりと腰を上げた。

俺はテーブルの上に置かれた、空のグラスと皿を乗せたトレーを手
に取った。

それを一旦、キッチンへと運ぶ。

キッチンのカウンターテーブルの上に、空のグラスと皿を乗せたト
レーを置きながら、姉に声を掛ける。

「じゃあ、姉ちゃん、俺達、出て来るから。多分帰りは遅くなる」

「分かった。気を付けてね。竜也君、またいらっしやいね」

姉は食器を洗う手を止めて、俺達の方を振り向いて笑顔で答えた。

「ありがとうございます。ジュース、ご馳走様でした」

竜也は笑顔で、姉にお礼を言った。

そして、二人揃ってマンションを後にする。

来客用の駐車場に止められた竜也の車に乗り、ライブハウスへ向かう。

俺達は車の中で、これからのバンド活動についての事を話していた。

俺達の乗った車は9時になる10分程前に、ライブハウスに到着した。

俺達が来るのを見計らったようなタイミングで、俊哉と充も到着。

「よお。お疲れ」

そう言いながら、四人揃ってライブハウスの事務所へと入る。

「こんばんは」

俺は、事務所のカウンターの中に座ってテレビを見ているオーナーに声を掛けた。

「ああ。いらっしやい。おつ。その子が新しいギターか？」

オーナーは、俺達の方を見ながらゆつくりと腰を上げた。

「ええ。そうです」

スタジオ使用の受付をしながら、俺は微笑みながら答えた。

「まあ、気が済むまで練習していつてくれ」

オーナーは、俺達に微笑みかけた。

「あれ？今日は土曜なのに、誰もいないんですか？」

俊哉は辺りを見回しながら、オーナーに問い掛ける。

「ああ。珍しい事にな。他の連中はどうしたんだろうな？」

と、オーナーは溜め息混じりに、ぼやきにも似たような言葉を発し

た。

「まあ、お前達だけの貸し切り状態。ゆっくりして行ってくれ」

そう言いながらオーナーは、カウンターの下から取り出したスタジオ
オの鍵を俺に手渡した。

「ありがとうございます」

俺達は、オーナーから鍵を預かるとや否や、早速、2階のスタジオ
へ続く階段を上がる。

「なあ、竜也？」

階段を上がりながら、俺は竜也に問い掛けた。

「なんだ？ 静流？」

「新曲、出来たのか？ 今、作曲中とかなんとか言ってたけど」

俺の問い掛けに、竜也はこう言った。

「ああ。8割までは完成してる。後はギターソロだけだな。どうしてもギターソロで、タッピングをやりたくてな。なかなか良いのが、思い浮かばないんだ」

言い終わった竜也の表情からは、少しだけ不満が伺えた。

「こだわりのあるんだな……。出来たら、俺達に聴かせてくれよ」

「ああ。良いぞ」

竜也は自信満々の笑みを浮かべて、俺を見た。

俺達は、2階のスタジオの前に立ち、ドアの鍵を開けて部屋に入っ
た。

部屋の照明をつけると、たくさんの音楽用の機材が並んでいるのが
見える。

それぞれの荷物を、適当に床の上に置く。

「じゃあ、さっそく、竜也の腕前を拝見しますかね」

俊哉は微笑みながら竜也を見つめた。

「ああ。任せてくれ」

そう言うと、竜也はギターケースからギターを取り出し、音の微調整を始めた。

ギターの弦が、竜也の指で強く弾かれる。

「良し。こんなもんだろ」

そう言うと竜也は、自分の思いつくままギターを弾き始めた。

所々で目に付く竜也のギターの技術に、俺達三人は、目を奪われた。

「ほう。なかなかじゃないか。これならイケるな」

俊哉は満足そうな表情を浮かべながら、竜也のギターの腕前に唸っていた。

「とりあえず、みんなでやってみないか？」

俊哉の提案に、

「そうだな」

と全員の意見が一致。

一斉に準備に取り掛かる。

俊哉は、ベースをケースから取り出して、音の微調整。

充は、ドラムを叩いて腕馴らしと、ドラムの各部分を自分に合うように調整する。

そして竜也も、ギターの弦の再調整を始めた。

俺は呼吸を落ち着け、少しずつ声を出す。

「ア、アゝ、アアゝ。うん。よし。調子は良い」

全員の準備が終わった段階で、俊哉が俺達に問い掛ける。

「何をやる？みんなが、知ってる曲が良いだろう？」

「GLAYなら、みんな知ってるしコピーした事あるだろうから、ちょうど良いんじゃないか？」

俊哉の問い掛けに竜也がそう答える。

「GLAYやLUNA SEAはコピーの定番だし、みんな知ってるしね。じゃあ、そうしようか」

俺は、竜也の意見に賛成した。

実際に演奏してみると、竜也にとっては、俺達BーRaveとは初めての演奏だったが、不思議と呼吸がピッタリと合っていた。

「うん。ピッタリだな。なんか、初めてだとは思えないくらいだな」

俊哉は笑いながら、竜也を見つめた。

「ああ、そうだな。今度は、みんなでオリジナルの曲をやってみないな」

俺は、竜也と演奏する俺達の曲がどういう風に化けるのか楽しみだった。

「俊哉？今、出来てるオリジナルの音源か、スコアを俺にもくれないか？」

思い出したように、竜也は俊哉に言った。

「そうだったな。竜也には、まだ渡してなかったな。ほら。これが音源だ」

そう言って、俊哉は持って来たバッグの中から、一枚のCDを竜也に手渡した。

「サンキュー。今度の練習までに覚えて来るよ」

竜也は、微笑みながらCDを手に取り、俊哉を見つめた。

「ああ。頼んだぞ」

俊哉は、喜ぶ竜也に微笑みかけた。

「俊哉？今、スコアは無いか？とりあえず、すぐにでも覚えられそうな簡単な曲とかさ」

竜也は、思い立ったように俊哉に問い掛ける。

「ああ、ちょっと待ってろ」

俊哉は、ついさっきCDを出したばかりのバッグの中を覗き込み、あるだけのスコアを取り出し、なるべく簡単な曲を探した。

「これなんかどうだ？ほぼ、コードだけだ。それにしても、一体、どうするつもりだ？」

俊哉は、竜也に問い掛けた。

その俊哉の手には、3枚綴りにされた紙があった。

「一時間、時間をくれ。今、覚える」

竜也は、俊哉からスコアを受け取るや否や、スタジオの椅子に腰掛け、すぐに譜面と睨めっこを始めた。

「分かった。なんなら、竜也の好きなように、アレンジ加えてもらっても構わないからな」

俊哉は、真剣な表情の竜也に微笑みかけた。

「ありがとう。ちょっと待っててくれ」

竜也はそう言うと、スコアを見ながら、一つ一つの音を拾い上げるように、ゆっくりとギターを弾き始めた。

「俺は竜也に、テンポとか教えるから、お前達は少し待っててくれ」

俊哉は俺と充にそう言うと、竜也の隣の椅子へ座った。

「充、少し外へ行かないか？」

俺は二人の邪魔をしないようにと、充を外へ誘う。

「ああ、良いよ」

俺と充は、一旦スタジオを出る。

タバコを吸おうと、シャツの胸ポケットを探った。

「あつ。タバコ、一本しかねえじゃん」

俺はタバコを箱から取り出し、空箱を握り潰した。

「コンビニ行くかい？」

充は、笑顔で俺を見つめながら言った。

「ああ。散歩ついでに行ってみるか」

俺は充と一緒に、ライブハウスの近所のコンビニへ向かった。

「なあ、静流？竜也すごいな」

買い物を済ませ、コンビニの駐車場に出た所で、充が俺に言った。

「ああ。ギターの腕が、あそこまで上手いとは思わなかったな」

俺も、竜也の演奏するギターを目の当たりにして、あまりのレベルの高さに感心していた。

「一時間で覚えられるかな？」

充は、少し心配したように呟く。

「俊哉が付いてるし、竜也なら出来るだろう」

俺はそう言いながら、買って来たコーヒーを開け、駐車場の車止めの上に座った。

そして、そう言いながら心の中のどこかでは、竜也となら俺達B－Raveの夢を叶えられるような気がしていた。

「静流は、どうやって竜也を見つけたんだ？」

充は、俺の座っている横の車止めに座り、俺と竜也との出会いのきっかけを問い掛けた。

「ああ。たまたま、同じバイト先だったんだ。この前バイト中にバンドや音楽の話をしたりしたから、こいつならって思ってたさ…」

俺は充にそう答えながら、自分の直感は間違いじゃなかったと確信していた。

「ふーん。なあ、静流？ 竜也となら、俺達の夢、叶えられそうじゃないか？」

どうやら充も、俺と同じ事を思っていたようだ。

「ああ。俺達が、B－Rave組んだばかりの時の、アレだな」

俺は充に微笑みながら、バンド結成当時の事を思い出した。

「そうそう。俺達が、「音楽の世界で新しい風を吹かせてやる」っ

て、夢…」

無邪気な笑みを浮かべながら、充も俺達の夢の話を思い出していたようだ。

「とにかく、メンバーは揃った。後は、やるだけさ。やれる所までやってやろうじゃん。なあ、充？」

俺は、充にそう微笑みかけた。

そして、心の中では、

「俺は、俺達の夢の為に突っ走るだけだ」

と、自分に言い聞かせていた。

「そうだね。今まで以上に、楽しくなりそうだな」

充は、俺達のこれから先の事を想像しているのか、嬉しそうな表情で夜空を見上げていた。

「まあ、とにかく。俺達のやれる所まで突っ走ってやろうぜ？な？
充？」

「そうだな。俺達の夢の為に頑張ろうぜ？な？静流？」

俺と充は微笑みながらそう言って、バンド結成時の夢の実現を互いに再確認し合った。

そして、暫く俺と充は、夜風を浴びて夜空を見上げながら話をして
いた。

ふと、時間が気になり、俺はケータイの待受画面の時計を見た。

竜也達が練習に籠ってから、既に、一時間は経っていた。

「そろそろ二人の所へ戻ってみるか？」

俺はゆっくりと立ち上がりながら、充に微笑みかけた。

「そうだね」

充も笑顔で立ち上がる。

そして、俺達は来た道を引き返してライブハウスへ戻り、2階のスタジオへと入る。

「どうだ？出来そうか？」

俺は、スタジオで休憩している二人に問い掛けた。

「ああ。いつでも行けるぞ」

竜也と俊哉が、声を揃えて微笑む。

「じゃあ、やってみよう。行くぞ？」

俊哉の掛け声と共に、全員が一つになって、音を奏でる。

充のシンバルを合図に、竜也のギターがノイズの混ざった甲高い

『キューーン、キュルキュル』

というメロディを奏でる。

そこへ俊哉のメロディアスながらも

『ヴーン』

とうねるベースの音色と、充のタムとスネアの疾走感溢れる、歯切りの良い

『タカタカタカタカ…』

という高速リズムと腹の底まで

『ドスンッ』

と、響く破壊力のあるバスドラの音色が絡む。

そして俺は、他の三人に負けないように、腹の底から出した時に激しく、時にクリアに澄んだ歌声を三人の魂の籠ったメロディに乗せた。

竜也が加わる以前の俺達には無かった、音の厚み、響き、そして、スタジオを全体を破壊するよううねりを感じた。

ベースのネックを握ったまま、うつむいた俊哉の左手が震えていた。

「コレだ…!!」

そう、メンバーの誰もが確信した。

「行ける。俺達ならやれるっ!!」

心の中の歓喜の叫び声と共に、俺も自分の胸が高鳴るのを感じた。

暫く音の余韻に浸っていた俺達を、現実の世界に引き戻すかのよう
に、

「あのさ…。俊哉って、メロディアスなベース多いよな？そのメロ
ディアスな部分を残しながら、もっとうねらせてみたらどうだ？多
分、もっとリズムがはつきりすると思うんだ」

と、竜也は俊哉のパートについて、竜也なりの考えを提案した。

「なるほどな。それは良いかもしれないな。少し変えてやってみよう。そう言えば、竜也？ギターソロの部分は、もっとノイズを効かせても良いぞ。きっと、俺のベースに絡まって良い感じになると思うんだけどな…」

「じゃあ、こんな感じでどうだろう？」

そう言うとき竜也は、軽々と自分流にアレンジを加えたギターソロの部分を奏で始めた。

俺達は、その激しく、攻撃的で、そして甲高くて速いノイズの入り交じったメロディに耳を傾けてじつくりと聴いた。

「おお。良いじゃないか！！素晴らしいっ！！」

俊哉は拍手をしながら、興奮した様子で椅子から立ち上がった。

「…で、ギターソロみたいにこんな感じで、ラストサビの辺りくらいからエンディングまで、派手に『キュルキュル』言わせたらカッコ良くないか？」

竜也は、子供のような無邪気な笑みを浮かべ俊哉を見つめた。

「ああ。もうその辺りは竜也に任せる。完成した時には、良い曲になってるはずだからな」

すっかり竜也の腕を信用した俊哉は、笑顔で竜也を見て言った。

「じゃあ、もう一回やってみようぜ？」

竜也は、笑顔で俺達に言った。

「ああ。やってみよう。充？イントロから派手にぶちかましてくれないか？ビートはお前に任せる。好きなように叩いてみてくれ」

俊哉は充のドラムに激しさを求めたのか、充に充なりの自由奔放なドラムを求めた。

「分かった。いつもよりちょっとだけ速く叩いてみるよ」

充は俊哉に、

「自分の好きなように叩け」

と言われた事が嬉しかったのか、はしゃいだ様子でスティックを両手に持ち、ドラムを無茶苦茶に叩き鳴らした。

充のドラムの音が鳴り止むのを待って、俺は俊哉に問い掛けた。

「俊哉？所々でシャウトしても良いか？その方がきっと迫力出るぞ？」

「ふむ…。それも、良いかもしれないな。よし。歌の事は静流に任せた。静流の好きなように歌ってみてくれ」

俊哉は微笑みながら、俺を見て言った。

「ああ。任せてくれ」

俺は親指を立て、得意気な表情で俊哉に微笑んだ。

俺達はお互いに、意見を出し合って、納得の行く曲になるまで繰り返し音を出し続けた。

スタジオ全体が揺れて、今にも崩壊してしまうような錯覚すら覚えるとてもない音圧に、身体のコから震えた。

「完璧だ。これなら、俺達の、理想の音楽にきっと届く」

俊哉は、今までにないくらいの満足気な表情で呟いた。

それは、俊哉だけではなく、この場において実際に音を出した俺達全員が確信していた事だった。

俺が三人の顔を見渡すと、誰もが満足感で満たされたような表情をしていた。

「充、今の曲、前と後で、ちゃんと録音してあるか？」

俊哉は、余韻に浸る俺達の目を覚まさせるかのように言った。

「ああ。バッチリだ。ちゃんと取れてるよ」

充は嬉しそうな表情で、CDを録音用の機材から取り出しながら答える。

「良しっ。じゃあ、これは帰って新しいCDに焼き付けて、またお前達に渡すからな？」

俊哉は微笑みながら、録音したばかりの音源を手にも、俺達に言った。

「今日は、もう遅い。それに、十分な収穫があった。次の練習まで、みんな、ちゃんと覚えておいてくれ」

「分かった」

俊哉の締め言葉を合図に、俺達はいそいそと帰り支度と、スタジオの後片付けを始めた。

俺達は、夢へ向かって大きな一歩を踏み出した。

竜也と言う、強力な仲間を得て。

俺達の音楽は、まだまだ進化するだろう。

音楽が低迷しつつあるこの時代に、俺達が一つに集まったのは、運

命なのか、それとも、神の悪戯なのか…。

新しく生まれ変わり、大きく前進する事になった、俺達「B＝R a v e」の初の音合わせは、大きな成果をもたらして終了した。

Chapter 8

数日後―。

ある日、バイト先での仕事中にパート女性が、突然、俺の目の前に現れこう言った。

「今日、新しい子が面接に来るよ。20歳の女の子だって」

その女性は微笑みながら、俺を見つめた。

「へえ。それ、竜也の耳に入ったら、絶対喜びますよ」

俺は内心、少し興味があつたが、あえて無関心を装った。

「小野瀬君に話してあげたら？」

パートの女性は、意地悪そうな微笑みを浮かべた。

「あはは。そうですね」

俺は笑いながらそう言って、竜也を探す為、カウンターからフロアを見渡す。

俺が一通り店内を見渡した所、メダルコーナーで一台のメダル機の扉が開いている光景が、俺の目の中に飛び込んで来た。

「あそこか……。よし」

俺はそう呟いて、ゆっくりとその場所へ向かう。

竜也は俺が思った通り、扉が開け放たれたスロット機の所にいた。

竜也はそこへしゃがみ込んで、一生懸命にスロット機の掃除をしていた。

俺は開いたスロット機の扉越しに、一生懸命に仕事をしている竜也に話掛ける。

「なあ、竜也。ちょっと良いか？」

「なんだ？ 静流？」

竜也の素っ気無い返事からは、

「今、お前には構ってられないんだよ」

と、言うような、そんな気配が感じ取れた。

それでも、俺はお構い無しに話を続ける。

女好きの竜也がどうリアクションをとるのが、楽しみだったからだ。

「今日、新しい人が面接に来るらしいぞ。しかも20歳の女だってさ」

俺は笑いを堪えながら、半分にやけた表情で竜也に言った。

「マジで？」

俺の話を聞くや否や、竜也は開いた扉の向こう側から、只でさえ大

きい目を、「これでもか」と言わんばかりに

『カッ』

と、見開き、勢いよく

『スッ』

と立ち上がった。

俺は竜也のその様子がおかしくて、堪えていた笑いをつついっぴい暴発させてしまった。

「あっははは。食い付いて来ると思った」

「いや、マジで?」

竜也は真剣な表情で、しつこく聞き返して来る。

「ああ。マジ、マジ。なんなら、岡さんに聞いてみな?俺は、岡さんから聞いたんだからさ」

俺は腹を抱えて笑いながら、竜也に答える。

俺の話聞くや否や、竜也は声を張り上げながら、仕事そっちのけで、カウンターへ向かって行った。

「岡さん。静流の話、マジっすかぁ!？」

「うん。そうそう。今日の12時半だったかな?来るらしいよ」

パートの女性も、

「クスクス」

と、笑いながら、竜也の問い掛けに答えていた。

「やったあ」

竜也は嬉しそうな表情を浮かべ、派手にガッツポーズをしていた。

俺は、昼過ぎにパートの女性から、バイトの面接について話を聞いた。

「なかなか、感じの良い子だったよ。約束の時間よりも10分くらい早く来てくれてね…」

パートの女性の話では、約束の12時半になる少し前に、その女の子は俺のバイト先にやって来たそうだ。

俺はカウンターから離れた場所で、景品の補充をしていた為、その女の子を確認する事が出来なかった。

「へえ。竜也は、どう言っていました？」

俺はそんな事よりも、竜也のリアクションが気になってしょうがなかった。

「小野瀬君にはまだ話してないんだけどね…。印象や感想どころか、ただ、「若い女の子」ってだけで盛り上がっちゃってるしね。言ったらどうなる事やら…」

パートの女性は苦笑いを浮かべながら、俺の問い掛けにそう答えた。

(やれやれ…)

俺は溜め息をついて、竜也がカウンターに現れるのを待つ事にした。

暫く経って、竜也がカウンターに戻って来た。

「竜也、面接に来た子、見たのか？」

俺は竜也が戻って来るや否や、すかさず問い掛けた。

「いや、残念ながら…。別の事してたり、トイレ行ったりしてたから…。見逃した…」

「一生の不覚」と言わんばかりの、竜也の落ち込み具合を見て、俺は思わず笑ってしまった。

それから、数日後―。

その女の子が、正式にバイトとしてメンバーに加わった。

女の子の初出勤の日、俺は、たまたまカウンターの周りのモップ掛けをしていた。

すると、ちょうどその時、俺の目の前を、パートの女性と若い女の子が、事務所の方へ向かって歩いて行くのが横目に見えた。

俺は内心、

「どんな子だろう？」

と、後ろを振り返って見た。

そして、その女の子も、俺の視線に気付いたのか事務所に入る直前に、俺の方を振り向いた。

彼女の目と俺の目が合った瞬間、つい、条件反射で俺は視線を逸らしてしまった。

（今、振り向いたよな？もしかして、俺の顔に何か付いてたのかな…？）

俺はそう思いながら、右手で自分の顔に触れた。

それから暫く経って、パートの人に連れられてカウンターにやって来たのは、肩に掛かるくらいの明るい茶色の髪をした、ぱっちりした大きな目が印象的な、色白の可愛い女の子だった。

彼女は、可愛い声で自己紹介を始めた。

「今日から、ここで世話になる藍沢です。よろしくお願いします」

彼女は可愛い微笑みを浮かべながら、俺を見つめた。

俺は彼女の笑顔を見た瞬間、

『ドキッ』

と、胸が高鳴るのを感じた。

「…霞です。よろしく」

彼女の笑顔を見た俺は、胸の高鳴りと、頬の紅潮を抑えようと必死

になった。

「今日は、ここにいる霞君か、小野瀬君に仕事を教えてもらってね」

微笑みながらそう言って、パートの人は事務所の中へ入って行った。

「じゃあ、とりあえず、この景品袋を、こんな風に折ってくれるかな？」

俺は緊張する気分と、指先の震えを抑えようと必死に格闘しながら、彼女に手本を見せた。

「はい。分かりました」

彼女は満面の笑みを浮かべながら、素直に答える。

俺は呼吸を落ち着け、彼女に優しく話掛けた。

「あつ、藍沢さんだっけ？俺、藍沢さんとは、歳が一緒なんだ。だから敬語じゃなくて良いからね」

俺は、少しはにかみながら、笑顔で彼女を見つめた。

「うん。分かった。ありがとう、霞君」

俺の言葉に、彼女の緊張が解れたのか、さっきとはまた違った笑顔で答えた。

（か、可愛い…）

彼女の笑顔を間近で見ていた俺の頬は熱くなり、気分が落ち着かなくて堪らなかった。

俺は、緊張する自分をなんとか抑え込み、午前中の業務を無事に終える事が出来た。

そして、昼休憩―。

早番のメンバーとの食事中、パートの人が突然、彼女に問い掛けた。

「そう言えば、藍沢さんは、彼氏はあるの？」

（いきなりかよ。まったく、岡さんは…）

俺はそう思いながらも、興味津々に聞き耳を立てた。

「はい。いますよ」

（チッ。虫付きか…。虫付きには興味無いな…）

心の中で強がりを書いてはみたが、内心、俺はショックを受けてしまった。

（そりゃ、そうだよな…。こんなに可愛いんだから…。当然、男もいるよな…。ハア…）

そのせいか、俺はつい、箸を滑らせて、弁当メインの鮭を落としてしまった。

『ツルツ…。ポトツ』

「ああ…。俺の鮭が…」

俺は立て続けのショックに、打ちひしがれてしまった。

「弱り目に祟り目」、「泣きっ面に蜂」とはよく言ったものだ。

その時の俺は、正に、その状況だった。

「お前、バカだな…。鮭は弁当のメインだろ？それを落とすなんて…。信じられんな…」

竜也は呆れた表情を浮かべ、俺に一瞥をくれながら皮肉を言った。

「ほっとけ。手元が狂ったんだよ」

俺は口を尖らせ、ふてくされた表情で竜也を睨んだ。

そんな俺と竜也のやり取りを見て、彼女は可愛らしい笑顔で、

「クスクス」

と、笑っていた。

食事を終えた俺達は、それぞれに自分達の休憩時間を満喫していた。

漫画を読みながら、俺は、ふと、事務所の時計を見た。

（もう14時前か…）

漫画に没頭するあまり、いつの間にか、休憩時間も終わりに近付いていたようだ。

ちょうど、その時。

再び漫画の世界に入り込んでいた俺を、現実の世界に引き戻すかのように、突然、店長が「机の掃除当番表」という物を持って来た。

その表には、曜日の所にそれぞれの名前が書かれていた。

（なんだ？これは？）

俺はその紙切れを見つめながら、そう思っていた。

「休憩机の上が汚いので、今日から当番を決めて、掃除をしてもらう事にしました」

店長が、その表の主旨を簡単に説明した。

（ふーん…。まあ、良いんじゃないか？）

俺は心の中でそう思いながら、漫画の続きを読みふけた。

「今日は月曜だから、早速、葵君お願いしますね」

店長はそう言いながら、バイト先の先輩に休憩机の掃除を依頼した。

「へーい」

先輩は、店長の言葉に気怠そうな返事をした。

（今日は葵さんか…。俺は何曜だ？）

俺は漫画を読むのを止めて、そう考えながら、壁に貼り付けられた

ばかりの掃除当番表を眺めた。

その横には、今月の俺達のシフト表も貼ってある。

（俺、掃除水曜じゃん。シフトは休みだぞ…。この場合はどうなるんだ？）

そう思いながら、俺はシフト表に目を向けた。

すると俺の目の中に、彼女の名前が勢いよく飛び込んで来た。

（へえ…。藍沢麻紀って言うんだ…。可愛い名前だな…）

俺はそんな事を、ただ、

「ボーッ」

と、上の空で考えている所へ、突然、彼女が話し掛けて来た。

「何してるの？」

「あ…、ああ。いや、掃除当番の日、俺休みなんだよね…。だから、こういう場合はどうなるのかなって…」

俺は彼女の問い掛けに、

「ハッ」

と我に返って、慌てて答えた。

「あつ。ホントだ。どうなるんだろうね？」

俺の言葉を聞いた彼女は、無邪気な表情を浮かべシフト表を眺めていた。

そんな彼女を横目で見ながら、俺は頭の中で考えていた事が彼女にバレないようにと必死になっていた。

俺は今まで、彼氏持ちの女性には一切興味は無かった。

だけど、彼女だけは何故か違った。

俺は、不思議な感覚に陥りながらも、彼女に話し掛けられて、俺の心臓は破裂しそうな程に高鳴り、顔からは火が出そうな程の勢いで熱くなっていた。

俺は緊張を抑えながら、彼女と共有する午後からの仕事の時間を、なんとか無事にやり過ごす事で精一杯だった。

その夜――。

帰宅してから、俺は自分の部屋に籠もって、ただ彼女の事だけを、

「ボーッ」

と、考えていた。

俺の頭の中はパンクしてしまいそうな程、彼女の事でいっぱいだった。

他の事は、一切何も考えられず、ただ彼女の事だけを考える事しか出来なかった。

すると…。

「静流？どうしたの？」

『ビクッ！！』

背後から突然、声を掛けられ、俺は思わず硬直した。

どうやら俺は、姉が部屋に入って来た事すら気付かなかったようだ。

「なんだ…。姉ちゃんか…」

俺は一言だけそう発し、また自分の世界に閉じ籠った。

「大丈夫？どこか具合でも悪いの？」

姉の声が、俺の耳には一切入らなかった。

「ねえ？聞ってるの？」

姉はしつこく話し掛けて来て、俺を現実の世界に強制的に引き戻そうとする。

「ん？ ああ…。大丈夫」

俺は自分の世界に浸ったまま、中身の籠っていない空返事で姉に答える。

「晩ご飯、テーブルに置いてるからね」

「…ああ」

「変な子…」

姉は溜め息混じりにそう呟いて、俺の部屋から出て行った。

俺は用意された夕食を、食べることすら忘れてしまう程に、彼女の事ばかりを考えていた。

「はあ…。どうしたんだろ…？ 俺…？」

考えれば考える程、彼女が頭から離れない。

俺の口からは、溜め息がこぼれるばかり。

なかなか眠りに就く事も出来ず、ただ、時間だけが静かに過ぎて行
った。

壁に掛けてある時計の秒針の音だけが、静かに部屋に響く。

「ハァ…。彼女…。今頃何してるんだろ…。？」

ただ、彼女の笑顔だけが俺の頭に浮かび続ける。

俺は溜め息をつきながら、ベランダに接した掃き出し窓の外へと目
を向けた。

夜空には、蒼白い満月が昇っていた。

Chapter 9

翌朝―。

いつもより、早く目が覚めた。

短い睡眠時間の割に、目覚めはスッキリしていて、どこか気分がよい。

俺はベッドから勢いよく起き上がり、部屋中のカーテンを開けた。

ベランダ側の掃き出し窓のカーテンを開けると、そこから射し込む朝日が眩しくて、思わず右手を額にかざして日の光を遮った。

「良い天気だなあ…」

俺は、掃き出し窓の外 of 青空を眩しそうに見つめながら、そう呟いた。

「さて…、と。準備するかっ」

そして、そう独り言を呟くと、いそいそとバイトへ行く為の身仕度を始める。

一旦、自分の部屋から出て、脱衣室の洗面台の前に立つ。

蛇口の栓を開け、顔を洗い、それから歯を磨く。

寝癖だらけの髪の毛を、ぬるま湯で濡らし、寝癖を取る。

そして、ドライヤーで丁寧に髪を乾かす。

少し長めの栗色のサラサラの髪が、ドライヤーの温風で左右になびく。

髪が完全に乾ききったら、再び自分の部屋に戻り、ゆっくりと服を着替えた。

準備を整え、自分の部屋からキッチンへ向かう。

「おはよう」

キッチンのカウンターテーブルの所で、朝食の準備をしている姉に、俺は微笑みながら声を掛けた。

「おはよう、静流。今日は早起きだね」

姉は俺の挨拶に、俺の方を振り向き、笑顔で答える。

「ああ、早く目が覚めちゃってさ」

俺は冷蔵庫からアイスコーヒーを取り出しながら、姉の問い掛けに答える。。

「昨日は、様子がおかしかったけど、大丈夫？」

姉はそう言いながら、トースターから取り出した焼きたての食パンを皿に乗せ、俺に差し出した。

「ああ、大丈夫。ありがとう」

俺はそう言うと、食パンに勢いよく嚙り付き、アイスコーヒーと一緒に腹の中へ流し込んだ。

「ご馳走様。じゃあ、行って来るよ」

「うん。気を付けてね。いつてらっしゃい」

笑顔の姉に見送られ、いつもより少し早目にマンションを出た。

別に、これと言って特別な事がある訳ではなく、ただ、彼女に会える事だけが嬉しくて…。

好きな音楽を聴きながら、鼻歌混じりで車を走らせた。

梅雨の中休み。

晴れた青空と共に、俺の心は清々しい気分だった。

俺の気分に合わせてるかのようには、アクセルの上に乗った俺の右足は、徐々にアクセルを踏み込んで行く。

『ブウウーーン』

エンジンは心地良い程の唸り声を上げながら回転数を増し、それに連動してスピードも上がって行く。

バイト先までの道のりは、意外に車が少なく、照りつけるご機嫌な太陽も手伝って、快調その物だった。

俺の運転する車は、順調なペースでバイト先に到着した。

「良しっ。ウチからここまでの記録更新っ！！ベストタイムが出たぞ」

勝手な自己満足に浸りながら、ゆっくりと車を降りた。

まだ誰もいない、だだっ広いアスファルトで覆われた駐車場の一番端っこの方から、ゆっくりと歩いて駐車場を横切る。

社員用の出入口から中へ入り、警備室の前を社員証を見せながら通り過ぎる。

荷物運搬用のエレベーターで2階へ上がる。

まだ開店前の静まり返った薄暗いフロアに出て、止まった下りエスカレーターを駆け上がる。

俺の足取りは、まるで自分の物とは思えない程に軽い。

3階部分の天窓から射し込む朝日が、いつもより数倍も眩しく感じた。

エスカレーター口から、フロアのカウンター前を足早に通り過ぎ、事務所のドアの前に立つ。

『ガチャッ』

静かにドアを開けて、ドア横に設置されたタイムカードを切る。

「おはようございます」

俺は、いつもより少しだけ大きな声で、先に来ていた店長に向かって挨拶をする。

「おはよう。今日は、早いんだね」

店長は、一瞬、事務所の壁に掛けてある時計を見上げ、そして、目を丸くしながら俺を見つめた。

「ええ。朝、早く目が覚めちゃって…。家にいてもやる事も無いし。だから、少し早めに家を出て来たんですよ」

「そうなんだ。ふーん…」

店長は俺を疑う素振りも見せず、ただ俺の言う事を真に受けているようだ。

「一分でも早く彼女に会いたいから、早くここへ来た」

なんて、例え口が裂けたとしても言える訳がない。

始業までの間、暫く時間に余裕がある為、俺は休憩机の椅子に座り、タバコに火をつけた。

『シュボツ…』

『チリチリ…』

「ふう…」

俺は、自分の口から吐き出された、自由気ままに浮かぶ煙を静かに見つめていた。

すると…。

「おはようございます」

急に俺の背後で、若い女性の声が聞こえた。

（あっ、あの声は…。彼女だ…）

そう思った途端、俺の鼓動は速くなり、心の中では緊張と嬉しさ、照れ臭さが交錯した複雑な気分に陥った。

「霞君、おはよう。来るの、早いんだね？」

彼女は子供のように無邪気で愛くるしい笑顔を浮かべながら、俺に声を掛けてくれた。

「お…、おはよう。ああ…、ま、まあね…。へへッ」

俺は緊張しながら振り返り、ぎこちない微笑みを浮かべながら彼女を見つめた。

その時、俺は彼女に対して、いつもと変わらない態度を取る事が、こんなにも難しい事なのかと思い知らされた。

「どうしたの？」

彼女は俺の異変を察知したのか、俺の顔を上目遣いで覗き込みながら問い掛けた。

「い、いや…、な、何でもないよ…」

彼女の視線に、俺の鼓動は破裂しそうな程、更に速く、大きく脈打つように高鳴った。

そして、他人にも分かる程に、自分の顔が紅潮し、熱くなっていたのが分かった。

「ちょ、ちょっと、着替えて来るよっ」

俺はそう言いながら、自分の気持ちを彼女に悟られまいと、慌てて逃げるように更衣室へ入った。

（ヤバかった…。あんなに近くであの子の顔見たら、緊張して死んでしまうよ…）

『ドキドキ…』

自分の胸に手を当てると、まだ心臓の鼓動が速く激しく高鳴っているのが分かる。

「はあ…」

俺は溜め息を吐きながら、その場へしゃがみ込んだ。

（ああ…。藍沢さん、今日も可愛いなあ…。それにしても、彼女の、あの上目遣い…。ヤバいだろ…。可愛すぎだよ…）

そう思いながら、頭の中にさっきの彼女の表情を思い浮かべた。

その事を思い出しただけでも、口元が緩み、にやけて来るのが分かった。

『パチンッ』

俺は、たるんだ気持ちを戒める為、自分の頬に自分自身の両手で平手打ちをして、気を引き締め直した。

（駄目だ駄目だ。しっかりしろ。彼女には、彼氏がいるんだぞ？）

心の中で自分自身にそう言い聞かせ、とりあえず身体中の熱を冷まし、気分を落ち着かせる為に、暫く更衣室に籠る事にした。

すると、その時。

「おはよう」

締めきった更衣室のドア越しに、聞き慣れた若い男の声が微かに俺の耳に聞こえた。

（あの声は、竜也か…？間が良いのか悪いのか…。まあ、とにかく助かった…）

俺は、更衣室の隅にしゃがみ込んだままの状態で、竜也が更衣室に入ってくるのをじっと待った。

『ガチャッ』

そして、やっと更衣室に竜也が入って来た。

「おはよう…。何やってんだ？静流？」

更衣室に入って来るなり、竜也はしゃがみ込んだ俺を見つめ、不思議そうな表情で問い掛けた。

「おお、おはよう。ああ、ちょっと立ち眩みがしてさ…」

俺は取って付けたような出鱈目な理由で、竜也をごまかした。

「大丈夫か？無理すんなよ？」

俺の嘘を真に受けた竜也は、心配そうに俺を見つめた。

「ああ。もう大丈夫」

そう言いながら、俺はゆっくりと立ち上がった。

（ふう…。助かった…。これで少しは気が紛れるはずだ…）

俺はそう思いながら、竜也と下らない世間話をして、なんとか冷静さを取り戻す事が出来た。

二人同時に着替え終わり、一緒に更衣室を出た。

そして俺達は、まるでお約束事のように、一斉にタバコに火をつける。

『シュボツ…』

「ふう…」

タバコをふかしながら、慌ただしく開店前の準備を始めた彼女を、

俺は横目で黙って見ていた。

そして、タバコの火を消し、意を決して彼女にそっと近付く。

「…手伝おうか？」

俺は、出来るだけ彼女には優しく接しようと心掛けた。

「うん。ありがとう」

彼女は嬉しそうな表情で、俺を見つめる。

「両替金とか重い物は、俺が持って行ってあげるよ。後、少しフロアを掃除するから、藍沢さんは、モップを持って来てくれるかな？」

俺は微笑みながら、両替金が入った複数の布袋を台車に乗せ、優しい口調で彼女に指示を出す。

仕事だと割り切ると、意外と簡単に彼女に話し掛けられる事に、自分自身が驚いていた。

「うん。分かった」

彼女は無邪気に微笑んで、台車を押す俺の後をゆっくりと付いて来た。

「…お前、女には優しいよな？」

竜也は俺を横目で一瞥しながら、低い声でそう呟いた。

「うるせえなあ…」

その時の俺は、それ以上、竜也の皮肉に対して反論する気にならなかった。

そして俺は、竜也を無視して、その場から逃げるように、両替機の元へ足早に台車を押して向かって行った。

平日の午前、客足もまばらで、彼女がいる事を除くと、俺にとって特に変わったような事も無く、平穏な時間が過ぎて行った。

そして、昼休憩。

食事中にバイト仲間達と、みんなで楽しく話をしていると、突然、竜也が言い出した。

「藍沢さんってさ、ちょっとした浮気みたいな事して別れそうだな？ ほら、ほんの出来心って言うのかな？」

「そうかなあ？」

彼女は戸惑った表情を浮かべながら箸を止め、竜也の顔を見つめた。

「そんな気がする。俺の直感は、よく当たるんだよ」

（おいおい…。どんな直感だよ…）

と、思いつつも、俺は、相変わらずマイペースなただの傍観者として、彼女と竜也のやり取りに聞き耳を立てていた。

更に続けて、竜也はこう言った。

「例えばさ、こう身近な人でさ…。うーん…。そうだな…。例えば、同じ職場のヤツとかと良い感じになったりしてさ…」

絶好調の…、いや「舌好調」と言う方が正しいのか…。

竜也の「暴走した妄想話」は止まりそうにない。

戸惑う彼女を見兼ねた俺は、竜也の暴走した妄想話にゴングを鳴らすべく、話を遮るように割って入った。

「おいおい…。竜也、ちょっと待て。どんな妄想だよ？ たたく、そんな事ある訳ねえだろ？ 見てみる。藍沢さん、困ってんじゃねえか？」

俺は少し呆れた表情で、眉間に皺を寄せ、竜也を見つめながら言った。

「こればかりは、人間だからな。分からんぞ？」

いつになく真剣な表情を浮かべ、腕組みをする竜也。

「ひょっとして、竜也が、何か期待してるんじゃないの？」

俺は竜也を一瞥しながら、周りの人間の注意を彼女から外させる為に、わざとらしく意地悪く言った。

「いやいや、俺は何も考えてないぞ？ いや、マジで、マジで…」

俺のたった一言で、戸惑い焦り、自分を弁解する竜也。

そして俺の思惑通り、周りの視線は、一気に竜也に集まった。

「慌てる所を見れば、やっぱり、やましい事でも考えてたのか？」

それを確認した俺は、ここぞとばかりに、しつこく竜也を弄る。

「えっ？ 小野瀬君、そんな事思ってたの？」

それまでは、黙って俺達の話を聞いていた他のスタッフまでもが、まるで俺を援護するかのように竜也を煽り始めた。

「だから、違うって言ってんだろ？」

誤解の解けない竜也は、ふてくされた表情で、眉間に皺を寄せ、俺

を睨み付けた。

「はいはい。じゃあ、そういう事にしときましょう」

俺は、不機嫌そうな竜也の視線を気にする素振りも見せず、軽くあしらうように突き放した。

「違うってのに……。なんだよ？みんな、なんでそんなに言うんだよ？そんな目で見んなよ……」

必死の弁解も伝わらず、誤解が解けない竜也は、酷く困惑した表情を浮かべて、俺達の顔を見渡した。

そもそもの原因は竜也にあるが、でも、そんな竜也を見て、少しだけ可哀想に思えた俺は、

「フン。この前、鮭弁の事で弄られたお返しだ」

と、意地悪く笑いながら竜也を見つめ、

「彼女は、困ってたんだぞ？」

と言う、竜也を弄った本当の理由を伏せ、取って付けたような言い訳をした。

「フンッ」

その出鱈目な理由を、またも真に受けた竜也は、完全にふてくされ、そっぽを向いてしまった。

そのふてくされた竜也の様子がおかしくて、事務所にいたスタッフ達全員の笑いを誘った。

「ちょっと試みてみただけなのに…。なんでこうなるんだよっ。クソッ、静流のヤツめ…。いつか絶対、仕返ししてやるからな…」

そう言いながら俺を一瞥した後、再びそっぽを向き、一人で文句を言っている竜也の様子がおかしくて、余計に俺達の笑いを誘った。

だが、俺はそんな竜也に救われたようだ。

良くも悪くも、その事がきっかけとなり、いつの間にか、彼女と打ち解けて、自然と話せるようになっていた。

「二人共、楽しいし、すごく仲良しなんだね？」

彼女は微笑みながら、俺を見つめてそう言った。

「あはは。まあね。竜也といると飽きないし、確かに、楽しいかもね」

それまでは、彼女の前だと緊張しっぱなしだったはずの俺が、この時初めて、彼女に自分の自然体の状態で微笑みかける事が出来た。

緊張した心の中の糸が切れ、彼女と打ち解ける事が出来た俺は、和やかな気分の下、午後の仕事に戻って行った。

そして…。

バイトが終わり、初めて、彼女と事務所に二人きりになった。

パートの人は定時になると同時に、俺達より先に足早に事務所を出て行き、竜也は急な遅番の手伝いが入り帰りが少し遅くなる為だった。

突然の思いも寄らない出来事に、俺は心の中で、

「よっしゃあっ!!」

と、ガッツポーズを上げた。

俺は事務所の中を、くまなく見渡した。

俺達の周りには、邪魔者達の気配は全く感じられない。

俺は、彼女を意識し過ぎないように平静を装い、休憩机の椅子に腰を掛け、ミルクティーを飲んでいる彼女に声を掛けた。

「ねえ？ 藍沢さんは、いつも、どうやってここへ来てるの？」

「家が、隣町の向かいの島だから、隣町の駅までバスに乗って、駅まで行くの。駅前にフェリー乗り場があるから、そこからフェリーに乗って帰るんだ」

彼女は俺の問い掛けに、何の疑いも抱く素振りも見せず、素直に答えてくれた。

「えっ？それって、かなり大変じゃない？バスの時間は大丈夫？」

話の内容からは、彼女の生活の一部を垣間見る事が出来た。

俺には、ボロボロの中古車とはいえ、一応はちゃんとした車がある。

故に、行動するのは金が続く限り、俺の思うがまま自由自在だ。

だが、彼女は車を持っていないようで、どこに行くにも金と時間に縛られる。

ましてや、ここは地方の田舎町。

彼女の通勤の大変さが、俺には痛い程理解出来た。

「バスが来るのが、あと30分位かな」

彼女は、事務所の壁掛け時計を見上げながら呟いた。

「30分？まだまだ、時間があるよ？隣町の駅まで乗せて行ってあ

げようか？」

俺はつい、お節介心が湧いてしまい、気付くと彼女にそう言ってしまっていた。

「えっ？良いの？でも、なんか悪いし…」

当然、彼女はそう言って申し訳なさそうに返答をする。

だが、俺はそんな事は気にしない。

彼女に断られればしょうがないが、頼まればどこへでも行く気持ちだった。

「良いつて。俺なんか、どうせ、バイト終わったら暇なんだしさ。ちよっとくらいの寄り道は平気だよ」

俺は彼女を安心させる為、微笑みながら彼女を見つめた。

「ホントに良いの？」

彼女は、俺に対して本当に申し訳なく思ったのか、本来ならここで断るはずだが、一向に断る気配を感じさせなかった。

（おっ？俺にも、彼女にアピールするチャンスがあるのか？）

俺の心の中では、彼女に対する浅ましい気持ちが渦巻いていたが、彼女に俺の考えを悟られないよう、俺は優しく微笑みかけた。

「大丈夫、大丈夫」

「ありがとう」

彼女は無邪気な笑顔で、俺を見つめながらお礼を言ってくれた。

（よっしゃ！！来たっ）

俺は嬉しい気持ちを抑え込み、ただ優しく彼女をエスコートする事に努めた。

「じゃあ、行こっか？」

微笑む俺の誘いに、彼女は、

「うん」

と、喜びながら両手でバッグを後ろ手に持ち、俺の横を寄り添うように付いて来た。

「ホントにゴメンね」

彼女は苦笑いを浮かべながら、俺の事を気遣ってくれる。

「気にしないで良いよ。俺の気まぐれだから」

と、彼女を安心させる為に言ってみたが、俺の心の中は、嬉しさに満ち溢れていた。

二人揃って、事務所を後にし、従業員用の出入口を抜け、警備員室の前を通り過ぎる。

二人同じペースで会話を楽しみながら、ゆっくりと、だだっ広い駐車場を横切り俺の車へ向かう。

「ちょっとボロボロだけどさ…」

そう苦笑いを浮かべ、助手席に彼女を誘導する。

そして俺は、運転席へゆつくりと乗り込む。

エンジンを掛け、ゆつくりとアクセルを踏み込んで、車を走らせた。

そして車の中でも、彼女と世間話程度ではあるが、色々な会話を楽しんでいた。

「ねえ？霞君は彼女、いないの？」

突然、話題を変えるかのように彼女は俺に問い掛けた。

「今は、いないよ。このバイト始めた頃に別れちゃったから…」

俺は彼女の問い掛けを、ただの世間話の延長程度で受け止めていた。

「ごめんね。変な事聞いちゃって…」

だが、彼女は俺の答えを聞いた途端、うつむいて申し訳なさそうに
呟いた。

「いや、良いよ。大丈夫。気にしないで」

（こうして、君と二人きりで話が出るんだから、全然淋しくな
かないんだよ）

俺は心の中でそう思いながら、うつむいた彼女の気を紛らわせる為、
彼女に微笑みかけた。

「うん」

俺の言葉を聞いて、彼女は顔を上げ、今までと同じ笑顔で俺を見つ
めた。

俺の運転する車は、バイト先から30分程で、隣町の駅前のフェリ
ー乗り場に到着した。

「今日は、ホントにありがとう。助かったよ。優しいね、霞君は…」

彼女は笑顔を浮かべ、俺に感謝の気持ちを伝えてくれた。

「そんな事ないよ」

俺は照れながら、彼女にそう一言だけ返すのが精一杯だった。

「霞君みたいに、優しい人に彼女いないなんて…」

彼女は、また表情を少し曇らせながら呟いた。

「今はもう、別になんとも思っていないよ。それに、もし俺に彼女がいたらさ、藍沢さんを送ってあげられなかったしね」

俺は本当に気にしていない事を彼女に伝え、安心してもらう為に、冗談混じりに微笑みかけた。

「そっか…。今日は、ホントにありがとね。またね」

彼女は、俺の言葉に安心したのか、笑顔を浮かべながらそう言うと、手を振りながら車から降りた。

そして、俺は周囲の安全を確認した後、彼女に笑顔で手を振り返し、駅前のバス乗り場で車を方向転換させた。

彼女と別れた帰り道、俺は、すごく幸せな気分で満たされていた。

Chapter 10

あれから、何の進展も無いまま、数日が過ぎた。

今日は、バイトが休みの日。

一日中、彼女に会えない。

そう考えると、会いたい気持ちが膨らんで、いても立ってもいられなくなった。

「はあ…こんな気分になるくらいなら、休みなんか無い方が良いや…。いや、待てよ？今日は、水曜だよな？うん。間違いない、水曜だ。良い口実があるじゃないか。そうだよ。事務所の机を、掃除しに行けば良いんだよ」

一人思い立った。

後は、行動に移すだけだ。

「…でも、ただ、「事務所に掃除しに来ました。はい、終わりました」

た。じゃあ、帰ります」だと、芸が無いよな…」

「…ん？待てよ…。そうだ」

結論が出た。

「彼女のバイトが、終わる時間に合わせて、掃除が終わるように家を出れば良い。それなら、またゆっくり話が出るはずだ」

と、一人、部屋で落ち着かなかった。

俺は、昼の3時を回った頃にマンションを出た。

事務所に着いた。

竜也が、驚いた顔で俺を見た。

「あれ？静流、今日休みだろ？」

「いやあ、よく考えてみれば、今日、俺が、事務所の掃除当番なんだよな？だから掃除に来たんだよ」

「あつ。ホントだな。休みなのに、大変だな」

（よしよし。上手く行ったぞ。竜也にも、誰にも怪しまれてない。
これで、堂々と行動に移せる）

俺はさっそく、掃除を始めた。

掃除が半分くらい終わった所で、彼女が事務所に入って来た。

「あれっ？霞君、どうしたの？今日は休みでしょ？」

びっくりしながらも、心無しか、彼女は嬉しそうな顔をしていた。

「ほら、俺、今日、掃除当番じゃん？だから掃除しに来たんだよ」

「わざわざ？大変だね。頑張ってね」

「ああ。ありがとう。もうちょっとで終わるから」

その時、彼女が机の上に置いてあった、俺のケータイに手を伸ばした。

「綺麗なケータイ…。ラッセンの絵だね。誰のかなあ？」

「あ、それ、俺のケータイ…」

「へえ。綺麗だね」

「ペイントしてあるように見えるシールなんだけどね」

「でも、上手く貼れてるね。霞君、ラッセン好きなんだ？」

「うん。見てると落ち着くし、何より色使いが綺麗だから…」

「あたしも、ラッセンの絵、好きなんだ。一緒だね」

彼女は、嬉しそうな顔で俺を見た。

「藍沢さんもなんだ。だったら、俺達、話が合うかもね」

俺は、はにかみながら彼女に言った。

「ねえ、藍沢さんは、今日もバス？」

俺は、思い切って聞いてみた。

「うん。それしか方法無いから…」

「じゃあさ、また送ってあげるよ」

「えっ？ ホント？」

「うん。良いよ」

「やったあ。ありがとう」

彼女は、はち切れんばかりの笑顔で喜んだ。

「じゃあ、藍沢さんがバイト終わるまで待ってるから」

「うん。ありがとね。じゃあ、そろそろフロアに戻るね」

「ああ。頑張って」

こうして、俺は、彼女のバイトが終わるのを待つ事にした。

「お疲れ様でした」

彼女の声が聞こえた。

「じゃあ、帰ろっか？」

「うん」

二人、並んで車に向かう。

端から見ると、二人は、恋人同士に見えたに違いない。

そんな、周囲の優しい視線が嬉しくて、まるで夢心地のようだった。

(夢ならこのまま覚めないでくれ)

そう思いながら、二人は、仲良く話をしながら車に乗った。

二人の時間は楽しくて、嬉しくて、幸せで…。

あっという間に、海沿いの国道に出た。

そこは、対岸に島があり、海に平行して、国道と電車が走っている。

その頭上には、大きな橋が架かっていて、対岸の島へ渡れるようになっている。

「橋を渡ったら、すぐに帰れるのにね」

「そうなんだよね…。フェリー待つのも時間あるし…」

「橋、渡ろうか？」

「ホントに？ 良いの？」

対岸までは、ほんの数百メートル。

ただ、海を渡るには、橋にも船にも、料金が掛かった。

でも、そんな事は気にしない。

「ああ。大丈夫。じゃあ、橋まで上がるよ」

「やったあ」

海に平走する国道と、橋へ上がる為の接道の交差点を、橋の方へ曲がった。

曲がりくねった道は、橋へ向けて山肌を登って行く。

上がりきった所で急に視界が開けた。

…海だ。

橋を渡るのは、あっという間の事だった。

橋を渡ると、すぐに料金所がある。

料金所で料金を払い、島へ入る。

ちょっとしたドライブ気分だった。

暫く道なりに進むと、突き当たりの三差路に着いた。

「家はどっち？」

「右に曲がって」

「了解」

暫く進むと彼女が呟く。

「家はこの辺りなんだけど、まだ帰りたくないよ」

彼女は、甘えた声で言った。

「じゃあ、少し、ドライブでもしよっか？」

「うん」

嬉しそうに、彼女は頷いた。

島をグルッと半周して、島の南側へ向かった。

水平線には、たくさんの島々が見える。

隣の島へ渡る、大きな橋の下をくぐり抜け、暫く進むと、道の路肩が広くなっている場所を見つけた。

そこへ車を止めて、二人で、近くの浜辺へ下りた。

目の前には、海が広がり、海の上には、幾つもの島が浮かんでいる。

浜辺へ二人、ゆっくりと腰を下ろした。

Chapter 11

「付き合わせちゃってごめんね」

「全然。大丈夫だよ」

波の音が耳に響く。

「ねえ？なんで、そんなに優しくしてくれるの？」

（君の事が好きだから…）

そう、心の中で呟いた。

「女の子に優しくするのは、当たり前だよ」

「そんなもんなの？」

「彼氏だって、そうでしょ？」

「うーん…。どうかなあ？彼氏ね、あたしがいるのに平気で、合コンとか行っちゃう人だから…」

（はあ？なんだ、その男…。ふざけてやがる）

俺は、そう思いながら彼女に言った。

「なんで、こんな可愛い彼女がいるのに、合コンなんかに行けるかなあ？」

「…はあ。あたしの彼氏も、霞君みたいに優しくかったらなあ…」

「そんな事ないよ。俺だって、優しくない人間かもしれない…」

「ううん。あたしには、分かるんだ…。霞君は人の痛みが分かる人だって」

「そうかな？」

「うん。それにね、話してる時に、たまに、淋しそうな目をしてる時あるよ？」

（それは、気付かなかった）

「そう？」

「うん。すごく淋しそう。過去に何かあった？」

「実は…。俺の家、姉ちゃんと二人暮らしなんだけどさ。前に、姉ちゃんが、姉ちゃんの婚約者に言ってたのを、チラッと聞いただけなんだけど…」

「実はね…。静流は、あたし達とは、血が繋がってないの。お母さんが働いてた施設に、ある日、生まれたばかりの静流が捨てられて…。お母さんが、可哀想に思って、施設からそのまま引き取って来たんだ…。お父さんも、快く静流を自分の子供として受け入れてくれてね…」

「そんな事を聞く気は、サラサラ無かったし、姉ちゃんも、俺の事、本当の弟のように思ってくれてたから、俺には、教えたくなかったんだと思う。俺には、今まで一切話してくれなかったから…。でも、いざ聞くと流石にショックで…」

「でもさ、こんな俺を引き取ってくれて、育ててくれた親父や母さ

ん、姉ちゃんには感謝してる。…だけど、親父は俺が小学校3年の時に、事故で亡くなったんだ。それから、母さんが、女手一つで、姉ちゃんと俺を育ててくれた。その母さんも、俺が高3になる年の春に、病気で亡くなったんだけどね…」

波の音が、浜辺に響く。

二人は無言のまま、暫く海を見つめていた。

二人の静寂を切り裂くように、俺が、ポツリと話を続けた。

「本当の親に捨てられ、子供の頃、家族の誰にも似てないって、イジメられてたし…。友達だと思ってた奴らにも裏切られた事もあるし…。だから、今でもちよつとだけ、人が苦手でもあるんだ…。」

「そうだったんだ…。辛い事、思い出させちゃったね…。ごめんね…。」

彼女は、うつむいて、俺に謝った。

「いや、全然平気だよ。今更、実の親が出て来た所で、俺は会う気無いし。俺を育ててくれた親父や母さんが、俺の本当の親だよ。姉ちゃんも、俺の事を、「本当の姉弟」みたいに気に掛けてくれてる

し…。例え、似てなくても、俺の家族は、紛れもなく、今の家族だから…」

「それに、今まで、俺を見下してた奴らは、今の俺には何も言えなくなってるし、俺も「今に見てろよ」って感じで、何も言わせないようにならうって、やってきたから」

「強いね。霞君は…」

「俺は、言う程強くはないよ。ただ、これが俺の運命だから…。受け入れるしかないんだ。それに、俺は、親父と母さん、姉ちゃんには、本当に感謝してるから…」

俺は、笑ってごまかした。

「そっか…。あたしは、そんなに強くはなれない…」

彼女は、うつむいたまま呟いた。

彼女に、自分の過去を話した途端、俺は、不思議な感覚に襲われた。

今まで、誰にも、自分の過去を話した事は無かった。

竜也や俊哉達にさえも…。

でも、彼女は違った。

俺の、全てを包み込んでくれるような、そんな感覚を覚えた。

「ねえ？霞君？」

「うん？」

「あたしで良ければ、霞君の思ってる事、何でも言ってね。あたしが、霞君の力になれるって思えないけど…」

彼女は、はにかみながら言った。

俺には、彼女の、その優しい心遣いが嬉しかった。

彼女の優しい眼差しで、言葉で、俺の全てが癒されて行くような、そんな気がした。

俺は、彼女のその優しさに、甘えていたと思った。

「優しいね。なんで彼氏は君みたいな子を粗末にするかなあ？」

「分かんない。あたしもね、霞君みたいにじゃないけど、過去に色々あってね…。だから、なんとなく、淋しい気持ちは分かるんだ…」

俺は、何も言えなかった。

今まで、俺の事を思ってくれる人はいなかった。

俺の事を、ここまで思ってくれる人に出会ったのは、これが初めてだった。

頭の中で、戸惑いと嬉しさが交錯していた。

それに俺は、人の過去に一切興味は無かった。

それは俺自身が、俺と接してくれる人達の現在や、未来の方を大切にしたいと思っていたからだ。

「ねえ、霞君？」

俺は、首を軽く左右に振って、彼女に微笑みかけて言った。

「霞君じゃなくて、

静流って呼んでくれないかな？ 霞君じゃ、堅苦しいよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて。ねえ、静流？」

「うん？」

「あたしの事も呼んで？ 藍沢さんじゃなくて…」

「麻紀…」

「静流…」

見つめ合う二人。

暫く時間が止まったようだった。

二人だけの浜辺には、波の音だけが響き渡った。

Chapter 12

梅雨の曇り空は、海と、俺達二人を抱いているかのように広がっていた。

そして波音は、二人の耳に優しく打ち寄せる。

俺は、足元の浜辺の砂をかき集めて、小さな砂山を作った。

ちょうどそこへ、麻紀がどこからか棒を拾って来て、作られたばかりの砂山の頂上に突き刺した。

「麻紀？棒倒しする？」

「うん」

麻紀が、微笑んで頷く。

「ジャンケン…ポン…！」

「麻紀からだね」

「じゃあ、砂いっぱい取っちゃお」

「意地悪だなあ、麻紀は」

「意地悪だもん」

「あはは」

暫く、昔話をしながら童心に帰った二人。

俺はふと、ケータイの時計を見た。

時計は、夜の8時前になっていた。

「もう8時前だよ？麻紀、大丈夫？」

「うーん…。そろそろ帰ろうかな…」

麻紀は、家に帰りたそうではなかった。

「俺には、麻紀を無事に、家まで送り届ける責任があるから」

「うん。ありがとう。じゃあ、帰ろっか？」

「ああ」

俺達は、ゆつくりと車に乗り込んだ。

浜辺から20分程で、麻紀の家の近くに着いた。

「麻紀。じゃあ、またね」

「ちょっと待って？ 静流、ケータイの番号とメールアドレス教えて？」

「ああ、良いよ」

俺は、ケータイを取り出して麻紀に手渡した。

それを片手に持ち、麻紀は、自分のケータイの中へ、真剣な表情を浮かべながら、俺の電話番号とアドレスを打ち込んで行く。

そして今度は、麻紀の方から、俺のケータイのアドレス宛てに、麻紀自身のアドレスと、電話番号が打ち込まれた内容のメールが送られて来た。

麻紀がメールを送って、ものの数秒で、俺のケータイの着メロが鳴る。

「それ、あたしのメアドと電話番号だよ。今日は、ありがとう。ホントに楽しかった。また遊んでね」

麻紀が、笑顔で車を降りた。

「ああ。俺の方こそありがとう。じゃあね」

そう言って、俺が車を出そうとした途端、麻紀が思い出したように、声を上げた。

「あつ。ちょっと待ってて」

「ああ、うん。」

そう言うのと、麻紀は家の中へ入って行った。

俺は、麻紀に言われるがままその場へ待機。

暫くして、麻紀が家の中から出て来た。

「はい。この前、静流も、GLAY聴くって言ってたじゃない？新曲出てたから、CD貸してあげるよ」

「GLAY、新曲出したんだ？ありがとう。さっそく聴くよ」

「うん。じゃあ、気を付けてね」

「ありがとう。また、帰ったらメールするよ」

俺達は、そう言って別れた。

麻紀は、俺の車が見えなくなるまで見送ってくれた。

どんよりとした梅雨空なのに、俺の気分はすごく晴れていた。

帰り道が、こんなに楽しいなんて思った事は無かった。

音楽の音量を上げ、アクセルを全開にして、国道のバイパスを飛ばした。

その時、ほんの一瞬の事だったが、オービスのような物の光が、俺の目の中に飛び込んで来たのが分かった。

慌てて減速しても、もう遅い。

「やべっ…、やっちゃまった…。まあ、良いか…」

今の俺は、そんな細かい事まで気にする気にもなれなかった。

マンションに着いた時には、夜の8時半近くになっていた。

「ただいま」

「あれ？今日は、遅かったのね？」

「ああ、ちよつとね…」

「また、何かあったんでしょ？あたしには、隠しても無駄よ？」

「…別に」

「絶対、今日は良い事あったでしょ？顔が嬉しそうだよ？」

「良いじゃん。別に」

そう言うと、姉から逃げるように、部屋に入った。

さっそく、ケータイを取り出し、麻紀にメールを送る。

「ただいま。家に着いたよ」

麻紀から、すぐに返事が来た。

「良かったあ。無事に着いたんだね」

「うん。さっきさ、オービスみたいなのが光っちゃって、焦ったよ…」

「大丈夫？オービス光ったの麻紀のせいだね…。ごめんね」

「運転したのは俺だよ。麻紀が悪いんじゃないよ」

「でも、遅くまで付き合わせちゃったし…」

「気にする事はないよ。大丈夫。やっぱり、麻紀は優しいね」

「そんな事ないよお」

暫く、彼女とメールを続けた。

「あのね、実は、あたしこっちに引越して来たばかりで、友達いなくて…。静流と仲良くなれて嬉しかったよ。また遊ぼうね」

「分かった。じゃあ、今度は花火しようか？」

「うん。しょ。あたし、花火大好き。綺麗だもん」

「じゃあ、今度、二人の休みが重なる日の、前の夜にしようか？」

「うん。楽しみ」

「じゃあ、あたし、お風呂に入って来るから。またね」

「ああ。またね」

麻紀とのメールを、一旦終えた俺は、新曲の歌詞を考えようと、自分の部屋の小さなテーブルに向かう。

今日は、何か良い詞が浮かびそうな気がしていた。

俊哉にもらった音源を聴きながら、シャーペンを片手に、何も書かれていない白紙のルーズリーフと、向き合った。

作詞の作業が最終段階に入った時、突然、麻紀からメールが来た。

「静流、起きてる?」

「起きてるよ。どうしたの?」

「なかなか眠れなくて…。あたしの彼氏が、「静流みたいな人だったらなあ…」って、ずっと考えちゃうの」

「まいったな…。なんか嬉しい。でも、俺なんか、そんなに良い人じゃないよ…」

返信しながら、俺は、このまま溶けて消えてしまいそうな気分だった。

「そんな事ないよ。あたしには、分かってるから。そう言えば、静流は、明日もバイトだったよね? 静流が起きれなくて、遅刻したらいけないから、またね」

「うん。また明日メールするよ。おやすみ、麻紀」

「おやすみ、静流」

再び、作詞の最終作業に入った。

時計は、真夜中を指していた。

Chapter 13

それから、一週間後。

「姉ちゃん、明日から、店が改装なんだ。だから、今日のバイトは、明日の準備とかで結構遅くなるから」

「そうなんだ。分かった。頑張ってるね。行ってらっしゃい」

「ああ。じゃあ、行って来るよ」

その日の午後。

遅番の、始業前のミーティング。

店長が、遅番スタッフに、改めて言った。

「明日から、店を改装します。10日間くらい休む予定です。改装している間は、新装開店の準備や機械の移動をさせたりするので、いつも通りに来て下さいね」

「今日が、一番ハードな日だな…」

竜也と顔を見合わせた。

「やれやれ…、やりますか…？ 竜也君」

俺は、怠そうに竜也を見た。

「はあ…、めんどくせえなあ…」

竜也は、既にやる気が無い様子だった。

「竜也…。既に、やる気無いじゃん…」

「当たり前だろ？ ゲーム機、全部運び出したぞ？」

「なるべく、考えないようにしてたのに…。なんで言うかなあ…。君は…？」

「やれやれ」と思いながら、竜也と二人で、フロアのゲーム機を見

渡した。

流石に、これだけ大量の、しかも、特に大きな機械の運び出しは骨が折れる。

と、ちょうどそこへ、麻紀がやって来て、俺達に問いかけた。

「二人共、どうしたの？ 難しい顔をして…？」

「いや、どれから運び出すかなって…。考えてる所…」

竜也と二人で声を揃えた。

「ああ、もう。やるしかねえ。やるぞ、竜也」

「しょうがねえなあ…」

竜也も、渋々動いた。

そんな、俺達の様子を麻紀は笑って見ていた。

「頑張って」

麻紀の言葉に励まされた。

夕方、5時。

「なかなか終わりそうに無いから、早番の人でも、残って手伝ってくれる人がいると助かるんだけど…」

店長が、時計を見て言った。

「あたし、残っても大丈夫ですよ」

麻紀は、俺の方を見ながら笑顔で言った。

「助かるよ。ありがとう。藍沢さん」

俺は、そんな二人のやり取りを横目で、何気なく見ていた。

そして、ふと、我に返る。

(…麻紀が、残る!?)

俺は、麻紀の顔を見た。

麻紀は、俺に微笑みかけてくれた。

俺は、そんな麻紀の笑顔を見て、既に薄れかけていたやる気が、自分の中にまた、湧き上がって来るのを感じた。

「さあ、竜也君。さっさと、この邪魔な機械共を、運び出そうじゃないか」

「はあ? 何、急にやる気になってんだ、静流?」

「良いから。やるって言ったら、やるんだよ」

俺は、竜也に発破を掛けた。

「はいはい…」

竜也は疲労困憊だ。

俺は、麻紀に良い所を見せようと、必要以上に気合いを入れた。

しかし、俺も生身の人間。

流石に、疲労の色が隠せなくなって来た。

「はぁ…。竜也、ちょっと休憩するぞ」

「お前、何そんなに張り切ってんだ？」

竜也、ちよつと休憩するぞ」

「お前、何そんなに張り切ってんだ？」

「…別に。さっさと終わらせたいだけだよ」

「ふうん…」

俺は、麻紀の方を見た。

麻紀は、大きな段ボール箱に詰められた、ゲームの景品の整理をしていた。

「…お前、何かあったな？」

竜也が俺を見る。

（…バレたか？）

俺は焦った。

「な、何がだよ？」

「例えば、女絡みの話とか…？」

（くっ…。鋭い奴め…）

「な、何もねえよ」

「ふーん…。メル友でも見つけたかと思った」

（竜也が、アホで良かったあ…）

俺は心底、ホッとした。

そんな状況でも、俺は、麻紀の方が気になる。

麻紀が、こっちに気付いて微笑む。

「静流、何、ニヤニヤしてんだよ？ 気持ち悪い…」

竜也が、少し退いた目で俺を見る。

「う、うるせえ」

そんな俺達を見て、麻紀は笑っていた。

俺はさり気なく、麻紀に近付いた。

紙で作られた、飾り付け用の花が、麻紀の手の平に乗っていた。

「それを作ってたんだ？」

「そうだよ。欲しい？ここに、いっぱいあるから。静流に1個、あげよっか？」

麻紀が、笑いながら指差した先には、紙で作られた花が大量に、段ボール箱に詰められていた。

「こんな物、何に使うんだ？」

「新装開店の時に、店の入り口とか、カウンターの周りとかに付けたりするんだって」

「へえ。それ、1個、貸して？」

「はい。何するの？」

「まあ、見てなって」

そう言うと、俺は竜也を探した。

俺は、麻紀に、竜也をカウンターまで呼び出してもらい、麻紀に竜也の気を引かせた。

竜也の背後から、そっと近付く。

裏面に両面テープを貼り付けた花を、竜也の頭に静かに乗せる。

竜也は気付かない。

麻紀は、必死で笑いを堪える。

俺も笑いを堪え、竜也の頭をわざとらしく押さえ、花を頭に貼り付けているのがバレないように、さり気なく竜也に話かけた。

「何やってんだよ？」

「ああ？呼ばれたから来たんだよ」

「さっさと、やるぞ?」

「ああ。分かった、分かった」

俺達の周囲で仕事をしていた仕事仲間達が、竜也を見てクスクスと笑う。

異変に気付き、頭に手をやる。

「何だ? こりゃ?」

「あっははは」

俺は、堪えていた笑いを爆発させた。

「竜也、何、頭に乗っけてんだよ?」

「静流…、お前か? お前の仕業か?」

「あっはははは。腹痛え…」

「あゝ、もうっ！！何、人で遊んでんだっ！！テメェーっ！！」

「あっははは。面白え」

ちょうどその時、店長が、事務所から出て来た。

「…さてと。早く終わらせるかな…」

そう言うのと、逃げるように俺は、フロアに残った機械の方へ消えた。

「あつ、汚ねえぞっ！！」

竜也も、急いで俺の後を追って来た。

それから、二人、黙々と作業を続けた。

やる気が途切れそうになると、麻紀の顔を見て、また奮起する。

この繰り返しだった。

「おい…？いつになったら終わるんだ…？」

竜也が、今にも仕事を投げ出さんばかりの勢いで言った。

「さあ…。とりあえず、機械は外へ出したからな。後は細かい仕事だけだろ…」

俺の体力も気力も、そろそろ限界に近付いていた。

「大体、終わったみたいですね。今日は遅いし、後は明日にしましょう。残ってるのは、事務所の整理だけみたいだし…」

「やれやれ…。竜也君。やっと、店長殿のOKサインが出たぞ…」

「ああ…。やっと、終わった…」

そう言ったかと思うと、崩れ落ちるように、竜也が床に座り込んだ。

「はい。二人共。店長から差し入れだよ」

麻紀が、両手に缶ジュースを持って俺達の元へ来た。

「ああ…。ありがとう」

「プシュッ」

「ああ…。美味しい。生き返る…。でも、これが冷たいビールなら、もっと最高…」

竜也と声を揃えた。

「二人共、オジサンみたいだよ？」

麻紀が笑って、俺達に言った。

「あははは」

俺が、事務所の時計を見上げると、真夜中の12時に近くなっていた。

それから、小さな雑用を終わらせたり、服を着替えたりとで、結局、俺達が帰る頃には、真夜中になっていた。

Chapter 14

俺は疲労困憊だったが、麻紀の顔を見ると、疲れが一気に吹き飛んだ。

「やっと終わったね。麻紀、疲れてない？」

「うん。平気」

「そっか。じゃあ、帰ろっか？」

「うん。そうだね」

二人、仲良く車に向かう。

「なあ、麻紀？明日、二人共休みじゃん？遅いけど花火する？」

「うん。花火したい」

「じゃあ、そのコンビニで花火買おうか？」

「やったあ」

俺達は、バイト先の近くのコンビニに寄った。

「ああ…、腹減ったなあ…。麻紀？何か食べる？」

「うん。食べる」

「何が良い？何でも良いよ。持っておいで」

「じゃあ、あたし、好きな物取って来るね」

「分かった」

俺が、弁当を眺めていると、麻紀が俺に寄り添って来た。

「これにする」

麻紀が、持って来たのはパンと紅茶だった。

「それだけで良いの？」

「うん。あたし、あんまり、お腹空いてないから」

「ねえ？ 静流？」

麻紀が、甘えた声で言った。

「うん？ 何？」

麻紀が、俺に寄りかかって来る。

そんな麻紀が、俺は、可愛くてしょうがなかった。

一通り買い物をして、前に二人で行った浜辺へ向かった。

俺は、車を走らせながら、パンを齧った。

流石に、真夜中だけあって、交通量は少ない。

目的地に着くまで、30分とかからなかった。

俺は、浜辺の近くに車を止めた。

「着いたよ。行こっか？」

「うん」

俺達は、道路から浜辺に下りる階段を下りた。

浜辺に二人並んで、しゃがみ込んだ。

買ってきた、花火を袋から取り出す。

「どれからやる？」

「これが良いな」

麻紀が手に取ったのは、小さな、一本の手持ち花火だった。

「綺麗…」

「ホント、綺麗だね」

二人は、その幻想的な光に暫く見とれていた。

「消えちゃったね」

花火は、瞬く間に燃え尽きた。

「今度は、ロケット花火でも打ち上げようか？」

「うん」

「でも、俺の打ち上げ方はちょっと違うんだ」

「どうやるの？」

麻紀も興味津々だ。

「このロケット花火を、手に持ったまま、火をつけるんだよ」

「危ないよ？」

「良いから、見てなって」

俺は、手に持ったロケット花火の導火線に火をつけた。

ロケット花火が飛び上がる瞬間に、夜空へ向かって投げた。

投げつけたロケット花火は、綺麗な弧を描いて宙を舞い、その後、ロケットの部分が、花火の柄の部分から勢い良く、夜空へ向かって飛び上がった。

まるで、本物のロケットが、空中で分離して飛び上がって行くように。

「すごい。空中でも、ちゃんと上に飛んで行くんだね」

「ホントのロケットみたいでしょ？この打ち上げ方、やり出すと面

白いだよね」

「高校生の時に、友達とよくやってたんだ。でも、一回失敗してさ。友達の、家の近所の浜辺でやった時なんだけど…。枯れ草の中に火花が突っ込んでね…」

「どうなったの？」

「枯れ草、燃えちゃったんだ…。しかも、燃えた場所が、笑えない事に消防車の車庫の裏でさ…。急いで、ペットボトルや、水が汲めそうな物に海水を汲んでかけたり、砂をかけたりして消したよ…。あの時は、マジ焦ったなあ…」

俺は、苦笑いを浮かべた。

「あはは。駄目じゃん、静流」

「あはは。ホント、あの時は焦ったよ…。さて…と。次は、どれにする？」

「うーんと…」

いつかやっていたドラマ風に、花火を並べて一斉に火をつけた。

花火の真ん中に飛び込んだ俺。

花火に照らされた笑顔の麻紀。

色とりどりの花が、二人を彩った。

気が付けば、花火はほとんど打ち上げ終わっていた。

最後に残ったのは、一束の線香花火だけだった。

麻紀と、向き合って線香花火に火を付ける。

「可愛い…」

麻紀が呟いた。

月明かりの下で、二本の小さな花が咲いた。

ふと、我に返った時、波の音が俺の、すぐ背後に聞こえた。

俺は、振り向いた。

「あれ？いつの間に…。波がそこまで来てるじゃん。潮が満ちて来たのか…」

「静流、濡れちゃうよ」

「麻紀、早くその階段に上がって」

「うん」

俺達は、急いで浜辺から道路に上られる階段を上った。

「危なかったね。静流」

「うん。ヤバかった。もうちょっと遅かったら濡れてたよ」

そう笑いながら、砂浜に忘れて来た線香花火を、拾いに行った。

「良かった。濡れてないな」

階段を上がり、残りの線香花火に火をつけ、麻紀に渡す。

線香花火の続きをしながら、俺は麻紀に言った。

「なあ…麻紀」

「なあに？」

「もしさ…もし、麻紀が彼氏と別れる事があったら…、その時は、俺が、麻紀の彼氏候補になっても良いかな？」

「うん。静流なら喜んで」

「麻紀…」

「静流…」

月明かりに照らされた二人。

いつの間にか、線香花火は消えていた。

麻紀は、そっと目を閉じ、俺の顔の方へ唇を近付ける。

もう止められない。

俺は、そっと麻紀の唇に俺の唇を重ねた。

「麻紀…大好きだ」

「静流…あたしもだよ」

もう一度キスをした。

俺は、照れながら麻紀に言った。

「麻紀、反則だよ…。誘われたら俺、抑えられる訳ないよ…」

「だって、静流とキスしたかったんだもん…」

そう言うのと、麻紀は、更に、もう一度キスをして言った。

「静流…大好き。ホントに大好き。彼氏いなかったら、静流の所へすぐにでも行くのに…」

「駄目だよ、麻紀。ちゃんとけじめは付けなきゃ…」

「うん…分かってる。でも、あたしも止められないの…」

「麻紀…」

時は、暫く止まっていたかのように、波の音だけが月夜の静寂の中に響いていた。

Chapter 15

どのくらい、時間が経っただろう。

二人、星空を見上げ、いろんな話をしていた。

（このまま、時間が止まれば良いのに…）

そんな事を思っていた。

その時、麻紀がポツリと言った。

「ちょっと寒いね」

「車に戻ろうか？」

俺は、手を麻紀に差し出した。

「うん」

俺の手を握り、立ち上がる麻紀。

砂を払った後、散らかった花火をコンビニの買い物袋に詰めた。

二人、手を繋ぎ、車へと歩き出す。

「夏の夜風は、気持ち良いね」

「そうだね。静流とこのまま、ずっと一緒だったらな…」

「俺も、同じ気持ちだよ」

俺達は、静かに車に乗り込んだ。

車の中で、見つめ合う二人。

「静流…大好き。こんなあたしでも、静流は好きでいてくれる？」

「ああ、もちろんだよ。麻紀が彼女になってくれたら、俺は、他に何もいらないよ」

「ホントに？」

「ああ。大好きだよ。麻紀」

「…キスして？」

「麻紀…」

俺達は、暫く唇を重ね合わせた。

「そろそろ帰ろうか？家の人、心配してるよ？」

「あたし、まだ、もう少しだけこのままでいたい…。お願い。もう少しだけ…」

麻紀は、潤んだ目で俺を見た。

「分かった。こっちにおいで、麻紀」

「うん」

俺は、麻紀を抱き締めた。

「静流、あったかい…」

「麻紀…」

俺は、暫く麻紀の温もりを、自分の両腕と胸で実感していた。

麻紀を抱き締めた腕を、離したくなかった。

「静流…」

「そろそろ、帰ろうか？夜が明けて来た」

闇が、うっすらと明るくなって来ていた。

ゆっくりと、夜明けが近付く。

「ホントだ…。静流といると、時間が経つのが早いね」

「俺もだよ」

「うん」

車を走らせ、麻紀の家の近くで止めた。

「静流、ホントにありがとう。楽しかったよ」

「俺の方こそ、ありがとう。楽しかったよ。じゃあ、またね」

「うん。居眠りしない様に、気を付けて帰ってね」

「ああ。大丈夫だよ。ありがとう」

「静流、おやすみ」

「おやすみ」

そう言って、キスをして麻紀と別れた。

麻紀は、相変わらず、俺の車が見えなくなるまで見送ってくれた。

マンションに着く頃には朝の4時半を回っていた。

コソツと玄関のドアを開け、物音をなるべく立てないように、自分の部屋へ戻った。

「ふう…」

すぐさま、ケータイのメール画面を開き、送信する。

「ただいま。ちゃんと着いたよ」

「おかえり。良かった。心配してたんだから」

「ははは。ありがとう。また後で、メールするね」

「うん。おやすみ」

「おやすみ」

俺は、シャワーを浴びに浴室へ行った。

シャワーを、浴びている最中も、ベッドに入った時も、麻紀の顔が頭に浮かぶ。

結局、眠りに就いたのは朝の6時を回っていた。

Chapter 16

どれくらい眠っただろう。

ふと、目を覚まして時計を見ると、昼の1時を回っていた。

何故か、俺の目覚めは、すごく良かった。

ゆっくりとベッドから起き上がり、カーテンと窓を開ける。

俺の気分を表すかのように、青く澄んだ夏空が広がっていた。

爽やかな、優しく心地良い風が部屋中に吹き込んで来る。

部屋から出て、キッチンへ向かうと、姉が丁度、食器を片付けていた。

「おはよう」

「おはよう。でも、もうお昼過ぎてるけどね。昨日は遅かったのね」

時計を見ながら、姉は言った。

「ああ。予想してたより手間取ってさ…」

「大変だったんだ？お疲れ様。寝起きだけど、何か食べる？」

「うん。軽く食うよ」

そう言うと、朝食とも昼食とも言えない食事を取り、顔を洗いに洗面所へ向かった。

部屋へ戻り、タバコに火をつけ、ベランダに面した、掃き出し窓の縁に、もたれ掛かるように座る。

窓の外は、どこまでも青い空が広がる。

（麻紀は、今、どうしてるんだろう…？）

そう思った時、ケータイの着信音が、部屋中に鳴り響いた。

「誰だ？」

ケータイを見ると、麻紀からの電話だった。

俺は、急いで電話に出た。

「おはよう。どうしたの？」

「静流：聞いて？あたし、彼氏と別れる事にしたの」

「えっ？何で、急に？」

「あたしね、彼氏が、合コンとか行ったりして、他の女の子と遊んだりするのが、もう耐えられないの…。あたし、静流の所が良い…。静流と一緒にいたい…。だから…、これから彼氏と話して来ようと思ってるんだ…」

今にも、泣き出しそうな声だった。

俺は敢えて、深くは聞かない事にした。

「そっか…。分かった。麻紀が納得するまで、彼氏と話し合えば良いよ。俺は、今は、何も言えない立場だから…」

「うん…。あたし、彼氏と話して来るから。話が終わったら…、また会いに来てくれる…?」

「もちろん。会いに行くよ」

「良かった…。ありがとう…」

「じゃあ、気を付けて行くんだよ?」

「うん」

そう言って、電話を切った。

俺は、暫く窓の外の青空を見上げていた。

「トントン…」

部屋のドアを軽く叩く音がする。

「静流？ 入るよ？」

「どうしたの？ ボーっとして？」

「別に、何でもないよ」

「なら良いんだけど…。はい。洗濯物乾いたから。静流の服、置いておくね」

「ああ。ありがとう」

綺麗に折り畳まれた服を置いて、姉は部屋から出て行った。

夕方、麻紀から再び電話が掛かって来た。

「もしもし？ 静流？ あたし、別れて来たよ…。あたしは、いつでも静流の所へ行けるんだよ…」

麻紀は、少し淋しそうな声をしていた。

「分かった。すぐ迎えに行くから。ちょっと待ってて」

「うん」

俺は、電話を切るなり、叫ぶように言った。

「姉ちゃんっ！！俺、ちよっと出て来るっ！！」

ケータイを握り締め、マンションを飛び出し、車へ向かった。

車に飛び乗り、麻紀に早く会いたい一心で、車を飛ばした。

隣の駅で、麻紀と待ち合わせた。

「麻紀、ごめんね。待った？」

「ううん。平気だよ」

「良かった」

俺は、麻紀と合流して、二人でゆっくりと話が出来る、麻紀と花火をしたあの浜辺へ行った。

「いい天気だね」

「うん。潮風が気持ち良い」

「ねえ、静流？」

「うん？何？」

「あたし、いつでも静流の所へ行けるようになったんだよ？」

麻紀は、笑顔で俺に言った。

「なあ、麻紀」

「なあに？」

俺は、麻紀を抱き締めて、耳元で囁いた。

「俺の…、彼女になってくれますか？」

「はい」

笑顔で答えてくれた。

「ねえ、静流？」

「うん？」

「麻紀を、愛してくれますか？一番好きでいてくれますか？」

「もちろんだよ。麻紀は、絶対に離さない。俺と麻紀は、ずっと一緒だからね」

そう言って、麻紀をもう一度、強く抱き締めた。

「あたしも。静流、大好き」

沈む夕日に、赤く染められた二人。

暫く見つめ合い、引かれる様にキスをする。

麻紀の息遣いを、肌で感じた。

俺は、今までに、人をこんなにも愛おしく感じた事は無かった。

俺は、嬉しそうに話してくれる麻紀を、ずっと、麻紀の傍で見たいかった。

俺は、自分の心と向き合い、心に誓いを立てた。

「麻紀だけは、絶対に何があっても離さない」

…と。

Chapter 17

俺は、麻紀を家に送り届けてから、マンションに帰った。

「ただいま」

「お帰り。どこ行ってたの？」

「ああ…。ちょっとね。友達と会ってたんだ」

「そうなんだ。友達って、女の子？」

姉は、笑いながら言った。

「そんな事、どうでも良いじゃん」

俺は、照れ隠しの為の強がりを使った。

夕食を取り、シャワーを浴び、部屋に戻る。

自分の部屋に入り、パソコンとCDプレーヤーにスイッチを入れる。

CDプレーヤーの中には、麻紀が貸してくれたGLAYのCDが入っていた。

その曲を聴きながら、パソコンを触っていると、麻紀からメールが来た。

「今、何してるの？」

「今？ 今ね、麻紀が貸してくれた、「STAY TUNED」聴いてるよ」

「あのね、そのCDの中に手紙を忍ばせといたんだけど…。読んでくれたかな？」

「…えっ？」

麻紀のメールを見て、俺は焦った。

俺は、その手紙の存在には、全く気付いていなかった。

そのCDは、初回限定盤で、通常のCDケースが、紙製のケースに入っている仕様だった。

その紙ケースの中を覗いて見ると…。

「あつた。これだ」

俺は、綺麗に折り畳まれた手紙を手に取り、それを開いて読む。

「静流へ。

この前も、今日も、送ってくれてありがとね。

あたし、ホントに嬉しかった。

それに、少しだけだけど、静流の事も分かったし…。

初めてバイト先に行った時、静流の事を見て「良いな」って思っちゃって…。

送ってもらえるってなった時、すごくドキドキしたんだよ？

あたし、こっちに引越して来て、友達いないし、不安だったし…。静流と仲良くなれてホント嬉しいです。

こんなあたしだけど、これから、ずっと仲良くしてください。

麻紀」

俺は、手紙を書いてくれていた事や、手紙の内容が嬉しくて、気が付けば、麻紀に電話を掛けていた。

「もしもし？麻紀？手紙、読んだよ。麻紀の気持ち嬉しかったよ。ありがとう」

「うん。あの頃はもう、静流の事が、好きで好きで…。しょうがなかったんだ…」

「ははは。そうだったんだ。嬉しいよ」

「静流は、どうだった？」

「…俺？俺は…、麻紀と初めてバイト先で会った時、正直、一目惚れしちゃったんだ。「可愛いな」って。だけど俺、麻紀と顔を合わせる、どうしても緊張しちゃって…。話掛ける勇気が無くて…。麻紀に「冷たい奴だ」って思われちゃったかなって…。だけど、麻紀は、こんな俺でも良いって言ってくれた…。だから俺は、麻紀が俺を選んでくれた事が、本当に嬉しいよ」

「そうだったんだ。ありがとう。嬉しい。そんな風に思ってくれてたんだね。でもね、あたしは別に、静流が冷たいだなんて、そんな事思ってたよ？」

俺は、麻紀の気持ちが嬉しくて、何も言えなかった。

「ねえ？ 静流？」

「うん？」

「あたし達、ずっと一緒にいようね。約束だよ？」

「ああ。もちろんだよ。麻紀も、どこにも行ったら駄目だからね」

「あたし、どこにも行かないよ。静流と、ずっと一緒にいるよ」

麻紀の一言一言がすごく嬉しくて、俺の胸に響いていた。

出来るなら、今すぐに会いに行きたい。

会って、麻紀をこの腕で抱き締めたい。

そう思っていた。

「ねえ？ 静流？」

「うん？」

「あたし、さっき会ったばかりなのに、静流に会いたいよ…」

切ない声で麻紀が言った。

「麻紀も、俺と同じ事思ってたんだね。俺も今、そう思ってた。声はすぐに繋がるのに…。」

「電話やメールは、ズルいよね…」

「ああ。そうだね。こんなに、近くで声は聞こえるのにね…」

「遠いね…」

「でも、俺達は、心は繋がってるよ」

「うん。でも、静流が傍にいてくれた方が良い…。声だけじゃ、嫌…。」

「麻紀…」

麻紀の気持ちは、痛い程分かった。

俺自身が、自制していた「抑えきれない程の、会いたい気持ち」だったからだ。

麻紀の言葉の重みが、俺の胸に、強く、深く突き刺さる。

俺は、そんな麻紀を諭すように、優しく言った。

「大丈夫だよ。朝が来れば、また会える。ほんの少し、我慢すれば良いだけだから…。明日には、また会いに行くよ」

「うん…」

「そうだ。麻紀、明日、俺の買い物に付き合ってくれないか？」

「うん。良いよ」

「じゃあ、明日、朝10時に迎えに行くから」

「分かった。楽しみだね」

「ああ。楽しみだね」

麻紀の声が明るくなった。

「じゃあ、麻紀、また明日ね」

「うん。また明日ね」

そう言って電話を切った。

俺は閃いた。

と、同時に、部屋からキッチンへ向かった。

「姉ちゃんっ!!」

「何? どうしたの? 急に、そんなに大声出したりして?」

「姉ちゃん、指輪貸して？」

「指輪なんかどうするの？」

「良いから、良いから」

姉は、不思議そうな顔をしながらも、指輪を外し、俺に渡してくれた。

「サンキュー」

俺は、急いで部屋に戻って、指輪のサイズを測った。

キッチンへ戻り、姉に指輪を返す。

「ありがとう。助かったよ。じゃあ、おやすみ」

「変な子…?」

姉は、終始、不思議そうな顔をしていた。

俺は、部屋へ戻り、測った指輪のサイズをメモした紙を、忘れない様に財布に入れた。

「麻紀、喜ぶかな？」

そう考えながら、眠りに就いた。

Chapter 18

翌日。

俺は、いつもの休みの日より、早く目が覚めた。

今日は、麻紀と初デート。

時計は、朝の8時を指している。

「おはよう」

「おはよう。あれ？今日はバイト休みでしょ？早いね」

「ああ。今日は、ちょっと約束があってね」

「そうなんだ。じゃあ、お昼、いないね？」

「ああ。いないよ」

「気を付けてね」

「分かった」

俺は、麻紀を迎えに行く時間になるまでが待ち遠しかった。

約束の10時に迎えに行けるように、少し早めにマンションを出た。

今日も、夏空が広がっている。

朝だと言うのに、汗ばむくらいの陽気だ。

北の空には、入道雲が浮かんでいる。

車に乗って、ごく機嫌な様子で音楽の音量を上げる。

アクセルを踏み込む。

隣町の麻紀の家まで、40分程で順調に行けた。

「着いたよ」

メールを送る。

麻紀から、すぐに返信が来た。

「すぐ出るからちょっと待ってて」

「うん。待ってるよ」

俺は、タバコに火をつけ、自販機で買った缶コーヒーを飲みながら、車の外で待つ事にした。

「今日も暑いなあ」

辺りには、蝉の鳴き声が響き渡っていた。

暫くして、麻紀が家から出て来た。

「おはよう。待たせてごめんね」

「おはよう。全然、平気だよ。ちょうど、コーヒー飲んで一服して
たし。じゃあ、行こっか？」

「うん」

二人を乗せた車も、嬉しそうに走る。

車の中で麻紀が言った。

「静流って、いつも、そんなロックな服だね？ アクセとか、ピア
スとかもいっぱい付いてるし」

麻紀が、俺を舐め回すように見ながら言った。

「麻紀はこのカッコ、嫌い？」

「ううん。静流、すごく似合ってる。本物のミュージシャンみたい」

「そうかなあ？ まあ、間違いじゃないかもね」

「どういう事？」

「今度、その理由を麻紀に見せてあげるよ。そう見えた理由をね」

「ええ？何？何なの？」

「それは、見てのお楽しみ」

俺は、微笑みながら少し意地悪く言った。

「じゃあ、楽しみにしとこっと」

麻紀は、嬉しそうに言った。

「ああ。楽しみにしてて」

会話を楽しんでいる内に、俺の住んでいる街の駅前に着いた。

「駐車場は空いてるかな？」

そう言いながら、駅前の地下駐車場へ入る。

「おっ！良い所空いてるじゃん」

「ホントだね。出入り口に近くて良いね」

「ラッキー」

俺は、地下道への出入り口のすぐ傍の、駐車スペースに車を止めた。

「着いたよ。じゃあ、降りようか？」

「うん。どこ行くの？」

「とりあえず、一番最初は、駅前のショッピングモールかな」

「うん。早く行こ？」

嬉しそうな彼女に手を引かれ、駐車場の出入り口から地下道へ出た。

俺達は手を繋いで、地上への階段を上り、駅前のショッピングモールに向かった。

「何階に行くの？」

「アクセサリー見たいから、とりあえず7階かな」

そう言いながら、上りエスカレーターに乗った。

7階に到着。

「麻紀、ちょっとだけ待ってて。トイレに行って来るから」

そう言って麻紀に、広場のベンチで待ってもらった。

（よし。行って来るぞ）

俺は、本来の目的を果たす為、麻紀にバレないように気を付けながら、一直線に、シルバーアクセサリーの店へ入った。

「すみません。これと同じ指輪で、このサイズありますか？」

俺は、自分の指にはめていた指輪を外し、メモと一緒に、店員に見せた。

「はい。ありますよ」

「こちらでよろしいですか？」

「はい」

「プレゼントですか？」

「そうです。でも、何も入れなくて大丈夫です」

「かしこまりました」

指輪代を店員に渡す。

「ありがとうございました」

俺は、麻紀の元へ走った。

「ごめん。お待たせ」

「静流、遅いよ」

「ごめん、ごめん」

麻紀が、少し拗ねた顔をして俺を見た。

「なあ？ 麻紀？」

「なあに？」

「ちょっとだけ、目を閉じて？」

「何で？」

「良いから、良いから」

俺は、微笑みながら言った。

「こう？」

そう言って麻紀は目を閉じた。

「ありがとう」

俺は麻紀の手を取り、ポケットから、ついさっき買ったばかりの、俺とお揃いの唐草模様が施された指輪を取り出し、麻紀の右手の薬指にはめた。

「目を開けて？」

俺に促され、麻紀は目を開けた。

「良かった。サイズ、ピッタリだったね」

俺は、麻紀に微笑んだ。

麻紀は、自分の薬指の指輪を見て、涙を浮かべた。

「嬉しい…。静流とお揃いの指輪…。あたし、大切にするね」

「いや、大した物じゃないんだけどね…。でも、これで、朝も昼も夜も、俺とずっと一緒だよ？」

「うん。ありがとう」

「麻紀が、淋しい時や辛い時には、この指輪を見て元気出して？」

「静流、ホントにありがとう」

麻紀が、涙を浮かべながら笑顔を見せた。

（かっ…可愛い…）

つい、俺まで嬉しくなってしまった。

「泣かなくても良いじゃん。まるで、俺が悪い事したみたいじゃない?」

俺は、おどけてみせた。

「ごめんね。あたし、すごく嬉しくて…。つい…」

そう言うと、麻紀は、人差し指で涙を拭った。

「じゃあ、次行こっか？」

「うん」

俺達は、手を繋いで、暫く店の中を見て回った。

ふと、俺が時計に目を向けると、昼の12時を回っていた。

「麻紀、お昼どうする？何食べたい？」

「うーん…。ハンバーガーが食べたい」

「じゃあ、マックに行く？」

「うん」

俺達は、ショッピングモールの近くのマクドナルドへ行った。

「いらっしやいませ。ご注文をどうぞ」

「うーん…」

「てりやきのセットで」

二人の声が揃った。

その様子がおかしくて、二人で笑った。

向き合って席に着いて、いろんな話をしながら、楽しく昼食を取る。

ポテトを摘む、麻紀の右手の薬指には、お揃いの唐草模様の指輪がキラキラと光っていた。

Chapter 19

俺達は、昼食を取り、また、ウインドーショッピングを楽しんだ。

「この、チェック柄のノースリーブのブラウス、可愛いね。麻紀が着たら、絶対似合って可愛いと思うな」

「そんな事ないよお。でも、この服可愛い」

「ねえ？この、クラッシュデニム、静流に似合うと思わない？黒だし」

「ホントだ。これ良いねえ。いくらだろ…。げっ！！3万もするじゃん…。欲しいけど、給料前だし…」

「残念だね。似たような、もっと安いのあるかも。探してみよ？」

「そうだね。まだまだ時間はあるしね」

歩きながらそんな会話をしていると、二人の時間は、あっという間に過ぎて行った。

「もう、夕方か…」

駅の南口の時計を見ると、夕方の5時になっていた。

「静流といると、ホントに時間が経つのが早いね」

「ホントだね」

「なあ？麻紀？」

「なあに？」

「これから、ウチに来ない？」

「えっ？いきなり行って大丈夫なの？」

「大丈夫。どうせ、姉ちゃんしかいないから」

「何か、急に行ったら悪いよ…」

「大丈夫だよ。行こ、行こ」

「うん」

俺達は、車へ戻った。

車のエンジンをかけて、ゆっくりと出る。

駐車場の出口のゲートで、駐車料金を払う。

駅前大通りに出て、国道との交差点を、俺のマンションのある西方向へ向かった。

駅前からは、夕方のラッシュとも重なって、帰るまでは少し時間が掛かった。

マンションに着いた時には、夕方の6時近くになっていた。

「俺のウチ、このマンションの5階なんだ」

「へえ。綺麗なマンションだね」

そう言いながら、自動ドアの前に立つ。

仲良く、二人寄り添ってエレベーターに向かう。

エレベーターは5階に到着。

エレベーターのドアが開く。

「俺のウチ、この階の一番奥の、角の部屋なんだ」

そう言いながら、突き当たりの部屋へ向かって歩き出す。

部屋のドアの前に立つ。

俺は、車の鍵と部屋の鍵が付いたキーケースを、ポケットから取り出して、玄関の鍵を開けた。

「ガチャッ」

玄関のドアを開けると、男性用のブーツがあった。

（あれ？巧さん来てる）

そう思いながら、俺は言った。

「ただいま」

奥から、姉が出て来た。

「お帰り。静流。今ね、巧が…」

姉と麻紀の目が合った。

「こんにちは。初めまして。あたし、藍沢麻紀って言います。いきなり、お邪魔しちゃって…。すいません…」

麻紀が、丁寧姉に挨拶をする。

姉は一瞬固まったが、いつも通りの笑顔で麻紀を迎えた。

「あら。いらっしやい。こちらこそ、初めまして。静流の姉の遥です。よろしくね。麻紀ちゃん」

「はい。こちらこそよろしくお願いします」

「静流、何やってんの？麻紀ちゃんを、外で待たせてないで、早く上がってもらいなさい？」

「あ、ああ…」

その時、俺は、姉の態度が、いつもと少し違う事に、違和感を覚えた。

「麻紀、おいで」

「うん。お邪魔します」

静流達が、部屋に入るのを確認した遥は、慌てたように、巧の元へと走った。

「た…、たた…、巧っ。た、た、大変よ!!」

「どうしたんだい？ 遙？ そんなに慌てて？」

「し、静流が、女の子連れて来たのよ!!」

「なんだ、そんな事か。そりゃ、静流だって「男」なんだから、彼女の一人や二人いたって、別に、おかしくないじゃないか」

巧は、笑って言った。

「違うのよ。静流が女の子を連れて来たのが、今日が初めてなの。だから一大事なのよ」

「へえ。静流も、ああ見えて結構、奥手なんだな」

巧は、相変わらずの笑顔で言った。

それはまるで、実の弟を見ているかのように。

「どうやって、接してあげれば良いの？ せっかく、静流に彼女出来たのに…」

遥は、一人で慌てて、軽いパニック状態に陥っている。

「そんなに、慌てるなよ…。別に、普通に接してあげれば良いだろう？ 静流の男友達が来た時のように…」

巧は、パニックになる遥を見て、苦笑いを浮かべた。

「そう…、そうよね。あたし、こんな事、初めてだから…。つい…」
やっと、冷静さを取り戻した遥。

一呼吸置き、とりあえず、キッチンへ向かった。

二人分のグラスにジュースを注ぐ。

それをトレイに乗せて、静流の部屋へ、静かに向かった。

「トントン…」

部屋のドアを、軽く叩く音がする。

「ごめんね。今、こんな物しか無くて…。分かってれば、ケーキでも用意したんだけど…」

「いえ、お構いなく。あたしの方こそ、いきなり押し掛けてごめんなさい」

「良いのよ。麻紀ちゃん。気にしないで。ゆっくりしてね」

「はい。お姉さん、ありがとうございます」

「あたしを呼ぶ時は、遥で良いよ。ウチに来て、そんなに固くならないで」

「はい。じゃあ、お言葉に甘えて…」

麻紀は、照れながらも、姉に対して、申し訳なさそうな表情をしていた。

「じゃあ、ごゆっくり」

姉は笑顔で、部屋を出て行った。

（姉ちゃん、やっぱりおかしい。いつもと違う…。あれは、動揺してるぞ、絶対…）

俺は、姉の異変を察知した。

「静流のお姉さん、優しいし、綺麗な人だね。あたしも、あんな風な大人の女性になりたいな…」

麻紀は、部屋を出て行った姉に対して、羨望の眼差しを送っていた。

「アレのどこが、大人の女性なんだ？」

俺は、麻紀に問いかけた。

「お姉さんに向かって「アレ」って…。だって、見たままだよ？」

「俺は、そうは思わないけどな…」

と、俺が話始めた、その時…、

「キーンッ…」

部屋のドアを、静かに開ける音がした。

「…静流君。また何か言ってるのかな？」

俺は、嫌なプレッシャーを感じた。

振り返ると、姉がクッキーを乗せた皿を持って立っている。

「いえ、何でもないです…」

「なら、良いんだけど」

（今、来んなよ…。地獄耳め…）

そんな、俺達姉弟を見て、麻紀は苦笑いを浮かべていた。

「麻紀ちゃん、あんまり良い物じゃないけど、良かったら食べてね？」

「色々、ありがとうございます」

「どういたしまして。じゃあ、ごゆっくり」

姉が、今度こそ、完全に部屋から出て行った。

「静流と遙さん、仲良いんだね？」

麻紀は、微笑いながら俺を見て言った。

「仲良いかどうかは分からないけど…。あの人、結構、口うるさいからなあ…」

俺は、溜め息混じりにぼやいた。

「静流が、たった一人の弟だからだよ。きっと。遙さん、静流の事、よっぽど心配なんだね？」

麻紀が、俺を見つめた。

「俺、そんなに危なっかしいかなあ…？」

俺は、口を尖らせた。

「あつ。ギターがある…。静流弾けるの？」

麻紀が、突然、声を上げた。

どうやら、部屋の隅の壁に立て掛けてある、俺のギターに気付いたようだ。

「まあ、一応ね…」

俺は、照れながら、そう答えた。

「何か弾いてみせて？」

俺を見つめる、麻紀の目が輝いている。

「じゃあ、麻紀が好きなGLAYの曲でも弾こうか？」

「GLAYの曲、弾けるの？」

「もちろん」

そう言うと、俺は「BELOVED」を、麻紀の前で弾いてみせた。

「すごい。BELOVEDだあ」

麻紀は、そう言いながら、ギターのメロディに合わせて、歌を口ずさむ。

俺は、そんな麻紀を見ながら微笑んでいた。

気が付けば、俺達は、いつの間にか、二人で歌を口ずさんでいた。

「すごい。静流、ギター上手だね？」

「ああ。ちよつと色々あってね」

「色々って？」

「まあ、良いから、良いから。今度、麻紀にも見せてあげるから。俺のとおっておきをさ」

俺はそう、得意気に言いながら、麻紀に微笑んだ。

「絶対に見せてね？」

「ああ。絶対に見せてあげるよ」

「うん。楽しみ」

麻紀は、今にも待ちきれないといった表情で、俺を見た。

「トントン…」

俺達の会話を遮るように、部屋のドアを、また、ノックする音が聞こえた。

「静流？晩ご飯どうする？麻紀ちゃんも、一緒に食べる？もうすぐ出来るから…」

「うん。頼むよ、姉ちゃん。麻紀も食べて行きなよ」

「遙さん、良いんですか？」

「良いのよ。ご飯は、大勢で食べる方が美味しいしね」

「ありがとうございます」

「いいえ。じゃあ、もうちょっと待っててね？」

そう言う姉は、俺の部屋から出て行き、キッチンへと向かって行った。

「遙さんって、料理上手そうだね？あたしも、遙さんに習っちゃおっかな？」

麻紀は、嬉しそうな顔で言った。

俺は、二人が台所に立つ姿を想像した。

（良いかも……。麻紀が作った料理……。食ってみたい……）

俺は、一人で、そんな事を妄想していた。

そして、暫くして、姉がドアの向こう側から、俺達に食事の合図を出した。

「ご飯、出来たよっ！！」

俺達は、一斉にキッチンへと向かった。

麻紀と、巧さんが、初めて顔を合わせた。

俺は、麻紀に巧さんを紹介した。

「麻紀？この人は、姉ちゃんの彼氏の巧さん。姉ちゃんと婚約してるんだ」

「ええっ？　そうなんですか？　おめでとうございます。あたし、藍沢麻紀って言います」

「俺は、浅倉巧。静流の言った通りだよ。よろしくね。麻紀ちゃん」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「まあ、挨拶はこの辺にして…。さあ、食おう」

巧さんの合図で、全員が声を揃えた。

「いただきますあす」

麻紀が、姉の料理を口にする。

「お口に合うかどうか…」

姉は、麻紀の顔色を気にしながら言った。

「美お味しいっ！！　すごい美味しい。遥さん、あたしのイメージ通

り、やっぱり、料理上手ですね？」

「もう。麻紀ちゃんったら」

姉が照れ笑いを浮かべた。

「な？美味いだろ？遥の料理」

巧さんも、姉の料理に舌鼓を打ちながら、麻紀に同意を求める。

「はい。こんな美味しい料理、あたし食べた事ないです」

麻紀も、姉の料理が気に入ったらしい。

麻紀は、笑顔で姉の料理に舌鼓を打っていた。

「あの…、遥さん？」

「なあに？麻紀ちゃん？」

「今度、良かったら、あたしにも、料理教えて下さい」

麻紀は、少し遠慮するように姉に、お願いをしていた。

「もちろん。良いわよ。また、今度ゆっくりいらっしゃい。その時には、一緒に二人で料理を作って、その男連中を唸らせてやりましょう？」

姉は、俺と巧さんを横目で見ながら、麻紀に、自信満々に言った。

「はい。でも…、あたし、遙さん程、料理上手じゃないし…」

麻紀は少し、自信なさげに言った。

「参ったなあ…。二人の美人に作ってもらう手料理程、素晴らしく良いご馳走はないぞ？最高だな。なあ、静流？」

巧さんは、美味しい食事と、体内にアルコールも補給されていた為か、上機嫌な様子で、喜んでいた。

そして、俺はと言うと、

「本当に、麻紀の手料理が味わえるのか？」

と思うと、興奮してしまい、いても立ってもいられなくなってしまった。

（ああ…。早く、麻紀の作った料理、食いてえ…）

俺の頭の中を、自分の勝手な妄想の世界が駆け巡っている。

「静流ー？どうしたの？おーい…」

麻紀は、箸をくわえたまま、ボートとしている俺の顔の前で、手を振りながら、俺の顔を覗き込んだ。

「…えっ？あ、いや…。なんでもないよ。うん。なんでもないんだ」

俺は、慌てて我に返り、麻紀に自分の妄想を悟られないように、微笑みながら、必死にごまかした。

「どうせ、また、変な事考えてたんでしょ？」

姉が、意地悪な表情で俺を見た。

「なっ…。んな事、ある訳ねえだろ？」

必死に反論する俺に、麻紀は、

「ホントかなあ？」

と、姉の意地悪に便乗するかのように、まるで、小悪魔のような意地悪な表情で、俺を見つめた。

「だから、違うんだって」

俺は、必死に麻紀に訴えかけた。

「あはは。冗談だよ。静流」

麻紀は、笑いながら俺に言った。

「もう…」

俺は、頬を膨らませながら、口を尖らせた。

「あははは」

その様子が、おかしいのか、三人は俺を見ながら笑っていた。

こうして、霞家の、楽しい団欒の一時は、夜遅くまで続いた。

Chapter 20

それから、数日後。

「プルルル…」

「もしもし？ 俊哉？」

「何だ？ 静流？」

「そろそろ、ライブやらないか？」

「そうだな。竜也も、もう行けるだろうし…。やるか、ライブ」

「ああ。いつやる？」

「そうだな。来週の土曜はどうだ？」

「俺はOKだよ。竜也はここにいるから、聞いてみる」

「竜也？来週の土曜、ライブしようと思うんだけど、空いてるか？」

「ああ。良いぞ。望む所だ」

「OKだって」

「そうか。充は：どうせ、アイツは予定無いだろうから、OKだな。充には、言っとくから、静流はライブハウスに連絡してくれ」

「ああ。分かった」

「頼んだぞ。久しぶりで楽しみだな」

「ああ。観客は、新しくなった俺達にビビるだろうな」

「ああ。俺達は変わった。進化したんだ。必ず、成功する」

俊哉が、いつになく熱くなった。

それは、俺達も一緒だった。

「じゃあ、俺はこれから用事があるから。じゃあな」

「ああ。またな」

「静流？日程は決まりか？」

「ああ。来週の土曜で決まりだ。後はライブハウスに連絡するだけだ」

「でも、充の予定はどうなんだ？」

「ああ。大丈夫。俊哉が、無理矢理にでも引っ張って来るだろうから」

「ひ…酷でえ…」

竜也は苦笑いをした。

「竜也、とにかく、新曲仕上げるぞ」

「ああ。ライブに間に合わせないとな」

「あっ…。先にライブハウスに連絡しないとな」

「はい。Sound Factory…」

「あっ、オーナー？霞です」

「おお、静流。今日は、どうした？」

「来週の土曜、ライブをさせて下さい」

「おっ？やっとか。長かったな」

「ええ。今度は、今までとは違いますから。楽しみにしてて下さい」

「分かった。お前達のライブは、評判が良いからな。これは忙しくなるぞ」

「久しぶりだし、どうですかね？」

「まあ、間違いなく、チケットは完売だろうな。ははは」

「そうだと良いんですが…。じゃあ、お願いしますね」

「分かった。じゃあな」

「はい。失礼します」

電話を切って、竜也と新曲の最終調整を始める。

「なあ、竜也？」

「なんだ？ 静流？」

「ライブ、上手く行くと良いな」

「きっと、上手く行くさ」

「そうだな。俺は、久しぶり過ぎて、どうも、緊張しているみたい

だ」

「はははは。何言ってるんだよ」

「ははは。ホントだな」

俺達は、ライブまでの間、出来る限りの事をやった。

ライブ前日。

「プルルル…」

「もしもし？麻紀？」

「なあに？静流？」

「明日、午後から空いてるかな？」

「うん。大丈夫」

「明日、前に約束した、俺のとおきをおき、麻紀に見せてあげるよ」

俺は、麻紀の前での初ライブという事もあり、かなり緊張していた。

「ホントに？」

「ああ。じゃあ、明日、昼前に迎えに行くから」

「うん。待ってる」

電話を切り、ベッドへ仰向けに寝転ぶ。

頭の中は、翌日のライブの事でいっぱいだった。

その日は、初めてのライブのように、なかなか寝付けなかった。

時計の針の音が、やけに耳に響く。

俺は、一人、ベランダへ出て、夜空を見上げていた。

夜空には、無数の星が散らばる。

（やるだけの事はやった。後は、それをぶつけるだけだろ？何を考える必要がある？しっかりしろ、静流）

俺は、夜空を見つめながら、自分の心にそう言い聞かせた。

ライブ当日。

「今日は、ライブだから夜遅くなるよ」

「分かった。頑張ってるね」

「ああ。行って来るよ」

まるで、戦場にでも向かうかのような面持ちで、マンションを出た。

ケータイを手に取る。

「プルプル…」

「もしもし？麻紀？今から出るから」

「分かった。待ってるね」

「ああ。着いたら、また連絡するよ」

「うん」

40分程で、麻紀の家の前に着いた。

「着いたよ」

「すぐ行くね」

メールがすぐに帰って来た。

暫くすると麻紀が出て来た。

「おはよう。あれ？静流、今日、雰囲気違うね？」

（今日の静流、いつもとオーラが違う…。どうしたのかなあ？）

「おはよう。そうかなあ？」

「うん」

「別に、普段通りだよ」

俺は、苦笑いしながら言った。

「じゃあ、行こっか？」

「うん。今日は、どこ行くの？」

「まだ秘密。もうすぐ分かるから、楽しみにしてて」

「うん」

麻紀は、笑顔で車に乗った。

一時間程で、ライブハウスに着いた。

「さあ、着いたよ」

「ここって…?」

「そう。ライブハウス。俺のとおき、俺の、もう一つの姿を、麻紀に見せるから」

麻紀は不思議そうな顔をしていた。

（もしかして、静流が、ライブするって事なの?）

「ねえ? 静流? 静流のとおきって、まさか…」

「そう。俺達、四人のワンマンライブ」

麻紀は驚いた。

「ウソ…。すごいね…」

麻紀を連れて、事務所へ入る。

俊哉と充は来ていたが、竜也の姿が見当たらない。

「やっと来たか…。始めるぞ」

俊哉が言った。

「あれ？竜也は？」

「竜也なら、タバコを買いに行ったぞ」

その時、事務所のドアが開いた。

「小野瀬君！？」

麻紀が振り返ると、竜也が立っていた。

「あれ？藍沢さんが何でここに？」

驚く竜也。

「竜也、遅かったな。サプライズゲストだ」

俺が、竜也に言った。

「お前達、付き合ってたんだ？いつの間に？」

「ああ。今月の頭くらいからかな？」

俺は曖昧に答えた。

「さあ、全員揃ったな？リハやるぞ」

俊哉の合図で、全員が2階のスタジオへ上がる。

スタジオまで上がる外階段の壁には、色々なバンドのポスターや、メンバー募集の紙が貼ってある。

「麻紀、これがチケットだよ。始まったら、会場へこれ持って入って来て」

俺は、麻紀にチケットを手渡した。

「うん。静流のバンド、B－R a v e って言うんだ」

「ああ。良い名前だろ？」

俺は、自慢気に言った。

「カッコ良いね」

麻紀が、俺達のポスターを眺めて言った。

「S O L D O U T って…、もしかして、今日のチケット完売したの？」

「ああ。一時間程で完売したらしいよ」

「そんなに有名なの？」

麻紀は、ただ目を丸くするだけだった。

「まあ、見てなって。すぐに分かるから」

俺は、麻紀に微笑んだ。

スタジオに入り、リハーサルの準備をする。

「今から、リハーサルやるから、少し見てて。俺の…、いや、俺達
のとおきを見せるから」

「行くぞっ!!」

「おうっ!!」

俺達は、今日の曲目順に、リハーサルをやった。

（静流って、歌ってる時、すごく嬉しそう。歌詞も、曲も綺麗…）

「一旦、休憩にしよう。開演まで後、二時間か…」

俊哉が時計を見た。

時計は、午後4時を指していた。

「麻紀、外行こっか？」

「うん」

俺達は外に出た。

スタジオの外廊下から、事務所入口を見下ろすと、早くも、たくさん
の観客達が集まっていた。

「また、今回もゾロゾロと…。それに、してもいっぱい来たなあ」

俺は、まるで他人事のように言った。

「すごいね…。この人達、全員、静流達を見に来たの？」

麻紀は、呆然と下の観客達を見て言った。

「みたいだね。でも、そんな事はどうでも良いんだ。今日は」

俺は、笑いながら答えた。

「えっ？ どうして？」

麻紀が驚いた表情で、俺を見る。

「だって、今日は、麻紀の為のライブだからさ。観客達は、オーナーが儲けようとして、チケット売ったんだよ。きつと」

俺は、照れながら麻紀に言った。

「このライブ、こんなに人が来てるのに、あたしだけの為なの？」

「そうだよ。観客達の前で歌うのは、馴れっこだからさ。麻紀の前で、歌う方がよっぽど緊張するよ」

麻紀は、不思議そうな顔をしていた。

「普通、逆だろって思ったでしょ？男はね、好きな子の前で、良い所見せようとか、頑張ろうとする程、緊張するし、気持ちだけが空回りして、失敗しちゃうもんなんだ」

「そうなの？」

「そうそう。例え、大勢の人を感動させたとしても、一人の大切な人を感動させられないんじゃない？、意味無いもんね」

俺は、照れ隠しをする為、はぐらかすように、麻紀に聞いた。

「それよりさ。麻紀？さっきの、リハーサルどうだった？」

「カッコ良かったよ。まるで、プロのバンドみたいだった。さっき、歌ってた曲のタイトル、何て言うの？」

「Star dust Ringって言うんだ。大切な人とずっと一緒にいたいって気持ちを込めた歌なんだ」

「すごく綺麗な曲だね。あたし、あの曲大好きになっちゃった」

「ははは。ありがとう。後で今日のライブのCD麻紀にあげるよ」

「ホントに?」

「ああ」

「嬉しい」

「もうすぐ、開演だから、開演まで俺達というと良いよ」

「うん」

俺は、麻紀をスタジオへ入れて、再度リハーサルをやった。

夕方、6時。

会場の扉が開いた。

「麻紀、会場は3階だから、先に上がってて」

「うん。楽しみにしとくね」

「ああ。麻紀の為に、俺達四人が、最高のライブをするから」

そう言って、麻紀に会場へ入ってもらった。

「さあ、時間だ。俺達ならやれる。お前達、準備は良いか？」

俊哉の合図で、全員に気合いが入る。

「ああ。いつでも良いぞ」

竜也が微笑む。

「いつも通りさ」

充は落ち着いている。

「今日は、俺の全てをぶつけてやるさ」

俺は、自分の緊張を払いのけるように言った。

「よし。行くぞ」

四人で会場のステージへ向かう。

ステージの袖から、観客達を見ると、既に満員状態だった。

俺は、最前列で麻紀を見つけた。

（ちゃんと入れたんだな。よしっ。やるかつ）

そう思いながら、メンバー全員のスタンバイを待った。

照明が落ち、演奏開始までの繋ぎの音楽が鳴る。

俺の胸が高鳴る。

全員、スタンバイ完了。

スポットが当たると同時に、演奏開始。

充の、疾走感漂う歯切れの良いドラムのリズムが響く。

腹の底まで響く、俊哉のベースに、メロディアスな竜也のギターの音色が絡む。

俺も、負けじと力の限り、声を張り上げる。

観客は、既にヒートアップしている。

会場全体が、熱気に包まれた。

一曲目が終わり、俺は観客達に言った。

「ええ…っ、みんなの前に、半年ぶりに帰って来ました」

「おかえり」

観客が応える。

「お前達、会いたかったぞおっ!!」

観客達が、大声で俺達の名前を叫ぶ。

「今日は、久しぶりのライブなんで、少々緊張しています。みんな、俺達のライブを楽しみにしてくれたと思うけど、今日のライブ、一番楽しみだったのは、実は、俺達四人でした」

俺は、麻紀の方に視線を向けた。

麻紀は、まるで別世界の人間を見るような目で、俺を見ていた。

そんな麻紀に、俺は微笑みかけた。

俺の微笑みに答えるように、麻紀も微笑み返してくれる。

「みんなに、何かを届けようとか、感動させようとか、そんな大それた事は考えてません。とにかく、ありのままの俺達を見て下さい。そして、楽しんで行って下さい。では…」

俺が、次の曲のタイトルを言うと同時に、充が、ドラムのステイックを振りかざした。

俺が、観客達を煽る。

「オラオラーッ!!」

「もっとーっ!!」

俊哉が煽る。

「まだまだーっ!! もっとーっ!!」

それに合わせて、観客達も声を張り上げる。

「まだまだ、出せるだろーっ? もっと来いよーっ?」

竜也も興奮している。

そんな、会場の雰囲気負けじと、俺達の演奏は、更に激しくなる。

順調に、ライブは進んで行った。

「もう一度、行こうか？」

「全員で飛ばして行くぞーっ！！」

四人で叫ぶ。

「ラストーっ！！」

俺が、ラストの曲の合図を送る。

竜也がギターをかき鳴らす。

充と俊哉が続く。

会場は興奮の嵐だった。

俺は麻紀を見た。

麻紀は嬉しそうに、俺達を見ていた。

（静流のオーラが、いつもと違うように見えたのは、これなんだ…。このライブ見てたら、なんだか、ホントにプロのミュージシャンに見えて来ちゃった…）

麻紀の考えてる事が、俺は、分かった気がした。

（きっと、麻紀はこの雰囲気から、プロみたいって思ったんだろうな…）

俊哉がステージの端にあるスピーカーの上に足を乗せて観客を煽る。

竜也は、観客の目の前でギターをかき鳴らす。

ライブの終幕へ向けて、俺達のテンションはピークを迎えた。

既に、体力は限界に近付いていた。

だが、そんな理由で手を抜く訳には行かない。

この、大勢の笑顔と、大切なたった一人の笑顔の為に。

俺達は、今、持てるだけの力を爆発させ、力の限り、演奏し続けた。

ラストの曲が終わった。

「どうも、ありがとうっ!!」

俺達は、観客達に叫んだ。

観客達は、俺達に声援を送ってくれる。

麻紀を見た。

麻紀は、圧倒されたのか、ただ、呆然と俺達を見ていた。

どこからともなくアンコールの声が湧き上がった。

俺達は、それぞれの顔を見合わせた。

(やるか)

全員で頷く。

「今日は、みんな、本当にありがとう。みんなの気持ち嬉しいです。まだ、未完成ですが、俺達の新曲を、大切な人を思い浮かべながら、聴いて下さい」

俺が、今日の為に用意した新曲。

それを、アンコールで発表する。

竜也が、優しいメロディーを奏でる。

俺は、囁きかけるように、優しく歌う。

俊哉と充は、さっきとは別人なくらい、大人しくリズムを刻む。

観客達は静かに耳を傾ける。

観客達の中には、涙する者もいた。

この曲には、今の俺の気持ちが詰まっている。

（麻紀に届け）

俺は、そう思いながら、歌った。

竜也のギターの音色が消えた。

観客達からは、盛大な拍手と、

「ありがとう」

の言葉が湧き上がる。

「今日は、みんな本当にありがとう。新しくなった俺達は、これからも、精一杯やって行きます。だから、みんな……。また会おうっ！
！」

俺の最後の挨拶で、照明が落ち、ライブは幕を閉じた。

Chapter 21

ライブが終わり、一旦、2階のスタジオへ。

観客達はまだ、興奮が冷めやらないのか、ライブハウスの外で騒いでいる。

「ああ…。疲れた…」

充が、バテて、スタジオのソファに倒れ込んだ。

「ははは。お疲れ」

オーナーが笑顔で言った。

「大成功だったじゃないか」

「まあ、久しぶりですし、あんな感じじゃないですかね」

俊哉は、素っ気なく答える。

「まだ、何か企んでるのか？」

俊哉の目付きが変わる。

「俺達は、まだ上を目指します。こんな、ライブの規模じゃない…。もっと、デカい規模で…」

「行くのか？東京？」

「ええ。いずれは…。でも、まだ時期じゃない。これから、もっと数をこなして、今以上の音が出せるようにならないと…」

俊哉は淡々と答える。

「このメンバーなら、きっとやれるはず。だから、今日のライブで満足しては駄目なんです」

「そうか…。まあ、お前達ならやれるかもな」

オーナーが微笑った。

俺達の目には、大きな会場を埋め尽くす程の、観客達の前で、俺達、BーR a v e がライブをしている光景が映っていた。

帰り支度をして、1階の事務所に入る。

麻紀が、オーナーの奥さんと話をしていた。

「あら？静流じゃない」

オーナーの奥さんが、俺に気付いた。

「…奥さん。また、変な事吹き込んでます？」

「あら？聞いた？失礼ね。別に、変な事は言っていないわよ」

そう言うと、オーナーの奥さんは、「失礼な」と言わんばかりの表情で、俺を見た。

「麻紀、この人の話は、大袈裟だから。あんまり、真に受けたら駄目だぞ」

俺は笑いながら、麻紀に言った。

「まあ？聞いた？可愛くないわねえ」

奥さんは、ふてくされた顔をしていた。

そんな、俺達のやり取りを見ていた、オーナーやメンバー達は、苦笑いしていた。

「そんな事より、復帰ライブの記念に、アンタ達、メンバー全員で記念写真撮らない？撮ってあげるから」

奥さんが言った。

「おっ。良いねえ」

竜也と充が賛成する。

「俺は、良いよ…」

俺は、写真が苦手だったので断った。

「まあ、良いから。早く入りなさい」

「痛ててっ…。何すんだよっ」

嫌がる俺を無視して、竜也と充が、無理矢理、俺を引っ張って並ばせる。

「静流、真ん中に寄れよ。さあ、藍沢さんも写真に入って」

何故か、竜也が仕切っている。

「えっ？あたしも？」

麻紀は、少し戸惑っていた。

「良いから、良いから。麻紀ちゃんは、静流の隣に…。はい。撮るよ」

そう言いながら、奥さんがシャッターを切る。

「…静流。固いよ？ほら、笑いなさい」

「だから、俺は、写真が苦手なんだって」

「そんなんじゃ、プロになってもジャケットの写真とか、撮れないよ？ウダウダ言わない。もっとリラックスしなさい」

奥さんが、俺に説教じみた事を言った。

「…無愛想で悪かったな」

俺の心の声が、ポツリと漏れた。

そんな俺を見て、麻紀が言った。

「静流の笑顔、あたしは好きだよ。子供みたいに無邪気で、可愛いし」

俺は、その言葉で顔が赤くなり、うつむいてしまった。

「そんな事、言うなよ…。恥ずかしいじゃん…」

麻紀が、俺の顔を覗き込む。

「静流。大好き」

麻紀が微笑みながら、俺にだけ聞こえるように、俺の耳元で囁いた。

「…フフっ」

俺は、つい、照れ笑いを浮かべてしまった。

その時…。

「カシヤッ」

シャッターを切る音。

「あっ!!」

目が点になる俺。

「はい。良い物が撮れました」

得意げな笑顔で、奥さんが俺を見た。

「じゃあ、現像出来たらあげるから」

そう言って、奥さんは事務所の奥へ入って行った。

「まあ、諦めるんだな」

オーナーが笑った。

「うっ…」

俺は、恥ずかしさの余りに、声が出なかった。

「静流って、ホントにシャイだね。ライブの時とは、別人に見えるちゃう」

麻紀が笑っていた。

俺達の話に割って入るように、竜也が言い出す。

「これから、打ち上げしないか？」

充が、「待ってました」と言わんばかりに騒ぐ。

「打ち上げやろう。やろう。どこ行く？ 駅前の居酒屋？」

「どこだって良いよ。どうせ、麻紀を送って行かないといけないし」

「あたしも、打ち上げ行きたい」

「えっ？ 麻紀、大丈夫なのか？」

「うん。今日は遅くなるって言ってあるし。全然平気だよ」

「じゃあ、駅前の居酒屋にでも行くか」

全員一致で、居酒屋へ向かう事に。

「オーナー、すいません。明日の昼まで、車停めさせて貰えませんか？」

俊哉がオーナーに頼んだ。

「ああ。別に、構わんよ。楽しんで来い」

「ありがとうございます」

「じゃあ、行くか」

オーナーに見送られ、駅前まで歩く。

俺は、麻紀に合わせてゆつくりと歩く。

「今日の静流、すごくカッコ良かったよ。あたし、静流が本物のプ

口に見えちゃった」

「そんな…。俺達はまだまだだよ。こんなので満足してちゃ、駄目なんだ」

「いっぱい、お客さんが来るはずだよね。」

「俺は…、いや、俺達は、「俺達の作る音楽を聴きたい奴だけ聴いてくれれば良い、聴きたくなければそれでも良い」って思ってるんだ。観客達は、ただ、それに賛同してくれてるだけだよ」

「俺達は、ただ自分達の力をどれだけ出せるか、自分達の力がどこまで通用するのかを、いつも考えてる。それだけじゃなくて、自分達の音楽で、観客達が感動したり、満足したり、明日も頑張ろうって…。そう思ってくれるように…。俺達は、毎日進化しなきゃいけないんだ。俺達は常に、高いレベルでの音楽を目指してる。自分の中の理想の音楽に、妥協は出来ないんだ。だけど、中には、こういう音楽は受け付けられないって人もいるでしょ？だから、聴きたい奴だけ、聴いてくれれば良いって事だよ」

「そう言う事」

「えっ？」

麻紀が振り返ると、他の三人が微笑んでいた。

「麻紀ちゃん、俺達は、自分達の思いを、上手く言葉には表現出来ないんだよ。不器用だからさ。俺達の気持ち、伝えられる手段なら、何でも良かったんだ。たくさんの人達に、俺達の思いを伝えようとしたら、たまたま音楽だったって話。野球の選手やサッカーの選手達が、良いプレーをして、ファンを喜ばせたり、逆境をはねのけて、試合に勝ったりしてファンに勇気を与えたりするのと同じだと思う。だから、自分達の思いを伝える為に、妥協は許さないんだよ」

俊哉が、麻紀に優しく言った。

「みんな、すごく考えてるんだね。みんななら、きっと出来るよ。今日、初めてB-Raveを聴いたあたしが、好きになっちゃったんだもん。ねえ？ファンクラブ作ったら、あたし、一番にファンクラブに入れて貰っても良いかな？」

「もちろん。喜んで」

俺達四人は、声を揃えた。

「ありがとう」

麻紀は、嬉しそうに喜んでいる。

「おっ!! 着いたぞ」

竜也の声で、全員の足が止まる。

話込みながら歩いている内に、着いてしまったようだ。

「じゃあ、入ろうか」

俊哉が、店に入る。

俺達も、俊哉の後を追うように、店内へ入って行った。

Chapter 22

居酒屋へ入ると、若い女性店員が、元気良く迎えてくれる。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

「五名様です」

既に、テンションが上がった充が、調子良く返事をする。

「では、こちらへどうぞ。五名様、ご案内します」

俺達は、その女性店員に、座席まで案内してもらう。

「ご注文をお伺いします」

「とりあえず、生中4つと…。麻紀ちゃんは何にする？」

俊哉が、麻紀にドリンクの注文を聞く。

「どれにしようかな…？」

「麻紀、女の子が飲みやすいのは、カシス系のカクテルか、カルーア、杏露酒とかかな。酎ハイなんかも良いかも」

俺は、決めあぐねている麻紀に飲みやすい物を薦めた。

すると、麻紀はこう言った。

「静流のオススメは？」

「俺は、カシス系の飲み物は好きだね。飲みやすいし、ジュースみたいだから」

「じゃあ、カシスソーダにする」

麻紀も決まった。

「すみません。後、カシスソーダを…」

俊哉が店員に伝えた。

「はい。かしこまりました。ご注文を繰り返します。生ビールの中が4つとカシスソーダが1つ。以上でよろしいですか？」

「はい」

全員が声を揃える。

「では、少々お待ち下さい。失礼します」

そう言うのと、店員は、厨房の方へと向かった。

「さて…と。今日は、お疲れさん。今日のライブは久しぶりだし、竜也が加わって初めてのライブにしては、上々だった。だけど、俺達は、まだスタートラインに立ったばかりだ。けど、俺達なら必ずやれるはずだ。だから、みんな、これから俺達四人で頑張ろう。誰一人欠けても、俺達、B－R a v eは成り立たない。俺達は四人で一つだから…」

俊哉が、感慨深げに言った。

「そうだな。俺達四人、行ける所まで行こう。やるだけやって、駄目ならしょうがないさ」

俺が俊哉に続いた、ちょうどその時…。

「お待たせしました。生ビール4つと、カシスソーダです」

店員が、さっき注文したドリンクを持って来た。

それぞれの手元に、ドリンクが行き渡る。

「じゃあ、新しい二人の仲間の歓迎と、俺達のこれからを願って…」

「カンパーイっ!!」

俊哉の合図で、ジョッキとグラスが、軽くぶつかり合い音を奏でる。

「美味いっ…。やっぱり、冷えたビールは最高だな」

「ははは。竜也、相変わらずオッサンだな」

俺は、笑いながら竜也を見た。

「うるせえなあ。美味しい物は美味しいんだから、しょうがないだろ？
オッサンもガキもあるかつ」

竜也が、幸せそうな表情をして言う。

「ガキは、飲めません。あつ、いたか。ここに、デカイガキが…」

俊哉は、そう言いながら、充を横目で見る。

「うん？」

メニューをジッと見ていた充が、「何の事？」といったような顔を
して、全員の顔を見渡す。

「何、食うんだよ？」

俊哉が充に聞く。

「ええっと、焼き鳥と、枝豆と、フライドポテトと、たこわさびと、ウインナーの盛り合わせと、唐揚げと…」

「一体、いくら食べば気が済むんだ？」

俊哉が呆れた顔をしている。

「とりあえず、腹がいっぱいになるまで」

充は、笑いながら答えた。

「今、充が言った分、全部、充が払えよ？」

俊哉が充に言った。

「割り勘じゃないの？」

「充の注文だけ、充の自腹」

俊哉が、意地悪そうな笑いを浮かべて言った。

「ケチーっ。なんで俺だけ…。ドケチの俊哉め…」

充は文句を言いながら、ものすごく不満そうな顔をして、俊哉を見ている。

「ははは。充、今言った食い物、俺達にも分けてくれるなら、話は別だぞ？ たこわさびは、流石に一人分だろうから、勘弁してやるよ」

俺が笑いながら、充に言った。

「そうそう。お前はすぐに、自分の所へ取り込んでしまうからな。どうする？ みんなで食うなら割り勘だぞ？」

俊哉が、笑いながら充を見る。

「じゃあ、みんなも頼めば良いじゃん。で、みんなで食べば良いじゃん。仲間なんだから」

拗ねた顔で充が言った。

「ははは。そうだな。とりあえず呼ぶか？」

「すみません」

俊哉が、そう言って店員を呼んだ。

「はい。ご注文をお伺いします」

店員に、充が選んだ食べ物を注文する。

「では、少々お待ち下さい」

「はい」

幸せそうな顔で、充が答える。

「お前、ホントに食い物の事になったら、幸せそうだな？花より団子か？」

俊哉が半分、呆れ顔で充に言う。

「へへへっ。でも、女の子も好きだけどね」

どうやら、充も男だったらしい。

「あっ!! やべっ」

急に竜也が声を上げた。

「帰りの交通費まで考えてなかった…」

「何やってんだよ？ ホラッ。貸してやるから。これで帰れるだろ？」

俺は、竜也の前にポンと三千円を出した。

「静流…。良いのか？」

「ああ。今日は、少し多めに持って来たからな」

「サンキュー。助かった。また、今度返すからな」

竜也が、安堵した表情で俺を見た。

そんな、俺達のやり取りを見た充が、こう言った。

「なあ？ 俊哉？ やっぱり、静流みたいに、気っ風の良いヤツがモテルのかなあ？」

俊哉は、「また始まった」と言わんばかりに、面倒臭そうな顔をして言う。

「ああ。そうかもな」

「うう…。冷たいなあ…」

「ああ。よしよし」

俊哉が、充の頭を、軽くポンポンと叩く。

「充、絶対に酔ってるよな？」

俺は、充を見て呆れていた。

「コイツは、いつもだ。酒に弱いくせに、飲むんだからな…」

俊哉が、ため息を吐きながら、充を見る。

「まあ、いつもの事だけだな。でも、今日は一段と酷いな。充、なにかあったのか？」

俺は、充に聞いた。

「何も無いよ…。ああ…。薫ちゃん…」

充が、小声で呟く。

「しっかりとあったんじゃねえか…。フラれたんだな？」

俺達は、苦笑いをしながら、充を見た。

「うう…」

（ヤバイ、半分泣き顔じゃねえか…）

俺達は、顔を見合わせた。

「もう、この話題はやめだ。なんか明るいネタ、無いのか？」

と、俊哉が言ったその時…。

「お待たせしました。焼き鳥です」

「ピクっ」

その言葉に反応した充。

その、充の反応よりも一瞬早く、竜也の手が動く。

「鳥皮串、もらいっ!!」

そう言いながら、竜也が、充の前から鳥皮串を攫う。

「あっ!!」

充が気付いた時には、鳥皮串は、竜也の口に運ばれていた。

「竜也っ!!ズルいぞ。俺の好物なのにつ!!」

充は、酷くご立腹である。

「何言ってるんだ?早い者勝ちだろ?」

竜也が充に言った。

「竜也め…」

充が、竜也を睨む。

「落ち着け。また、頼めば良いだろ?」

俊哉が、二人の間に割って入る。

俺と麻紀は、そのやり取りを笑いながら見ていた。

「うう…」

充の怒りは収まりそうにない。

俊哉が、疲れた表情を浮かべながら、店員を呼ぶ。

「すみません。鳥皮串もらえますか？」

「はい。かしこまりました」

「俊哉、ありがとう」

少し機嫌が治った充。

「ねえ？ 充君？」

麻紀が充に言った。

「充君なら、きっと良い彼女が見つかるよ。だって、無邪気な性格だし、すごく可愛い顔してるしね。きっと大丈夫だよ」

「だとき。充。良かったな。女の意見だから、多分、間違いないだろう」

俺は、充に言った。

「ホントに？なんか嬉しいなあ」

（ホントに単純なヤツだ…）

俺達は、呆れた顔で充を見ていた。

「麻紀ちゃん、あんまりコイツを褒めたら駄目だ。すぐ調子に乗って暴走するからな」

俊哉が、横目で充を見ながら言った。

「なんで、そう言うかな？俊哉君は？」

充が、しかめっ面で俊哉を見る。

「俊哉さん。ホントですよ？他の人はどうか知らないけど、あたしから見たら、充君は可愛いですよ」

麻紀が、笑顔で俊哉に言った。

「そんなもんかねえ…。でも、まあ、良かったな、充」

「へへへっ」

充が照れ臭そうだ。

「麻紀ちゃん、俺達はもう仲間なんだ。だから、俺の事は俊哉で良いし、敬語じゃなくて良いから」

俊哉が、微笑んで麻紀に言った。

「ありがとう。じゃあ、お言葉に甘えるね」

麻紀は嬉しそうに言った。

「お待たせしました。鳥皮串です」

店員が、鳥皮串を持って来た瞬間。

「これは、俺のだぞ？取るなよ？俺のだからな？」

「ああ…。はいはい。分かったよ。誰も取らねえよ。分かったから、さっさと食べ」

俊哉が、面倒臭そうに言った。

「フフっ」

充の機嫌は、完全に治ったが、逆に、俊哉は疲れ果てた顔をしていた。

「やれやれ…。ホントにしょうがないヤツだな…」

俺達は、苦笑いを浮かべた。

鳥皮串を頬張る充は、この上なく、幸せそうな顔をしていた。

ちょうど、そこへ店員が来て、俺達に案内をした。

「ラストオーダーになります、ご注文はよろしいですか？」

「俺達は、十分、飲み食いしたけど…。おいっ。充？ラストオーダー良いのか？」

俊哉が充に聞く。

「うん。満足した」

「もう大丈夫です」

「はい。では、ごゆっくり」

ふと、俺はケータイを見た。

時計は、夜中の1時を回っていた。

「もう、こんな時間か…」

「今、テーブルの上にある物食ったら帰るぞ」

俊哉が、お開きの合図を出した。

会計を一旦済ませ、俊哉が言う。

「二人、五千円な。麻紀ちゃんは…三千円で良いや」

「ええ？でも、悪いよ…」

「良いから、良いから」

俊哉は、微笑んで麻紀を見た。

「俊哉、麻紀の分も、俺が出すよ」

そう言って、俺は俊哉に八千円を渡した。

「良いの？ 静流？」

「ああ。全然、構わないから」

「ありがとう」

俺達は、そう言いながら、居酒屋を出た。

「じゃあ、今日はお疲れさん。またな」

「ああ。またな」

そう言って、俺と麻紀を残して、他の三人は、夜の街に消えた。

「麻紀？ 遅くなったね。ごめんな」

「なんで、謝るの？ あたしは、楽しかったよ？」

「いや、麻紀の親に申し訳ないよ…」

「酒飲んでるから、タクシーで送るよ」

そう言って俺はタクシーを探した。

すると、麻紀が、俺に抱き付いて言った。

「あたし…。今日は帰りたくないの…」

「そういう訳にはいかないよ？」

「お願い…。静流…。今日は、一緒にいて？」

「…分かった。とりあえず、家には連絡するんだよ？麻紀のお父さんやお母さんが心配してるかもしれないから」

「うん。ちょっと待ってて」

そう言って、麻紀は家に電話を掛けた。

「どうだった？」

「遅くなったから、友達の家に泊まるって言ったら、分かったって」

「そっか。なら良いんだけど…。これから、どこ行く？」

「静流の家に行っちゃダメ？」

「俺の家かあ…。まあ、あの人しかいないから、平気だろうけど…」

「静流の家に行こ？」

「分かった。でも、とりあえず、帰る足を探さないかね」

そう言って、俺達はタクシー乗り場へ向かった。

Chapter 23

タクシーに乗り、俺のマンションへ向かう。

流石に、夜中だけあってタクシーは10分程でマンションに到着。

エレベーターに乗り、5階へ。

部屋の前に立ち、玄関の鍵を開ける。

「ガチャ」

「おかえり。あら、麻紀ちゃん。いらっしやい」

「こんばんは。遙さん。夜遅くにごめんなさい」

「別に、良いのよ。気にしなくても」

姉が微笑んで、迎え入れる。

「麻紀、おいで」

「うん。失礼します」

俺達は、部屋に入った。

「ねえ？ 静流？」

「うん？」

俺が振り向くと、麻紀がいきなり抱き付いて来た。

「…キスしょ？」

麻紀は潤んだ瞳で、俺を見る。

俺はそっと、麻紀にキスをした。

「麻紀、酔ってる？」

「ううん。平気」

「顔赤いぞ？」

「静流とキスしたからじゃない？」

麻紀が、ごまかすように言った。

「トントン…」

ドアをノックする音を聞いた俺達は、急いで離れた。

「静流？ 入るよ？」

ドアが開いたと同時に、姉が顔を覗かせる。

「麻紀ちゃん？ 今日遅いから、ウチで良ければ、泊まって行っ
たら？」

「ありがとうございます」

「麻紀ちゃん？あたしの部屋と一緒に寝る？この部屋じゃ、むさ苦しいでしょ？」

「うるさいな」

俺は、姉を横目で見た。

「ありがとうございます。でも、あたし、この部屋で大丈夫ですよ」

「そっか…。じゃあ、ここに布団、持って来るね」

残念そうな顔をした姉は、そう言いながら部屋から出て行った。

「良いのか？麻紀？」

「うん。あたし、静流と一緒に良いから」

「そっか」

暫くして、姉が布団を、俺の部屋に持って来た。

「静流？静流が床に寝なさい。麻紀ちゃんは、この布団を、静流のベッドに敷いて寝てね」

「はい」

麻紀は、苦笑いをしながら答える。

「じゃあ、あたしは、向こうに行くから。麻紀ちゃん、ごゆっくり」

（さっさと行けよ）

俺は、姉を「出て行け」と言わんばかりの目で見た。

「静流？変な事したら、許さないわよ？」

「ああ？うるせえなあ。分かってるよ」

「じゃあ、麻紀ちゃん、おやすみ」

「おやすみなさい」

姉が、部屋から去った。

（やれやれ…。やっと失せたか…）

俺は、麻紀を見て言った。

「麻紀。姉上殿が、ベッドで寝るようにだってさ。俺、布団替えるよ」

そう言って、俺は、自分の布団をベッドから退けようと、ベッドに手を伸ばした。

「静流？あたし、静流と寝たい…。ダメ？」

「そりゃあ、流石にヤバイでしょ？しかも、俺は釘を刺された身分だし…」

「お願い…。一緒に寝よ？」

俺は暫く固まった。

(麻紀と一緒に寝る？嬉しいけど、緊張して寝れないかも…)

「ダメ？」

麻紀が、「お願いだから」と言う表情で俺を見ている。

俺は、暫く自分の中で葛藤した。

「…分かった。一緒に寝るだけだからね」

「ありがとう」

俺は、自分の欲望に負けた。

「麻紀？シャワー浴びて来れば？」

「あたし、良いよ…。無理矢理、押し掛けてるし…」

「遠慮しなくて良いから。今日は暑かったし、気持ち悪いでしょ？」

「うん…。じゃあ、シャワー借りるね」

俺は、麻紀を風呂へ案内した。

「じゃあ、ごゆっくり」

「ありがとう」

俺は、一人、部屋に戻り気分を落ち着けようと必死だった。

「ヤベエだろ？麻紀の隣で寝るって…。嬉しいけど、絶対、落ち着かねえよ…」

そう独り言を言いながら、部屋中をウロウロしていた。

すると、麻紀が部屋へ戻って来た。

「シャワーありがとう。静流も入っておいで？」

「あ…、ああ。そうするよ」

俺は、上の空で返事をした。

（うわあ、どうすりゃ良いんだ？落ち着け。落ち着け…）

俺は、シャワーを浴びながら、何度も自分に言い聞かせた。

部屋に戻って、タバコに火をつける。

「静流？どうしたの？」

「いや、何でもないよ」

麻紀が、俺の異変に気付いた。

「そろそろ、寝よつか？」

俺は、布団の中に潜り込んだ。

その後で、麻紀が布団の中に入って来る。

俺の心臓は破裂しそうなくらい、鼓動を打っていた。

「…電気消すよ？」

顔が赤くなってるのが、麻紀にバレないように照明を消した。

「ねえ？ 静流？」

「うん？ 何？」

「あたし、今、すごく幸せ」

「なんで？」

「静流と一緒に布団で寝るんだよ？ すごく幸せだよ」

「そっか」

俺は、それどころじゃなかった。

とにかく、気分を落ち着けようと必死だった。

「ねえ？ 静流は？」

麻紀にそう聞かれ、一瞬、返答に困った。

「お…俺も、う…嬉しいよ」

「静流？もしかして、緊張してる？」

俺は、顔が熱くなった。

「可愛い」

そう言うと、麻紀は、俺の唇にキスをして来た。

（ああ…、ヤバイ…。麻紀って良い匂いがする…）

俺は、自分の欲望を抑えるのに必死だった。

「静流？ 大丈夫？」

「…麻紀。大好きだ」

そう言って、麻紀を力強く抱きしめた。

俺は、ついに自分の欲望に負けてしまった。

「静流、ちょっと苦しいよ…」

麻紀のその言葉で、俺は、我に返った。

「あ…、ああ。つい…。ごめん。大丈夫？」

「うん。大丈夫」

「なあ？ 麻紀？」

「なあに？ 静流？」

「麻紀は、なんで、俺なんかと一緒にいたいって思ってくれたんだ？」

「なんでって言われても…。静流の事、好きだし、静流って優しいし。それに、どこか淋しそうだったから…。同情とかじゃなくて、ただ、静流の傍で、支えてあげたいって思ったから…。でも、言葉で表現するって、難しいね…」

「そっか。ありがとう。俺は、十分過ぎるくらい、麻紀に元氣をもらってるから。俺は、麻紀がいてくれたらそれで良い。麻紀がいるから、俺は頑張ろうって思えるんだ」

「そっか。良かった。あたしは、頑張る静流が大好きだよ。ねえ、静流？ あたし達、ずっと一緒にいようね」

「ああ。俺だって。絶対、麻紀を離さないからね」

「フフッ。静流、大好き。愛してる」

「俺も。愛してるよ。麻紀」

そう言って、お互いの顔を近付け、キスをした。

「おやすみ。麻紀」

「おやすみ。静流」

俺は、麻紀を抱き締めて麻紀が眠りに就くまで、ずっと起きていた。

麻紀の気持ち良さそうな、寝息が聞こえる。

俺は麻紀の温もりを、全身で感じた。

俺は、麻紀の髪を撫でながら、麻紀の温もりと、呼吸の一つ一つを逃すまいと、麻紀を強く抱き締めた。

隣で寝ている、麻紀の寝息と体温が心地良く、いつの間にか、俺も眠っていた。

Chapter 24

どのくらい、眠っていたのだろう。

俺は、「ハッ」と我に返り、飛び起きた。

時計はまだ、朝の8時を回ったばかりだった。

俺の隣で、眠っていたはずの麻紀がない。

（あれ？どこだ…？）

「…麻紀？」

俺は、部屋中を見渡した。

キッチンの方から、良い匂いが漂って来る。

俺は、ベッドから下りて、キッチンへ向かった。

「トントントントン…」

包丁が、まな板をリズムミカルに叩く音がする。

「…ん？」

俺は、目を疑い擦った。

俺の目に飛び込んで来た光景は、カウンターキッチンで、仲良く並んで料理をしている、二人の女性の姿だった。

「あら？おはよう、静流。早いよね？」

姉が俺に言った。

「あっ、おはよう。静流」

麻紀も俺に気付いた。

「あ…、ああ。おはよう…」

俺は、一瞬、何が起きたのか分からなかった。

「コーヒー、飲む？」

麻紀が俺に聞く。

「あ…、ああ。じゃあ、ブラックで…」

「うん。ちょっと待っててね」

嬉しそうな顔をして、麻紀は、カウンターキッチンの上のコーヒーマーカ―に手を伸ばした。

「静流？麻紀ちゃんが早起きしてね、」静流に、朝ご飯作ってあげたい」って、あたしの所に来たんだよ」

朝食の準備をしながら、姉も嬉しそうな顔を浮かべている。

「ふうーん。どうりで、美味そうな匂いがすると思った…」

そう言いながら、俺は、椅子に腰掛け、テーブルの上の灰皿を取りながら、タバコに火をつけた。

タバコをふかしながら、忙しく動く二人を、ボーっと眺めていた。

「はい。どうぞ」

麻紀は、カップに注がれた、淹れたてのコーヒーを俺の前に置いた。

「良い匂いがする…。姉ちゃんが淹れたのとは、また違う匂いだね」

俺は、熱々のコーヒーを、そっと一口、口に含んだ。

味は濃すぎず、薄すぎず、それでいて、苦味がちょうど良い。

アメリカンのような、少し薄めのブラックだ。

「美味しい…。俺好みのブラックだ…」

俺は、もう一口、口に含んだ。

「良かった。静流に気に入ってもらえて」

麻紀は、俺の顔を見て微笑んだ。

「麻紀、ありがとう。このコーヒー、すごく美味しいよ」

俺も、麻紀に微笑み返した。

「もうすぐ出来るから。もうちょっと待っててね」

そう言うと、麻紀は慌ただしく、カウンターキッチンの方へ向かって行った。

俺は、コーヒーを飲みながら、タバコをふかし、料理をしている、麻紀の後ろ姿に見とれていた。

（ああ…。良い…。すごく、良い…。俺の夢見た光景だ…。もし、これが夢なら、覚めないでくれ…）

そんな事を思いながら、小さな幸せに浸っていた。

キッチンにある、掃き出し窓のレースのカーテンが、風でなびく。

そのカーテン越しに、朝の柔らかい日差しが差し込んで来る。

窓の外には、爽やかな夏空が広がっていた。

トースターの方から、香ばしい香りが漂って来た。

「チンッ」

どうやら、食パンを焼いてくれていたらしい。

麻紀は、焼けた食パンを左手に、バターを塗りながら俺に言った。

「静流？ 静流は、パンに砂糖まぶすの？」

「いや、バターだけで良いよ」

「分かったあ」

麻紀が鼻歌混じりに、バターを塗った食パンを皿に乗せる。

姉は、サラダの盛り付けに取り掛かっていた。

麻紀は、次の食パンを焼きながら、熱したフライパンに、溶き卵を流し込んだ。

「ジューツ…」

どうやら、オムレツを作っているようだ。

慣れた手付きで、フライパンを返す。

「あら？麻紀ちゃん、上手ね。きっと、良いお嫁さんになれるよ」

姉が、麻紀を誉める。

「そんな事ないですよ。あたし、レパートリー少ないし…」

麻紀が、照れ笑いを浮かべた。

（ああ…。麻紀が、俺と結婚してくれたらな…）

俺は、二人の会話を聞きながら、そんな妄想に浸っていた。

キッチンには、卵が香ばしく焼ける匂いが広がる。

「はい。出来たよ」

そう言いながら、麻紀が出来たてのオムレツと、こんがり焼けたパンをテーブルの上に置く。

皿の上には、ケチャップがかけられた、黄金色のオムレツが乗っていた。

姉が、小鉢に盛り付けた、三人分の野菜サラダを持ってテーブルに向かって来る。

「後、スープもあるからね」

そう言って、麻紀は鍋の蓋を外し、スープをカップに移した。

鍋から立ち上る湯気と一緒に、コンソメの香りが漂う。

「朝っぱらから、ご馳走じゃん」

俺は、いつもは朝食を取らないが、何故か、今日は食欲が湧いて来た。

「静流は、いつも朝ご飯、食べないんでしょう？朝ご飯は、ちゃんと食べないと元気出ないよ？」

麻紀が、俺に諭すように言った。

「あ…、ああ。はい。すいません…」

何故か、謝ってしまう俺。

（絶対、姉ちゃんが、麻紀にチクったんだ…）

俺は、姉を見た。

姉は、とぼけた顔をして、俺から目を背ける。

(やっぱり…)

姉を横目で見ると、俺。

姉が、はぐらかすように言った。

「準備OKだね。じゃあ、食べよっか？」

「ああ。そうだな。せっかくのオムレツが冷めたら台無しだ」

三人がテーブルに着いた。

両手を合わせて…。

「いただきます」

オムレツに箸を通す。

外は、フワフワ。

オムレツを割った瞬間、中からトロトロの卵の黄身が溢れ出す。

それを口に運ぶ。

「美味しい。こんなオムレツ食った事ないや…」

バターの香りが口に広がり、後からほんのりとした甘さが口に広がる。

俺は、夢中でオムレツを食べた。

「麻紀。このオムレツ、すごく美味しいよ」

「そう。良かったあ。静流に気に入ってもらえるかどうか、ちょっと不安だったから…」

「このオムレツ、高級ホテルのオムレツなんかよりも、ずっと美味しいよ」

「ありがとう。なんか照れちゃうね」

麻紀は、照れ笑いを浮かべた。

「ふうーん……。あたしが作ったら、無関心なくせに、麻紀ちゃんが作ると誉めるんだね」

姉が、冷たい視線を俺に投げかける。

「フンッ。それとこれとは別」

「可愛くないなあ……」

姉が、ふてくされている。

そんな姉を余所目に、俺は麻紀の手料理を、一口一口、汁一滴残すまいと、一心不乱に味わった。

「俺、もう思い残す事が無いや……。こんなに死ぬ程美味しい、麻紀の作った料理食えたんだから……」

「そんな、大袈裟だよお」

麻紀が、笑いながら言った。

「あたしにも、そのくらいのリアクション、たまにはしてくれても良いのに…。ねえ？ 静流君？」

姉が、横目で俺を見ながら、嫌味を言う。

俺は、姉の嫌味を無視して、黙々とスープを飲む。

麻紀は、嬉しそうに俺を見つめていた。

「ああ…。美味かった…。麻紀、ありがとう。ご馳走様」

「どういたしまして。静流に、喜んでもらえたみたいで良かったあ」

「静流君？ サラダは、あたしが作ったんだけど？」

姉が、「あたしも誉めろ」とばかりに言う。

「ただ、切って盛り付けたただけだろ？」

「まあ、失礼ね。ドレッシングは、ちゃんとお手製ですう」

姉が、拗ねた顔をして俺を見る。

「ああ、はいはい。悪かったよ」

「ホントに可愛くないんだから。麻紀ちゃん？こんなヤツのどこが
良いの？」

麻紀は、俺達、姉弟のやり取りを見て苦笑いしていた。

姉が、俺に向かって、しかめっ面で舌を出して「べー」をしている。

「フンッ」

俺は、そっぽを向いた。

「まあまあ」

麻紀がなだめる。

「ああ、そうだ。ライブハウスへ車取りに行かないと…」

俺は、思い出したように言った。

「そう言えばそうだね。どうやって行くの？」

麻紀が、俺の顔を見る。

俺は、姉を見た。

姉は、

「フンッ。知らない」

と、そっぽを向く。

どうやら、へそを曲げたらしい。

「姉ちゃん、頼むよ…」

「静流君？人に頼む時は言い方があってでしょ？」

（くっ…）

俺は、渋々頭を下げた。

「お願いします。お姉様。ライブハウスまで乗っけて下さい」

（クソーっ…。さっきの仕返しかぁ…）

「まあ、良いでしょう。じゃあ、食器を片付けたら、乗せて行ってあげるわ。さっさと準備しなさい」

勝ち誇ったように言う姉。

（く…くっ…）

俺は、ただひたすら、屈辱に耐え忍んだ。

「静流？ 遥さんには勝てないよ？」

麻紀が苦笑いをして、俺に言った。

「うう…」

俺は、何も言い返せず、ただ、

「ご馳走様」

と、だけ言い残し、自分の部屋へ逃げ帰った。

「クソっ。絶対、いつか、姉ちゃんに仕返ししてやる…」

俺は、一人、枕に八つ当たりをした。

その頃、キッチンでは、朝食の後片付けをしながら、遥と麻紀が話

をしていた。

「ねえ？麻紀ちゃん？」

「はい？どうしたんですか？」

「麻紀ちゃんって、料理上手だよね？誰に習ったの？」

「お母さんに教えてもらって…。それに家で、よく作るんです」

「そうなんだ。あたしも、お母さんに教えて貰ったんだよ。小学生くらいの時からかな？」女の子は、ちゃんと料理が出来ないとね」
って」

遥は笑いながら、麻紀に話す。

「お父さんがいなくなって、お母さんが大変だから、交代で家事をしてね。お母さん、いなくなってからは、あたしが静流の親代わり…。静流も、大きくなってたから、前程大変じゃなかったんだけどね」

「大変だったみたいです。静流から聞きました」

「えっ？あの子、知ってたの？あたし、あの子に話した事ないのに……」

「前に、遥さんが、巧さんに話してたのが、聞こえたって……」

「そっか……。あたし、あの子に、あたし達の事、本当の家族じゃないって思われるのが怖くて……。それに、静流が、そう思い込んでるうと、静流が本当に一人ぼっちになっちゃうから……。そんな可哀想な事、あたしには出来ないから……」

遥は、淋しそうな顔をして言った。

「静流は、そんな事思っていないですよ？お父さんにもお母さんにも、それに遥さんにも、感謝してるって……。霞の家の人達が、俺の本当の家族だって……。そう言っていました。だから、静流の本当の両親が名乗り出ても、会う気は無いって……。静流は、霞家の人達が大好きみたいですよ？」

麻紀は微笑みながら、遥に言った。

「もう……。あの子ったら……」

遥の頬を、一筋の涙が伝う。

「あたし、遥さん見てると、静流の気持ち分かる気がします。霞家って、すごく居心地が良いから…。それに、遥さんと静流って、端から見たら、本当の姉弟に見えますよ？どことなく、雰囲気や性格が似てるし…」

「ありがとう。麻紀ちゃん。あたし、静流がいなくなるのが怖いから…。静流は、あたしの大切な弟だから…」

遥は、間接的ではあるが、静流の気持ちを理解出来て、少し安心した表情を浮かべた。

「静流が羨ましいです。こんなに、お姉さんに大切にされてるなんて」

「でも、たまに、憎まれ口を言うのが可愛くないんだけどね…」

遥は、苦笑いを浮かべた。

「きつと、照れ臭いんですよ。静流って、結構シャイだから…」

麻紀は、微笑んで言った。

「あの子、ああ見えて、結構、人見知りするしね。ホント、困った子よね」

遥が、いつもの調子に戻った。

食器の片付けもほぼ終わったところで、遥は、麻紀に言った。

「麻紀ちゃん？悪いんだけど、静流の様子見て来てくれる？もしかしたら、あの子、準備しないで、遊んでるかもしれないから」

「はい。じゃあ、ちょっと見て来ますね」

「うん。お願いね。遊んでたら、怒って良いからね」

「あはは。分かりました」

そう言いながら、麻紀はキッチンから、静流の部屋へ向かった。

「キーンッ…」

麻紀は、音を立てないように、そっと部屋のドアを開ける。

麻紀が、ドアの隙間から部屋を覗き込む。

静流は、夢中になって、ギターを弾いて遊んでいた。

もちろん、準備などしていない。

（もう…。やっぱり、遙さんが言った通りね…）

麻紀が、しかめっ面をして静流を見る。

そして…。

「こらっ！！何遊んでるの？」

「おわっ！！！」

いきなり、大声を出され、俺は、思わずその場で硬直してしまった。

「やっぱり…。遙さんの言った通りだったね。ちゃんと準備しなきゃダメでしょ？ほらっ、早く。向こうは片付け終わったよ」

麻紀に急かされる。

「はい…。ごめんなさい…」

（なんか、麻紀まで、姉ちゃん化してないか…？）

俺は、重い腰を上げ、外出の準備を始めた。

その間、ずっと麻紀が監視している。

（もしかしたら、姉ちゃんよりも怖い…？）

麻紀の視線が、俺の背中に突き刺さる。

（うーん…。背中の方が、妙に痛いなあ…）

俺は、苦笑いを浮かべて麻紀を見る。

麻紀は、笑顔で俺に言う。

「早く、服、着替えようね？」

「はい。あはは…」

俺は、急いでクローゼットから服を取り出した。

ちょうどその時…。

「やっぱり、こんな事だろうと思ったわよ」

（げっ…。もう一人増えやがった…）

姉が、横目で俺を見ながら言う。

「なんで、君は、すぐに他の事に目が行っちゃうのかなあ？ねえ？
静流君？」

「あは…、あはは…」

俺は、ただ笑うしかない。

この二人には勝てない、逆らうなど、本能が悟った。

「麻紀ちゃん。そのまま、監視しててね」

「はい。終わるまでずっと見張ってますね」

「静流？早くしなさいよ？」

俺は、今までに感じた事の無いプレッシャーに襲われた。

「はい…。すぐに…」

（こ…怖え…）

俺は、なるべく急いで、準備をした。

「そんなだから、遥さんに怒られちゃうんだよ」

麻紀が、俺に言った。

「遥さんが、静流をほっとけない気持ち、分かった気がするよ」

麻紀が、溜め息混じりに呟いた。

（うーん…。それじゃ、俺がまるで、駄目人間みたいじゃないか…）

「でも、マイペースな性格の静流らしいと言えば、らしいけどね…」

（フォローになってるのか、なってないのか…）

麻紀の監視が続く中で、着々と、俺の準備は進む。

「やっと、終わったみたいね？じゃあ、行くわよ？」

俺の準備が終わる頃に、姉が、再び部屋に入ってきた。

「はい。準備完了」

「なんで、さっさと準備出来ないのかな？ 静流君は？」

また、姉のネチネチとした、嫌味のような攻撃が始まる。

「はい。すいません…」

（もう、良いじゃん…）

「まあ、良いわ。早く行かなきゃ。あたし、買い物行きたいし。じやあ、麻紀ちゃん、行こっか？」

「はい」

俺を、置いて部屋を出る二人。

「お…、おいっ。俺を置いて行くなよっ」

慌てて、二人の後を追った。

姉の車に乗り、ライブハウスへ向かう。

「麻紀ちゃん、一緒に買い物行く？」

「はい。行きたいです」

麻紀が、笑顔で答える。

「静流は、荷物持ちね？」

「ええーっ!？」

「何か不満でも？」

「いえ…、何もありません…」

そんな、俺達の会話を聞いて、麻紀は笑っていた。

「じゃあ、三人で買い物に行きましょ」

荷物持ち確定で、不愉快極まりない俺とは対照的に、姉は上機嫌である。

「麻紀ちゃん、どこ行く？荷物持ちと荷物運び用の車はあるから、色々買えちゃうよ？」

姉が、横目で俺を見ながら言った。

（好きで荷物持ちやる訳じゃねえし…。ほとんど、脅迫じゃねえか…）

俺は、ふてくされた顔で姉を見た。

「何か、文句でも？」

「いえ、何でもないです…」

（こんな所で降ろされたんじゃ、たまったものじゃない…。大体、マンションと、ライブハウスの間点じゃねえか…）

俺は、逆らわずに大人しくする事にした。

そうこう言っている間にも、車はライブハウスへ近付いて行く。

（もうすぐ…。もうすぐで自由だ…。見てろよ…）

「静流君？まさかとは思うけど、逃げる気じゃないでしょうね？」

姉が、俺を睨み付ける。

（クソッ。バレていたか…）

「逃げたら、分かってるよね？」

「はい…。逃げません…」

俺は、蛇に睨まれた蛙状態だった。

麻紀は、さっきから「クスクス」と笑っている。

（ああ…。俺は、まるで捕虜か奴隷だ…）

俺の邪な悪巧みは、露と消えた。

「ほらっ。着いたわよ。車、取っておいで」

「はいはい…」

俺は、姉の車から降りて、自分の車へ向かった。

車に乗り、エンジンをかける。

「じゃあ、行きましょ」

上機嫌な姉。

俺は、麻紀を乗せた、姉の車の後を追った。

これから、始まる「恐怖のショッピング地獄ツアー」へ向かって。

Chapter 25

姉の車に付いて行く事、約30分。

姉は、街から少し外れた所にある、ショッピングモールの駐車場へ入って行った。

流石に、休日だけあって、混み合っている。

警備員が暑そうにしながら、駐車場の空きスペースへ車を誘導する。

姉の車の横へ、車を止める。

「人混みは嫌いだな…」

俺は呟いた。

「何言ってるの？早く行くわよ」

姉はそう言うと、麻紀とさっさと、建物の中へ入って行く。

「お…、おい。待ってくれよ…」

俺は、慌てて追いかけた。

「麻紀ちゃん、どこから行く？」

姉の目が輝いている。

「うーんと…、服、見に行きませんか？見たい服があるんです」

麻紀も、活き活きとしている。

「良いわね。じゃあ、2階に行こっか？」

「はい」

この二人、正に「水を得た魚」状態である。

俺は、麻紀はともかく、姉の買い物と言う事に嫌悪感を抱いていた。

（どうせ、またバカみたいに大買いするんだろ…？勘弁してくれ…）

俺は、過去の姉の買い物に付き合った事を思い出した。

（そう言えば、前の買い物時は、リビングにある、小さいソファと、キッチンの食器棚と、後は…、両手いっぱい、ヤツの服が目一杯詰まった紙袋を運ばされたっけ…。はぁ…。今日も、多分そうなるんだろうな…。あぁ…。憂鬱だ…）

そう考えたら、気が滅入って来る。

「ほら、着いたよ。麻紀ちゃん、どんなの欲しいの？」

「ええっと…」

目を輝かせながら、店の中へ入って行った二人。

「静流、早く来なさい」

姉が呼ぶ。

(…何故?)

俺は、顔をしかめながら言った。

「別に、俺は、そこに用事は無いぞ？」

「静流、おいで？」

麻紀が呼ぶ。

「はい。行きます」

俺は、つい、麻紀の声に反応してしまった。

「ちょっと、アンタ？　どういう事？　あたしが呼んだら来ないのに？」

姉がしかめっ面をして、俺に言った。

「フンッ」

俺はそっぽを向いた。

麻紀は、そんな俺達を見て、苦笑いをしている。

「可愛くない」

姉が、そう言いながら、俺の頬をつねる。

「痛たたた…。ば…暴力反対…」

「何か言う事は？」

「…ごめんなはい…」

「よろしい」

そう言う姉は、俺の頬から手を離し、麻紀と服を物色し始めた。

（おお…。痛てえ…）

俺は、右の頬をさすりながら、二人の後を付いて歩く。

「これなんか、麻紀ちゃんに似合いそうだね」

姉が手に取ったのは、クラッシュデニムのミニスカートだった。

「あっ。これ、良い感じ。試着してみようかなあ」

「うん。試着してみて。きっと似合うから」

姉に促され、麻紀が試着室に入った。

「お待たせ。どうかな？」

「すごく似合うじゃない。麻紀ちゃんのイメージにぴったりだね」

姉は、絶賛していた。

（ああ…。麻紀のミニスカ…。可愛いすぎる…）

俺は、つい、麻紀に見とれてしまい「ボーッ」としていた。

「静流? どう?」

麻紀が、俺に聞いて来る。

俺は、我に返って、返事をする。

「あ…、ああ。麻紀、すごく似合うじゃん。可愛いよ」

「へへっ。ありがとう」

麻紀は、照れ笑いを浮かべた。

「麻紀ちゃん、それ、あたしが買ってあげるよ」

姉が言った。

「えっ? 良いんですか? でも、悪いですよ…」

麻紀は、遠慮していた。

「良いの、良いの。あたしから、麻紀ちゃんにプレゼント」

姉は、微笑みながら言った。

「遥さん、ありがとうございます。へへっ。嬉しい」

麻紀が喜んだ。

「あっ。姉ちゃん、ズルい。俺にも、何か買ってくれよ」

「静流は、自分で買いなさい」

姉が、軽くあしらうように言った。

「ケチっ。良いよーだ。フンッ」

俺は、少しふてくされた目で姉を見た。

姉は、そんな俺を後目に、麻紀と他の服も物色し始めた。

(…)

(…)

(…長い。まだかよ?)

痺れを切らした俺は、姉の所へ向かった。

「姉ちゃん、まだ選んでんの? どれ着たって一緒だって。誰も見やしないからさ。それに、結局、着ないまま、クローゼットの肥やしになるのがオチ…」

全てを言い切る前に、姉の右手が、俺の右頬に伸びて来た。

「いゝっ、痛ててて…。ね、姉ちゃん、そこ、さっきとおんなじトコ…」

「静流君、何か言う事は?」

「だって、本当の事…」

「なあに？」

微笑みながら、姉が右手に、更に力を入れる。

「い…、痛い…」

「何か言う事は？」

微笑みながら言う姉。

だが、俺の右頬をつねる姉の右手は、容赦無かった。

「い、痛てえ…。ご、ごべんない…。」

ようやく、俺の右頬から、姉の手が離れた。

「良いから、黙って付いて来なさい」

姉が、静かに言った。

「はい…」

（い、痛え…）

麻紀が、そっと近づいて来た。

「大丈夫？」

「痛い…。涙出るかと思った。まったく、暴力女め…」

俺は、そう言いながら、しかめっ面で姉の後ろ姿を見た。

姉が、こちらに振り向く。

固まる俺。

そして、俺は、思わず首を横に振る。

姉は、ニッコリ笑って近づいて来る。

「何かあったの？」

「いえ、何でもありません…」

俺は、視線を逸らす。

「また、何か言ってた？」

「い…、言っていないです…」

声が震える。

（もう、止めてくれ…）

俺は、心の中で叫んだ。

「それなら、良いけど」

姉は、再び、品定めを始めた。

（ホッ…）

俺は、胸を撫で下ろした。

麻紀は、苦笑い浮かべて、俺を見た。

「ダメよ。静流。変な事言うから、怒られるんだよ」

「だって、ヤツのクローゼットには、本当に着ないままの服が、腐る程あるんだから」

「ダメよ。女の子にそんな事言ったら」

「だって、着ないヤツ持ってもしょうがないじゃん」

俺は、着ない服まで買ってしまう事が不思議でしかなかった。

それから数分後。

やっと、買う物が決まったらしい。

「麻紀ちゃん、おいで」

姉が、麻紀を呼んだ。

（やれやれ。やっと終わったか…）

俺は、ホッとした表情で二人を見ていた。

次の瞬間。

俺は、目が飛び出しそうになる程驚いた。

レジの液晶には、「60000」の数字が浮かんでいる。

（ん？ 桁、間違えてねえか？）

俺は、目を擦って、目を凝らしてもう一度、金額が表示された液晶を見た。

「一、十、百、千、万…」

レジの液晶には、やっぱり「60000」の数字が浮かんでいる。

（アホか…？コイツ…）

俺は、呆れた目で姉を見た。

呆れ果てた俺とは対照的に、姉は満足げな表情をしている。

「姉ちゃん、これ、ちょっと買いすぎじゃねえか？」

「そお？こんなもんでしょ？」

（なんで、即金で6万も出せる…？どこかにへそくってたのか…？）

「そんな事あるかよ。6万も服買ってこんなもんって…。それに大体、なんで、そんな大金があるんだよ？」

俺は、姉に問いかけた。

「ボーナスが、出たからよ」

姉は、俺の問いかけに即答した。

「へえ…。そりゃ、羨ましい事で…」

俺は、口を尖らせて、横目で姉を見ながら言った。

会計を済ませ、店を出る。

「そうだった。大事な事、忘れてた。今日の買い物、一番の目的の物を探さなきゃ」

「おいおい…。本来の目的忘れて、衝動買いかよ？頼むよ…」

俺は、呆れ顔で姉を見た。

「もう…。うるさいわねえ」

姉が、横目で俺を見る。

「はい。これ持って」

姉が、お約束通り、荷物を俺に持たせた。

「つたく。よく買うよ。こんなに服ばかり…」

俺は、姉に愚痴った。

姉は、俺の愚痴を無視して、目的の店まで向かって行く。

俺は、いっぱい服が詰まった、女性ブランドの紙袋を両手に持ち、姉の後を付いて行った。

麻紀は、俺の横を寄り添うように歩く。

「遥さん、何買うのかな？」

麻紀が、俺に聞いた。

「一番忘れちゃいけない、巧さんの、誕生日プレゼント…」

「それ、かなり大事じゃない？」

「そうなんだよね…。大体、そっちのが優先順位は上だろうに…。困った姉ちゃんだよ…」

俺は、溜め息混じりに言った。

「まあ、ちゃんと買うみたいだから、良いけど」

すると、姉は、ショッピングモール内の一角にある、店の中へ入って行った。

そこは、紳士物のスーツが置いてある店だった。

その店で、姉はネクタイを見ていた。

「静流、ちょっと来て？」

姉が、俺を手招きして呼んだ。

「ん？何だよ？」

「ちょっと立ってて」

そう言うと、姉はネクタイを二、三本手に取り、俺に合わせてみる。

「なんで、俺に合わせる？」

「静流と巧は、何となく似てるから。イメージし易いのよ。だから、アンタを連れて来たのよ」

「そうか？巧さんと、そんなに似てるか？」

俺は、不思議そうな顔をして姉を見た。

「何となくよ。何となく」

姉は、そう言いながら、真剣な顔で、全体の雰囲気を見ている。

「これが一番良さそうね。これにしよう」

姉は、一番最初に手に取った、薄い水色の生地にチェックの柄の入ったネクタイを手に取り、レジへ向かった。

「やれやれ。やっと終わったな」

俺は、ホッとした表情を浮かべて、麻紀の所へ行った。

麻紀は、マネキンに着せてあるスーツを、じっと見つめていた。

「どうしたの？」

俺は、麻紀に声を掛けた。

「ううん。このスーツかっこいいなって…。ねえ？このスーツ、静流に似合いそうだね？」

麻紀は、マネキンのスーツに一目惚れをしたようだ。

「そうかな？俺、どうもスーツは苦手だな…」

「なんで？」

麻紀が、不思議そうに俺を見る。

「スーツは動きにくいし、堅苦しいしさ…。それに、俺がスーツ着たら、何故かホストに見られちゃうから…」

「確かに、静流がスーツ着たらホストみたいに見えちゃうね。でも、あたしはスーツ着た静流を見てみたいかも…」

「じゃあさ、今度、卒業アルバム見せてあげるよ。学園祭の時に、スーツ着た写真がいくつか載ってるから」

「見たい。絶対見せてね？」

「ああ。それで良いならいくらでも」

俺と麻紀が、そんなやり取りをしていると、会計を済ませた姉が、こちらへ戻って来た。

「お待たせ。二人共、お腹空いてない？」

「そう言えば、とっくに昼過ぎてるじゃん」

俺は、ケータイの待ち受け画面の時計を見ながら言った。

時計は、14時前だった。

「何か食べに行こうか？」

「賛成」

俺と麻紀が声を揃える。

それから三人で、ショッピングモール内のファミレスへ向かった。

食事を済ませた頃には、昼の3時を回っていた。

俺達は一旦、マンションへ荷物を持って帰る。

それから、俺は麻紀を、麻紀の家へ送った。

Chapter 26

車は、麻紀の家の前に着いた。

時計は、夕方の5時を少し回っていた。

麻紀が、ふと言った。

「ウチ来る？」

「へっ？ 良いの？ なんかいきなりだし、挨拶出来るようなカッコしてないし…。悪いよ…」

俺は、突然の麻紀の誘いに少し戸惑った。

「大丈夫だよ。気にしなくて良いから。行こ？」

「あ…ああ。麻紀がそう言うなら…」

俺は、恐縮した。

「ただいま」

麻紀が、玄関のドアを開ける。

中から、俺よりは少し年上と思われる、若い女性が出て来た。

「おかえり。麻紀。お父さんが心配してたよ？」

「あつ。お姉ちゃん。そうなんだ。お父さんには、後で謝っとくから」

「麻紀？誰かいるの？」

「うん。あたしの彼氏だよ」

「はじめまして。麻紀さんと、お付き合いさせてもらってます。霞静流と言います。いきなり、お邪魔してごめんなさい」

俺は、麻紀の姉に挨拶をした。

「いらっしやい。良いのよ。気にしなくて。ゆっくりしてね」

彼女は、俺をジッと見たかと思うと、麻紀に小声で言った。

「ちょっと、麻紀。ひょっとして、この人、B－Raveのヴォーカルの静流じゃない？」

「えっ？お姉ちゃん、なんで知ってるの？」

「やっぱり？当たり前じゃない。B－Raveって、すごく有名よ？」

彼女は、知らない方がおかしいとばかりに、麻紀に言った。

そして、俺に言った。

「静流君って、B－Raveだよね？」

「そうです。俺達の事、覚えてて貰えて嬉しいです」

俺は、少し照れくさかった。

「麻紀、凄いいじゃない。あの、静流だよ？B－Raveだよ？良いなあ…。どうやって捕まえたの？あたしにも、そんな話無いかなあ…」

彼女は、かなりはしゃいだ後、ため息混じりに言った。

「そんな、捕まえたなんて…。静流に出会ったのは、偶然だよ」

麻紀が、彼女になだめすかすように言った。

「そう言えば、あたしの名前言ってなかったね。あたしは、麻紀の姉で、麻優「まゆ」って言うの。よろしくね。麻優って呼んでくれたら良いからね。静流君」

「分かりました。じゃあ、お言葉に甘えて」

「今度、ライブする時は、あたしも絶対呼んでね。あたしも、あたしの友達もB－Rave好きだから」

「分かりました。じゃあ、今度のライブは、麻優さん達を、一番良い場所へ招待しますね」

俺は、はしゃぐ彼女に言った。

「ホントにつ！？ありがとう。すごく嬉しい」

彼女は、かなり舞い上がっていた。

彼女が、俺達の熱烈なファンだという事は、彼女の一言一句から、十分に感じ取れた。

それがまた、俺は嬉しいやら、照れくさいやらで、複雑な気分だった。

「静流、おいで」

麻紀が、家の中へ案内してくれる。

「お邪魔します」

「どうぞ。ごゆっくり」

嬉しそうな顔で麻優さんが、家の中へ通してくれる。

麻紀の部屋へ通された。

「へえ。ここが麻紀の部屋なんだ。やっぱり、綺麗にしてあるね」

俺は、綺麗に片付けられた部屋を見て、自分の部屋と見比べていた。

「麻紀の部屋見てたら、俺の部屋って、確かに汚いね」

俺は、苦笑いしながら麻紀に言った。

「汚いって言っても、服が置きっぱなしだったり、ギターの楽譜とかが転がってるだけでしょ？ 静流が頑張って、ちょっと片付けるだけで綺麗にはなると思うから、大丈夫じゃない？」

麻紀は、笑いながら言った。

「俺が、頑張って片付けるって事が、一番の問題だけどね」

「トントン…」

部屋のドアを叩く音がした。

ドアが開いて、一人の女性が、部屋に入ってきた。

麻紀の母親だ。

俺は、緊張しながら挨拶をした。

「は、はじめまして。麻紀さんとお付き合いさせてもらってます。霞静流と言います。ご挨拶が遅れてすみません」

「まあまあ。ご丁寧に。こちらこそ。いつも麻紀がお世話になって、ありがとうございます。そんなに固くならないでね。麻紀や麻優から、話は聞いているわ」

麻紀の母親は、優しく微笑みながら、俺に話かけてくれた。

「静流君は、お姉さんと二人暮らしなんでしょう？ 大変だね…。あたしで良ければ、何か出来る事があれば、お手伝いしてあげるからね」

麻紀の母親は、実の息子に話かけるように、俺にそう言ってくれた。

「ありがとうございます。お気持ちだけで嬉しいです」

俺も、麻紀の母親に微笑み返して、お礼を言った。

久しぶりに、母親と言う存在に触れて、少し懐かしく感じた。

「ウチは、見ての通り、娘ばかりだから、男の子が来てくれて、息子が出来たみたいで嬉しいわ」

麻紀の母親は、嬉しそうに微笑んだ。

「こんな物しか無いけど、良かったらどうぞ」

麻紀の母親は、グラスに入ったジュースとクッキーを、俺の前に差し出した。

「ありがとうございます。いただきます」

俺は、微笑みながら麻紀の母親を見た。

「じゃあ、ゆっくりして行ってね」

そう言って、麻紀の母親は部屋から出て行った。

「優しいお母さんだね」

俺は、麻紀を見て言った。

「うん。お母さん、ホントに男の子が欲しかったみたいだから、すぐく嬉しそう。静流、気に入られちゃったんじゃない？」

「そうだと良いなあ。嫌われちゃったら、俺も嫌だし…」

「大丈夫。あの人、好き嫌いはっきりしてるから。あの調子だと、静流の事は嫌いじゃないと思うよ」

「なら良かった。ちょっと安心かな」

俺は、苦笑いを浮かべた。

「あつ。もうすぐ、お父さん帰って来る時間だ。そろそろ、晩ご飯の手伝いしなきゃ」

「忙しいね。邪魔したら悪いから、俺は、そろそろ帰ろうか？」

「えっ？ 晩ご飯食べて行かないの？」

「でも、いきなり悪いよ…」

「ちょっと待ってて」

そう言うと、麻紀は部屋から出て行った。

暫くして、麻紀は部屋に戻って来て言った。

「お母さんも、晩ご飯、一緒に食べよって言ってるよ？」

「えっ？ ホントに良いの？」

「うん。大丈夫だよ」

「なんか悪いね…」

「良いから、良いから」

麻紀は嬉しそうな表情をしていた。

「じゃあ、姉ちゃんに電話しとかなきゃ」

そう言って、俺はケータイを手に取り、姉に電話を掛けた。

「あつ。姉ちゃん？俺、麻紀の家で晩飯誘われちゃったから、今日は、晩飯いらないよ」

「そう。分かった。ちゃんと麻紀ちゃんの、ご両親にお礼言うのよ？」

「分かってるよ。じゃあね」

「遙さん、何て言ってたの？」

「ちゃんとお礼言いなさいだって。そんなの、小学生でも知ってるよ」

俺は、顔をしかめながら言った。

「遙さんらしいね」

麻紀は笑っていた。

「じゃあ、あたし、手伝ってくるから。ゆっくりしてて」

「うん。ありがとう」

そう言うのと、再び麻紀は、部屋から出て行った。

それから、30分程して、麻紀が、俺を呼びに部屋へ戻って来た。

「もうすぐ出来るから、おいで」

「分かった」

俺は、麻紀の後に付いて行った。

キッチンのテーブルには、美味しそうな料理が並んでいた。

その時、玄関から物音と共に、声が聞こえた。

「ただいま。あれ？お客さんが来てるのか？」

「あっ。お父さん帰って来た」

麻紀は、そう言うのと玄関へ向かった。

程なくして、キッチンに優しそうな、中年のスーツ姿の男の人が現れた。

その後ろには、麻紀が見えた。

「はじめまして。麻紀さんとお付き合いさせてもらってます。霞静

流と言います。今日は、いきなりお邪魔してごめんなさい」

俺は、申し訳なさそうな顔で麻紀の父親を見た。

「ああ。いらっしやい。麻紀がいつも良くしてもらってるみたいで。ありがとう。麻紀からは、いつも話を聞いてるよ。よろしくな」

麻紀の父親は、笑顔で言った。

「晩ご飯まで、ご馳走になって、ホントに申し訳ないです」

「良いから、良いから。気にしなくて。ウチに来て遠慮はいらんぞ？さあ、椅子に座りなさい」

「ありがとうございます」

「ところで、静流君は、何をやっているのかな？」

麻紀の父親は、俺の事について尋ねた。

「今は、麻紀さんと同じ場所でバイトをしながら、音楽をやっている」

ます。僕の夢はいつか、僕達の作る音楽で、たくさんの人に僕達の伝えたい事や、感動を届けたり、元気付けたり、勇気付けたり出来たらと思っています。その為に、今はいろいろな場所で活動を広げて、今では、僕達の活動を支えてくれるたくさんの方の人達が出来ました」

「そうか。夢があるのは良い事だ。でも、もしもって事もあるだろう？何か考えているのかな？」

「はい。僕達の出来る所までやって駄目なら、僕達は、きっとそれまでだったという事で、スッパリと音楽からは手を退きます。ウダウダやっててもしょうがないですし。その時は、仕事を探しますが、僕は贅沢言ったり選り好みはしません。何でもやるつもりでいます。だけど、僕は、僕の今やるべき事に、全力でぶつかりたいんです。だから、当面は音楽を続けます」

「そうか。そこまで覚悟しているのなら、私は何も言えないな。私にも、静流君くらいの年頃には、いろんな夢があったからな。君を見ていると、昔の事を思い出して懐かしい……」

麻紀の父親は、俺と若かりし頃の自分を重ね合わせて、当時を懐かしんでいた。

「まあ、君はまだ若い。やり直しはいくらでも出来るからな。頑張れ」

麻紀の父親は、微笑みながらタバコに火をつけた。

「ところで、静流君？麻紀とはどうかな？麻紀の事をどう思ってるんだ？」

「もう、お父さん。いきなり変な事言って…」

麻紀は、焦った表情で言った。

俺は、麻紀の父親に静かに言った。

「僕は、このままずっと麻紀さんと続くなら、結婚したいとも考えています。その時は、自分の夢を捨てる事だって構わない…。そのくらい、麻紀さんは、僕にとって大切な人です」

俺は、麻紀の父親に自分の気持ちをぶつけた。

「静流…」

麻紀は、戸惑った表情で俺を見た。

「そんなに、思ってくれているのか……。ありがとう。これから麻紀の事、よろしく頼むよ」

「はい」

「良いの？ 静流？」

麻紀は、戸惑った表情のまま、俺に言った。

「ああ。俺は、構わないよ。麻紀の為なら何だって出来るよ」

俺は、微笑みながら、麻紀の頭を軽くポンポンと叩いた。

そんな様子を見て、麻紀の両親は目を細めて見ていた。

「母さん。今日は祝いだ。ビールを出してくれ」

「はいはい。分かったわ。麻紀？ ビールをお父さんにあげて」

「うん」

「どうだ？ 静流君も一杯？」

「お気持ちはありがたいです。でも、車で来てるんで…」

「そうか…。残念だな…。じゃあ、また今度は泊まりでウチに来なさい。それなら、大丈夫だろう？」

麻紀の父親は、少し残念そうな表情を浮かべた。

「はい。また、ゆっくりと来させて下さい。今日は、姉にも、晩ご飯だけと伝えてありますから」

「ん？ お姉さん？ 静流君のご両親はどうした？」

麻紀の父親は不思議そうに言った。

「僕の両親は亡くなりました。父親は小学生の頃に。そして母親は、僕が高3の頃にそれぞれ…」

「そうだったのか…。それは、すまない事を聞いてしまった…。悪かった…」

「いえ。大丈夫です。気にしないでください」

俺は、麻紀の父親に微笑みかけた。

「静流君さえ良ければ、私達を本当の親のように思ってくれて良いからな」

麻紀の父親は微笑みながら、優しい言葉をかけてくれた。

「はい。ありがとうございます。お気持ち、すごく嬉しいです」

「さあ。食べよう。静流君、遠慮しなくて良いからな。さあ、いっぱい食べてくれ」

「はい。いただきます」

俺は、用意された食事に手を付けた。

「あつ。美味しい」

「お口に合ったみたいで良かったわ」

麻紀の母親が嬉しそうに言った。

「そう言えば、麻優さんは？」

俺は麻紀に聞いた。

「お姉ちゃん、彼氏とデートだって」

「ふうん。だから、さっきから姿が見えないんだ」

俺は、そう言いながら、食事を口に運んだ。

「今日のビールと晩飯は、いつも以上に美味しいな」

麻紀の父親が、上機嫌で言った。

「そうね。まるで、ウチに息子が出来たみたいでホントに嬉しいわ」

麻紀の母親も嬉しそうだ。

「静流？唐揚げ食べる？」

麻紀が、俺に言った。

「えっ？良いの？」

「うん。もうお腹いっぱいだから」

「やった。じゃあ、もらお」

そう言うと、俺は麻紀の皿から唐揚げを取り、口の中いっぱい頬張った。

「はははは。流石、男の子だけあって、良い食いっぱいだ。しっかりと食べなさい」

麻紀の父親は、ビールを飲みながら微笑んだ。

食事も済み、食後の一服を麻紀の父親としている時には、夜の9時半になっていた。

「もう、こんな時間か…」

俺は、時計を見ながら呟いた。

「今日は、本当にご馳走様でした」

俺は、麻紀の父親にお礼を言った。

「いや、こちらこそ。大したもてなしも出来なくて、すまなかったな」

「いえ。十分すぎるくらい、良くしてもらって…。本当にありがとうございます」

「また、いつでも来なさい。その時は一緒に飲もう」

「はい。また来ます。今日は、どうもありがとうございました」

そう言って俺は、玄関へ向かった。

「気を付けて帰るのよ？」

麻紀の母親が、優しく言った。

「はい。ありがとうございます。じゃあ、おやすみなさい」

「はい。おやすみ」

麻紀の両親に見送られ、俺は麻紀の家を出た。

麻紀は、俺の車まで一緒について来た。

「じゃあ、今日はありがとう。お父さんお母さんによろしく言っていてね」

「うん。二人共、すごく嬉しそうだった。また、おいで」

「ああ。また来させてもらうよ。じゃあ、麻紀。おやすみ」

「うん。おやすみ。気を付けてね」

「ああ」

そう言って、軽くキスを交わして俺は、自宅へと向かった。

麻紀が、家へ戻った時、麻紀の父親に呼び止められた。

「麻紀。ちょっと良いか？」

「なあに？お父さん？」

「静流君は、見た目はアレだが、素直で真面目だし、すごく良い子だな。今時の子にしては珍しい」

「静流のお姉ちゃんが、結構、そういう事に厳しいみたいだよ」

「そうか。お父さんお母さんがいないのに、立派な姉弟だな」

「お父さん、静流の事、気に入ったみたいだね」

「ああ。彼なら、いつでも歓迎だ。いつでも呼んであげなさい」

「うん。じゃあ、あたし、晩ご飯の片付けして来るよ」

「ああ。分かった」

そういうと麻紀は、キッチンへと向かった。

リビングに残された麻紀の父親は、残ったビールを飲みながら、タバコを静かにふかしていた。

Chapter 27

7月も終わりに近付いた、ある土曜日。

俺のバイト先がある隣町では、毎年恒例の花火大会がある。

俺は、その花火大会にバイトが終わってから、麻紀と見に行く約束をしていた。

竜也が、呟いた。

「今日、花火だな」

「ああ。花火だな。俺はバイト終わったら行くよ」

「お前良いなあ。俺、遅番だもんな…」

竜也が愚痴をこぼす。

「花火って、何故か、ガラの悪い奴らが集まりたがるよな？ 今日だ

って朝から、変な奴ら多いし…」

俺はフロアを見渡して言った。

「まあ、暴走族とか毎年来てるからな」

竜也が言った。

「まあ、俺には関係ないけどな」

俺は、他人事のように言った。

「静流、絡まれないように気を付けろよ？」

「分かってるって」

俺達が、そんな話をしていると、そこへ麻紀がやって来た。

「二人共、何、話してるの？」

「ああ、今日は花火だなんて話してたのさ」

俺が答える。

「そっか。今日だったね」

「バイト終わったら行こうな？」

「うん」

麻紀が笑顔で答える。

「そうそう。さっき、変な男の人達にナンパされたんだ。「彼氏いるから良いです」って言ったのに。花火行こうってうるさかったんだよ。ちゃんと断ったけどね」

「∴そいつら、どこにいる？」

俺は、ムツとしてフロアを見渡した。

「静流、ケンカしたらダメだよ？」

「分かってる。…でも、なんかムカつく…」

「良いじゃない。あたしは、静流の傍にいたんだから」

「ああ…。そうだね」

俺は、納得がいかなかった。

その時、俺達に向かって、軽そうな二人組の男が近付いて来た。

「あつ。あの人達よ」

「こいつらか…」

俺は、そう言うのと、その二人組を睨み付けた。

（テメーら、何、人の彼女に声かけてんだよ？ふざけんな）

その二人組を見ながら、俺は、そんな事を思っていた。

その二人組は、俺と目が合うや否や、俺から目を逸らして、逃げるように去って行った。

「フンッ。麻紀に手を出そうとしやがって」

まだ、少し溜飲が残る俺は、そう吐き捨てた。

「はぁ…。早く、バイト終わらないもんかねえ？」

俺は、ため息混じりで呟きながら、時計を見た。

時計は、夕方の4時になったばかりだった。

「後、たったの一時間じゃない。もう、静流は、せっかちなんだから」

麻紀が、笑いながら俺に突っ込んだ。

ようやくバイトが終わり、花火を見に行く為に、二人仲良く、事務所を後にした。

車を、バイト先の近くの臨時駐車場に停めて、バスに乗り換える。

俺は、麻紀の手を引いて混雑したバスに乗った。

「足元、気を付けなよ？」

「うん。大丈夫」

「麻紀。ここ空いてるから、座りな」

俺は、一つだけ空いていた座席を、麻紀に譲った。

「えっ？一つしか空いてないし、良いよ…」

「俺は、立ってても平気だから。座りなよ」

「うん。ありがとう」

暫くバスに乗って、目的地の近くの国道脇のバス停でバスを降りた。

手を繋いで、二人で並んで歩く。

「暑いなあ」

俺は、そう言いながら、持って来たうちわで麻紀を扇いだ。

「涼しい。でも、静流も暑いでしょ？ 静流が使えば良いのに」

「俺は大丈夫。暑いのは慣れてるから」

「優しいね」

「そんな事ないよ」

暫く歩くと、海沿いの商店街に出た。

既に出店は並んでいて、花火を打ち上げる前だというのに、大勢の人ばかりでゴった返していた。

「うわぁ…相変わらず多いなあ」

「ホントだね」

「麻紀、はぐれないようにしっかり捕まってなよ」

「うん」

少し歩くと、かき氷の旗が見えた。

俺は、麻紀に聞いた。

「かき氷食べる？」

「うん。食べたい」

「何味がいい？」

「静流と一緒に食べるから、静流の好きな味買って良いよ」

「そういう訳にはいかないよ。麻紀は何が良い？」

「うーんと…、じゃあ、ハワイアンブルー」

「俺も、それにしようと思った」

俺は、笑いながら言った。

「以心伝心だね」

麻紀も嬉しそうに言う。

「あはは。そうだね」

かき氷を買って、海が見える場所へ座って、かき氷をつつく。

氷を食べ始めて、ほんの数分後、一発目の花火が上がった。

「綺麗…おっきい…」

今度は、ピンク色の花火が上がった。

「可愛い…」

俺は、そんな麻紀を見て言った。

「花火も可愛いけど、俺は麻紀が一番可愛い」

麻紀は、顔を赤らめながら言った。

「もう、変な事言わないでよ」

恥ずかしそうな顔をする麻紀。

「顔赤いよ？」

そんな麻紀が可愛くて、俺は麻紀に、少し意地悪に言った。

「もう、意地悪なんだから」

麻紀は、頬を膨らませた。

「あはは。でも、本当に綺麗だね」

「うん。来て良かった」

花火は、二人を鮮やかな光で照らし出す。

水面には、色とりどりの花火が波で揺れていた。

花火を見ながら、麻紀に聞いた。

「なあ、麻紀？俺について幸せ？」

「うん。すごく幸せ」

そう言いながら、麻紀は俺に寄り添って来た。

「ねえ？静流は？」

「俺も、すごく幸せだよ。でもね、この幸せが、いつか壊れたらって考えると、すごく怖いんだ…」

俺は、麻紀の目を見た。

「大丈夫だよ。そんな事、絶対無いから。心配しないで」

麻紀は、俺の不安を取り除くように優しく言った。

「ああ。そうだね。変な事考えてちゃ駄目だよね。そうだ。何か食べる?」

「うーん…。ポテト食べたい」

「じゃあ、買いに行こうか?」

「うん。行く」

ポテトの屋台に行くと、たくさんの人が並んでいた。

「多いね」

「ホントだね」

「これは、かなり待つな…」

俺は、そう言いながら、辺りを見回した。

俺達の前に、どこかで見たような子供達が、行儀良く並んでいた。

「あっ！！霞さんだ」

「あっ！！お前達！？」

俺のバイト先に、よく遊びに来る子供達だった。

「仲良いね」

子供達がニヤニヤしながら言った。

「仲良いよ。悪いか？」

俺は、笑いながら子供達の冷やかしを、軽くあしらうように言った。

そんな、俺と子供達のやり取りを、麻紀は笑って見ていた。

「霞さん、またね」

「ああ。気を付けてな」

子供達は、人混みの中に消えて行った。

それから、少しして、やっと順番が回って来た。

「いらっしゃい」

威勢の良い屋台のおじさんが、迎えてくれる。

「一番大きいポテト下さい」

「ありがとう。ちょっと待ってな。今揚げてるからな」

「待たせて悪かったねえ。君達、仲良しみたいだし、少しサービスしとくよ」

そう言いながら、おじさんは少し多めにポテトを入れて、麻紀に手渡す。

「おじさん、ありがとう。はい。これポテト代」

そう言って、俺は、500円をおじさんに渡した。

「ちょうどね。ありがとう」

ポテトを買い、手を繋いで、俺達がさっきまでいた場所へ戻ったが、その場所は、別の人に取りられてしまっていた。

「しょうがないなあ。少し歩くか…」

俺は、ぼやいた。

「あたしは平気だよ」

麻紀は、微笑んだ。

俺達は、花火がよく見える場所を探して、歩き回った。

気が付いた時には、いつの間にか、駅前広場に出ていた。

駅前の広場に、ちょうど腰が掛けられる位の高さの花壇があった。

そこへ、二人で座って花火を見る事にした。

暫く、幻想的な世界が二人を包んだ。

闇に咲き乱れる、大きな色とりどりの花。

咲いては散りを繰り返し、二人の顔を七色に染める。

「綺麗だね…」

「すごいね」

最後の花火が華々しく上がって闇に散った。

至る所から、盛大な拍手が上がる。

「終わったね」

「うん。終わっちゃったね」

「帰ろうか？」

「うん。帰ろ」

俺は、麻紀の手を引いて混雑するバスに乗った。

混雑したバスの車内で、運転手のアナウンスが流れる。

「どなたか、両替出来るお客様はいらっしゃいませんか？お客様が両替に困っていらっしゃいます」

俺はふと、我に帰って財布を開いてみた。

「あっ！俺も一万円札しか無い……。そう言えば、さっき小銭を全部使っちゃったな……」

「えーっ！？ちょっと待ってて。あたしの財布見てみるよ」

麻紀が、バッグから財布を取り出して中を覗いた。

「あっ。あった。ちょうど二人分あったよ」

「良かったあ……。後で、コンビニでタバコ買うから、その時に返すよ」

「うん。じゃあ、これ、静流の分ね」

「ありがとう」

暫くして、バスは臨時駐車場に着いた。

車に乗り換えてコンビニへ向かい、タバコとコーヒーを買う。

「麻紀も、何か欲しい物ある？」

「ミルクティー飲みたい」

「じゃあ、持っておいで」

「うん。ありがとう」

そう言って、麻紀は、冷蔵庫からペットボトルのミルクティーを持って来る。

レジで支払いを済ませて、さっきのバス代を麻紀に渡す。

「はい。さっきのバス代。ありがとう」

「えっ？ミルクティー買ってもらったし、返さなくても良いよ」

「借りた物は、ちゃんと返さなきゃ。はい」

そう言って、俺は麻紀の手の平にバス代を置いた。

「ありがとう」

車に乗り、麻紀を家まで送って行く。

「ねえ？ 静流？」

「うん？」

「ちょっとドライブしない？」

「ああ。良いよ。じゃあ、海に行こうか？」

「うん」

俺は、海に向かって車を走らせた。

前に花火をしに来て、麻紀に告白したあの浜辺へ、車は到着した。

二人で浜辺に座り込んだ。

蒼白い月が、海と浜辺を薄明かりで照らす。

「ねえ？ 静流？」

「うん？」

「さっき、静流が、今の幸せが壊れたら怖いって言ってたじゃない？」

「うん。怖いよ」

「あたしも、ホントは怖いんだ…。静流が、どこか遠くに行っちゃったらイヤだなあって…」

「俺は、どこにも行かないよ。俺がどこかに行く時は、麻紀も一緒だよ？」

「うん。そうだよね」

「ああ。大丈夫」

「でも、もし、静流と離れ離れになったり、はぐれちゃったりしたらどうしよう…？あたし、怖い…」

「大丈夫。もし、はぐれてしまったり、離れ離れになった時には、ここに来れば良いよ。俺が、絶対迎えに来るから」

「ホントに？」

「ああ。約束するよ。だから大丈夫。もう心配しなくて良いから」

「うん。ありがとう。ちょっと安心したよ」

そう言って麻紀は、俺の肩にもたれ掛かって来た。

俺は微笑みながら、麻紀の髪を優しく撫でた。

「そろそろ、帰ろうか？」

「うん。帰ろ」

車に乗り、麻紀の家へと向かった。

麻紀を無事に送り届け、俺は自宅へ帰った。

マンションに着く頃には、夜中の1時近くになっていた。

Chapter 28

夏も終わりに近付いた、盆休み最後の日、8月15日。

その日は、俺の住んでいる街の、夏祭りの最終日でもあった。

俺の住んでいる街には、街をちょうど東西に真っ二つに分けるように流れている、大きな川がある。

その川で、毎年、街の夏祭りの最後を飾るように、花火が打ち上げられる。

この花火が終わると、夏が終わった気がして、少し淋しい気持ちになった。

「麻紀、今日は、俺の住んでる街の川で花火があるよ？」

「ホントに？ 見に行きたい」

「分かった。じゃあ、迎えに行くから」

「うん。待ってるね」

俺は、昼の3時過ぎに麻紀の家まで、麻紀を迎えに行った。

玄関のチャイムを鳴らす。

「はあい」

中から、優しそうな女性の声がした。

「ガチャッ」

扉が開く。

「あら、静流君。いらっしやい」

ドアの向こうには、麻紀の母親が立っていた。

「こんにちは」

「ごめんね。麻紀、今準備してるからちょっと待っててね」

「はい」

「さあ。暑いから、中へどうぞ」

「お邪魔します」

俺は、麻紀の家のリビングで麻紀を待つ事にした。

「ジュースでも飲む？」

麻紀の母親が、俺に尋ねる。

「ああ、はい。いただきます」

ちょうどそこへ、麻紀の父親がやって来た。

「おおっ。静流君じゃないか。よく来たなあ。いらっしやい」

「ああ、どうも。こんにちは」

「今日は、静流君の家の近くで花火だって？」

「そうなんです。毎年、この日にやるんです」

「そうか。しっかり楽しんで来なさい」

「はい。ありがとうございます」

「でも、まあ、麻紀の準備は、後、一時間はかかるだろうから、ゆっくりして行きなさい。あっはっは」

冗談混じりに、麻紀の父親は言った。

「そんなにかかりませんっ!!」

少し濃い青色の生地に、薄い赤や黄色の花柄があしらわれた、黄色い帯を巻いた浴衣姿の麻紀が、リビングの入り口に立っていた。

麻紀の後ろ髪は、頭の後ろで束ねられ、アップにして髪止めで止められていて、浴衣の襟の部分からは、うなじが露出していた。

少しムツとした表情で、腕組みをして麻紀は父親に言った。

「もう。変な事言わないでよ」

麻紀はそう言いながら、父親を横目で見る。

「おお……。怖いなあ……。静流君、気を付けろよ？」

麻紀の父親は、小声でそう言いながら、そそくさとリビングから出て行った。

「お父さんっ!!」

麻紀が、逃げる父親を一喝する。

「あははは」

俺は、ただ苦笑いをするしかなかった。

「もう。あんな事しか言わないんだから…」

麻紀が、うんざりした表情を浮かべて愚痴をこぼす。

「面白いお父さんじゃん。俺は、麻紀のお父さん、好きだな」

俺は笑いながら、そう答えた。

俺は、麻紀の浴衣姿を、改めてまじまじと見た。

普段と違う髪型、色っぽい、少し大人びたような印象の麻紀に思わず「ドキッ」とした。

「どうかな?…変?」

麻紀が、俺に尋ねる。

「麻紀って、浴衣がこんなに似合うんだ…」

俺は、いつもと違う麻紀に、つい見とれてしまった。

「どうしたの？ボーっとして？」

「いやいや、麻紀があんまりにも可愛いくて綺麗だから、つい見とれちゃって…」

「惚れ直した？」

麻紀が笑いながら言った。

「いやいや、惚れ直す所の騒ぎじゃないよ」

俺は、照れ笑いを浮かべて、麻紀に言った。

「あはは」

「じゃあ、麻紀。そろそろ行こうか？」

「うん。行こ」

俺達は仲良く、麻紀の家を後にする。

その様子を見ながら、麻紀の両親が見送ってくれた。

「気を付けてね」

「はあい」

「いっぱい楽しんで来いよ？」

「ありがとうございます。じゃあ、また」

そう言って、俺は車を走らせた。

花火が上がるまでには、まだ時間があつた為、俺のマンションで時間を潰す事にした。

「こんにちは」

「あら。麻紀ちゃん。いらっしやい。浴衣、可愛いじゃない」

「エへへ。ありがとうございます」

嬉しそうに喜ぶ麻紀。

「姉ちゃん、今日、花火行くのか？」

「うん。行くわよ。夕方には、巧が迎えに来るから」

「そっか。なあ？花火って、7時頃からだったよな？」

「確か、そのはずよ？」

「じゃあ、まだ時間あるなあ…」

「ここでゆっくりして、巧が来たら、みんなと一緒に行けば良いじゃない」

「そうだな」

俺は、とりあえず自分の部屋へ戻った。

「静流は、浴衣、着ないの？」

麻紀が、聞く。

「着るには着るんだけど、姉ちゃんが、どこへ片付けたのか、分かんなくてさ…」

「ごめん、静流。浴衣なんだけど、昨日クリーニングから持って帰って来てから、ずっとあたしが持ってたままだったわ…」

姉は、俺達の会話が聞こえたのか、慌てて浴衣を持って俺の部屋へ来た。

「あつ。あつた。なんだ、姉ちゃんが持ってたのか」

俺は、慌てる素振りもなく、他人事のように言った。

「さて…と。じゃあ、俺も、そろそろ着替えますかね」

「じゃあ、あたし、遙さんの部屋に行って来るね」

「ああ。分かった」

そう言うのと、俺は浴衣に着替え始めた。

俺は、クリーニングから帰って来たばかりの、薄灰色の生地に、細かい白と黒のストライプの入った浴衣に腕を通し、黒い帯を巻いた。

「お待たせ」

俺は、そう言いながら、姉の部屋の入り口に立った。

「静流、浴衣似合うじゃない」

麻紀が、目を輝かせて言った。

「ありがとう」

俺は、麻紀に誉められたのが嬉しくなった。

姉も、浴衣に着替え終わっていた。

「遥さんの浴衣、可愛い」

麻紀が言った。

姉の浴衣は、赤と白のグラデーションで、所々に赤と白の花びらの柄があしらわれていて、淡いピンク色の帯が巻かれていた。

「可愛いでしょう？色が綺麗だったから、つい買っちゃった」

姉が嬉しそうに言った。

「ピンポーン」

その時、玄関のチャイムが鳴った。

「姉ちゃん、巧さん来たよ？」

「静流、帯を調節するから、ちょっと出て？」

「ああ。分かった」

俺は、そう言うのと、玄関へ向かった。

「ガチャッ」

玄関のドアを開けると、そこには、黒地に白と灰色のストライプが入った、紺色の帯を巻いた浴衣姿の巧さんが立っていた。

「よお。静流。今日も暑いなあ」

「いらっしやい。暑いねえ。もうすぐ準備出来るから、入って」

「ああ。分かった」

そう言って、俺と巧さんは、姉の部屋へ向かった。

「おっ！？麻紀ちゃん。久しぶり」

「あつ。巧さん。お久しぶりです」

「おい、静流？」

「何？巧さん」

「浴衣姿の美人が二人もいるぞ！？参ったな、これは」

嬉しそうな声で巧さんが言った。

「は…はは…」

俺は、苦笑いをした。

「巧さん？鼻の下伸びてるよ？」

俺は、さり気なく突っ込んだ。

「おっと…」

巧さんは、慌てて、手で口の周りを塞ぐ。

「まあ、この状況で喜ぶなって言うのが無理か…」

俺は、苦笑いしながら言った。

「お待たせ。じゃあ、行こっか？」

準備を終えた姉が言った。

四人揃って玄関を出る。

「カラン、コロン…」

四人の下駄が、乾いた、歯切れの良い音色を奏でる。

「バスで行くんだろ？」

巧さんが、尋ねる。

「ええ。そうよ。もうすぐ来るはずだから」

姉が、答えた。

俺達は、マンションから歩いて2、3分の所にある、バス停に向かう。

バス停には既に、浴衣姿の人達が並んでバスを待っていた。

「バスは、多分、またいっぱいなんだろうな…」

ため息混じりに、俺が呟く。

俺達がバス停に着いてから、5分程でバスが、バス停に到着した。

「やっぱり混雑してるなあ…」

そう言いながら、俺は麻紀の手を、巧さんは姉の手を引いてバスに乗り込む。

「足元気を付けなよ？」

俺と巧さんが、同じタイミングで、麻紀と姉を気遣った。

その様子がおかしくて、ついみんなで笑ってしまった。

「あははは」

俺達を乗せたバスは、川へ向かって走り出す。

10分程で、川の土手の数百m手前のバス停に到着した。

「降りるぞ」

巧さんの合図で、一斉に乗降口に向かった。

バスを降りて、川を渡る橋に向かって歩く。

警察が、川の両土手の道と川を渡る橋から駅前大通りまでの道の、交通規制をしていた為、会場付近は、歩行者天国のような状態になっていた。

土手に上がり、土手の上の道路を歩く。

土手の道路と、土手下の河川敷には、数多くの出店が立ち並び、浴衣姿のカップルや、家族連れ、友達同士等の人々で溢れかえっていた。

「また、今年も何万だか、何十万だか知らないけど、いっぱい人が来てるみたいだな？」

俺は、河川敷を見下ろして言った。

「とりあえず、下に下りて場所取りしないとな」

巧さんが、そう言いながら、土手の階段を駆け下りた。

その後を追うように、俺達もゆっくりと階段を下りる。

暫く歩いて、やっと、四人が座れそうな空きスペースを見つけた。

「麻紀と姉ちゃんは、ここにいて。俺と巧さんは飲み物とか買って来るから」

「うん。分かった」

「何が良い？」

「あたし、オレンジジュース」

麻紀が答えた。

「じゃあ、あたしも」

姉も、麻紀と同じ物を頼む。

「俺は、別として…。巧さんは多分、ビールだな…」

そう言うのと、麻紀と姉を残して、俺は飲み物を探しに出た。

飲み物の屋台の前は、思った程混雑はしていなくて、少し並ぶだけで順番が来た。

「いらっしやい」

若い男の人が、微笑みながら迎えてくれる。

「オレンジジュース2つと、ビール2つ下さい」

「はい。じゃあ、これね。ありがとう」

袋に飲み物を詰めてもらい、それと引き換えにお金を渡す。

帰り際に駄目元で、店の人に聞いてみた。

「あの、いらぬ箱ありませんか？ あれば、少し分けてもらいたいです」

すると、店の人は言った。

「こんなので良ければあるけど？」

店の人が、店の裏側から取り出して来たそれは、中身を全部取り出された後の、綺麗に折り畳まれたジュースや酒の箱だった。

「十分です。それを、いくらか分けてもらえますか？」

「ああ。良いよ。はい、どうぞ」

そう言いながら、嫌な顔一つせず、俺に折り畳まれた空箱を数枚、渡してくれる。

「ありがとう」

そう言って、俺は店を後にした。

麻紀と、姉がいる場所に戻る。

「また、ナンパされてるよ…」

俺は、変な二人組の若い男達にナンパをされている、麻紀と姉を見ながら呟いた。

すると、一人の男性が現れて、その男達に言った。

「俺の連れに何か用か？ 話なら、俺がいくらでも聞くぞ？」

その男性は、穏やかな表情でその二人組に語りかけていたが、その男性が放つオーラは、決して穏やかな物ではなかった。

「出た…。巧さんだよ…。アホだな、アイツら…。まあ、巧さんが暴れたら面倒だしな…」

「何だ？ テメーは？」

その二人組の内の、金髪の男が、巧さんに喧嘩を売った。

「こ…、このガキッ…!!」

「ヤバい。巧さん、キレた」

俺は、急いで、三人の元へ駆け寄った。

「はいはい、巧さん。そこまで。アンタら、何？ 何か、用事でもあるの？」

俺は、巧さんを制止しつつ、その男達に言った。

「ああ？何だあ？コイツは？」

その金髪の男は、俺にまで、喧嘩腰で言った。

「ここには、他にもいっぱい女の子いるからさ。他へ行きな？」

俺は、そんな事は気にせず、その男達に淡々とした口調で言った。

「お、おい…、ちょっと待て。コイツ確か…」

二人組の内の、鼻にピアスをした無精髭を生やした男が、金髪の男に言った。

「間違いない…。あの有名なバンドのヴォーカルだ…。しかも、喧嘩も結構強いとか何とか…」

髭の男が続けて言った。

「試してみるかい？」

俺が、その男達に挑発をする。

「うっ…」

「喧嘩が強いとか、冗談じゃない。向こう、行こうぜ…」

その男達は、そう言いながら、そそくさと、その場を立ち去って行った。

「ったく。油断も隙もねえな…。もう少しで、暴れる所だったぞ」

巧さんがぼやいた。

「やっぱり？巧さん、キレてたもんなあ…。急いで良かった…。あつ。そうだ。ホラ。地面に敷く為の空箱、もらって来たから」

俺は、さっきもらって来た箱を広げて地面に並べ、四人分の席を作った。

「さあ、みんな座って乾杯しよう。もうすぐ、花火も上がるしね」

俺は、三人に微笑みかけて言った。

「ああ。そうだな。ホラッ。遥も麻紀ちゃんも座れよ」

巧さんが、二人に促す。

「ありがとう」

そう言いながら、二人は、地面に敷かれた空箱の上に座った。

「はい。二人のジュース」

俺は、袋からジュースを取り出し、二人に手渡した。

「ありがとう。静流」

麻紀が微笑む。

「はい。巧さんは、どうせビールでしょ？」

「ああ。花火見るなら、当然ビールだろう？」

笑いながら、巧さんはビールを手取る。

「言うと思った」

姉が、笑って巧さんを見る。

「おお。そうだ。ホラッ。焼き鳥買って来たからな。飲みながら、食おう」

巧さんは、上機嫌な様子で言った。

「あはは」

「じゃあ、とりあえず、カンパイッ！！」

俺達は、巧さんの合図で、乾杯をした。

「ふはっ。美味い…」

巧さんは、しみじみと言った。

汗をかいたように、結露しているビールの缶は、その冷たさを物語っていた。

「静流、ありがとね」

麻紀が、俺の肩に寄り掛かって言った。

「えっ？何が？」

俺は、何の事かさっぱり理解出来なかった。

「さっきの変な人達、追い払ってくれて…」

「ああ。あれか。別は大した事じゃないよ」

俺は、笑いながら言った。

「あの人達、すごく変な事言ってたし…。ちょっと怖かったの…」

「そうだったのか…。ごめんな。嫌な思いさせちゃって…」

「ううん。大丈夫。すぐに巧さん来てくれたし、静流も来てくれたから」

麻紀が、ホッとした表情を浮かべた。

「麻紀ちゃん？この二人、結構、頼りになるでしょ？でも、静流は、普段はだらしないけどね」

姉が、麻紀に微笑みかけた。

「姉ちゃん、最後は余計だよ」

俺は、しかめっ面で姉に言った。

「あはは」

そんな、他愛もない話をしていると、薄暗くなった夕闇の空に、大きな音と、眩しい位の閃光と共に、色とりどりの花が咲き乱れた。

「おっ？上がった上がった。いきなりデカいなあ」

巧さんが、空を見上げた。

「綺麗ね…」

麻紀と姉は、夕闇の空に咲き乱れた、鮮やかな大輪の花に魅了され、うっとりしていた。

「静流、ちょっと、何か食い物買って来るぞ？」

暫くして、巧さんが耳元で囁く。

「えっ？だったら、俺が行くよ？」

「いや、お前はここにいろ。俺は、遥と行って来るから。麻紀ちゃん、隣の傍にいてやれ」

巧さんは、微笑みながらそう言うと、姉と席を立ち、出店に並ぶ人混みの中へ消えて行った。

「あれ？巧さんと遥さんは？」

麻紀が、俺に聞いた。

「ああ。何か食い物買って来るって。仲良く二人で出掛けたよ」

「そっか。ねえ？静流？ここの花火も綺麗だね」

「そうだね。でも、俺は、小さい頃から何回も見てるからなあ…。あんまり、そうは思わなくなっちゃった」

俺は、苦笑いを浮かべた。

「ねえ？静流…」

麻紀はそう言うと、俺の手を握り締めて来た。

「うん？何？」

「ううん…。何でもない」

麻紀は、何か言いたそうな顔をしていた。

「なあ、麻紀？」

「なあに？静流？」

「麻紀、俺さ、いつまでかかるか分からないけど、いつかきつと、音楽で食えるようになるから…。だから、その時まで、ずっと付いて来て欲しい。そして、俺の夢が叶ったら…、その時は…、俺と…」

「俺と…？」

麻紀は、不思議そうな顔で俺を見つめていた。

「俺と…」

その時、爆音と共に夜空に黄色い、大きな花が咲いた。

花火の音に紛れて俺は、俺の素直な気持ちを、麻紀にぶつけた。

「俺と結婚してくださいっ!!」

俺は、精一杯の言葉で、麻紀にありったけの気持ちを伝えた。

麻紀は目を丸くしていた。

そして、次の瞬間、麻紀は、今までに無いくらいの笑顔で言った。

「ありがとう…。嬉しい…。静流が、そんなに思ってくれてたなんて…。この前、お父さんに言ってた事、本気だったんだね？」

「もちろん、本気だよ。それは、今でも変わらないし、これからずっと、変わらないから」

俺は、麻紀に微笑みかけた。

「ホントに嬉しい。ありがとう、静流。こんなあたしで良ければ、

あたしの方こそ、静流のお嫁さんになってください…」

麻紀の頬が赤く染まった。

「麻紀。ありがとう。俺は、麻紀をずっと離さないから」

俺は、思わず麻紀を抱き締めた。

「うん。あたしね、静流のお嫁さんになりたいって思ってたの…。だから、すごく嬉しい」

麻紀は、満面の笑みを浮かべ、目を潤ませながら俺を見つめていた。

その時の麻紀は、まるで天使とも、女神とも言えるような表情だった。

そんな二人の様子を、花火が、祝福するかのように彩る。

そんな二人を、姉と巧さんは、遠目から嬉しそうな表情で見つめていた。

「顔、赤いよ？」

俺は、笑いながら麻紀に意地悪っぽく言った。

「花火のせいだよ…」

麻紀は、照れ隠しをするように、笑いながら言った。

そこへ、姉と巧さんが仲良く帰って来た。

「おかえり。遅かったね？」

俺が言うと、巧さんが少し、不機嫌そうに答えた。

「いや、イカが食いたくてな？イカを探したんだけど、なかなか見つからなくてな？やっと思つけたと思つて並んで、順番来て、ちょうど焼きたてのヤツをもらおうとしたら、イカ屋の兄ちゃんが、それを地面に落としやがって…。しかも、最後の1個。当然、また一から焼き直し。焼けるまで、結構待たされたんだぞ？」

巧さんが、ビールを飲みながら愚痴をこぼす。

「あはは。それは、災難だったね」

俺は苦笑いしながら、言った。

「ったく、イカ屋のヤツめ…」

「あははは」

俺は、巧さんと、そのイカ屋の人とのやり取りが想像出来そうでおかしかった。

俺達は、そんな笑い話をしつつ、闇の花壇に咲き乱れる、色とりどりの大輪の花に魅了された。

「ホント綺麗ね…」

姉がうつとりしている。

「でも、これで、もう夏も終わりだね…」

俺が、少し淋しげに言った。

「ああ。そうだな。この花火が終わると、あっと言う間に秋だ」

巧さんも、少し淋しそうだった。

「なんで、花火が終わると秋なの？まだ暑いよ？」

麻紀が、不思議そうに言った。

「俺達の住んでる、この街の秋の合図が、この花火だからさ。この花火が、この街に秋を連れて来るんだよ」

「そうなの？」

「ああ。それにな、麻紀ちゃん。盆を境に、昼はそうでもないけど、朝と夜の気温、それから、この辺りの海水の温度がガラリと変わるんだ。急に下がり始めるんだ。その境目の日が、今日なんだよ」

俺と巧さんが、麻紀に説明する。

「そうだったんだ。じゃあ、ホントに夏の終わりなんだね」

「ああ。この街の今年の夏は、今日で終わりさ。明日からは、少しずつ、空が高くなって、気温が下がって、秋が来るんだよ」

俺は、夏が一番好きな季節だったので、少し淋しい気持ちだった。

「俺は、夏が一番好きだな…。でも、秋の冷たい夜風も同じくらい好きなんだけどね」

俺は、淋しさを紛らわす様に笑った。

「また、来年も夏が来るよ？また、来年も四人で来れば良いじゃない」

麻紀は、笑顔で言った。

俺は、麻紀の太陽に負けないくらいの、眩しい笑顔を見て、淋しさが吹き飛んだ。

「ああ。そうだね。来年も、再来年も、ずっと四人で花火を見よう」

「もちろん」

三人は笑顔で、俺に答えてくれた。

「今、最後のアナウンスが聞こえたな？これで最後だ。今年はどんな花火なんだろうな？」

巧さんが、言った。

ラストの花火が上がり始める。

川の兩岸に掛かるように、花火の仕掛けが渡され、仕掛けからは川に注ぎ込む滝のように、オレンジ色の火花は水面に向かって落ちて行く。

火花はまるで、夕日に移し出された滝の水しぶきのように闇に飛び散る。

「すごい。滝みたい」

麻紀がはしやぐ。

その滝の後ろからは、無数の蕾が、夜空へ向かって飛んで行き、闇の中で薄紅色の花を咲かせて、川に注ぐ滝に色を添える。

「今年の花火は、少し凝ってるんじゃないか？」

巧さんが、言った。

確かに、今までと比べると少し凝っているように思えた。

闇に咲く、薄紅色の大輪の花の花びらと、暗い水面に降り注ぐオレンジ色の水しぶきが、闇に包まれた川の水面を彩る。

それはまるで、山に咲き乱れて散って行く、山桜の花びらと、山桜の木の傍の崖を、勢いよく落ちる滝の水しぶきのようだった。

「今年のラストは、ホントに綺麗だな」

俺まで、感動せずにはいられないくらい、普段見慣れた川の風景を、幻想的な世界が包んでいた。

最後に残った、一枚の薄紅色の花びらと、一滴のオレンジ色の雫が、闇に飲まれて消えた。

「花火のタイトルが「桜」だってさ。そのまんまじゃん」俺は、花火の案内を見て言った。

「でも、綺麗だったよ？あたし、最後の花火が一番良かった」

麻紀は、どうやら、「桜」が気に入ったらしい。

「さて、本当に今年の夏は終わったな。また来年だ」

巧さんが、そう言いながら立ち上がる。

「また、来年みんなで来よう」

俺は、みんなに笑ってみせた。

「よしっ！！じゃあ、霞家に戻って、飲み直しだ。みんな、帰るぞ」

「巧…、まだ、飲むの？」

姉が、少し呆れた表情を浮かべた。

「当たり前だろ？当然、静流も飲むよな？」

ほろ酔いの巧さんが、俺に振る。

「あ、ああ。うん」

「よしっ。決まりだ。みんな、霞家へ帰るぞ」

巧さんは、かなりご機嫌な様子で、俺達を引っ張って行った。

花火会場の河川敷や土手の上には、家路に着く人々で溢れかえっていた。

Chapter 29

それから、夏が過ぎ、暫くして山は紅く染まり、木の葉が散り、全ての物を白く染める季節を過ぎた。

桜のつぼみが、膨らみ始めた頃。

俺と麻紀は、昼下がりの駅前のカフェへ入った。

「なあ、麻紀？」

「何？どうしたの？」

麻紀は、相変わらず、俺に優しく微笑みかけてくれる。

俺は、麻紀に大切な話をしなければいけない。

なのに、麻紀の笑顔を見ると、とても言い出せなかった。

（遅かれ早かれ言わなきゃいけないんだぞ？しっかりしろよ）

そう、心の中で自分に言い聞かせた。

「あのさ…、俺…」

「何？」

麻紀は、子供のような無邪気な目をして、俺を覗き込む。

「麻紀の事が好きだから、泣かせたくないから」

麻紀は、子供のような無邪気な目で、俺を覗き込む。

「麻紀の事が好きだから、泣かせたくないから。この笑顔を曇らせたくないから…」

という気持ちで、頭の中を駆け巡る。

俺は、麻紀に言い出すべきか暫く迷っていたが、覚悟を決めて、麻紀に告げた。

「…俺、桜が咲いたら、東京に行くよ」

それまで無邪気な表情で、子供のように微笑んでいた麻紀の表情が、俺のたった一言で、一瞬、凍ったように見えた。

「えっ？」

麻紀の表情は、戸惑いを隠せない。

「俺、バンドを本気でやりたいから…。だから、東京行くよ」

「そっか…」

麻紀は、うつむいたまま、そう答えたただだった。

「もし、麻紀が良ければ、俺と一緒に東京に行ってくれないかな？」

俺は、一か八かで自分の気持ちを、麻紀にぶつけた。

二人の間に暫く、無言の冷たい時間が流れた。

「…あのね、静流。あたしも静流と一緒にいきたいよ？でもね…、あたしがいたら、静流の足手まといになっちゃうから…」

麻紀の声は震えていた。

「そんな事ないよ。俺が麻紀を守るから。だから、一緒に行こう？」

俺は、うつむいた麻紀の横に座り、麻紀の頭を優しく撫でた。

「あたし、静流がそう言ってくれて嬉しいよ。でもね、あたしも静流が好きだから、静流のお荷物になりたくないの…」

麻紀の声は震え、うつむいたまま、涙をこぼしていた。

「そんな事、俺が思う訳ないじゃん。麻紀をここに置き去りにする方が、よっぽど辛いよ…」

俺は、そんな麻紀を見ているのが辛かった。

「…ありがと。でも、あたしは大丈夫だから…。だから、静流は頑

張って。静流なら絶対出来るから」

「そっか……。分かった……」

俺はそれ以上、言葉が出なかった。

これ以上は、俺がとやかく言う事ではなくて、麻紀の意志に委ねる事だったから。

「もし、静流が成功したら、その時に、あたしを迎えに来て？」

麻紀は、目に涙を溜めたまま、優しく微笑んだ。

麻紀の気持ちは、「行かない」だった。

麻紀も、決断する事が色々辛かっただろう。

だけど、俺が無理矢理、麻紀を引っ張って行って、俺のちっぽけな夢に付き合わせて、麻紀の人生を狂わせる訳にはいかない。

俺も、淋しさを堪えて納得するしかなかった。

「分かった…。絶対成功して迎えに来るから。だから、ほんのちょっとだけ待ってて」

俺は唇を噛み締め、自分の膝の上の、右手の拳を「ギュツ」と硬く握り締めた。

「うん。待ってるね。約束だよ？」

「ああ。大丈夫。絶対に成功して、迎えに来るから…」

そう言って、俺は、麻紀に指きりをした。

それから、数日が経った。

出発の朝。

「良し。全員揃ったな」

肩に、ギターやベースを掛けて、荷物がパンパンに入ったボストンバッグや、スーツケースを持った四人組が、駅の切符売場が集まっ

た。

「俊哉、ちょっとだけ待ってくれないか？」

俺は、俊哉に言った。

「麻紀ちゃんか？」

「ああ……」

俺達は、麻紀が来るのを待った。

改札口で俺達は、暫く待っていたが、麻紀の姿は一向に見当たらない。

「時間だ……。行くぞ」

無情にも、時間が来た事を告げる俊哉。

「麻紀……」

俺は、後ろ髪を引かれる思いで改札を通った。

俺は、改札の向こう側を振り向いて見回した。

だが、麻紀の姿は結局、見当たらなかった。

四人は、新幹線のホームへ上がるエスカレーターに乗った。

四人共、終始無言だった。

ホームに上がると、新幹線が近づくアナウンスが聞こえた。

その時。

「静流っ!!」

俺は、聞き覚えのある声に、ついさっき、自分達がホームに上がって来た、エスカレーターの方を振り向いた。

「麻紀っ!!」

俺は、荷物を放り投げて、麻紀に駆け寄った。

「ハアハア……。良かった。間に合った……」

息を切らしながら、麻紀は言った。

「来てくれないかと思ったよ」

俺は、麻紀を強く抱き締め、頭を優しく撫でた。

「見送りは絶対行くなって決めてたもん」

麻紀は、優しく微笑んだ。

「ありがとう」

俺は、麻紀の顔を見つめて微笑った。

向かい合う俺達の横を、長くて白い影が、桜の花びらを巻き上げな

がら、ゆつくりと通り過ぎ、やがて止まった。

「もう、行かなきゃ。ごめんな…」

俺は、麻紀に申し訳なさそうに言った。

「うん。頑張ってね」

麻紀は、きつと心の中では泣いていたはず。

俺は、放り投げた荷物を拾い上げ、麻紀の方を振り向かずに、背中越しに手を振り、新幹線に飛び乗った。

出発のアナウンスと同時にドアが閉まる。

俺と麻紀は、ドアのガラス越しに見つめ合った。

二人の間を引き裂くように、ゆつくりと新幹線はホームを離れる。

「絶対に待ってるからあつ!!」

麻紀は泣きながら、走る新幹線に向かってそう叫んだ。

俺は、離れて行く麻紀を見つめ、涙を堪えて叫んだ。

「待ってろ！！必ず迎えに来るからな！！」

さっきまで、麻紀といったホームは、あっという間に見えなくなってしまう。

俺は、窓の外を流れる、暫くは見る事の無い、最後の景色見つめていた。

「静流？お前、本当にこれで良かったのか？」

俊哉が、気を利かせたように俺に問いかけた。

「…」

俺は、俊哉の問いかけには答えられず、ただ窓の外を見つめ、溢れそうな涙を堪える事で精一杯だった。

Chapter 30

車内のデッキでは、暫く無言の状態が続く。

新幹線の車内には、行き先を知らせるアナウンスと、新幹線の走る風切り音だけが、ただ、悲しく響き渡る。

「静流…」

竜也が、俺に氣遣うように口を開く。

「戻るなら、今の内だぞ？俺達の事は気にしなくて良いから」

「そうだぞ。竜也の言う通りだ。今のままの気持ちでやっても、結果は付いて来ないからな。まだ迷ってるなら、戻ってやれ」

俊哉が、竜也に続いて落ち着いた口調で言った。

「俺達は、大丈夫。静流は、麻紀ちゃんを幸せにしてやれよ」

充は微笑みながら、俺の顔を覗き込んだ。

俺は、三人の方を振り向いた。

「みんな…」

俺は、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「つたく…。ホントにお前は、不器用なヤツだな…」

俊哉が、呆れた表情で俺を見る。

「ごめん。みんな。ホントにごめん。俺、やっぱり麻紀がほっとけないから…。ホントにごめん」

俺は、深く頭を下げて謝った。

「何、謝ってんだよ？謝るのは俺達にじゃないだろ？」

こんな時でも、三人は、優しく微笑んでいた。

「みんな、ありがとう。俺、ホントに情けなくて…。ごめん。ありがとう。俺、みんなと一緒にいれてホントに良かった…」

俺は、三人に感謝の気持ちを伝えた。

「分かったから、さっさと、次の駅で降りて、Uターンしろよ?」

俊哉は、笑顔で俺の背中を叩く。

「俺達は、三人でお前の分もやってやるから、安心しろ」

竜也が、俺の胸に拳を当てた。

「ああ。後は頼んだ。俺も機会があれば、東京に行くから」

「ああ。待ってるからな」

三人は声を揃えた。

ちょうどその時、俺達のやり取りを見計らったように、タイミング

良く、次の停車駅を告げる、車内アナウンスが流れて来た。

「お別れだな。静流、元気でな」

「ああ。みんなも元気でな。みんななら、きっと上手く行くから」

新幹線は、ゆっくりと次の停車駅のホームへ滑り込んだ。

静かに止まり、ドアが開く。

「ホラッ。さっさと行け」

俊哉が微笑みながら、意地悪く俺の背中を押す。

「またな」

「ああ…。またな、みんな」

俺は三人と握手を交わして、ホームへ降りた。

ホームからドア越しに、手を振って三人を見送った。

三人を乗せた新幹線は、静かに、東へ向いてホームを離れた。

「ごめんな…。俊哉、竜也、充。みんなありがとう」

段々と小さくなって行く、白い影を見つめて、そう呟いた。

「さて…。俺も、俺の新しい居場所に帰らないとな」

俺は、麻紀の元へ急ぐ為に、反対側のホームへ走った。

階段を駆け下り、人の波をすり抜けて、反対側のホームへ続く階段をまた、駆け上がる。

俺が、反対側のホームに出ると、正に、俺を待っていたかのようなタイミングで、新幹線が止まっていた。

俺は、迷うことなく、それに飛び乗った。

「今帰るから。待っててな。麻紀」

俺は、息を切らしながらそう呟いて、窓の外の青空を見上げた。

新幹線が、ゆっくりと麻紀の元へと向けて、ホームを離れ始めた。

静かな車内で俺は、麻紀や、俊哉達との今までの事を回想していた。

新幹線は、俺の気持ちを察したかのように、スピードを上げた。

さっき、俺が、俊哉達に促されUターンした駅から、僅か30分足らずで、麻紀の待つ、地元の駅へ到着した。

俺は、ドアが開くと同時にホームへ飛び出した。

（麻紀っ）

俺は、さっき俺達が行ったはずの、反対側のホームへと目を向けた。

エスカレーターの傍のベンチに、うつむいて座っている女の子が見えた。

俺は、反対側のホームへ向かって全力で走った。

人の波をすり抜けながら、エスカレーターを駆け下りて、反対側のエスカレーターをまた駆け上がる。

ホームへ上がり、麻紀が見えた場所へ、息を切らしながらゆっくりと向かう。

呼吸を落ち着け、ベンチにうつむいて座っている、麻紀の前に静かに立った。

「何、泣いてんだ？」

俺は、手の平で軽く麻紀の頭を「ポンポン」と叩いた。

「…えっ？」

麻紀は、一瞬何が起こったのか分からないと言った、戸惑いの表情を浮かべた。

そして、次の瞬間、混乱する頭の中で、状況整理が出来たのか、俺に飛び付いて声をあげて泣いた。

「おっと…」

「うわぁぁん…。静流…。やっぱりあたし淋しかったよ…。ダメだったよ…」

俺は、そんな麻紀を、ただ、優しく抱き締めて、頭を撫でてやる事しか出来なかった。

「麻紀。もう大丈夫だから。もう絶対に離れる事はないから」

麻紀は、真っ赤になった目で俺の顔を覗き込んで言った。

「静流？バンドは良いの？夢は？」

「もう良いんだ。麻紀を悲しませてまでやる程の事でもないし…。俺は、音楽よりも、麻紀の方が大切なんだって気付かされたから…」

「…うん。ホントに良いの？」

「ああ。麻紀がいなくなるよりはずっと良い。麻紀がいてくれるな

ら、俺のちっぽけな夢なんか、どうだって良いよ」

「うん。静流？」

「うん？ どうしたの？」

「ありがとう。大好き」

そう言って、麻紀は俺の頬に小さくキスをした。

俺は、麻紀に手を差し出して言った。

「帰ろうか？」

「うん」

手を繋いで、ゆっくりとエスカレーターに向かう。

それまで泣いていたはずの麻紀が、いつものように楽しそうに俺に話かけてくれる。

麻紀は、エスカレーターに乗ると、手を繋いだまま、俺に肩を寄り添わせて来た。

俺は、そんな麻紀を愛しく思い、

「もう絶対、何があっても離さない。離すもんか」

と、心に決めた。

「麻紀？これから、どこ行く？」

「静流の家に行こう？」

「ああ。そうしようか。姉ちゃん、びっくりするだろうな」

「あはは」

駅のすぐ北側の城の庭から、桜の花びらがホームに舞い込む。

駅を通過する新幹線が、線路に落ちた花びらを、巻き上げて走り去

つ
た。

Chapter 31

俺は、その翌日から、真剣に仕事を探そうと決めた。

「じゃあ、姉ちゃん。ちょっと行って来るから」

「行ってらっしゃい。仕事、いっぱいあると良いね」

「ああ。そうだね。これから頑張らないと。じゃあ、行って来るよ」

そう言って俺は、駅前のハローワークへ、職探しに出掛けた。

「さすがに、混んでるなあ…。やっぱり、どこも不景気なんだな…」

そう、独り言を呟いて、ハローワークの受付へ向かった。

「すみません。仕事探したいんですけど…」

「初めてですか？」

「はい」

「では、こちらの記入用紙に、お名前とか必要な事項を、後ろの机で書き込んで、またこちらへ来てください」

「はい。分かりました」

俺は、受付の人に言われた通り、案内された机で書類に必要事項を書き込んだ。

書類が書き終わる頃には、受付前に、五、六人が既に並んで、順番待ちをしていた。

（仕事探すのも、楽じゃないな……。まあ、不景気だししょうがないか……。麻紀を幸せにする為だ。我慢、我慢……）

そう、心の中で自分に言い聞かせた。

やっと、順番が回って来た。

「はい。出来ました」

「じゃあ、こちらをお預かりしますね。求人が掲載されたパソコンを、ご覧になりますか？」

「はい。見せてください」

「では、13番の番号のシールが貼られたパソコンを使ってください」

そう、受付の人に言われ、13番の番号札を渡された。

俺は、その番号札を手に、「13番」のパソコンへ向かった。

（ええっと…、13は…。あつた）

俺は、目的のパソコンの前に立った。

椅子を引き出し、椅子に座る。

パソコンの画面はタッチパネル式になっていて、地域や職種、給料の条件から探せるようになっていた。

「とりあえず、給料だよな。金が無いと何も出来ないしな」

俺は、迷わず給与面で探す事にした。

「ええつと…。月給は…、最低でも20万は欲しいから、20万と…」

パソコンは瞬時に、月給20万円以上の求人を表示した。

「へえ…。結構あるじゃん。おっ？これなんか良さそうだ。高卒OKだし、日曜休みだしな」

俺は、何件か良さそうだと思った求人をピックアップし、求人票をプリントアウトした。

それを手に、受付へ戻る。

「ありがとうございました」

俺は、受付へ番号札を返した。

「はい。霞さんの登録が出来ましたので、次回から、このカードをお持ちくださいね」

受付の人から、一枚のカードと、職業訓練等の案内が書かれた紙をもらった。

「霞さんですと、この案内状の表側の職業訓練コースよりも、裏側の資格の取得のお手伝いが出るコースの方が、良いかもしれませんね。まだ、お若いですし。どうされますか？」

受付の人が、親身になって案内をしてくれる。

「今日は、時間が無いので、また検討して来ます」

俺は、そう言って、ハローワークを後にした。

俺はその足で、駅までバイト上がりの麻紀を迎えに行った。

「おかえり。お疲れ様」

俺は、麻紀に微笑んだ。

「ただいま。どうだった？」

麻紀も、自分の事のように、気に掛けてくれていた。

「うん。何件か良さそうな仕事があったよ。麻紀にも見てもらいたいからさ、ちょっと寄り道しない？」

俺はそう言って、麻紀の手を引き、駅前のカフェに入った。

麻紀は、いつになく難しい顔をして求人票を眺めていた。

「俺、これなんか出来そうだと思うんだよね」

俺が指差したのは、大きな工場内の、機械や設備の補修の仕事だった。

麻紀は、少し不安そうな表情を浮かべて言った。

「大丈夫？この仕事、下手したら、大ケガだけじゃ済まないかもよ

「？」

俺は、不安そうな麻紀を見て頭を撫でた。

「心配してくれてありがとう。でも、俺は大丈夫。それに、俺が、麻紀を幸せにするんだから、俺は命賭けなきゃ…ね」

「あたしの為に、静流の大事な命賭けなくて良いから…。それよりも、毎日元気で帰って来てね？」

麻紀は、心配そうな顔をしていた。

「大丈夫。俺だって、麻紀と、ずっと一緒にいたいから。だから死なないよ。だけど、せめて命賭けるくらいの気合いで頑張らないと、麻紀を悲しませてしまうから…」

俺は、麻紀に微笑んだ。

「うん。だったら、静流が思うように頑張ってみたら良いよ」

麻紀がやっと、俺に微笑ってくれた。

「でも、約束だよ？絶対に毎日元気で帰って来るって。あたし、静流に何かあったら悲しいから…」

麻紀が、舞い上がる俺に釘を刺した。

「うん。分かってるよ。俺だって、麻紀を悲しませたくないから」

そう、麻紀に微笑みかけて、俺は、コーヒーを口に含んだ。

それから暫く、俺達は、これからの二人について話し合った。

「静流は、仕事決まったらどうするの？」

「そうだな…。とりあえず、金貯めて、家を出て一人暮らしをしてみようかなって」

「静流が一人暮らし出来るの？なんか心配だよ」

麻紀が、ため息混じりに呟いた。

「なっ…。失礼な。ちゃんと飯くらい作れるし。洗濯機は使い方がわからないから、説明書読んでだな…。うんうん…」

「ほらっ。やっぱり不安だよ。あたし、時々覗きに行くからね」

麻紀は、俺の事がほっとけないらしい。

「じゃあさ…。じゃあ、そう思うなら、俺と一緒に住まないか？」

「えっ？」

麻紀は、一瞬、戸惑った表情を浮かべた。

「俺と、同棲して欲しい。だから、家を出ようと思ってるんだ」

俺は、麻紀に自分の思いを打ち明けた。

「うん。あたしも、静流と一緒に住みたい。でも、いきなりは難しいから、だんだん移り住むようになってもいい？」

「ああ。それでも構わないよ。麻紀と一緒に暮らせるなら」

俺は、麻紀に微笑んだ。

「うん。これですーっと一緒だね」

麻紀の顔が、少し赤くなった。

「うん。寝ても覚めても、ずっと一緒。嬉しさも楽しさも、今まで以上だよ？それに何より、辛い時や悲しい時は、二人で分け合えるから、今までの半分にもなるしね」

「そうだね。ねえ？静流？」

「うん？」

「あたし達、二人で頑張って一緒に住もうね」

「ああ。それで、いつかは、俺達結婚して…。子供もいて…。楽しいだろうね」

「うん。楽しみだね。静流となら、楽しい家庭になりそうだしね」

「ああ。俺、麻紀の為に、俺の、未来の家族の為に、一生懸命頑張るよ」

それはまだ、桜が散り始めた頃の季節の事だった。

それから、麻紀と出会って二回目の夏が来ようとしていた。

運命の歯車が、少しずつ「狂々（くるくる）」と回り始めていた。

Chapter 32

一方、その頃。

B－Raveの三人組は、東京の、とあるビジネスホテルにいた。

「とりあえず、出て来たは良いが、どうするんだ？これから…？」

竜也は、ベッドに腰を掛け、俊哉に問いかけた。

俊哉は、スポーツ新聞を読みながら、コーヒーを飲んでいた。

「うん…」

新聞をテーブルに置き、俊哉が口を開く。

「そうだな。とりあえず、当面の俺達の活動拠点を探す事、それから、雨風を凌げる、「俺達の住みか」を探す事。この二つだな」

「どこか宛てでもあるのか？」

竜也は、不安そうに俊哉に問いかける。

「無い事も無いが…。まあ、ちょっと待て」

そう言うと、俊哉はケータイを取り、どこかへ電話を掛けた。

「プルルルル…」

「もしもし？ 薫か？」

「ああ。俊哉兄か。どうしたんだ？ 久しぶりだな」

電話口からは、明るい、若い男の声が漏れる。

「いや、東京で音楽をやるうって思ってたな。地元から、出て来たは良いが、この辺りの地理はさっぱり分からん…。だから、お前に案内を頼もうと思ったんだ」

「なんだ。そんな事か。なんなら、今すぐでも良いぞ？」

「本当か？助かった。どこで待ち合わせをする？」

「渋谷駅はどうだ？」

「分かった。渋谷だな。今から、仲間を連れて行くから、よろしくな」

「ああ。分かった。着きそうになったら、また連絡してくれよ」

「ああ。分かった。じゃあ、後でな」

俊哉は、電話を切り、竜也と充に言った。

「お前達、今から渋谷へ行くぞ」

「渋谷？今の電話の相手は誰だ？」

竜也は、俊哉に問いかけた。

「ああ。今のは、従兄弟だ。確か、10年前だったか…。父親の転

勤で、こっちに引っ越したんだ」

「へえ。それで、俊哉は落ち着いてたんだな」

「まあな。それに、アイツも俺達のようにバンドやってるからな。そっち方面にも、多少詳しいって事だ」

竜也と充は、俊哉の話を聞き、とりあえず安心したようだ。

「じゃあ、そうと決まれば、行くか？」

竜也が、二人の顔を見る。

「ああ。行こう」

俊哉と充は、声を揃えた。

三人は、ホテルを後にして、徒歩で駅へ向かった。

駅に着くと同時に、行き先の案内板を見た。

「…？さっぱり分からん…」

三人共、首をかしげる。

「とりあえず、環状線とか言うのに乗れば良いのか？」

竜也が先走った。

「待て、竜也。ここは、駅員に聞いた方が確かだぞ？」

俊哉は、竜也を制止して、改札へ向かった。

「すみません。渋谷へは、どれに乗れば…」

「ああ、渋谷でしたら…」

駅員が丁寧に、俊哉に教えた。

「よし。分かったぞ。みんな、行こうか？」

「ああ。行こう」

三人は、切符を買い、改札へ向かった。

「おっと…。忘れる所だった。薫に連絡しないとな」

そう言うのと、俊哉は、コートのポケットからケータイを取り出した。

「もしもし？薫？今から、電車乗るから」

「ああ。分かった。じゃあ、駅の改札で待ってるよ」

「ああ、悪いな。じゃあ、また後で」

そう言って、電話を切る。

「何て言ってた？」

竜也と充が、俊哉に問いかける。

「駅の改札の辺りで待っていてくれるらしい」

「そうか。良かった。助かったな」

「ああ。まだ時間もあるし、薫に、手土産の一つでも買って行くか」

そう、俊哉は呟いた。

「そうだな。せっかく案内してもらうのに、手ブラじゃ、悪いもんな」

改札に背を向けて、三人は、駅の売店へ向かって歩いた。

「クッキーとか、そんなもんで良いか。みんなで食えるし」

「そうだな。下手なご当地土産よりはマシだろう」

「俊哉？俺達も出すぞ」

竜也が、俊哉を気遣う。

「別に、良いって。お前達に出してもらおうとは思ってねえし」

俊哉は、遠慮したが、充が続いて言った。

「俺達、三人が案内してもらうんだ。だから、俺達も出さないと悪いだろ？ 気にしないで良いから」

「そうだな。すまん。竜也、充」

「良いって。気にすんな」

そう言って、三人がそれぞれ、財布から金を出し合って、薫への手土産のクッキーの詰め合わせを買った。

「じゃあ、そろそろ時間だし、行くか」

俊哉が微笑んで、二人を見た。

「ああ。行こう」

竜也と充も微笑む。

売店を出て、改札を抜け、ホームへ向かった。

三人が、ホームへちょうど着いた頃、タイミングを計ったように電車が滑り込んで来た。

三人は、それぞれの思いを胸に電車に乗り込んだ。

三人の大きな夢と期待を乗せて、電車はゆっくりとホームを離れて行った。

Chapter 33

三人が渋谷駅へ着く頃、薫は、一人、改札口の柱にもたれ掛かるように立ち、右手をジャケットのポケットに突っ込み、左手でケータイを触っていた。

「おっ？ 来た来た」

薫が、ふと顔を見上げると、ロングの金髪にサングラスを掛けた、黒いロングコートを着た俊哉が、改札の向こう側に見えた。

「待たせたな」

俊哉は、そう言いながら、薫に近付く。

薫は、目はパッチリして色白で、髪は黒く少し長めで、身体の線は細く、背はやや低めだった。

薫本人に話かけたり、人から聞かない限りは、どう見ても女性にしか見えなかった。

ただ、服装はモノクロで、「いかにも」と言った雰囲気纏っている。

「いや。大丈夫。俺だって、10分前に着いたから」

薫が、微笑む。

「そうだ。仲間を紹介するよ。こっちが竜也で、こっちが充だ」

俊哉が、二人を薫に紹介する。

「はじめまして。小野瀬竜也です。よろしくな」

「同じく、朝霧充です。よろしくね、薫」

二人は、薫に微笑みながら握手を求める。

「こちらこそ。俺は、天城薫です。よろしくね」

そう言うと薫は、竜也、充とそれぞれに微笑みかけて、握手を交わした。

「さあ、自己紹介は終わりだ。薫は、飯食ったのか？」

俊哉が、そう切り出し、薫に問いかける。

「いや、まだだけど」

「だったら、少し腹ごしらえしないか？とりあえず、飯でも食いな
がら、行き先をみんなで決めよう」

俊哉が意見を出すと、三人は、

「賛成」

と、返事をした。

「俺、良いところ知ってるから案内するよ」

薫が、連れて行ってくれるようだ。

「ああ。じゃあ、道案内を頼む」

薫に導かれ、三人は、足並みを揃えて歩き出した。

暫く歩いていると、急に薫が立ち止まった。

そこは、外見はどこにでもありそうな、通りに面した小さなカフェだった。

「このランチが安くて美味しいんだよ。後、食後のコーヒーも美味くてさ…」

薫が、無邪気な顔をして微笑む。

「へえ…」

三人は、カフェと通りの境目に掲げられた、その日の「お勧めメニュー」が書かれた黒板に目をやった。

「お勧めメニュー」は、カラフルなチョークで手書きをされていて、黒板の上には、店名が書かれたプレートが貼り付けられていた。

「cafe de Lumier」
カフェ・ド・ルミエール

「へえ。小洒落た名前じゃねえか…」

三人は、地元には無い、小さいけれど、お洒落な名前のカフェに心を奪われた。

四人は、カフェのウッドデッキに上がった。

デッキから、店全体を見回した。

そのカフェは、通りに面した所にウッドデッキがあり、デッキの上には、少し小さなテーブルが5席程、無造作に置かれていた。

通り側の、デッキの両端には、二本の柱が立っていて、その柱の上には、建物へ向かって、梁のような物が渡されていた。

おそらく、雨が降った時は、その梁の上に、テントのような物が被せられるのだろう。

今日は、晴れているので、雨避けは外され、頭上には青空が広がっ

ていた。

デッキ奥側には店が立ち、掃き出し窓は開け放たれていて、自由に店の中とデッキが行き来出来るようになっていた。

店の中は、暖色系の照明で照らされていて、フロア自体はそんなに広くなく、誰もいないカウンター席と、カウンター上にレジが置いてあるだけだった。

そのカウンター越しに、アンティーク風な食器棚が置かれているのと、厨房が見える。

昼のピークを過ぎたせいかな、デッキには、客は俊哉達四人と、他に一組のカップルがいるだけだった。

通りが見渡せる席へ、男四人組が座る。

「色気の無いテーブルだな」

竜也が苦笑いを浮かべる。

「まあまあ。ここに座ってれば、目の前の通りを、女の子がいっぱ

「通るからさ」

薫が笑う。

「そうだ。薫、俺達から土産だ」

俊哉は、思い出したように、スーツケースから、さっき買ったクッキーを取り出し、薫に手渡した。

「気を遣わなくて良いのに……。でも、ありがとう。みんな」

薫は喜んで、土産を受け取った。

そこへ、注文を取りに、若い女性がやって来た。

彼女は、ハニーブラウンの長い髪をポニーテールで結び、白いブラウスに黒いスラックス姿で、足首まである、長くて黒いエプロンを腰に巻いていた。

「ご注文をお伺いします…」

四人が、彼女の方を向いた瞬間。

「あれ？薫じゃない」

彼女は、薫を見た。

「あつ。瑞希。今日は、バイトだったんだ？」

「うん」

三人は、二人を見た。

「なんだ？知り合いか？」

薫が、彼女を三人に紹介する。

「えっと、ここの看板娘とでも言えば良いのかな？瑞希って言うんだ」

「へえ。可愛い子じゃないか」

俊哉達三人は、口を揃えた。

「このカフェは、俺達のバンド仲間が、よく集まる所なんだ。で、入り浸ってたら、いつの間にか仲良くなってさ…」

「へえ。そうだったんだ」

薫が、続けた。

「瑞希。この三人は、俺が昔住んでた所の人達で、バンド活動をこっちでやるって、地元から出て来たんだ。俺の正面にいるのが、俺の従兄弟の俊哉兄。で、その右隣が竜也。俺の隣が充だよ。これから、ちよくちよく来ると思うから、仲良くしてやってね」

そう言いながら、薫は、瑞希に微笑んだ。

「そうなんだ。あたしは、橘瑞希って言います。みんな、瑞希って呼んでね。よろしくね」

瑞希は、微笑んで三人を見た。

「俺、小野瀬竜也。竜也で良いからね。よろしく」

「俺、朝霧充だよ。俺の事も、充って呼んでね」

二人は、瑞希を微笑んで見た。

そして、最後。

「今、薫が言った通り。俺は、薫の従兄弟で、桜井俊哉って言うんだ。薫の母親と、俺の親父が兄妹だね。もちろん、他の三人と同じく、俺の事も俊哉で良いから。薫は、「俊哉兄」って言ってるけどな」

俊哉は笑いながら、自己紹介をした。

「俊哉さんは、お兄ちゃんみたいだから、あたしも薫と同じように「俊哉兄」って呼ぶね」

「ああ。分かった」

「みんな、よろしくね」

「よろしく」

一通り挨拶が終わった所で、瑞希が思い出したように言った。

「あつ。脱線しちゃって、オーダー聞くの忘れてたね。みんな、何にする？」

「みんなランチで良い？」

薫が、三人に問いかける。

「薫のオススメなんだろう？なら、それで良いよ」

竜也が、薫を見る。

「俺もそれで」

「俺もっ!!」

俊哉と充が口々に言った。

「じゃあ、オーダー繰り返すね？ランチ4つでOK？」

「OK!!」

四人の声が揃う。

「食後のドリンクは、コーヒーと紅茶どっちが良い？」

瑞希が、続けてオーダーを取る。

「ホットコーヒーで」

四人の息がピッタリ合った。

「あはは。今、ハモっちゃったね。分かった。ランチ4つとホット4つ…と。すぐに持って来るからね。ゆっくりして行ってね」

「ありがとう」

そう言って瑞希は、左脇にトレーを挟み、店の中へ入って行った。

「さて…と。食ったらとりあえず、どうする？ここら辺のライブハウスにでも行ってみるか？」

俊哉が、タバコに火をつけながら三人に問いかける。

「そうだな。行ってみよう」

竜也が賛成する。

「みんな行くなら、俺も行く」

充も、それに従う。

「薫？悪いけど、この辺りのライブハウスに案内してくれないか？」

俊哉が、薫に頼む。

「よし。任してくれ」

薫が、胸を張る。

ランチが出来上がるまで、暫く四人は雑談をして時間を潰した。

店の中から、瑞希がトレイに乗せられた、ランチを両手に持って出て来た。

「お待たせ。ごめんね。遅くなっちゃって…。とりあえず、ランチ2つ持って来たよ」

そう言いながら、テーブルの上にランチを静かに置いた。

「後2つすぐに持って来るからね。もうちょっと待っててね」

そう微笑んで、瑞希はまた忙しそうに店の中へ戻って行った。

テーブルに置かれた、出来たてのランチを、四人が覗き込む。

ランチのメニューは、ハンバーグとアスパラの炒め物、ポテトサラダ、コンソメのスープにライスの組み合わせだった。

「美味そう…」

その時…。

「グーッ…」

四人の腹が一斉に鳴った。

四人は、顔を見合わせて笑った。

「あっははは。なんで、俺達、腹の虫までハモってんだ？」

そこへ、残りの2つを持って、瑞希が出て来た。

「お待たせ。残りの2つだよ。ごゆっくり」

「ありがとう。瑞希」

薫が、瑞希に微笑んでお礼を言った。

「うん」

瑞希は微笑んで、そのまま店の中へ入って行った。

「いただきます」

四人は、一斉に箸をつけた。

「おっ。美味しいな」

竜也が、目を丸くした。

「でしょ？安くて美味しい。このカフェは、俺達貧乏人の味方だよ」

薫は、笑いながら言った。

「ああ。何より、このカフェの雰囲気が良い。こんなカフェ、地元には絶対無いぞ？」

どうやら俊哉は、このカフェを気に入ったようだ。

「ハンバーグ美味めえ」

「充は、そればかりだな」

俊哉は、苦笑いしながら充を見た。

「あははは」

竜也と薫が笑う。

四人は、カフェのランチに舌鼓を打ちながら、楽しい昼食の一時を満喫していた。

Chapter 34

一通り食事も済み、それぞれがタバコをふかしながら、音楽の話をしていた。

そこへ、瑞希が現れた。

「もう、大丈夫かな？ キレイに食べてくれたんだね。ありがとう」

四人は、瑞希に微笑んだ。

「ご馳走様。美味かったよ」

それを聞いた瑞希は、恥ずかしそうに言った。

「良かった。実は、ランチ作ったの、あたしなんだ…。ちょっと不安だったけど、みんなにそう言ってもらえて嬉しいよ」

「えっ？ 瑞希の手作りだったの？ しまった…。ゆっくり味わえば良かった…」

薫は、残念そうに呟いた。

「あはは。大げさだよ、薫」

瑞希は、笑った。

「いやいや、これなら、きっと良いお嫁さんになれるんじゃないか？」

竜也が、瑞希を誉めた。

「もう。竜也まで」

瑞希はそう言って、顔を赤くしながら、竜也の肩を軽く押した。

「いや、ホントに美味かったよ。俺、このランチならもう一人分、食える自信があるよ」

「充。お前、ホントにバカみたいな食欲だな。「痩せの大食い」とは良く言ったもんだ…」

俊哉が、ため息をついた。

「でも、確かに美味かった。これなら、1000円近く取られても文句無いな」

俊哉も、笑顔を浮かべて満足していた。

「へへっ。みんな、ありがとう。あたし、ちょっと自信出ちゃった。このお皿とか下げて、コーヒー持って来ても大丈夫？」

「ああ。頼むよ」

薫が、瑞希に微笑んで頼む。

「じゃあ、ちょっと待っててね」

そう言うと、瑞希は慣れた手付きで、空の食器を積み重ね、持ってきたトレーに乗せる。

それを器用に、落とさないように左右の手の平に乗せて、店の厨房へ運んで行った。

コーヒーを待つ間、竜也が言った。

「あの子、ホントに良い子だな。真面目だし、明るくて物腰柔らかいし…。薫、狙っちゃえよ？」

「ええ…。俺、そんな自信無いよ。瑞希は確かに、可愛いし良い子だけど、俺なんか、絶対相手にされないよ…」

薫が、自虐的になった。

「確か、こんなヤツ、俺達の身近にもいたよな…。しかも、ついこの前まで…」

俊哉がそう言うと、竜也と充も声を合わせて言う。

「いたいた…」

三人の頭の中には、地元に置いて来た、静流の顔が浮かんでいた。

「えっ？誰？誰？」

薫が、三人の話題に首を突っ込む。

「あっはは。そういう風に、話に首を突っ込んで来る所も一緒だな」

俊哉が笑う。

「ええ…。誰だよ？」

なかなか教えてもらえない薫は、不満そうな表情を浮かべた。

「俺達のバンドのヴォーカルだよ。静流って言ってな。女の前じゃ、どうしても自分を出せない、「超」が付くくらい奥手なヤツがいてな。薫と、静流が似てるなあって、思ってたところだ」

「そうそう」

俊哉が言った後、竜也と充も声を揃える。

「へえ。静流ってヴォーカルがいたんだ。なんで、一緒に来なかったの？」

薫が、更に深く掘り下げる。

ちようどそこへ、瑞希がコーヒーを4つ、トレーに乗せて持ってきた。

「お待たせ。どうぞ」

瑞希が四人の前に、コーヒーが注がれたカップを静かに置いた。

「これ、ミルクとお砂糖ね。はい」

そう言って、四人の真ん中に、角砂糖の入った、コルクで蓋をしてある小瓶と、ミルクの入った小さな水差しを置いた。

「何の話してたの？みんな、すごく楽しそうだったけど？」

瑞希まで、興味津々だった。

「俊哉兄達のバンドのヴォーカルが、俺の性格と似てるらしいんだよ」

薫が、瑞希に簡単に内容を教える。

「へえ。薫みたいな奥手なタイプ、そうそういないと思ってたのに…。
いる所にはいるんだね。フフッ」

そう笑いながら、瑞希は薫を見た。

「で、その静流は、今、何してるのさ？」

話をはぐらかすように、薫が、俊哉に詰め寄った。

「あ？ああ。アイツな…。夢よりも、好きな女を取った」

俊哉が、笑顔で淡々と言った。

「へ？」

薫は、いまいち理解をしていない。

俊哉は、これまでの事を、薫と瑞希に教えた。

「ふうーん。俺、そこまで好きな人出来た事ないから、よく分らないや」

薫の反応はいまいちだったが、瑞希は違った。

「素敵な人じゃない。あたしは、話を聞いたただけだけど、すごく優しい人なんだっていうのは分かったよ。良いなあ。静流君の彼女さん…。そんなに思ってもらえるなんて…。あたしも、そんな彼氏欲しいな…」

そう言って、瑞希は薫の顔を覗き込んだ。

「な…、何だよ？」

薫が、少し戸惑う。

「はあ…。あたしには、まだまだ見つかりそうにない…か」

ため息混じりに、瑞希がぼやいた。

「ホラッ。薫、お前。瑞希は、お前に気があるぞ」

竜也が、小声で薫に耳打ちをする。

「え？」

「鈍いやツだなあ…。お前の顔見てばやいてんだぞ？瑞希は、お前に声をかけてもらいたいんだよ」

竜也が、更に薫に言った。

「でも…、俺…」

自信が無さそうな薫に、俊哉が気合いを入れる。

「お前、ここで行かなきゃ、男じゃねえぞ？」「据え膳食わぬは武士の恥」みたいに大げさじゃねえけどさ。こんなチャンス、滅多にねえぞ？夜になったら、ちゃんと瑞希に連絡してやれ。分かったな」

「あ…、ああ。分かった」

二人の気迫に気圧されて、薫は、瑞希に言った。

「瑞希？」

瑞希は振り向いた。

「何？」

「あ、あのさ……。今日は、ご馳走様。また、夜にでもメールして良
いか？」

薫の顔が赤くなった。

「ちゃんと、メールしてね？絶対だからね？」

瑞希が、薫に釘を刺す。

「あ…、ああ。絶対するよ」

「じゃあ、あたしは仕事あるから。みんな、ゆっくりして行ってね」

瑞希は、嬉しそうな表情で、店の中へ入って行った。

「何なんだ？ 一体…」

薫が、あっけに取られていた。

「ホントに鈍いヤツだな。瑞希はお前に惚れてんの。単純な理由。その証拠に、静流の話をした時、薫の顔を覗いたろ？ その後で、薫を横目で見ながら、ぼやいてた。ほぼ確定じゃねえか」

珍しく竜也が熱くなった。

「そうそう。お前、もう少し女心分かってやれ。その辺りは、静流とは違うな」

俊哉が、苦笑いを浮かべた。

「そうかな…？ 確かに、瑞希可愛いし、俺も、瑞希好きだけど…。下手な事言って嫌われないかな…？」

薫が、不安そうに俊哉と竜也を見る。

「大丈夫。上手く行くさ。男なら当たって碎けるくらいで行けよ」

竜也が、薫の後押しをする。

「薫？もう少し、自分に自信持て。お前なら大丈夫だ」

俊哉は、薫に微笑んだ。

その時。

「ああ…。コーヒー美味かった」

充が、場違いに間拔けな発言をした。

「お前はやっぱり、花より団子かよ…」

俊哉が頭を抱えた。

「え？何が？」

充は、空気を理解していなかった。

「まあ、お前らしいと言えば、お前らしいか…」

俊哉が、ため息をつきながら、苦笑いをする。

張り詰めた空気が、充の一言で一気に和んだ。

「さあ。コーヒー、すっかり冷めてしまったけど、飲んだら行くとするか」

俊哉が、三人をまとめる。

「賛成」

桜の散り始めた季節の昼下がりに。

とあるカフェでの、他愛の無い風景の一コマだった。

Chapter 35

「じゃあ、瑞希。ご馳走様」

そう言って、四人は席を立った。

「ありがとう。また来てね」

瑞希が、笑顔で見送ってくれる。

「ああ…。美味かったなあ」

満たされた腹を、充は「ポンポン」と軽く叩いた。

「ところで、薫？ライブハウスはここから近いのか？」

俊哉が、薫に問いかけた。

「ああ。10分くらいで着くよ」

四人は、雑談をしながら、ゆっくりとライブハウスへ向かった。

ふと、全員の足が止まった。

「…ここか？」

俊哉が、薫の顔を見た。

「そう。ここが、俺のバンド仲間達のホームグラウンドだよ」

四人の目の前には、5階建ての、大きな白いビルが立っていた。

三人は、地元のライブハウス以上の規模に、息を飲んだ。

「すげえ…。やっぱり出て来た甲斐があったな…」

竜也が、ビルを見上げる。

「ちなみに、1階と2階は楽器売り場だからね」

薫が補足する。

「もし、こんな場所で、俺達がワンマンやったとして…、会場が満員になったとしたら、俺達は、また一步夢に近付けそうだな」

俊哉は、今にもライブをやりたそうな表情を浮かべた。

「ここならさ、ドラムセットもう少しデカく出来そうだね」

充が嬉しそうに言った。

「今日は、3階以上は開いてないから、中、見れないけどね」

薫が、申し訳なさそうに、苦笑いを浮かべた。

「いや、雰囲気だけで十分だ」

俊哉は、拳を握り締めた。

「ようし…。やるぞ。絶対にやってやる」

俊哉達、三人は同じ事を思い、武者震いをしていた。

「ところで、薫は、ライブしないのか？」

竜也が、薫に問いかけた。

「うーん…。俺、今、バンド抜けちゃったからなあ」

薫が、頭を掻きながら言った。

「なんだ？ どうして？」

俊哉は、心配そうに聞いた。

暫く、薫は黙っていたが、突然、重い口を開いた。

「いやあ…。恥ずかしい事に、ケンカしちゃったんだよね。音楽の事とか、メンバー関係で…」

更に、薫は続けた。

「それは、かなり前からあったんだけど、この前、人間関係で、とうとう我慢出来なくなつて、俺がキレちゃってさ…。もう、辞めた」って、一方的に抜け出してやっただよ」

薫は、苦笑いをしながら、三人を見た。

「そうだったのか」

三人は、妙に納得した表情を浮かべた。

「まあ、人間だからな。しょうがない」

竜也は、薫を見て微笑む。

「その点、俊哉兄のトコは良いよね。みんな、仲良ししさ。やって楽しいだろ？」

薫が、羨ましそうに三人を見た。

「まあ、仲良いかどうかは知らないが…。俺達は、たまたま、巡り

合わせが良かったんだろう。たまに、小さな言い争いはあるが、ケンカはしないからな。それに、音楽の方向性も今の所、一致してるしな」

俊哉が微笑みながら、竜也と充を見た。

「ああ。俊哉の言う通りだ」

竜也と充が、声を揃える。

「良いなあ…。楽しそうで…」

薫が、三人を見た。

「…なあ？俺も、俊哉兄達のバンドに混ぜてくれない？」

薫が、唐突に三人に言った。

三人は目を丸くした。

「俺は、別に構わないが、コイツらがどうかな…？」

俊哉が、竜也と充を親指で指差しながら言った。

「俺も構わないぞ」

「俺も平気。薫となら楽しくやれそうだしね」

竜也と充も、歓迎する。

「じゃあ…」

薫の顔色が明るくなった。

「ああ。コイツらが良いって言ったんだ。どこに拒否する理由がある？」

俊哉が微笑んで薫を見る。

「みんなありがとう」

薫が、三人に深々と頭を下げた。

「ところで、お前、確かギターだったろ？俺達、ヴォーカルも欲しいんだが…」

俊哉が、薫に「誰か紹介しろ」と言わんばかりに言った。

「大丈夫。俺、前のバンドでギターヴォーカルしてたから。静流の代役は、俺に任せて」

薫が、自信ありげに胸を張る。

「そうか。だったら、問題無いな」

俊哉が、ホッとした表情を浮かべた。

「ただし、静流の代役に足るかどうかは分からないけどね…」

薫が、苦笑いをする。

「そんなもん、やってみなきゃ分からないだろ？」

「そうそう。やる前から駄目だって決めつける事ないじゃないか。やって駄目ならしょうがないけどさ」

竜也と充が口々に言った。

「みんなありがとう。俺、頑張るからさ。これからよろしくね」

「ああ。俺達の方こそ、これからよろしくな、薫」

こうして、更に新しくなったB－Raveは、夢へ向かって、また一歩、歩き始めた。

この後、B－Raveは更に大きく進化する事を、この時はまだ、誰も知るよしも無かった。

Chapter 36

話は、また静流達の所へ戻り…。

季節は、桜が散り、山の木々や、通りの街路樹達が青々とし始めていた。

あれから俺は、何社か面接を受けた。

が、話に折り合いがつかなかったり、社風が自分には合わなかったり…。

更に、不景気な世の中と言う「決して抗う事の出来ない事情」も手伝って、学歴も能力もない俺には、なかなか就職先が決まらなかった。

なかなか決まらず、俺の焦りは募る一方。

そんな時でも、麻紀は、優しく俺に語りかけてくれた。

「大丈夫だよ、静流。焦って決めても良い事ないよ？ 静流なら、き

っと見つかるから、焦っちゃダメだよ。だから、もうちょっと気長に探そう？」

「麻紀…」

不甲斐ない俺は、麻紀の優しさに、どれだけの元気と勇気をもらった事か。

「ありがとう。麻紀。ホントにありがとう」

俺は、麻紀に感謝してもし足りない程、元気づけてもらった。

「俺、絶対仕事見つけて、いつかは麻紀と一緒にになるから…」

その時の俺は、麻紀に、ただ、そう言うしかなかった。

「クソっ…。俺は、音楽取ったら何も出来ない…。ただの能無しじやねえか…」

俺は、自分の無能さに腹が立ち、齒痒さを覚えた。

それから、更に、2ヶ月が経った。

麻紀と出会って、2回目の夏。

麻紀が、ある日、俺に、とある観光ガイドのような雑誌を見せた。

「ねえねえ、静流？」

「うん？どうしたの？」

俺は、麻紀が手にした雑誌に目をやった。

「麻紀？水族館行きたいのか？」

「うん。ここの水族館って、いっぱい生き物があるんだって。イルカやアザラシの芸も可愛いらしいよ」

「へえ。楽しそうだね。じゃあ、今受けてる会社の内定出たら、一緒に行こうか？」

「うん。絶対だよ？約束だよ？」

嬉しそうな麻紀の声を聞くだけで、俺は幸せな気分だった。

「ああ。絶対に連れて行ってあげるよ」

俺は、麻紀に微笑んで約束をした。

それから、数週間が経ったある日。

俺は、麻紀のバイトが終わる頃に合わせて、マンションを出た。

「後、15分か…」

バイトが終わって、麻紀が出て来るまで、俺は、近くの路上に車を停めて麻紀を待った。

「よし。18時になった。麻紀が、もうすぐ帰って来るな…」

俺は、ソワソワしながら麻紀を待った。

「今日は、麻紀に大事な話があるんだ。麻紀、喜んでくれるかな？」

俺は、車の助手席のダッシュボードの中に、小さな四角い包みと、会社の内定通知を忍ばせていた。

運転席から、車の外へ目を向ける。

「おっ。帰って来たな」

俺は、麻紀が社員用の出入口が出て来るのを確認して、車から降りた。

「麻紀っ!!」

麻紀が、俺の方を見た。

「あっ。静流。ただいま」

「おかえり」

麻紀は、左右を確認して、ゆっくりと、俺に向かって歩き出す。

その時。

俺の左手の方から、一台の車が走って来た。

その車は、スピードを緩める事無く、止まる素振りも見せないまま、麻紀に向かって進んで来る。

俺は、とっさに走りながら叫んだ。

「麻紀っ！！危ねえっ！！避けろっ！！」

「えっ？」

一瞬、俺より早く、車が、麻紀に突っ込んで行く。

「キイイイイッ！！」

急制動をかけられたタイヤは、けたたましい摩擦音を辺りに響き渡らせた。

「ドンッ!!」

俺が、ふと、目にした光景は、とても信じられるような物ではなかった。

車に飛ばされ、数m先で、路上にぐったりと転がる麻紀。

それはまるで、冷たい人形のようにさえ感じられた。

俺は、急いで麻紀に駆け寄った。

「麻紀? 麻紀?」

俺は、必死に麻紀に呼びかける。

麻紀から返事は無かった。

「誰かつ!! 救急車呼んでくれっ!!」

俺は、辺りに群がる野次馬に大声で叫んだ。

俺は、麻紀に人工呼吸を試みた。

「う…」

微かに、麻紀から反応が感じられた。

でも、それはとても弱々しく、さっきまで元気だった麻紀が、まるで嘘のようだった。

俺は、麻紀の生きる力を信じて、ただ、ひたすら人工呼吸を繰り返した。

一時間は経ったように思えるくらい、救急車が来るまでが、とても長く感じた。

事故から、15分程経って救急車が到着。

麻紀は、担架に静かに乗せられ、救急車に運ばれた。

俺は、麻紀を轢いた車を運転していた男の所へ、ゆっくりと向かっ

た。

その男は、まだ若く、20代前半くらいだった。

車から降りて、放心状態になっていた男の胸元を掴み、男の顔を無言で、思いきり殴り飛ばした。

俺は、怒りや麻紀の痛みを、感情のままにぶちまけた。

「デメエ……!! 麻紀に、もし何かあったら、絶対に許さねえからなっ!!」

そう吐き捨てて、俺は、救急車に乗った。

「麻紀……。しっかりしろ……。頼むから……。また、声を聞かせてくれよ……」

俺は、麻紀の右手を力強く握り締めた。

病院に着くまでに、救急隊員が、麻紀に人工呼吸器を付け、応急処置を施す。

病院に着くと、救急搬送口から病院内へと入る。

そのまま麻紀は、検査と手術の為、手術室に運ばれて行った。

俺は、麻紀の手術中、一人、暗くなった待合室の長椅子にうつむいて座っていた。

俺の目から、涙が止めどなく溢れ出す。

両手を合わせ祈った。

「麻紀が、元気になるように…」

ただ、それだけを願った。

暫くして、麻紀の両親が、慌てて病院へやって来た。

俺は、麻紀の両親に、事故の一部始終を説明した。

そして俺は、病院の床に正座をし、頭を床につけて謝った。

「ごめんなさい。俺が、付いていながら…、こんな事に…。本当にごめんなさい…」

俺は、声が震えた。

麻紀の父親が、俺の目の前にしゃがみ込んで、優しく語りかけてくれた。

「何を、君が謝る必要がある？むしろ、私達の方が、君にお礼を言わなきゃいけない。君が、麻紀の傍でずっと介抱したり、声をかけてくれてたんだろう？ありがとう。もう泣くな。男の子だろう？麻紀は大丈夫。きっと、元気になるから…」

「お父さん…」

麻紀の父親が、優しい笑顔で俺を見た。

「そうよ。静流君。ありがとね。ほら、これで涙を拭きなさい…」

麻紀の母親は、目に涙を溜めて、俺にハンカチを差し出した。

「ありがとう…。お父さん、お母さん…」

麻紀の両親が微笑んだ。

「手術はまだ終わらないのか？」

麻紀の父親が、腕時計を見ながら言った。

「…はい」

俺は、言葉が出なかった。

俺は一人、トイレへ向かった。

トイレの洗面台に掛けられた鏡を見た。

「情けないヤツだな。お前は…。結局、好きな女、一人守れやしな
い…。所詮、お前は、ちっぽけな虫ケラのような存在だよ」

俺は、自分の情けなさ、不甲斐なさに怒りが込み上げた。

「クソッ」

「パリーンッ…」

気付いたら俺は、拳を握り締め、目の前の鏡を叩き割っていた。

俺の右手の甲から、赤い血が流れ出す。

「麻紀の痛みはこんなもんじゃないっ!!」

俺は、自分が許せなかった。

大切な人が、目の前で無惨な姿になる様子。

俺は、黙って指をくわえて見ているだけだった。

俺の心の中は、そんな情けない自分を、殴り飛ばしたい気持ちでいっぱいだった。

その時、鏡が割れる音に気付いた若い看護師が、トイレに慌てて駆け込んで来た。

「ちょっと、あなた、大丈夫？血がいっぱい出てるじゃない。ちゃんと手当てしないと…」

「良いです。このままで。アイツの…、麻紀の痛みに比べれば、こんなケガ…」

俺は、看護師の手を振りほどこうとした。

「駄目です。ちゃんと処置しますから。こっちに来てください」

看護師は、俺を叱り、嫌がる俺を無視して、無理矢理、処置室へ引っ張って行った。

俺の血は、止まる事を知らないくらいに流れ続けた。

右手の傷の処置が済み、包帯が巻かれた自分の手を見つめながら、俺は、病院の外へ出た。

タバコを口にくわえ、震える指先で火をつけた。

夕闇の空には、三日月が昇り、星が輝き始めていた。

「俺は、本当に情けない…」

夕闇の空を見上げ、自分を恨んだ。

俺が、外に出て暫くすると、麻紀の父親は、俺の事を気にしてか、俺の後を追うように、正面入口から外に出て来た。

「静流君…。そう、自分を追い込むな…。傷つけるな…。君の悲しそうな顔を見ると、私達も辛い。でも、麻紀はもっと辛いと思うぞ？」

麻紀の父親は、俺の右手を見ながら語りかけた。

「麻紀は、今、頑張っている。先生と麻紀を信じて、今は待とう…」

俺よりも誰よりも、麻紀の父親が一番辛いはずなのに、そんな時でも、俺の目を見て優しく励ましてくれた。

「…うん」

俺の頬を涙が伝って、地面にこぼれ落ちた。

「さあ。暗くなった。そろそろ終わるかもしれない。中へ入ろう…」

麻紀の父親に促され、俺は、病院の中へ戻った。

手術室の前では、既に麻紀の母親が待っていた。

俺達が、ちょうど手術室に着いた時、「手術中」の赤いランプが消えて、中から、一人の医師が出て来た。

「先生、麻紀はどうなんでしょうか？」

麻紀の父親が、落ち着いた声で医師に問いかけた。

医師が、重い口を開く。

「手術自体は、問題無く終わったのですが…。ただ…、打ち所が悪く、意識もまだ、はっきりしていません。後は、麻紀さんの回復力

次第ですが、回復したとしても、もしかすると、後遺症が出るかもしれないし…。暫くは安静にして、様子を見て行くかし…」

「そうですか…」

麻紀の両親は、医師の診断に肩を落とした。

俺は、うつむいたまま何も言えず、ただ、涙がこぼれ落ちるばかりだった。

Chapter 37

医師の説明を受け、俺達は麻紀の病室へ向かった。

入口のドアには、面会謝絶の札が付けられていた。

俺と麻紀の両親は、病室に、そっと入って行く。

麻紀は、人工呼吸器を付けられ、額には包帯が巻かれ、頬には、ガ
ーゼが貼られていた。

俺は、静かに麻紀の傍に近付いた。

頭をそっと撫でて、意識の無い麻紀に話しかけた。

「ごめんな…。麻紀…。痛かっただろ…？守ってやれなくて…、ホ
ントにごめん…」

痛々しい麻紀を見ると、また、涙が溢れ出してしまった。

麻紀の両親は、ずっとうつむいたまま黙っていた。

「お父さん、お母さん？」

俺は、絞り出すような声で、麻紀の両親に問いかけた。

「どうした？ 静流君？」

「今日、ここにいても良いですか…？ 麻紀の傍にいても良いですか…？」

「ああ。そうしてやってくれないか？ その方が、麻紀も喜ぶだろう…」

麻紀の父親は、俺の願いを聞き入れてくれた。

「じゃあ、今日は、私達は帰るから…。静流君は、麻紀の傍にいてやってくれ…。明日の朝、必要な物をまた、届けに来るから。だから、その時まで、一緒にいてやってくれ…」

麻紀の父親は、涙を堪えながら言った。

「じゃあ、静流君？麻紀の事頼むわね」

麻紀の両親は、俺を氣遣って、俺に、麻紀の事を託してくれた。

「…はい。ありがとうございます」

そして、麻紀の両親は、静かに、病室から出て行った。

俺は、麻紀の手を取り、ずっと握り締めていた。

意識の無い麻紀から、麻紀の温もりを感じた。

「麻紀…。頑張ろうな。そうだ…。麻紀に報告があるんだ…。今日、ウチに、会社の内定通知来たんだ…。麻紀に一番に教えたかったんだぞ…。？だから…。約束してた水族館行けるから…。だから、元氣になったら、一緒に行こうな…。」

俺は震える涙声で、意識の無い麻紀に、精一杯微笑んで、ただ語りかけるだけだった。

「ホントに？おめでとう。良かったね。静流なら、きっと大丈夫だ

「思ってたよ。あつ。約束の水族館、ちゃんと連れて行ってね？」

そんな声が、今にも聞こえて来そうな気がした。

俺は、涙で滲む麻紀を、ずっと見ていた。

翌日。

ふと、気が付くと、麻紀の母親が病室に来ていた。

どうやら、俺は、いつの間にか、寝てしまっていたらしい。

「おはよう。静流君。ご苦労様」

麻紀の母親が、微笑んだ。

「あ…。おはようございます。ごめんなさい。いつの間にか寝ちゃって…」

「良いのよ。あなたも疲れたでしょ？麻紀の為にごめんね…。朝ご飯、パンしか持って来てないけど、食べれたら食べてね」

麻紀の母親の気遣いが、俺には、とてもありがたかった。

「ありがとうございます」

「家には、連絡しなくて大丈夫？」

麻紀の母親の一言で、俺は、我に返った。

俺は慌てて、ケータイをジーンズの後ろのポケットから取り出して見た。

待ち受け画面に表示された、

「着信あり 20件」

のメッセージ。

着信履歴を表示させると、履歴は、姉からの着信でいっぱいになっていた。

「ちょっと、電話して来ます」

そう言って、俺は、病院の外に出て、姉に電話を掛けた。

「もしもし？ 静流？ 何かあったの…？ 電話しても全然出ないし…」

姉が、心配そうな声で言った。

「姉ちゃん…。俺、どうしよう…？ 麻紀が…、麻紀が…」

俺は、つい取り乱してしまった。

「麻紀ちゃんがどうしたの？ 落ち着いてゆっくり話さない？」

俺は、姉に昨日の出来事を伝えた。

「…えっ？ 静流？ 今、どこにいるの？」

姉は、俺の話から、ただならぬ事態だという事を察した。

「中央病院…」

「すぐに行くから、そこで待ってなさい」

そう言って、姉は電話を切った。

俺は、ケータイを握り締め、ただ呆然と、夏の朝の青空を見上げるばかりだった。

電話から、30分程で姉が病院に着いた。

病院入口の前で、姉と合流し、麻紀の病室へ向かった。

「コンコン…」

「失礼します…」

姉の目には、痛々しい姿の麻紀が飛び込んで来た。

姉は、言葉を失ったように、手を口に当てながら、

「麻紀ちゃん…」

と、だけ呟いた。

その時、病室のドアが開き、麻紀の両親が病室に入って来た。

姉は、麻紀の両親に気付き、挨拶をした。

「はじめまして。あたし、静流の姉の、霞遥と申します。いつも、弟がお世話になって…」

麻紀の両親が微笑んで、姉に言った。

「これは、ご丁寧に。ありがとうございます。いつも、麻紀が良くしてもらってるみたいで…」

「いえ、そんな…。とんでもないです…。それより、麻紀ちゃんがこんな目に合っちゃって…」

姉の目から、涙がこぼれ落ちた。

「ありがとう。お気遣いだけで嬉しいですよ。麻紀の為に、わざわざ来てもらって…。みんなに、こんなに心配してもらって…。麻紀は、幸せ者だな…」

麻紀の父親は、姉に優しく話かけた。

「あの…。これ少ないですけど、お見舞いです。意識が戻ったら、麻紀ちゃんに何か買ってあげてください…」

そう言って、姉はのし袋を、麻紀の父親に渡した。

「いえいえ、そんなに気を遣わないで。私達はお気遣いだけで嬉しいんだから…」

麻紀の父親は、のし袋を受け取ろうとはしなかった。

「良いんです。ホントに気持ちだけですから…。麻紀ちゃん、すごく良い子で…。あたしの妹みたいで可愛くて…。だから…、麻紀ちゃんに何かあげてください」

姉の熱意に負けたのか、麻紀の父親は言った。

「そこまで言われるのなら…。ありがたく、頂きます。それにしても、あなたといい、静流君といい、ご両親がいないのに…。立派なご姉弟だ…」

麻紀の父親が微笑んで、俺達、姉弟を見る。

「いえ…。立派だなんて、とんでもないです」

姉は、謙遜して言った。

「いやいや。今時、いないですよ。なかなかね…」

麻紀の父親は続けた。

「じゃあ、私は、今日は、どうしても外せない仕事があるので、これで。静流君、遥さん、麻紀をお願いしますね」

そう言って、麻紀の父親は、母親にのし袋を渡して病室から出て行った。

「ホントに、麻紀の為にありがとう。あなた達を見てると、ホントに私達、親って何だろう？って思わされます…」

麻紀の母親が、遠い目で麻紀を見つめた。

「あの子ね…。家では、静流君の話ばかりしてくれるの。その時の麻紀は、ホントに嬉しそうだから…」

麻紀の母親の目から、涙がこぼれる。

「主人と二人、ホントにあなた達には感謝してるわ。ホントにありがとう…。麻紀を…、麻紀を、大事にしてくれてありがとう…」

そう言うと、麻紀の母親は泣き崩れてしまった。

俺達は、母親の様子を見ているのが辛くて、涙が止まらなかった。

Chapter 38

その翌日も、俺は、麻紀の傍にしようと、病院へ向かった。

「コンコン…」

ドアをノックして、病室へ。

病室には誰もおらず、ただ、静かに眠っている麻紀だけがいた。

「麻紀…」

俺は、そっと麻紀の元へ。

ベッドの脇の椅子に腰掛け、麻紀の手を握る。

「麻紀…。偉いな…。よく頑張ってる…」

決して答える事のない麻紀に、俺は、必死に話かけた。

ただ、「奇跡」だけを信じて。

昼を回った頃、麻紀の母親が、病室に戻って来た。

「ああ。静流君。いらっしやい。いつも来てくれて、ありがとね」

麻紀の母親が、俺に微笑みかけてくれる。

「お母さん？先生は何て…？」

俺は、今朝の回診時間の事を聞いた。

「今は、薬で落ち着いてるんだって。暫くはこのままだけど、そのうち目を覚ますかもしれないからって。だからね、心配しなくても大丈夫よ。きっと、元気になるから」

「良かった…」

麻紀の母親の言葉に、俺は、安堵した。

きっと、麻紀の母親は、俺に気を遣ってくれたのかもしれない。

麻紀の具合は、思った以上に悪いのかもしれない。

でも、俺は、母親のその言葉を信じる事にした。

「麻紀……。良かったな……。早く元気になろうな……」

俺は、麻紀の頭を優しく撫でた。

日がすっかり落ちる頃、俺は、一旦、家に戻ろうと病院の外に出た。

夕闇の空を見上げると、流れる薄紫の雲の間から、星が輝き始めていた。

俺は、家に戻ってシャワーを浴びた。

浴室から出て、自分の部屋で着替えていると、突然、ケータイが鳴った。

着信は、知らない番号からだったが、俺は、何のためらいもなく電話に出た。

「もしもし？ 静流君？」

電話の声の主は、麻紀の母親だった。

「あのね、悪いんだけど、これから病院まで、また来れるかな？」

「はい。大丈夫です。何かあったんですか？」

「ううん。先生が、検査の結果が出たからって。だから、静流君も一緒に、先生の話聞こう？」

麻紀の母親は、俺に気を利かせてくれた。

「分かりました。すぐに行きます」

そう言うと、急いで準備をし、姉に検査の結果を聞いて来る事を伝え、マンションを飛び出した。

さつきまで、輝いていた星は、雲の中へ消えて、暗闇が夜空を覆っていた。

病院に着くと、入口で麻紀の父親が待っていた。

「待っていたよ。さあ、行こうか？」

麻紀の父親は、優しく俺の肩を叩いた。

「はい」

その時。

「大変です。藍沢さん。良かった、彼氏さんも一緒に…。とにかく、すぐに来てください」

ひどく慌てた様子で、看護師が俺達を呼びに来た。

俺達は、ただ事ではない事態だと悟り、急いで病室へ向かった。

病室に入った、俺の目に飛び込んで来た光景…。

俺は、それを一生忘れる事が出来なかった。

それは、目を疑う光景だった。

「麻紀さんの容態が急に悪くなって…」

若い看護師が、唇を噛んだ。

医師が必死に、麻紀の蘇生を試みていた。

「麻紀っ！！しっかりしろよ。元気になるんだろ？」

俺は、必死で麻紀に呼びかけた。

その時。

麻紀がうつすらと目を開けた。

俺の方を見ながら、麻紀は、何かを伝えたそうに口を弱々しく動か

した。

俺は、急いで麻紀に駆け寄り、麻紀の手を握った。

「麻紀？　どうした？」

俺は、顔を麻紀の顔に近付けた。

「し…、しず…る…。あ…、あ…り…と…う…」

そう言うと、麻紀の目から一粒の涙が、頬を流れ落ち、そのまま眠るように動かなくなった。

握った麻紀の手から、力が抜けて行くのが分かった。

「…麻紀？　なあ…？　どうした？　なあ…？　目を開けてくれよ…？　名前呼んでくれよ…？　声を聞かせてくれよ…？」

俺は、気が動転してしまった。

「おい…、嘘だろ？　なあ？　麻紀？　嘘だって言ってくれよ？　起きろよ

？なあ？一緒に水族館行くんだろ？頼むから、目を開けてくれよ。
俺の手を握ってくれよ…。麻紀、何とか言えよっ…」

錯乱状態の俺の目から、涙が一気に溢れ出した。

麻紀の肩を揺さぶり、俺は、必死で麻紀に呼びかけた。

だが、麻紀は目を閉じたまま動かない。

「先生っ！！麻紀を助けてくれよ？俺、何だってするからさ？頼むから、麻紀を助けて…」

俺は、医師の白衣を掴んで必死に訴えた。

麻紀の母親は、崩れ落ちるように床に座り、声をあげて泣いた。

麻紀の父親は、ただうつむいて唇を噛み締めていた。

「先生頼むよ…。麻紀を…。麻紀を…」

「残念ですが…」

医師はうつむいて、ただ、そう言うだけだった。

「何で、麻紀がこんな目にあわなきゃいけないんだ？おかしいだろ？何で…？俺達、結婚する約束もしてたのに…。幸せだったのに…」

俺は、麻紀の顔を抱き、人目もはばからず、泣き崩れた。

暫くして、涙声で俺は、医師に言った。

「先生？麻紀、今寝てるんだろ？明日には目を覚ましますよね？先生、何とか言ってくれよ…」

「静流君…。もう良いんだ。麻紀は、よく頑張った…。もう、ゆっくり眠らせてやろう…」

麻紀の父親が、取り乱す俺を制止する。

麻紀の父親の目から、涙が流れる。

俺は、その場に崩れ落ちた。

「うわあああ…」

そんな、俺達を気遣ってか、医師達は、病室を出ようとしていた。

「お父さん、お母さん。それに、先生…」

三人が、俺を見た。

「お願いがあります…。この部屋、暫く、俺と麻紀だけにしてもらえませんか…?」

麻紀の両親は、涙を流しながら微笑んだ。

「ああ。良いよ。静流君は、麻紀の旦那さんだから…。最期くらい、麻紀と一緒にいなさい…。先生？娘夫婦を二人きりにしてやっても
らえませんか…?」

麻紀の父親も、そう言って、医師に掛け合ってくれた。

「もちろん、良いですよ。明日の朝、また来ます。それまでは、二

人でゆっくりしてください。では、私達はこれで…」

医師は快諾して、病室を後にした。

「じゃあ、私達も邪魔したら悪いから…。母さん、少し出ようか？」

「そうね…。静流君？麻紀の事よろしくね…」

そう言って、麻紀の両親も病室を離れた。

「みんな…。ありがとう…」

俺は、麻紀のベッドの窓側に腰掛け、動かなくなった麻紀をそっと起こして抱き締めた。

「麻紀…。まだ…。あったかいじゃん…」

まだ温もりが残る、麻紀の身体が余計に、悲しみを誘う。

俺は、力強く麻紀を抱き締めた。

俺は、麻紀の頭を膝の上に乗せ、頭を撫でながら、麻紀に優しく語りかけた。

「麻紀？俺達が出会えた事、俺は、ホントに嬉しかった…。幸せだよ？目を覚ましたら、絶対に、水族館に行こうな」

麻紀の頬に、一粒の涙が落ちた。

「そうだ。忘れてた。麻紀…。これ…」

そう言いながら、俺は、ジーンズのポケットから、小さな箱を取り出した。

「麻紀が目を覚ましたら、渡そうと思っていたんだ…」

俺は、麻紀の左手の薬指に、箱から取り出した小さなダイヤの指輪をはめた。

「俺と、結婚して欲しくて…。ちょっと無理したけどね…。良く似合うよ。麻紀」

「嬉しい。ありがとう。静流。大事にするね」

そんな声が聞こえて来そうだった。

「麻紀？覚えてるか？」

そう言いながら、俺は、麻紀との昔話を始めた。

麻紀と出会った頃の事、花火をした事、麻紀の誕生日の日の事、クリスマスの日のこと…。

挙げれば、キリが無いくらい、麻紀には色々な、たくさんの思い出をもらった。

優しさをもらった。

愛をもらった。

幸せをもらった。

「麻紀…。今まで、ありがとう。俺は、ホントに幸せだったよ」

ゆっくりと二人だけの時間が流れる。

気が付けば、俺は、麻紀が好きだった歌を口ずさんでいた。

夜がだんだんと、朝に近付く。

ゆっくりと夜が明ける。

俺は、いつの間にか冷たくなった麻紀を、両腕で強く抱き締めていた。

「今まで、ありがとう。麻紀…。俺は、ずっと、麻紀を愛してるよ…」

Chapter 39

麻紀と迎えた、最期の朝。

俺は、麻紀の右手の薬指から、お揃いの唐草模様の指輪を外した。
それを、自分の首に掛けてある、シルバーのネックレスのチェーンに通した。

「コンコン…」

ドアを軽く叩く音がした後、看護師達と麻紀の両親が病室に入ってきた。

「麻紀…。ありがとう。守ってやれなくて、ごめんね…」

俺はそう言って、麻紀の頬に最期のキスをして、立ち上がった。

「静流君…。もう良いのか…?」

心配そうに、麻紀の父親が俺の顔を覗き込む。

「ええ…。十分です…」

涙を堪えて、そう答えるのが精一杯だった。

俺の心の中には、笑顔の麻紀が映っていた。

「静流…。今まで、ありがとう。一緒にいれなくて…、約束守れなくて…、ごめんね…」

麻紀の声が、確かに耳に響いた。

振り向いて麻紀を見ても、麻紀は、もう動かない。

麻紀の声も、呼吸する音さえも、もう、聞く事が出来ない。

俺は、涙を堪えて病院を飛び出した。

外は、麻紀が悲しんでいるかのように、雨が降っていた。

俺は、涙をごまかす為に、雨に打たれながら、ただ、麻紀が旅立った空を見上げていた。

「麻紀…。ありがとう…。バイバイ…。俺もいつかは、そっちへ行くから…」

俺は、ずぶ濡れになりながら、一人静かに泣いた。

俺が、マンションへ帰った時には、既に昼を回っていた。

「おかえり…。どうしたの？びしょ濡れじゃない…」

姉が心配そうに、俺を見つめた。

姉の顔を見た途端、堪えていた悲しみが、一気に溢れ出す。

「姉ちゃん…。麻紀…。死んじゃった…」

俺は、姉の胸の中で、子供のように声をあげて泣いた。

「うわあああ…」

「そっか…。麻紀ちゃん…。駄目だったんだ…。ちゃんと、お別れしなきゃね…。明日、一緒に、麻紀ちゃんの所へ行こ？」

姉は、目に涙を溜めて、ずぶ濡れの俺を、優しく抱き締め、そして頭を撫でた。

「うん…」

その日、俺の目からは、枯れる事を知らない程、涙が流れ続けた。

麻紀との、最期のお別れの日。

その日は、前日の雨が嘘のように晴れ渡り、どこまでも青い夏空が広がっていた。

姉に付き添われ、俺は、麻紀に最期のお別れを言った。

「麻紀…。ごめんね…。俺、守ってやれなかった…。ごめんね…」

俺は、まるで眠っているかのような、純白の死装束に着替えた麻紀を見つめた。

今にも、目を覚まして起き上がりそうな麻紀は、とても、死んでい
ると思えなかった。

そんな麻紀を見ると、余計に悲しみや悔しさが込み上げて来る。

「どうせなら、こんな純白の死装束じゃなくて、純白のドレスを着
せてやりたかった…」

俺はそう呟いて、涙を我慢する為に、天井を見上げた。

俺の横で、麻紀の亡骸を見た姉は、声を押し殺し、うつむいたまま、
すすり泣いていた。

「なんで、麻紀ちゃんが…？なんで、こんなに良い子が、こんな事
にならなきゃいけないの…？おかしいわよ…。なんで…？神様は酷
いよ…」

姉は、そう怒りを顕にした後、涙を流しながら麻紀を見つめ、最後
に小さく呟いた。

「麻紀ちゃん…。静流の事、良くしてくれてありがとね…。麻紀ちゃん、あたしの妹みたいで、可愛かった…。あたしも、麻紀ちゃんが大好きだよ？痛かったでしょ…？辛かったでしょ…？でも、もう大丈夫だからね…。今は、ゆっくり休んでね…」

姉は、麻紀の頭を優しく撫でながら、涙声でそう言って立ち上がり、指で涙を拭いながら、口にハンカチを当て、逃げるようにその場を離れた。

多分、姉は、残酷すぎる現実を受け入れられなかったのだろう。

俺は、流れる涙を指で払い、麻紀の頬を優しく撫でた。

「麻紀…。今まで、ありがとう。幸せだったよ…。俺、麻紀に出会えてホントに良かった。ゆっくり休みなよ？おやすみ…。ずっと、愛してるよ…」

そう言って、麻紀の顔の横に、静かに花束を置いた。

麻紀の左手の薬指には、俺がプレゼントした、ダイヤの指輪が悲しく光っていた。

無情にも、時間は過ぎて行き、とうとう、麻紀と、永遠のお別れの時がやって来た。

麻紀の眠る柩の四隅に、釘が静かに打ち込まれる。

俺は、その様子をただ呆然と見つめていた。

「静流君…」

その様子を見守っている俺に、麻紀の父親が小さな金槌を手渡した。

「…うん。麻紀…。バイバイ…」

俺は、涙で滲む手元の釘を、ゆっくりと、優しく叩き、少しずつ、麻紀の眠る柩に打ち込んで行った。

麻紀の眠る柩が、静かに黒い車に乗せられる。

「麻紀…。嫌だっ！！行かないでくれ…。俺、一人になるの、嫌だ…。約束したじゃん…。ずっと一緒だって…」

俺は、麻紀の父親の制止を振り切るように、麻紀の乗せられた車に向かって、叫びながら追い掛けようとした。

その様子が、見ている者の悲しみを誘った。

「うわああああ…」

俺は声を上げ、その場に崩れるようにうずくまった。

姉が、優しく俺に手を差し出した。

「静流…？麻紀ちゃんの所へ行こう？麻紀ちゃん、きっと、静流を待ってるよ…？」

姉に手を引かれ、俺は泣きながら、送迎用のバスに乗った。

「静流君…。ごめんね…。ホントにごめんね…」

麻紀の母親が、俺と姉が座っている席の所へ来て泣いて謝った。

「お母さんは悪くないよ…。悪いのは、俺だから…。だから、謝ら

ないで……。傍にいたのに、目の前にいたのに……。何も出来なかった……。俺は、麻紀を守ってやれなかった……。お母さん、俺の方こそ、ごめんなさい……」

俺は震える声で、麻紀の母親に謝った。

そのやり取りを姉は、ただ黙って見ていた。

「ホントにありがとね……。静流君……。静流君は、ホントに麻紀の事を大事にしてくれた……。ホントにありがと……」

麻紀の母親は、泣きながら、俺の手を握り締めていた。

俺は、その場から視線を外すように、窓の外を見た。

青い空には、白い雲が浮かんでいた。

麻紀と過ごした、あの頃のように……。

「麻紀……。今まで、ホントにありがと。俺、幸せだったよ。麻紀、よく頑張ったね。今は、ゆっくり休みなよ……。俺、麻紀の分も、一生懸命、頑張るから……。ちゃんと見ててくれよ……。いつかまた、俺

達が会えるその日まで…」

俺は、胸元にある麻紀の形見の指輪を握り締め、静かに心の中で誓った。

俺の頬を、冷たい雫が伝う…。

バスは、全員が乗った事を確認して、葬儀場から出て行く。

バスの中で、俺は、自分に対する、自責の念でいっぱいになり、今にも押し潰されそうになった。

姉は、うつむいたままの俺を見て、ただ優しく肩を抱き締め、頭を撫でただけだった。

麻紀との最期が、刻々と近付く。

火葬場で、最期に、麻紀の顔を目に焼き付ける為、俺は、麻紀の顔をずっと見つめた。

麻紀とのお別れの挨拶を済ませ、本当に、これが俺と麻紀の最期の時となった。

暗い長細い穴蔵に、麻紀の柩が納められ、俺達の世界と、死んだ者達の世界とを分けるボタンが、容赦なく押された。

俺達と、麻紀の最期の別れの時…。

俺が、麻紀を見送る、最期の時…。

俺は、それを見ているのが辛くて、今にも逃げ出しそうになった。

そんな弱い俺を、逃げ出さないように、姉は、しっかりと掴んで離さなかった。

一通りの儀式が終わり、俺は、重い足を引き摺るように、フラフラとさまよい歩いていた。

建物の壁際に設置されたベンチに、壁にもたれ掛かるように座る。

俺は、虚ろな目で、麻紀が、一人ぼっちで旅立った空を見上げた。

「静流？麻紀ちゃん、良い顔して眠ってたね…？静流が、ここへ来

たから麻紀ちゃん、きつと安心したんだよ。だからね…？泣かないで…？あたしだって辛いけど、泣いてたら、麻紀ちゃん、悲しんじやうから…。だから、静流も微笑お？麻紀ちゃんを微笑って送ってあげなきゃ…」

姉は、俺の横に座り、俺を元氣付けようと必死だった。

「…うん」

俺は、ただ一言、そう言い返したただけだった。

俺が失ったものは、計り知れないくらいに大きかった。

この先、俺は、生きる糧をどのように見つければ良いのか…。

どのように生きて行けば良いのか…。

完全に見失ってしまっていた。

前を見るのが怖くなり、俺は、歩みを止めた。

そして、この世界に残された俺は、麻紀の残した面影に、残り香に、優しさに…。

ずっと、もたれ掛かっている事しか出来なくなってしまった。

大切な思い出と、麻紀の笑顔と面影だけを、ずっと頭の中に思い描いて…。

Chapter 40

麻紀がいなくなって、早、一ヶ月が経った。

秋はもう、すぐそこまで来ていた。

あれから俺は、心に大きな喪失感が生まれ、何をしても、生きた心地がしなかった。

俺は次第に、部屋に閉じ籠もる事が多くなってしまい、外の世界と関わる事を、恐れるようになってしまった。

食事をすれば、身体が受け入れず、吐き出す事が多々あり、眠ろうとすれば、あの日の悪夢が頭の中を駆け巡り、うなされて飛び起きるといった事が、ほぼ毎日続いた。

俺は、ある日、無理矢理姉に連れられ、とある病院に行った。

医師の診断によれば、

「麻紀の事故死のショックによる、精神疾患である可能性が高い」

という事だった。

カウンセリングと、薬による治療が並行して行われる事になった。

一週間に一度、病院に行く以外は、一日中、部屋に閉じ籠もった。

「静流？病院行くよ？」

姉が、部屋のドアを開けた。

俺は虚ろな眼差しで、ただ窓の外を見つめていた。

「静流…」

そんな俺を、見ている姉も辛かっただろう。

それでも、姉は、俺の回復を信じて、祈るような思いで、病院まで連れて行く。

こんな生活が、長く続いていた。

そんなある日。

「静流…？入るぞ？」

優しいような男の人の声が、部屋のドアの向こう側から聞こえた。

俺は、ただベッドの上で、壁に寄り掛かって座り、虚ろな表情で、窓の外の空を見ていた。

「静流…」

声の主は、巧さんだった。

巧さんは、俺の横に座り、静かに語りかけた。

「静流？俺だって、お前の気持ちは、痛い程分かるぞ…？辛かったよな…？悔しいよな…？相手を許さねえって気になるよな…？俺だって、遥に何かあったらって思うと怖い…。きつと、お前みたいになっちゃおうかも知れない…」

俺は無言のまま、窓の外の流れる雲を見つめた。

「だけどな？それだけじゃ、何も生まれない…。前にも進めない…。それに…、今のお前を、麻紀ちゃんが見たら…、悲しんで泣いてしまうぞ…？だからな…、静流。焦らなくて良い。頑張らなくて良い。お前のペースで良いから、少しずつ、また日の光…浴びてみないか？別に今日じゃなくても、明日でも、明後日でも、来年だって良い。だから、麻紀ちゃんが、お前を見渡せるように…、お前の顔を見れるように…。お前が少しでも、外に顔を出さないと…。ほら。そのベランダでも良いから。麻紀ちゃんは、きつと、お前を見つけてくれるから…」

巧さんの言葉に、俺の目から、無意識の内に涙がこぼれた。

「…うん」

「良し」

そう言って、巧さんは、俺の頭を微笑んで優しく撫でた。

「静流？気晴らしにギターでも弾いてやろうか？」

巧さんはそう言うと、部屋の隅に立て掛けてある、俺のギターを取った。

そして、その場にあぐらをかいて座り、ギターを弾き始めた。

部屋の中には、ギターの切ないメロディーが流れる。

俺は黙って、そのギターの音色に耳を傾けた。

元気だった頃の麻紀が、頭の中に甦る。

「静流。元気出して？」

麻紀の声が、耳に響く。

俺は、涙が止まらなかった。

どんな形でも良かった。

麻紀が、生きていてくれさえすれば…。

俺が、麻紀の手足になるつもりでいた。

だけど、現実はとても残酷だった。

俺は、

「涙は枯れる事を知らない」

という事を、初めて知った。

俺は、一人の女性に出会って変わった。

それまでは、何があっても、一滴の涙すら流さなかった俺が、たった一人の愛する人の為に、嫌と言う程泣いた。

俺自身が、それを信じられなかった。

ギターを弾き終えた巧さんは、部屋を出る直前に言った。

「静流？今度は、麻紀ちゃんの為だけに歌ってみないか？麻紀ちゃ

んに、一つでも多く、お前の歌声を届けてやるんだ。きっと、麻紀ちゃんも喜ぶし、お前の生きる意味にもなるはずだ。だから、ゆっくりで良いから、また、お前の歌、天国の麻紀ちゃんや、ここにいる俺達に聴かせてくれ…」

巧さんは、優しく微笑んだ。

そして、ドアを開けながら言った。

「音楽は良いぞ。絶対に裏切らないからな。お前が大切に思えば思う程、お前の大切な人達に、その気持ちは、絶対に伝わるからな…」

そう言い残して、巧さんは部屋を出た。

俺は、一人で考えていた。

開け放たれた窓の外からは、近所の公園ではしゃぐ、子供達の声が聞こえた。

窓の外を、薄紫の雲が流れて行った。

その夜。

俺は、葉の影響も多少あるが、久しぶりに睡魔に襲われた。

夢うつつに見た光景。

それは、とても信じられなかった。

「静流…？どうしたの？」

懐かしいような、心が安らぐような、そんな優しい声が、どこからともなく聞こえて来る。

ふと気が付いて、ゆっくりと頭を上げると、俺の目の前には、元気だった頃の麻紀がいた。

「麻紀…。良かった。生きてたんだ…」

俺は、嬉しくて微笑んで麻紀を見つめた。

「やっと、微笑ってくれたね。あたし、静流の笑顔、好きだよ？だから、悲しまないで…。静流は、ずっと笑っててね？」

麻紀は、微笑んで俺を見た。

「ああ。もちろん。麻紀の為なら何でもするよ。それよりも、どうしたの？こんな夜中に？」

俺の心の中は、思わぬ麻紀との再会で、驚きと安堵、喜びが交錯していた。

「だって…。静流が悲しそうなんだもん…。こんな静流見るの、あたしは初めてだから…。心配したんだよ？」

麻紀は、心配そうな顔で俺を覗き込んだ。

「そっか…。悪かったよ、心配掛けて…。ごめんな…」

俺は、麻紀に申し訳なく思い、苦笑いを浮かべた。

「もう。静流は、あたしに謝ってばかり…。何も悪い事してないでしょ？」

麻紀は、優しい表情で俺を叱った。

「そっか…。俺は、俺なりに、麻紀を守ってやれなかった事が辛くて…。だから、悪い事したなって…」

「だったら、謝るのは、あたしだよ？ 静流をいっぱい泣かせちゃった…。あたしの大好きな静流の笑顔、曇らせちゃったね…。ごめんね…」

麻紀は、涙を流して俺に謝った。

「ううん。そんな事ないよ。麻紀がいるのが分かったから、俺は、安心したよ」

「良かった。いつもの静流に戻ってくれた…」

麻紀は、涙を指で払い、優しく微笑んだ後、少し淋しそうな表情を浮かべ、俺に、こう問いかけた。

「ねえ？ 静流は、いつ、あたしの為に歌ってくれるの？ それとも、歌う事、もう辞めちゃったの…？」

「まさか。ちょっと疲れて休んでただけだよ」

俺は、淋しそうな麻紀に、優しく微笑みかけた。

「良かった。じゃあ、また静流の歌、聴けるんだ？楽しみ」

麻紀は、あの頃のままの、無邪気な満面の笑みを浮かべた。

俺は、麻紀のこの笑顔に、どれだけ救われ、元気付けられただろう。

「ああ。任せてくれ。いっぱい、麻紀に聴かせてあげるから」

「ありがとう。約束だからね？楽しみにしてるからね？じゃあ、あたし…、もう、行かなきゃ…。今は、もう会えないけど…。淋しいけど…。でも、静流が思ってくれたら、いつでも会えるから…。あたしは、静流の心の中にいるから…」

「ああ…。分かったよ。約束だ。俺、頑張るよ。麻紀の分まで、精一杯生きて、歌うから…。だから、麻紀？またね…？」

「うん。またね…。あたし、静流の心の中で、静流の歌、ずっと楽しみにしてるから…」

「ああ…」

二人の会話が終わった途端、急に、辺りが眩しい光に包まれた。

俺と麻紀は、その光の中に飲み込まれて行った。

ふと気がつくと、俺は、真っ暗な自分の部屋のベッドの上で、壁に寄り掛かって座っていた。

外は、ゆっくりと夜明けが近付いていた。

窓のカーテン越しに、ゆっくりと明るくなって行くのが分かった。

「今日は、きっと良い天気だな…」

今までの俺が嘘のように、気分は晴れ渡り、外の世界にも、また、少しずつ興味が湧いて来た。

俺は、また麻紀に助けられたようだ…。

Chapter 41

その日を境に、俺の病状は少しずつ良くなって行った。

でも、完全に病気が克服出来た訳ではなかった。

ふとした拍子に、発作的に精神が不安定になり、呼吸困難になったりする事があった。

医師の診断では、

「とりあえずは、日常生活には問題無い範囲までは、回復して来ている」

と言われたが、同時に、

「余り、心に負担を掛けるような無理は、絶対にしない事」

と言う注意も受けた。

その上で、葉はまだまだ、手放せそうにない。

自力で、病院に通える程になった頃、俺は、麻紀との約束を果たす為、久しぶりにギターを手に取った。

俺は、ギターを奏でながら、声を出そうとした瞬間、がく然とした。

精神的ショックで鬱^{ふさ}込んでからというもの、歌が全く歌えなくなっ
てしまっていたのだ。

「俺は…、もう、歌えないのか？歌う事さえ許されないのか…？も
う一つの麻紀との約束すら、果たせないのか…？」

その時、俺は初めて自分の運命を呪った。

今までに無いくらい、激しく自分自身を呪い、そして、精神的に追
い込んだ。

その瞬間。

また、死ぬ程の苦しみを味わう、あの発作が起きた。

まるで、鼻と口を塞がれたように、上手く呼吸が出来ない。

俺の肺は、息を吸うばかりで、一向に、息を吐き出そうともしない。

(く…苦しい…。呼吸が…)

「ヒィ…。ハァ…。ハァ…。ウツ…」

(俺、このまま死ぬのか…？ああ…。ごめんな…。麻紀…。また約束守れなくて…)

俺は、自分の胸を押さえながら、悶え苦しみ、狂いながら、心の中で死ぬ覚悟を決めた。

その時、突然、部屋のドアが開いた。

もがき苦しむ俺を見つけた姉が、慌てて駆け寄って来た。

「ちょ…。ちよっと、静流？聞こえる？大丈夫？ちゃんと呼吸して？」

優しく背中を撫でながら、姉は、俺の気分を落ち着かせてくれた。

「そうよ。ゆっくりで良いから…。そうそう…。もう、大丈夫よ。もう…。無理したらダメだって、先生言ってたのに…」

姉は、心配そうな顔で俺を見つめる。

「ハアハア…。うん…。ごめん…。もう大丈夫…」

姉のおかげで、大事には至らず、俺の発作は、暫くして落ち着いた。

「なんで？なんで、急に、そんな事をしようとしたの？」

姉が、心配そうに問いかけた。

「麻紀や、巧さんと約束したから…」

俺は、姉に今までの出来事を全て話した。

「そうだったんだ…。でもね、静流？いきなり、歌おうと思わなく

て良いの。最初は、普通の会話から、段々と慣らして行けば良いんだから…。ね？」

姉が微笑んで、優しく俺を抱き締める。

「…うん」

「ご飯出来たから、ちょっとだけでも良いから、食べよう？」

「…うん」

「で、ご飯食べたら、ちゃんと薬飲まなきゃね？」

「…うん」

完全に歌えるように回復するまでには、それから、かなりの時間を要した。

俺は、毎日少しずつ、話せるように、歌えるように努力をした。

もう一度、麻紀の笑顔が見たい。

もう一度、麻紀の声が聞きたい。

姉や、巧さんの気持ちに応えたい。

俊哉達と、もう一度、俺がいつか夢見たあの場所に、みんなと一緒に立ちたい。

その一心で、血の滲むような努力をした。

時には、悔しさの涙で、夢や希望が滲む事もあった。

だけど、俺は、明日を信じて、未来を信じて、必死に手を伸ばした。

先へ進む為に…。

俺を思ってくれる、俺を待っていてくれる、大切な人達の為に…。

あの日、ライブの後にみんなで撮った写真の中の麻紀は、変わる事のない笑顔で俺を見ていた。

そして月日は、明るい未来へ向かって、少しずつ前へ向いて進んで行く。

いつもと違う、俺の全てが凍り付く程に辛かった、冬の日々が過ぎて行った。

麻紀がいなくなってから、俺の心の中で、どうしようもない程に凍り付いていた、俺の止まった時を、優しく解かすかのように、夢や希望に充ち溢れた、穏やかで暖かな春が、少しずつだが、確実に訪れて来た。

少しずつ春を感じさせる、風の匂いと温もりを、俺は肌で感じ取っていた。

そして、俊哉達が東京へ旅立った、一年後。

季節は、既に桜が満開で、風で桜吹雪が舞い散る頃の事。

俺は、俊哉達の後を追う為、東京へ行く事を決めた。

すっかり伸びてしまった長い栗色の髪を、ポニーテールで結び、黒いサングラスを掛け、黒のロングコートを羽織り、あの時のような、

ライブスタイルに身を包んだ。

肩には、ギターケースを掛け、いっぱいに詰め込んだスーツケースには、あの日、みんなで撮った写真も入っていた。

俺の胸元には、麻紀の形見の唐草模様の指輪が光っている。

俺は、姉と巧さんの見送りで、駅の新幹線のホームにいた。

「身体、気を付けてね。まだ治ってないんだから……。無理しないでね？」

姉が、不安と淋しさが入り交じった表情で微笑んだ。

「頑張ってきて。お前なら出来る。何かあったら、絶対に連絡しろよ？」

巧さんは、笑顔でエールを送ってくれた。

「うん。二人共、ありがとう。俺、みんなの為に頑張るから……。いつになるか分からないけど、絶対にやってみせるから……。だから、ちゃんと見てて」

俺は、笑顔で二人に挨拶をした。

「なあ？ 巧さん？」

「なんだ？ 静流？」

俺は、少し恥ずかしがりながらも、思い切って言った。

「…巧兄って呼んでも良いかな？」

巧兄は、少し照れながら嬉しそうに微笑んだ。

「ああ。もちろん。お前は、俺の大切な、可愛い弟だ。弟の頼みや、言う事を聞くのは、兄貴として当然だからな」

嬉しそうに巧兄が微笑う。

「へへっ。ありがとう。じゃあ、姉ちゃん、巧兄。俺、行って来るよ」

そう言って、俺は、両手いっぱい荷物を持って、新幹線に飛び乗った。

あの日、追い掛けた夢を、もう一度、追い掛けて…。

姉と巧兄を残して、新幹線は、ゆっくりとホームを離れた。

俺は、麻紀の形見を握り締め、窓の外を流れる景色を見つめた。

「もうすぐ、行くからな…。みんな…」

新幹線が行ってしまったホームで、二人は暫く、新幹線が走り去った方向を見つめていた。

「行っちゃったね…」

「ああ。行ってしまったな…。淋しいか…？ 遥？」

「うん…。ちょっとね。でも、今は嬉しさの方が大きいけどね。フッ」

「ああ。俺達の知らない内に、アイツ、大人の男になったな」

「ええ。頼りなかったあの子が、あんなに立派に見えちゃうなんてね…」

二人の間を、春の穏やかな風が吹き抜ける。

「そうだ。巧？ちょっと電話して良いかな？」

「ああ。構わないぞ」

「ありがとう」

そう言って、遙は、バッグからケータイを取り出し、どこかへ電話を掛けた。

「もしもし？俊哉？」

相手は、あの俊哉だった。

「ああ。遙か…。久しぶりだな。どうしたんだ？急に？」

俊哉が、珍しそうな声で聞いた。

「あのね、ウチの静流が、今、そっちへ行ったから、よろしくね。後、静流、色々あって、病気まだ治ってないから…。あまり無理しないように注意してやってね」

遙は、どうも静流の事が心配らしい。

「ああ。分かった。色々あった事については、深くは聞かないから安心してくれ。静流の口から聞いた方が、俺達にとっても良いからな」

「うん…。ありがとう。静流の事、よろしくね」

「ああ。任せろ」

そう言って、俊哉は電話を切った。

「…ふう」

遥は、溜め息をついた。

「ははは…。ホントに遥は、心配性の過保護だな…」

巧は、苦笑いを浮かべた。

「だって…」

遥が口を尖らせる。

「ははは。俺だって、遥と同じ気持ちさ。アイツの事が心配じゃない訳じゃない。ただ、アイツも男だ。アイツなりの考えがある。俺は、アイツの自主性を尊重してやりたいんだ」

巧は、新幹線が走り去った方向を見ながら、目を細めた。

駅裏の城の庭から、風に吹かれた桜の花びらが、ホームにヒラヒラと舞い込んだ。

二人の頭上には、春の穏やかな晴天が広がっていた。

桜吹雪が舞い散る中、山の木々や、街路樹が、これから青々とする
準備を始めていた。

Chapter 42

電話を切った俊哉が、珍しく興奮して叫んだ。

「おい。お前達っ!!」

「んあ？」

そこには、竜也と充、薫がいた。

ここは、東京の俊哉達の住みか。

4LDKの部屋に、俊哉、竜也、充がそれぞれ金を出し合って住んでいた。

三人は、リビングでくつろいで、ゴロゴロしながらテレビを見ていた。

俊哉は、キッチンのカウンターテーブルに座り、コーヒーを飲みながら、電話をしていた。

「静流が……。静流が来るぞ」

俊哉が、嬉しそうに三人に話す。

「えっ？マジで？」

竜也と充も、嬉しそうなリアクションを返す。

「ああ。今、遥と話してたんだが……。静流、この一年の間に色々あったらしい……。まだ、病気も治ってないらしくてな……」

俊哉が、遥との電話のやり取りの内容を、三人に話した。

「静流が病気……？」

竜也と充は、不安そうな表情を浮かべた。

「ああ……。まあ、とにかく、静流が、自分から話すまで、俺達から静流の事を、あれこれ詮索しない事。良いな？」

俊哉は、静流の事を気遣った。

「分かった」

「よし。そうとなれば……。お前達、後、4時間もしないうちに、静流が、ここへ来るぞ？ 駅まで迎えに行ってやろうぜ？」

「賛成っ！！」

三人の明るい声が響く。

「さあ、早く出掛ける準備をするぞ？」

俊哉のその言葉に、四人はそれぞれ、外出の準備を始めた。

静流が、到着する一時間程前に、四人は揃ってマンションを出た。

東京駅―。

「間もなく、終点の東京です」

終点の合図を知らせる、アナウンスが聞こえた。

「いよいよか…。たった一年だったけど、長かったな…。思えば、俺は、麻紀にもらってばかりだったね…。今度は、俺の番だ…。麻紀にいっぱい届けるから。俺の精一杯の「ありがとう」と「愛してる」をね…。じゃあ、麻紀？行くよ？」

俺は、そう呟いて、ネックレスの指輪を見つめた。

麻紀が、微笑んでいるように見えた。

「良しっ」

俺は席を立ち、頭の上の荷物棚から、スーツケースを取り、ギターケースを肩に掛けた。

新幹線のドアが開く。

俺は、生まれて初めて、東京の地面を踏んだ。

「ここが…。東京か…」

俺は、新しい一步を踏み出した。

その時。

サングラス越しの、俺の目に、懐かしい顔が飛び込んで来た。

俺は、サングラスを少し下にずらして、目を凝らしてよく見た。

「間違いない…」

そう言うと、俺は、その懐かしい顔が見えた方向に走り出した。

「おいっ!! みんなっ!!」

俺は、その懐かしい顔に向かって叫んだ。

俊哉達が、俺の方を向く。

「静流ーっ!!」

竜也と充が、俺に飛び付いて来る。

「あはは…。久しぶりだなあ。元気そうだな」

俺達は抱き合って、久しぶりの再会を心から喜んだ。

「静流？お前、ちょっと痩せたんじゃないかねえか？ただでさえ、細せえのに…」

竜也が、俺を心配そうに見る。

「ああ…。ちょっと病氣してたからな。でも大丈夫さ」

俺は、竜也に微笑んだ。

「そうか…。まあ、無理はするな。調子が悪くなったら遠慮するなよ？俺達が出来る事なら、協力するから」

俺は、竜也の気遣いが嬉しかった。

「ああ。ありがとう」

「静流？おかえり」

充が、微笑む。

「ただいま。充」

俺も、充に微笑んだ。

「俊哉？…ただいま」

俊哉が、微笑って言う。

「つたく、お前はしょうがないヤツだよ…。でも、まあ、おかえり」

「みんな…。また、よろしくな」

「ああ。今度は逃がさねえからな」

俊哉達三人は、意地悪そうな顔で笑った。

俺は、もう一人いる事に気付いた。

「えっと…。その人は？」

俺は、薫を見た。

「おっと…。忘れてたな。すまん…、薫」

俊哉は、薫を見て申し訳なさそうに言った。

「いや、久しぶりなんだ。しょうがないよ」

薫が微笑んで、俺に近付く。

「はじめまして。俺、俊哉兄の従兄弟の、天城薫です。よろしくね」

薫が微笑って、俺に手を差し出した。

「はじめまして。俺は、霞静流。よろしくね。薫」

そう言って、俺達は握手を交わした。

「君が、俊哉兄の言ってた、静流なんだ。確かに、優しそうだね。でも、どこか淋しそうだよ？」

薫は、俺の顔を覗き込んだ。

「そうかなあ……？ だったら、後で俺の昔話でもしてあげるからさ。そしたら、俺が淋しそうに見える理由、分かるかもね」

俺は、意地悪く微笑ってごまかした。

「さあ。みんな、俺達はまた新しく生まれ変わった。これからは忙しくなるからな。気合い入れて行けよ？」

俊哉が、俺達に発破を掛ける。

「ああ。望む所だ」

俺達は、声を揃えた。

「じゃあ、いつものアレ、やるか？」

俺は笑顔で、四人に提案した。

「いつものアレって？」

薫が、俺達の顔を見る。

「まあ、やれば分かるさ。さあ。みんな、手を繋げっ！！」

俊哉の合図で、俺達五人は手を繋いだ。

「良いか？「せーの」で飛ぶからな？」

薫を見て、俊哉が微笑む。

「じゃあ、行くぞ？せーのっ……！！」

俺達五人は、繋いだ手を高く挙げ、目一杯ジャンプをした。

それは、ライブの最後で、観客やメンバー同士の繋がりと絆を深める為にやっていた、儀式みたいな物だった。

駅のホームには、嬉しそうな、五人の男達の笑顔があった。

「音楽と心」という、目に見えない、深い絆で繋がれて…。

Chapter 43

俺達は、駅の改札を抜けて、電車に乗る為に切符を買う。

「なあ？ 俊哉？ 何で、俺が来る事分かったんだ？」

俺は、誰にも言ってないはずなのに、俊哉達が、俺の到着時間に合わせて、駅に来ていた事が不思議だった。

「ああ…。遥が電話して来たんだよ。お前を頼むってな」

俊哉が笑った。

「また、姉ちゃんか…。俺が、そんなに信用出来ないのか…？」

俺は、愚痴をこぼした。

「きつと、心配なんだろう。お前、まだ身体が本調子じゃないんだろ？ そりゃ、誰だって心配もするさ」

俊哉が、俺の肩を優しく叩いた。

「そっか…。俊哉達は、今、どこに住んでるんだ？」

「渋谷」

「へえ…。人多そうだな…。ここも人混みだけど…」

俺は、人混みが苦手だった。

「まあ、そう言うな。活動拠点になるライブハウスも見つけてあるし、俺達、この一年で、少しずつ活動の幅、広げたんだけ？」

俊哉が、得意げな表情で俺を見る。

「やっぱり、みんな、すげえな…。それに比べ…。俺は…」

俺は、俊哉達のひた向きさに感心した。

それと同時に、俺は、過去ばかりに捕らわれてしまい、足を止めて、歩く事をやめてしまっていた。

立ち直る為だけに費やした俺の半年と、俊哉達のひた向きな一年とを比べて、俺は、自分が情けなくて、恥ずかしくて、申し訳ないと思った。

「そう思いつめるな。この一年、どんな事があったのか知らないが、俺達が過ごした時間も、お前が過ごした時間も同じくらい大切なんだ。無駄な時間だったとか思うのはやめろ…」

まるで、俺の心を読んだかのように、俊哉は優しく語りかけ、軽く俺の背中を叩いた。

「ああ。ありがとう」

俺は俊哉に、心の底から感謝した。

俺の事情を察したように、俺の事について、あえて何も言わない、聞かないでいてくれた事に。

「それより、腹減ったな…。もう昼過ぎだ。静流も来た事だし、渋谷へ着いたら、みんなで飯でも食いに行くか？」

俊哉が、全員に向かって言った。

「賛成っ！！」

俺達五人は、電車に乗り、渋谷を目指す事に。

電車は、駅のホームへ、ゆっくりと滑り込む。

俺達は颯爽と、その電車に乗り込んだ。

夢や希望に満ち溢れた、俺達五人を乗せ、電車はゆっくりと渋谷へ向けて出発する。

そして、電車は渋谷へ到着―。

改札を抜け、駅出る。

「どこに食いに行くんだ？」

俺は、俊哉達に問いかけた。

「良い所があるんだ。そこへ連れて行ってやるよ」

俊哉が微笑む。

俺達は、通りを道なりに、暫く歩いた。

「さあ。着いたぞ」

俺の目に飛び込んで来たのは、お洒落で小さなカフェだった。

「C a f e d e L u m i e r」

俺の目に、お洒落なカフェの名前が飛び込んで来た。

「瑞希ー？」

薫が、ウッドデッキに上がり、女性の名前を呼んだ。

店の中から、若い女性が出て来た。

「あつ、薫。それに、みんなも。いらっしやい」

元気良く明るい笑顔で、俺達を迎えてくれた。

瑞希が、俺に気付いた。

「薫？あの人、誰？ちよっと、カッコイイんだけど…」

瑞希のトーンが上がる。

薫は、少しムツとした表情を浮かべた。

俊哉が、瑞希に俺を紹介した。

「瑞希？コイツが、前に俺達が言ってた静流だ。仲良くしてやってくれ」

「はじめまして。霞静流です。よろしくね」

俺は、瑞希に微笑んだ。

瑞希は、頬を赤くして言った。

「橘瑞希です。あたしの事、瑞希って呼んでね」

「分かった。瑞希。俺の事は、静流で良いから」

「うん。分かった。みんな、今日は、何にする？」

俊哉が、俺に言った。

「静流。ここのランチは、かなり美味いぞ？」

「じゃあ、俺は、ランチにするよ」

俺が、そう決めると他の四人も合わせて言った。

「じゃあ、俺達も」

瑞希が微笑む。

「ランチ5つね。みんなは食後はコーヒーとして、静流は、コーヒーと紅茶どっちにする?」

「俺もコーヒーで」

俺も、瑞希に微笑み返す。

「うん。分かった。じゃあ、みんな。ちょっと待っててね」

「ああ」

オーダーを取り、店の中へ瑞希は入って行った。

薫は、瑞希が店の中へ消えたのを確認して言った。

「静流、モテモテじゃん…。クソーっ。瑞希の浮気者め…」

薫の悔しそうな愚痴に、俺達は苦笑いを浮かべた。

「ははは…。言うのは、タダだから」

俺が、薫に言った。

「確かに、静流はカッコイイさ。認めるよ。優しいし…。でも、俺がいるのにそんな事言わなくても良いじゃんか…」

薫の愚痴は止まらない。

「静流、ほっとけ。コイツは、いつもこんなだから…」

俊哉が苦笑いをしながら、俺に聞き流すように言った。

「ははは。面白いじゃん。でも、薫がヤキモチ焼く気持ち、俺にはよく分かるよ」

俺達は、そんな下らない話で盛り上がっていた。

そこへ瑞希と、もう一人の若い女性が、俺達がオーダーしたランチを持って来た。

「お待たせ。最後の一つ、すぐ持って来るから、ちょっと待っててね」

そう言うと、瑞希は早足で店内のカウンターへ行き、最後のランチを持って、また俺達の所へ。

「はい。どうぞ。ごゆっくり」

「ありがとう」

俺達は、声を揃えて、

「いただきます」

と、一斉に箸を付けた。

「おっ？ 美味しいじゃん」

俺の箸が進む。

「な？ 美味いだろ？」

四人が、笑う。

俺達は、安くて美味しいランチを堪能した。

食事が済み、それぞれがタバコに火をつけた。

「やっぱり、食後の一服は最高だな」

竜也の顔が緩んだ。

「ホントにそうだな」

俺も、食後の一服を満喫していた。

そこへ、瑞希がやって来た。

「みんな、いつもありがとう。もう、下げても大丈夫？」

瑞希は、微笑んで俺達を見て言った。

「ああ。頼むよ」

「じゃあ、お皿下げて、コーヒー持って来るね？」

そう言って、瑞希はニコニコしながら、空の食器に手を伸ばした。

俺は、そんな瑞希の笑顔を見ると、麻紀の顔を思い出して、切なくなった。

瑞希は手際良く、食器を重ねて厨房の中へと入って行く。

暫くして、瑞希が五人分のコーヒーカップと、砂糖とミルクをトレイに乗せて、俺達の所へ持って来た。

瑞希は、そのコーヒーカップを、俺達の前に、丁寧に置いた。

「ありがとう」

俺は、瑞希に微笑ってお礼を言った。

すると、何も事情を知らない瑞希が、突然、俺に問いかけた。

「静流？ 静流って、笑ってても、どこか淋しそうだよね？ 何かあったの？ それに、彼女さんは…？」

瑞希の問いかけに、俺は、うつむいた。

そんな俺を見て、俊哉が慌てて、瑞希の口を塞ごうとした。

「瑞希…、ちょっと…」

俊哉の気遣いはありがたかった。

だが、俺は、それをあえて制止した。

「良いんだ…。俊哉。遅かれ早かれ、言わなきゃいけないんだから…。俺が東京に一人で来た理由…」

「静流…」

そんな俺の事を、俊哉は悲しそうな目で見ていた。

俺は、俺の事を知らない、薫や瑞希の為に、俺の両親は、本当の親ではない事、その両親が亡くなった事…。

そして、麻紀との出会いから、麻紀の事故死の事。

麻紀の死が病気の引き金になった事。

病気が原因で歌えなくなっていた事。

病気を克服しようと努力して、やっと歌えるまでになった事。

包み隠さず全て話した。

五人はうつむいて、言葉を失ったように黙っていた。

暫く続いた沈黙を破るように、瑞希は、涙を流して俺に謝った。

「ごめんね…。そんな事知らなくて…。悲しい事、いっぱい聞いちやったね…。ホントにごめんなさい…」

「いや、気にしなくて良いよ…。大丈夫。後から根掘り葉掘り聞かれるより、ずっと良いから…。だから、もう泣かないで？俺は、もう、女の子の涙は見たくないから…」

俺は、瑞希に優しく語りかけた。

「やっぱり…。静流は優しいんだね…。こんな、あたしにも、優しくしてくれて…。あたしがもし、麻紀ちゃんの立場だったらって…。そう考えただけでも、すごく切なくて、苦しくて、悲しいよ…」

瑞希は、指で涙を拭った。

「静流…。そんな辛い事があったのか…。お前…。よく立ち直れたな…。普通の人間なら、こんなに早く吹っ切れる訳ないのに…。ホントに、よく頑張ったな…」

俊哉は、静かに俺の努力を労った。

「俺さ…。約束したんだよ。夢に出て来た麻紀と、病気の俺を励ましてくれた、姉ちゃんと巧兄に。俺の精一杯の歌声を、たくさん聴かせるって…。だから、もう立ち止まる訳にはいかないんだ…」

俺は、じつと前を見据えて、ゆっくりと話した。

自分自身に言い聞かせるように。

「それに、今は調子良いけど…。また病気が悪くなって、発作が出て…、また歌えなくなるかもしれない…。その時がいつなのかは分からないし、俺に残された時間も少ないのかもしれない…。だから、俺は、今、精一杯出来る事をやろうって…」

俺は、もう逃げない。

立ち止まらない。

過去も振り返らない。

また、いつか、麻紀に会う日まで…。

俺は、今は、ただ前を見て、出来る事を精一杯やって、麻紀の分まで、見て、聞いて、歌って、生きて…。

いつか、麻紀に胸を張って会えるように…。

麻紀の笑顔を曇らせないように…。

俺は、覚悟を決めていた。

「そうか…。お前は昔からそうだったな…。根性があるって言うか…。よし。そういう事なら、俺達も、お前に負ける訳にはいかないぞ？ しっかり気合い入れて、天国の麻紀ちゃんを、一緒に喜ばせてやろうぜ？」

俊哉が、微笑んで俺の背中を叩く。

「ああ。やろう。俺達なら、絶対出来るさっ！！」

竜也と充も、声を合わせた。

「静流？俺は…、麻紀ちゃんに会ってないから、よく知らないけどさ…。だけど、俺も、とことん付き合うよ？ 麻紀ちゃんの為に、俺達と一緒に、空の向こうまで、俺達の音楽を届けてやろうぜっ！！」

薫も微笑んで、俺に賛同してくれた。

「みんな……。ありがとう。ホントに恩に着るよ」

瑞希は、そんな俺達を見て、涙の微笑みを浮かべていた。

「これで、また、新しくなったB－Raveの活動目的が増えた訳だな。今度は、天国か……。良いじゃねえか。俺達が、どこまで通用するか……。俺達の思いが、どこまで伝わるか……。俺達五人でやってやろうぜっ!!!」

俊哉が、暗い空気を吹き飛ばすように発破を掛けた。

「おおっ!!!」

俺以外の三人は、俊哉の発破に呼応した。

「ああ。望む所だ……」

俺は、静かに右手の握り拳を左手の平に打ち付けた。

自分自身に気合いを入れる為に。

（麻紀…。見てなよ？俺達は音楽で、麻紀に会いに行くから…）

俺は、形見の指輪を握り締め、唇を噛み締めた。

「瑞希、ごめん…。俺の長話で、せっかく淹れてもらったコーヒー、冷めちゃったな…」

話に夢中だった俺は、我に返り、瑞希に苦笑いしながら謝った。

「良いのよ。コーヒーなんて、また淹れ直せば良いんだから。淹れ直そうか？」

瑞希は、微笑んで俺達に言った。

「別に良いよ。そんな、もったいない事…。俺は、ブラックしか飲まないから、冷めてても平気だしね」

俺は、瑞希に微笑んだ。

「ああ。静流の言う通りだな。俺だって、ブラックしか飲まないから、アイスかホットの違いだけで、飲めない訳じゃない。だから、

気にしなくて良いぞ？」

俊哉も微笑う。

「そうそう」

竜也と薫も微笑んで、すっかり冷めてしまったコーヒーを口に含んだ。

「…苦っ!!」

突然、充が大声を上げる。

どうやら充は、ブラックが随分と苦手らしく、飲んだ瞬間、えも言えぬ渋い表情を浮かべた。

「ははは。お子様だな、充は。ブラックも飲めないのかよ？」

俊哉が、充をからかう。

「違うっ。久しぶりに飲んだからで、別に飲めない訳じゃないんだ

からなっ」

充は、強がりと言ったが、味覚は正直だった。

「…苦っ!!」

「はははは。やっぱりガキだな」

俊哉が楽しそうに、充をからかった。

「フンッ。俊哉なんか無視無視」

充が、拗ねた顔をしてそっぽを向いた。

「プッ…、くっ…、あはっ。あはははは」

そんな充がおかしくて、みんな思わず吹き出してしまった。

「あははは…。みんな、ありがとね」

突然、瑞希が言った。

「良いつて良いつて」

俺達は、笑顔で声を揃えた。

「ランチだけのつもりが、長居しちゃったな…。もう16時だぞ？
静流、俺達の寝ぐらに來い。どうせ、来たばかりで住むトコも無
いだろう？」

俊哉が、ケータイを見ながら言った。

「えっ？良いのか？俺も、行っても…？」

俺は、申し訳なさそうに俊哉を見た。

「ああ。構わん。それにコイツらも、お前がいた方が嬉しいだろう
からな」

腕組みをしていた俊哉は、親指で、横にいる竜也達を指差しながら
微笑んだ。

「そうだぞ？一緒に来いよ？俺達、三人で金出し合って住んでんだ。それに、部屋だって一つ余ってるしな。気にすんな」

竜也が、笑って俺に言った。

「静流、一緒に住もうぜ？今日は、宴会だあ！！」

充がはしゃぐ。

「みんな…。ありがとう」

俺は、三人に深々と頭を下げた。

「良いから。早く来いよっ！！」

俊哉が微笑みながら、俺を引っ張って行く。

「あ、コラッ！！痛ててて…。ちよっ…、俊哉、引っ張んなっ！
！服伸びるだろ…」

「じゃあ、瑞希。ご馳走様」

薫と充が、瑞希に挨拶をした。

「うん。こっちこそ、ありがとね。また来てね」

瑞希が、俺達を微笑んで見送ってくれる。

「おいおいおい…。押すなよ、竜也っ！！痛てててて…」

「ほら。グズグズすんなよ、静流っ！！」

俺と竜也の声が、通りに響く。

「フフフ…。ホントにみんな仲良しね」

瑞希が笑う。

「そりゃあ、もう。俺達の自慢の仲間達だからね」

充と薫が得意げになった。

「じゃあ、またね」

そう言いながら、瑞希に手を振って、充と薫も俺達の後を追った。

夕日に照らされた、五人の姿は、仲良く人混みの中へ消えて行った。

Chapter 44

俺達は瑞希と別れ、一路、俊哉達の「寝ぐら」だと言う、貸マンションに向かった。

バスに乗る為、瑞希の働いている、カフェがある通り沿いのバス停へ。

バス停の時刻表を見ると、たった今、バスが出たばかりだった。

「次のバスまで後、15分あるな…」

俊哉は、コートのポケットからケータイを取り出し、時間を見ながら呟く。

「しょうがないから、そのコンビニで、時間潰さないか？」

竜也が、バス停すぐのコンビニを指差した。

「そうだな。ついでに、酒でも買って帰るか」

俊哉がそう言うのと、俺達は揃ってコンビニへ入って行った。

「いらっしやいませ」

俺達はまず、本棚の漫画を手に取り、パラパラとめくった。

暫く立ち読みをしていると、薫のケータイが、突然鳴った。

「あっ。瑞希だ」

そう言うのと、薫は、瑞希からの電話に出て、暫く話し込んでいた。

俺達は、漫画を本棚に戻し、酒やジュースの入った冷蔵庫の前に立った。

「とりあえず、ビールが…。何本あれば足りる？」

竜也が、俺達に問いかける。

「500mlの6缶パック二つと、バラの500ml缶が二、三本

もあれば良いんじゃないか？もし、足りなかったら…、誰か走れ」

俊哉は、微笑みながらも意地悪く言った。

「いやいや…。そこは、公平にジャンケンだろう？」

俺達は笑いながら、俊哉に反論し、カゴに缶ビールを詰め込んだ。

「当然、つまみもいるよな？」

そう言いながら、充は大量のポテトチップスや、焼き鳥の惣菜等を持って来た。

「また、お前は…」

俊哉が、呆れたように、頭を片手で押さえる。

そこへ、薫が現れた。

「なあ？みんな？」

薫の呼びかけに、俺達は薫の方を見た。

「なんだ？」

「瑞希がさ。バイト終わったから、一緒に来たいって…。駄目かな？」

薫が、少し遠慮したように言った。

「別に、良いだろ？なあ、お前達？」

俊哉の呼びかけに俺達は、

「ああ。一緒に来ると良いよ」

と、薫に微笑んだ。

「ありがとう。みんな。もしもし？瑞希？」

薫は嬉しそうに、瑞希に話した。

「もう一本、バス遅らせるか？」

俊哉は薫を見ながら、

「やれやれ…」

といった表情で言った。

「まあ、しょうがねえよ」

俺は、そう言いながら、薫を過去の自分に重ね合わせて見ていた。

「…ったく、誰かと一緒だな」

俊哉が、俺を横目で見ながら、ため息まじりに微笑む。

「ほっといてくれ」

俺は、しかめっ面で俊哉を見た。

「あははは」

俺達が待っているコンビニに、瑞希が現れる頃には、日が完全に沈んで、辺りは暗くなり始めていた。

「お待たせ。ごめんね、みんな」

瑞希が、息を切らせてコンビニに入ってきた。

「ああ、大丈夫。じゃあ、後は…、瑞希の飲み物買ったら帰るぞ？」

買い物カゴを片手に、俊哉は再び、酒の入った冷蔵庫の前へ。

俺達も、俊哉に付いて回る。

瑞希は、酎ハイとカクテルを四、五本取り、カゴに詰め込んだ。

「よし。じゃあ、金払うぞ？もう他には、良いか？」

俊哉が、俺達を見る。

「もう十分だろ？」

俺は、いっばいに詰め込まれた、二つのカゴを見た。

レジで会計を払う。

「俺も、出すよ」

俺は、財布から金を出そうとしたが、俊哉がそれを制止する。

「今日は、お前の復帰祝いだ。だから、お前は出さなくて良い。それに…、お前の辛い時に、傍にいてやれなかった…。俺達のせめてもの償いの意味も含めて…だ」

俊哉が微笑んだ。

「気にすんな。今日の主役は、静流だからな」

竜也と充、薫が微笑う。

「瑞希も良いよ。俺が出すから」

そう言って、瑞希の分まで薫が支払った。

「悪いな…。みんな」

俺は、申し訳なく思った。

「ありがとう。薫」

瑞希は、喜んで薫を見た。

「良いから良いから」

四人が、笑顔で声を揃えた。

「おっと…。忘れるところだった…。タバコ、タバコ…」

思い出したように、俺は、レジ横のタバコ棚からタバコを取る。

それに釣られるかのように、

「あつ、俺も」

と、男連中は一斉に、タバコに手を伸ばす。

そんな様子を、「クスクス」と笑いながら、瑞希は見ていた。

買い物が終わり、店を出ると、ちょうどバス停にバスが止まっていた。

「おいっ、急げっ!!置いてかれるぞっ!!」

竜也の掛け声に、全員が慌てた。

間一髪で、全員がバスに乗った。

…はずだった。

「あれ？ 充は？」

「あっ…。そう言えば…」

充が、どこにもいない。

バスは、今、出たばかり。

充は叫んだ。

「待ってくれえっ！！」

「あの、バカ…」

俊哉は、呆れた顔をしながら、右手を頭に当て、掻きむしった。

バスは、みるみる速度を上げる。

俺達は、バスの後部座席の後ろの窓から、外を見る。

充が、必死に追い掛けて来るのが見えたが、どんどん引き離され、やがて見えなくなった。

「あーあ。やつちゃったよ、充のヤツ…」

俺は、ため息をつきながら、コートの左ポケットに入ったケータイを取り、充に電話を掛けた。

「次のバス停はすぐそこだから、早く来いよ？」

俺は、車内に貼られた、バスの路線図を見ながら、充に言った。

「ハアハア…。分かった…。うう…：苦しい。横っ腹痛てえ…。うえっ…。」

「汚ねえなあ…」

俺は言葉を失い、ただ苦笑いするしかなかった。

次のバス停で、俊哉が運転士に事情を説明し、少し待ってもらう事に。

幸い、バスの乗客は俺達だけで、それ以外には誰もいなかった。

充を待っている間に、事情を知らない乗客が、何人かバスに乗り込んで来た。

「早くしろよ……。充……」

俊哉が、イライラしながら、小刻みに足踏みをする。

するとそこへ、充が息を切らせてバスに飛び乗って来た。

「ハアハア……。やったあ……。間に合った……。俺、多分、世界で一番速く、さっきの場所から、このバス停までの間を走ったぞ」

充は、汗びっしょりになりながらも、なんとも言えない自信を滲ませた。

「そんな訳ねえだろ……。まったく、お前ってヤツは……。大体、なんで乗り遅れた？急に、フラツといなくなりやがって……」

俊哉は、充に説教を始めた。

「また始まったか…。俊哉兄さんの説教タイムが…」

「ああ…。充は、懲りないからなあ…」

俺と竜也は、失笑しながら、口々に言った。

薫と瑞希は、俊哉と充の、日常茶飯事のやり取りを、ただ呆然と見ていた。

「いやあ、トイレに行ってたんだよね…。でも、まあ、追いついたんだから良いじゃん」

「良くねえよっ！！ちゃんと言えって、いつも言ってるだろ？大体、お前はいつも…」

俊哉と充の、言葉の応酬。

「まあ、いつもの事だから、気にしなくても良いぞ？」

「そうそう。アレがないと、逆にどっか具合でも悪いのかって心配

になるくらいだからな…」

俺と竜也は、失笑しながら、薫と瑞希にフォローを入れた。

「ちよつとうるさいけど、慣れたら面白いぞ？あははは」

俺と竜也は、顔を合わせて笑った。

「おい…。そろそろ、二人共休戦しろよ？他の人に迷惑だからさ…」

さすがに、周囲の目が気になり始めた、俺と竜也は、俊哉達の間で割って入った。

そんな俺達を、薫と瑞希は笑って見ていた。

バスは、ゆっくりと走って行く。

賑やかな俺達を乗せて。

バスは、俊哉達の寝ぐらから、歩いて5分程離れたバス停に到着し

た。

「もうすぐ、着くからな」

俺達を先導しながら、俊哉は言った。

俺は、朝から歩き通しだったが、仲間達との再会や新しい仲間との出会い、見る物全てが新鮮で、新しい世界だったので、長旅の疲労は感じていなかった。

おそらく、一番疲れたのは、置いてけぼりを食らって、バスを追い掛けた充だろう。

それも、充の自業自得だが…。

薄暗くなった道を、六人は、歩幅を合わせて、暫く歩いた。

白壁の6階建てのマンションの前に差し掛かった辺りで、俊哉が歩みを止めた。

「着いたぞ、静流。ここが、俺達の寝ぐらだ」

「へえ……。静かで良いトコだな」

俺は、マンションの辺りを見回した。

俊哉達のマンションの周囲は、閑静な住宅街といった雰囲気だった。

Chapter 45

「さあ。ここが俺達の寝ぐらだ。まあ、入れよ」

俊哉達は、俺と瑞希を温かく部屋の中へ招き入れてくれた。

俊哉達の部屋は、マンションの4階の一番奥の角部屋で、周囲には低い建物が多く、眺めは良かった。

「静流。お前は、この部屋を使えよ」

そう言って、俊哉は余った一番奥の一部屋を、俺にあてがってくれた。

「ああ。ありがとう」

「じゃあ、俺達はリビングにいるからな」

そう言って、俊哉はドアに手を掛けた。

「俊哉…？」

「なんだ？ 静流」

「悪いな…。俺なんかの為に…」

「何を急に言い出すかと思ったら…。なあ、静流。よく聞け。俺達は、お前の事を「静流なんか」と思った事は一度も無いぞ？ そう、自分を卑下するな。あんな事があった後だから、そんな気持ちにもなるんだろうが、二度と「俺なんか」とか、自分を蔑んだり、自分には価値が無いみたいにな、自分を軽く見るような事は言うな。お前は、立派な一人の人間であり、立派な男であり、俺達の大切な仲間なんだ。お前の事を、誰が何と言おうが、お前の価値は俺達が一番よく知っている。お前は、俺達にとってはいなくてはいけない存在だ。それに、お前は最期まで、ずっと麻紀ちゃんの傍にいて、見守って看取ってやったんだろ？ よくやったじゃないか。だからもう、これ以上自分を責めたり、傷付けたりするな。自分を許してやれ。これは、天国の麻紀ちゃんの為でもあるんだからな？ 麻紀ちゃんも、そう望んでいるはずだ。それを忘れるな。良いな？」

俊哉は、俺に優しく叱るように諭した。

まるで、自分の弟のように。

「先にリビング行ってるから、荷物置いたら来いよ？」

俊哉は、いつになく優しい目で、俺に微笑んだ。

「ああ……。ありがとう。俊哉……」

俺は、俊哉にそう言う事だけで精一杯だった。

俊哉は、無言のまま部屋を後にした。

俺は、荷物を適当に置いて、俊哉の後を追った。

俺が、リビングのドアを開けると、既に宴会らしく、グラスと酒がテーブルに置かれ、充の持って来た、あの大量のつまみも封を開けられ、テーブルの真ん中を占拠していた。

「さて、全員揃ったな？じゃあ、始めるとするか？」

俊哉の嬉しそうな掛け声と共に、グラスにビールが注がれる。

瑞希も、自分の酎ハイの缶を開け、乾杯の準備が整った。

「じゃあ、みんな。静流が東京に来て、俺達のバンドに復帰した祝いと、薫、瑞希が、俺達の新しい仲間になった祝いを記念して…」

竜也の掛け声で、俺達全員が、それぞれの酒を手が高く挙げる。

「乾杯っ!!」

「やっぱり、みんなで飲むと美味しいな」

竜也の頬が緩む。

「そうだな」

俊哉は、嬉しそうに微笑んだ。

充の頬は、大量のつまみを頬張って膨らんでいる。

充の頬を楽しそうに、薫が人差し指でつつく。

「おりゃっ!!」

「やべろっ!!」

食べ物を頬張ったまま、充が怒る。

その様子を、俺達は笑って見ていた。

竜也の手が、こっそりと焼き鳥に伸びて行く。

「焼き鳥もらいっ!!」

そう言うと、竜也は急いで焼き鳥を口に運んだ。

「あゝっ!!」

それを見た充が慌てる。

「おでのやぎどびっ!!」

充が、口に頬張ったまま喋るので、俺達には何を言っているのか、さっぱり分からない。

「口の物、飲み込んで話せよ…」

俊哉は、疲れた表情で充を見る。

充は、急いで口の中の物を飲み込む。

「美味しい、美味しい」

竜也は、これ見よがしに充を見ながら言った。

「竜也め…。また俺の食ったな…？」

充は、恨めしそうに竜也を睨む。

そこへ、今度は薫の手が伸びて来て…。

「最後の焼き鳥もらいっ!!」

そう言うと、薫も急いで焼き鳥を口に運ぶ。

「あっ!! 薫まで…。お前達、覚えてろよ…?」

充は恨めしそうに、両隣の竜也と薫を交互に睨んだ。

「グズグズしてるのが、悪いんだよ」

「そうそう。物は何でも早い者勝ちってな」

竜也と薫が、口々に言った。

「充。お前の負けだ」

俊哉が、笑って充を見た。

俺は、ただ、その様子を黙って見ていた。

「なあ? 静流?」

そんな俺に、俊哉は、静かに話しかけて来た。

「さっき言った事じゃないが、俺達だって迷いがない訳じゃないし、失う事だって怖い」

「俊哉…？」

「それに、今のお前の気持ちは、きっと俺達の想像よりも、もっと深いはずだ。だけどな？お前が、今ここに残された理由を考えてみる？きっと、お前には大切な何かがあるんだ。存在意義とでも言えば良いのか…。これまでのお前の存在意義は、確かに、麻紀ちゃんの為であったはずだ。そして、もし、未来が変わっていたなら、お前の存在意義はずっと麻紀ちゃんの為であったと思う。それは、いっぱいあるゴールの内の一つに過ぎない。お前は、そのゴールに幸せを見出だしていたんだろ？だけど、現実はず違った…」

俊哉は、静かに淡々と続ける。

「辛いだろうが…、今は、現実を受け止めるしかない。現実を受け止め、今の現実から、お前はもう一度、存在意義を見つけられないけない。今のお前は、麻紀ちゃんと言う、大きな心の支えとゴールを見失って、深い霧の中で迷ってるだけなんだ。だから今は、何も分からなくて良い。迷って良い。だけど、一人で迷うな。どうせ迷うなら、俺達も道連れにしろ。みんなで迷う方が楽だろ？お前の存

在意義が見つかる為のフォローをするのが、今の俺の…、いや、今の俺達の存在意義だ。もし、お前の存在意義が見つかったら、今度は、お前が、霧の中で迷ってる人達の支えになってやれ。その時は、静流と俺達四人で、その人の道しるべになってやろう。俺達に出来る事は、ただ一つ。俺達の音楽で、迷ってる人達に元氣や勇氣を分けてやって、そして、その人達の道しるべになる事。俺達の、個々の存在意義は、それぞれ違ったとしても、俺達五人が、一緒になった時の存在意義は、俺達の音楽を聴いてくれた人達の道しるべになる事…。これで良いんじゃないか？そうやってるうちに、お前にも、いつか新しい存在意義が見えて来るんじゃないか？」

そう言い終わると、俊哉は、静かに俺に微笑んだ。

「さっきも言ったが、俺だって、失うのは怖い。それは、この五人が、それぞれいなくなり、そしてバンドの存在自体が無くなってしまふ事。バンドの存在自体が、時間の流れに飲み込まれ、ただの一発屋として、世の中から消え去ってしまう事。俺は、それが怖いから、そうならないように、その時、出来る事を精一杯やりたい。必ず、何かしらの、「その時、俺達がそこにいた」っていう証拠を残しておきたいんだ」

俊哉が珍しく、淋しそうな表情を浮かべた。

それまで騒いでいた竜也達も、いつの間にか俊哉の話に静かに耳を傾けていた。

「俺達の存在意義は、長い人生の中で、絶えず変化していく物だ。その人生の長い時間の変化の中でも、絶対に普遍的な物がある。それは、自分の心の中にある、信念とかプライドとか……。自分の内面的な部分は、誰にも変える事は出来ない。だから、変化する、その時々が存在意義の中にも、自分の信念を持って、プライドを持って取り組めば、きっと、大きな何かが残せるはずだ。それが、歴史上の偉人のような形であったり、多くの人を救う、医者のような形であったり、芸術家の残すような作品であったり……。人それぞれ、色々ある。俺は、形はどうであれ、いずれ、そんな風になりたいと思っている。これが、俺の中での「絶対に普遍的な存在意義」だと思っている」

俊哉は、自分の中の「存在意義」についての考えや信念を全て、俺達にさらけ出した。

「そんな考えの中でも、やっぱり、迷いはある。果たして、このままで良いのか？このまま走り続けて、その先に何かがあるのか？色々ある。俺も、静流と同じように、濃い霧の迷路の中にいるのかもしれない……。だけど、迷ってる暇があるなら、その分、今出来る精一杯の事をやって前に出た方が、いつかは光が見えて来そうで……。迷って立ち止まるより、そっちの方がずっと良いと思ってるから……。だから、俺は止まらないし、止まらないんだ」

そう言った俊哉からは、その時の俺達には無い、何かしらの大きな覚悟が垣間見えた。

「…そうだよな。俺が迷ってると、麻紀も不安になるよな？ だったら、俺も、俊哉のように止まらない。過去は振り返らないって、俺は、麻紀に誓ったから。行ける所まで行ってやるさ。今の俺の存在意義…か。俺の存在意義は決まってる。一つでも多くの俺の歌声を、俺の大切な人達に届ける。これだけだ。例えば、声が出なくなっても、俺は、喉を切り裂いてでも届けなきゃいけない。大切な人達の笑顔の為に…」

（そうだろう？ 麻紀？）

そう言って、俺は静かに胸元の形見の指輪を握り締めた。

「確かに、俊哉と静流の言う通りかもな…。俺達は、そんな事考えもしなかった…。俺達の音楽を多くの人達に届ける。立派な存在意義だ。俊哉と静流がそこまで思ってるなら、俺達は、それにとことん付き合うまでだ。なあ、そうだろう？」

竜也は、充と薫を見た。

「ああ。そうだな。俺達は、まだ何も見つけてないんだ。だったら、見つかるまで、みんなのバックアップをしよう」

「俊哉兄、静流？ 俺なんかで良いなら、とことん手伝うよ。その先

に何が見えるのか、俺は、見てみたいから。その時には、自分のやりたい事、見つかるかもしれないし…」

充と薫が、口々に言った。

「俺は、ありがとうとは言わないぞ？これは、お前達が、それぞれに決めた事だ。お前達の決めた事の手伝いはしてやるが、「ありがとう」はいらない。俺達、みんなで目指す、存在意義だからな」

俊哉が、微笑む。

「ああ。分かった。俺達の思い、精一杯届けてやろうぜ」

竜也が発破を掛けた。

「なあ？だったら、みんなに提案があるんだけど…」

俺は、東京に来る前から、心の中に秘めていた事を提案した。

「なんだ？それは？」

四人が、声を揃えた。

「バンド名を、少し変えないか？もちろん、基本的な俺達の信念は変えずに…だ」

「例えば、どんな風に？」

バンド名の名付け親である俊哉は、興味津々だった。

「単刀直入に言う。新しいバンド名は…」

俺はそう言うと、手元にあった紙とペンを持ち、他の五人に見えるように書いた。

「B・R a — Z E^{プレイズ}」

全員は、新しいバンド名が書かれた紙を覗き込んだ。

「B・R a — Z Eか…。意味は？」

俊哉が、俺の顔を覗き込む。

「俺達のバンドの根本的な部分は、「音楽の世界において、常にぶつかって挑戦する事」と「俺達の音楽を聴いてくれる人が、夢中になって、元気になる事」。この2つだろ？」

「ああ。そうだな」

俺は、全員の顔を見ながら続けた。

「今度は、それに新しい意味をくっ付けたのさ。今、ちょうど俊哉が言った、俺達の存在意義を。俺が、くっ付けた言葉は、「blaze」って言う単語だ。妙な偶然だけど、この単語には、いろんな意味があったんだ。例えば、単純に名詞で言うなら、「炎」だ。だけど、文法上の使い方じゃ、「太陽が輝く」とか「道を切り開く」とか「くを知らせる」とか「目印」とか、いっぱい使い分けが出来るんだ。言いくるめちまうと、「俺達は音楽の世界で挑戦し続け、新しい道を付けて、たくさんの人達を夢中にし、俺達が、その人達が迷わないように輝いて、迷ってる人の目印になる。足下を照らす、松明のような炎になる」そんな意味を込めたんだ。そして、そんな俺の今を、天国の麻紀に知らせる為に…。そう思って考えてみたんだけどな…。どうだろう？」

俺は、俺のありのままの気持ちを、全員にさらけ出した。

「確かに、俺が言った、「バンドとしての存在意義」と一致してるな。妙な偶然ってあるもんだな」

俊哉は微笑んで、さらに続けた。

「まあ、こういう言葉もある。「偶然は必然」ってな。要するに、俺達のバンド名変更は、偶然なんかじゃなく、最初から必然的にそう決まっていたような物だったんだ。だったら、俺達の存在意義に基づいて、この静流が考えた新しいバンド名を受け入れざるを得ないだろう。これを拒否した場合、俺達の存在意義その物が、嘘になってしまうだろうからな」

俊哉は、微笑って快くバンド名変更を受け入れた。

「じゃあ…?」

「ああ。静流。良いバンド名をありがとう。俺達は新しく五人になったし、ちょうど良いだろう。今日から、俺達は「B・R a - Z E」だ。これに異論があるヤツは？」

「異論無しっ!!」

他の三人も笑顔で新しいバンド名を受け入れた。

「全会一致だな。まあ、俺達のバンドは全会一致が原則だからな」

俊哉が、俺を見て微笑う。

「みんな、ありがとう」

俺は、全員の顔を見渡した。

「良いお話だね…。あたし、ちょっと感動しちゃった…」

瑞希が、目を潤ませていた。

「あたしにも、みんなの思いが伝わったよ。みんななら、きっと出来るから…。だから、思いっきり頑張ってね」

瑞希が微笑んで、俺達にエールを送ってくれた。

「ああ。ありがとう」

俺達は、声を揃えた。

「存在意義か……。あたしの存在意義って何だろうね？ うーん……。考えると結構、難しいね……」

瑞希は、難しい表情を浮かべて悶々としている。

「瑞希？ そんなに深く考えなくて良いんだよ。俺達だって、根本にあるのは、単純な理由だから。それぞれの理由や信念は違っても、それは立派な事だから」

「そうそう。深く考えたって、何も見つからないぜ？ 瑞希は、瑞希の出来る事をすれば良いんだ。その内、瑞希にも見えて来るから」

俺と俊哉は、瑞希に優しく微笑んだ。

「うん。ありがとう。あたしも、みんなみたいに頑張らなきゃね」

そう言って、瑞希は笑顔を浮かべて俺達を見た。

「さて、飲み直した。まだまだ夜は長いぞ？」

俊哉が笑顔で、仕切り直した。

俺達の宴会は、その後、夜遅くまで続き、最終的には、みんな酔い潰れて、その場で寝入ってしまったていた。

ふと、俺は、目を覚ました。

物音を立てて、誰かを起こさないように、静かにベランダへ出た。

頬に当たる夜風が、心地良かった。

「東京か……。人がいっぱいいて、高いビルがいっぱいある以外は、俺の生まれた街と何も変わらないな……。この夜も……。夜を照らす月も……。この夜風も……。時間の流れでさえも……」

俺は、夜空を見上げた。

雲の端から、蒼白い月が顔を出す。

「俺も、俺の存在意義を果たせたら……。いつかは、きっと……。あの夜空に行けるんだろうな……。その時は、麻紀は微笑って俺を迎えて

くれるかな…？なあ？どうかな、麻紀？」

俺は、首から外したネックレスを月の光にかざした。

蒼白い月の光で、シルバーのチェーンと形見の指輪は、妖しく光った。

夜空の月に、麻紀の顔が浮かぶ。

「なあ？麻紀？聞こえるか？俺、頑張るから…。病気も治して頑張るから…。だから、見てくれよ？麻紀には、一番良い場所で俺達の思い聴かせるから。だから、ずっと、俺の傍にいてくれよ？」

そう一人、静かに呟きながら、俺は形見の指輪にキスをした。

そして、ネックレスを静かに首に戻した。

するとその時、俺の後ろでゆっくりと、掃き出し窓が開く音がした。

「カラカラ…」

「静流？」

俺が振り向くと、そこには瑞希がいた。

「ごめん…。起こしちゃったな…」

俺はそう言いながら、頭を掻いた。

「ううん。あたしも、目が覚めちゃったから」

「そっか」

「何してたの？カゼひくよ？」

瑞希は、俺に微笑んで話しかけた。

「うん、ちょっとね…。夜風に当たりたかったんだ。天気も良いしね」

「そっかぁ。夜風、気持ち良いもんね？」

「ああ」

俺と瑞希は、二人で暫く夜空を眺めていた。

月夜の静寂が二人を包む。

「ねえ、静流？」

瑞希が、突然、静寂を破るように言った。

「うん？」

「静流は麻紀ちゃんの事、ホントに好きなんだね…」

瑞希は、切なそうな声でそう言った。

「うん…。結果が結果なだけに、余計かな…。フラれたとかなら、諦めもつくけどさ…。現実って、残酷だよ…。「何で俺だけ？」って思った事が、今までに何度あった事か…」

そう言いながら、俺は、月を見つめた。

「辛かったね……。苦しかったね……。でもね、静流？あたし達は、あなたの味方だから、何かあったら遠慮しないで何でも言っただけいいの……。静流の病気だって、すぐに良くなるような物じゃないじゃない？あたし達を頼って良いんだからね？だから、一人で抱えて苦しまないで……。今の静流は、一人で苦しんでるように見えるから……」

「だから、静流？麻紀ちゃんの為に、早く病気治して、もっと笑顔にならなきゃね」

瑞希は、微笑んで俺を見た。

「その為に、あたしは静流達のお手伝いをする……。それが、あたしの存在意義。……。どうかな？」

瑞希は、照れ笑いを浮かべた。

「十分だと思うよ。ありがとう、瑞希」

俺は、笑顔で瑞希を見た。

「じゃあ、あたし、中に戻るから。あんまり、夜風に当たりすぎると、カゼひくから、程々にね」

そう言うと、瑞希は、また静かに部屋へ戻った。

「俺の…、存在意義か…。歌い続けた後の事なんて、分かんねえや…。もしかしたら、俺は、歌う以外には何も無いかもしれないし…。先の事なんか、今は考えられねえよ…。俺は、麻紀の為、姉ちゃんや巧兄の為…、そして、俊哉達との夢の為に歌うだけだ…。結果は後から付いて来るだろ…？今の俺には、それだけで良い…」

俺は、夜空の月を見上げながら、一人でずっと考えていた。

きっと麻紀は、命を賭けて俺に存在意義を覚えてくれたのかもしれない…。

それに気付かない俺に、俊哉は、そっと気付きを与えてくれたのかもしれない…。

一人、心の中で、そう考えていた。

蒼白い月は、夜の静寂の世界に、一人佇む俺を、ただ静かに、ひっそりと蒼く、明るく照らしていた。

東京での、初めての夜の事だった。

Chapter 46

翌日。

ふと気が付くと、俺は、リビングのソファの上にいた。

あれから暫くして、ソファの上で寝転んでいたら、いつの間にか、眠っていたようだ。

それに、誰かが、俺に風邪をひかないように毛布を掛けてくれたようだ。

「うーん…」

ケータイの時計を見た。

「もう昼だ…」

時計は、昼の12時を過ぎたばかりだった。

部屋中を見渡してみたが、部屋の中には、俺以外に人がいる気配が無い。

「あれ？みんなどこ行った？」

俺は、ケータイを取り、俊哉に電話を掛けた。

「あれ？留守電だ…」

今度は、竜也に掛けてみる。

「竜也も留守電かよ…。おかしいな…」

二人共、留守電になっていた為、俺は少し不安になった。

その時、玄関の方で、何か物音がするのが聞こえた。

「…ん？」

玄関から、リビングに向かって、人が来る気配を感じた。

「誰か帰って来たな」

そう思うと、俺は、少し安心した。

「ガチャッ」

リビングのドアが開いた、瞬間。

「あっ。おはよう。起きてたんだね」

「瑞希？俺は、てっきり、薫と帰ったと思ってたよ」

俺は、驚いた表情で瑞希を見た。

「薫は、朝の9時頃だったかな？ここから直接、バイトに行ったよ」

そう言いながら、瑞希は、買い物袋を、キッチンのカウンターの上に置いた。

「そっか。で、なんで、買い物袋なんか持ってたの？」

俺は、いまいち状況が掴めなかった。

瑞希は、笑顔でこう言った。

「あのね、俊哉兄にね、「瑞希、今日は、バイト休みだろ？俺達は、バイト行くから。静流は、その内起きるだろうから、ここの鍵と金をいくらか瑞希に預けとく。アイツが起きたら、何か食わせてやってくれないか？もちろん、瑞希の分まで置いておくから」って。だから、近所のスーパーに買い物行ってたんだよ」

「そうだったんだ……。ごめんな……。俺の為に」

俺は、わざわざ俺の為に留守番をしてくれて、更に買い物までしてくれた瑞希に対して、申し訳なく思った。

「良いのよ。どうせ暇だったし。静流達という方が、あたしは楽しいから」

そう言って、瑞希は微笑みながら、食事の準備を始めた。

俺は、そんな瑞希に、麻紀を重ね合わせて見ていた。

「へえ…。やっぱり、カフェでバイトしてるだけあって、手際良いね」

俺は、瑞希の手際の良さに感心していた。

「そんな事ないよ。あたしだって、料理始めたの、カフェにバイトに行くようになってからだもん」

瑞希は照れ笑いを浮かべながら、食事の準備を続けた。

「カフェで、バイト始めたのはいつ？」

「うーんと…。高校卒業してすぐだから、もう3年くらい経つかない」

「それだけやってれば、十分だよ。どろりで上手い訳だ」

「そんな…。誉めても何も出ないよ？」

瑞希は、照れ笑いを浮かべて俺を見た。

「実はさ、俺も姉ちゃんに料理仕込まれてさ…。こう見えても、結構料理作ったりするんだ」

俺は、姉にしごかれながら、料理を覚えた日々の事を思い出した。

「へえ。お姉さんと仲良しなんだね？」

瑞希が微笑む。

「俊哉達は、そう言うね。でもあの人、結構、口うるさいから…」

俺は、苦笑いを浮かべて、タバコに火をつけた。

「それだけ心配なんですよ？ たった二人だけの姉弟だから…」

「確かに、それはあるだろうね…。でも、そろそろ、ほっといて欲しい気もするし…」

俺は、そう言いながら、リビングの掃き出し窓を開けた。

春の暖かい風が、部屋中に優しく吹き込んで来る。

「静流は、お姉さんの事、心配じゃないの？」

瑞希は、姉を気遣うように言った。

「ああ。心配じゃないと言えば嘘になるけど…。あの人は大丈夫。巧兄って言う、最強のボディガードがいるから…。だから、俺は、安心して東京に来れた」

俺は、笑顔で瑞希を見た。

「そっか。じゃあ、静流は安心して、自分の心配だけしてれば良いんだね」

「そう言う事。あはは」

俺は、笑いながら、キッチンのコンロの所へ向かった。

コンロの上に置いてある、小さな片手鍋を手に取り、適当な量の水を入れる。

それを、またコンロに置き、火にかけた。

食器棚に置いてあるマグカップを取り、その中に、コーヒーの粉を
適当に入れた。

「言ってくれたら淹れるのに……」

瑞希は、申し訳なさそうな表情を浮かべて、そう言ってくれた。

「飯作ってくれてるんだ。悪いよ。それに、これくらいの事は自分で出来るしね」

俺は、瑞希にそう言って、鼻歌混じりに、水が沸騰するのを待った。

「あつ。その歌……。もしかして、LUNA SEA?」

瑞希は、野菜を刻みながら、俺に問いかけた。

「瑞希、知ってたの?」

俺は、驚いて瑞希の顔を見た。

「知ってるよ。だって、あたし、LUNA SEA好きだもん」

瑞希は、満面の笑みを浮かべた。

「そうなんだ。俺も、LUNA SEA好きなんだ。っていうか、俺は、LUNA SEAを初めて聴いた時に、背筋が震えて鳥肌立つちゃってさ…。「カッコイイ」ってハマっちゃって…。あの衝撃は、今でも忘れられないよ。俺もいつかは、あんな風になりたいなって。それから、音楽にのめり込んだって訳なんだ」

俺は、照れ笑いを浮かべて、音楽を始めたきっかけを瑞希に話した。

「それに、さっきの歌、俺が辛かった時に、いっぱい元気付けてもらった歌だから…。だからつい、無意識に出ちゃうんだよね」

「その気持ち、すごくよく分かるよ。静流が鼻歌で歌ってた曲の歌詞は、ホントに元気になるよね？頑張ろうって」

瑞希は笑顔で、俺の気持ちに同調してくれた。

「うん。特に最後の歌詞。あれは、すごく良いよね？俺は、あの部分が一番好きなんだ」

『夢を見続けて 走り続けた

夢を見続けて 終わりは無いから

雨に打たれても 夢が滲んでも

明日を信じて この手は離さない』

「俺は、一番苦しかったあの時、麻紀の笑顔と、この歌を思い出して…。「諦めるか!!」って…。それで、今ここにいるんだ…。みんなと会えたんだ…」

俺は、遠い目をしながら、辛かった日々の事を思い出していた。

「俺は、LUNA SEAに元気をもらった。だから、今度は俺が、LUNA SEAみたいに、たくさんの人を元気付けられたらって…」

「静流なら、きっと大丈夫。きっと出来るから。だから、諦めないで。頑張ってるね」

瑞希は、微笑んで俺を見た。

「ありがとう。俺、自分の出来る事は大した事じゃないけど…。でも、俺にしか出来ない事があるはずだから…。だから、俺は諦めない」

俺は、静かにじっと前を見つめて、瑞希に自分の気持ちを語っていた。

瑞希は、そんな俺を微笑んで見てうなずいた。

「うん」

「ねえ？それより、静流？」

「うん？」

「鍋、沸騰してるよ？」

「あっ。忘れてた。ヤバイヤバイ…」

俺は、慌てて火を消して、カップに沸騰したての湯を注いだ。

「熱ッ」

「もう…。落ち着いて飲まないからよ…」

瑞希は、苦笑いを浮かべた。

「へへっ。でも、ありがとう。瑞希。俺の下らない話に付き合ってくれて…」

そう言う俺は、淹れたてのコーヒーを口に運んだ。

「別に、ありがとうなんて良いよ。あたしには、これくらいしか出来ないから。でも、それで静流が元気になってくれるなら、いくらでも聞くからね」

「ああ。ありがとう」

「はい。出来たよ」

瑞希は、そう言って、カウンターテーブルの上に、出来たての卵焼きと味噌汁、白いご飯と、焼き鮭、小鉢に盛った野菜サラダを静かに並べてくれた。

「ありがとう。美味そうだね」

俺は、並べられた料理に喉を鳴らした。

二人並んでカウンターテーブルに座った。

「いただきます」

二人で同時に箸をつけた。

「うん。美味い。鮭の焼き加減といい、卵焼きの砂糖と塩加減といい…。絶妙だね。ホントに美味いよ」

俺は、夢中で瑞希の料理を食べた。

「良かった。喜んでもらえて」

その時の瑞希の微笑みは、俺には、まるで麻紀のようにしか見えなかった。

「そう言えば、瑞希は、薫とはどうなのさ？」

俺は、薫と瑞希の微妙な空気が気になっていた。

瑞希は、暫く沈黙した後、ゆっくりと口を開いた。

「薫か…。あの人ね、まだ、何も言ってくれないの…。あたしは、ずっと待ってるのに…。あたしには脈が無いのかな…」

瑞希は、箸を止めてうつむいた。

俺は、そんな瑞希を見て、

（何やってんだよ、アイツ…。よし。こうなったら…）

ある事を思い立った。

「あーあ…。薫も静流みたいな性格だったらなあ…」

瑞希が、ぼやいているのを見かねた俺は、

「瑞希？瑞希と薫が上手く行くように、俺がなんとかしてみるよ」

と言って、瑞希に微笑みかけた。

「えっ？どうやって…？」

「良いから。俺に、任せときな？」

業を煮やした俺は、瑞希と薫をくっ付ける為に、一つ策を練る事にした。

「薫の口から、言わせるから。瑞希は楽しみに待ってな」

俺は、瑞希に微笑んだ。

「うん。ごめんね、静流。あたしの為に…。静流は、今辛いのに…」

「良いんだよ。世話焼いてると気晴らしにもなるし、俺は、瑞希と薫には幸せになって欲しいから」

「ありがとう。静流って、ホントに優しいんだね。それに、カッコイイし…」

瑞希が、頬を赤くした。

「俺なんか、全然、かつこよくないよ。不器用だし、人見知りするし…。でもね？俺は、俺の大切な人達には幸せになって欲しいから…。笑ってて欲しいから…。ただ、それだけ。まあ、任しといてよ」

俺は、そう言いながらも、照れながら頭を掻いた。

瑞希は、そんな俺を微笑んで見ていた。

「さあ、早く食おうよ。せっかく瑞希が作ってくれたんだから」

俺は笑いながらも、薫に、瑞希の気持ちを伝える事を考えていた。

（俊哉達が帰って来たら、情報収集しないとな…）

「ねえ？静流？」

「うん？」

「静流は、そうやって麻紀ちゃん落としたんだ？」

「ブッ…」

俺は、瑞希のいきなりの問いかけに、口の中の物を吹き出しそうになった。

「ケホケホッ…。何？いきなり…？」

俺は、慌てた。

「だって、静流のその優しさと、クールなオーラのギャップに当てられちゃうと、女の子は大抵、コロッと行っちゃうよ？」

「そんなに簡単に行く訳ないよ…。人の気持ちなんて…」

俺は、苦笑いするしかなかった。

「少なくとも、あたしなら行っちゃうかも…」

そう言うと、瑞希は顔を赤くして、俺の目を見た。

「そんなもんかな…？俺は、ただ、自分が正しいと思った事しか言わないし、しないからさ」

俺は、いまいち女心がよく分からない時があった。

そのせいか、昔から、姉に小言のように、

「もっと、女の子を理解しなきゃダメよ」

と言われていた。

（分かんねえもんは、分かんねえし…）

なんで、俺が当たり前だと思った事で、女の子が喜ぶのか…。

とても不思議だった。

「なんで、女の子ってさ、俺が当たり前だっと思ってる事で喜んだりするんだ？」

俺は、そう瑞希に問いかけた。

「うーん…。難しいね。でも、ほとんどの男の人って、そういう小さな気遣いとかに疎かったりするじゃない？」

「まあ、言われてみれば…。確かに」

「でしょ？要するに、細かい小さな事でも、気付いて欲しいんだよ。「髪切った？」とか「今日の服、可愛いね」とか。そういう事の積み重ねや、嫌な事あった時や、困った時に話を聞いてくれたり、アドバイスしてくれたりすると、「優しくて頼りになる人だな」って、好感が持てちゃうんだよ？」

瑞希は俺に、女心について分かりやすく話してくれた。

「なるほどね…。じゃあ、俺達に足りないのは、その小さな心配りって訳か…。確かに、いくら姉ちゃんが髪切ったところで、服装変えたところで、俺、一切興味なかったもんな…。そうか。だから、よく下らない事で怒られてたんだな…」

俺は、瑞希の話の中に、妙に納得出来る事がたくさんある事に気付いた。

「静流のお姉さんも女の子だから、やっぱり、静流や、お姉さんの彼氏さんに見てもらいたいんだよ。綺麗な自分を…」

「ふうーん…」

俺は、巧兄と二人揃って、姉に正座をさせられ、延々と説教された事を思い出した。

（確か、姉ちゃんの誕生日だったよな…。姉ちゃん、気合い入れて美容院行って、服や化粧もいつもより気合い入ってたよな…。俺は、姉ちゃんに無関心で、巧兄は仕事に没頭して、遅刻はするわ、レストランの予約は忘れてたわで…。姉ちゃん、今までに無いくらい、ブチ切れたんだっけ…。それで、俺と巧兄は、二時間くらい正座させられて、延々と小言を言われて…。ひたすら「スイマセン」を繰り返したっけ…）

思い出しただけでも、うんざりする光景だった。

「どうしたの？」

瑞希は、俺の顔色を見て言った。

「いや、瑞希の話で、姉ちゃんの誕生日の事、思い出してさ…。俺と巧兄が、姉ちゃんブチ切れさせて大変だったんだよ…」

俺は、苦笑いを浮かべながら、瑞希にその時の事を話した。

「そりゃあ、お姉さんじゃなくても、誰でも怒るよ…」

瑞希は苦笑いをしながら、ウーロン茶を飲んだ。

「せっかく、頑張って綺麗になったんだから、誉めてあげなくちゃ。女の子は誉められて、もっと綺麗になるんだよ？」

「へえ。そうだったんだ。今度から気を付けるよ」

俺は、瑞希の話から、色々なヒントをもらった。

（薫に、そのまま使えるな…）

こうして、俺の「薫が、瑞希に告白する」（正確には、薫を煽って、意地でも瑞希に告白させる）為の計画は、その日の夕方、俊哉達が帰って来てからも、俊哉達からの、薫周辺の情報収集等で着々と進んで行った。

Chapter 47

その日の、夕方。

「ただいま。ああ、疲れた」

そう言いながら、竜也は、俺がいるリビングに入ってきた。

「おお。良い所へ帰ってきた。竜也、ちょっと聞きたい事があるんだけど…」

「ん？なんだ？静流？」

俺の唐突な質問に、竜也は、不思議そうな表情を浮かべた。

「実はさ…。昼間、瑞希に言われてさ。薫が、まだ何も言ってくれないって。あたしには、脈が無いのかもって言ってたんだよねあ…」

俺は、昼間に瑞希と話していた事を竜也に話した。

「はあ？アイツ、まだ瑞希に告ってねえの？俺達がけしかけたのに…」

竜也は、呆れた顔で俺を見た。

「そうそう。だからさ、薫について色々聞きたい。今度は、俺が薫を煽るからさ」

薫は、「超」が付く程の奥手という事と、恋愛に対しては、かなりの臆病という事が分かった。

「なのに、あんなにヤキモチ焼きなんだな？」

俺は、竜也に確認を取る。

「ああ。カフェで、昨日見ただろ？あんな感じだ」

「ふうーん、なるほどな…。さて…と。なんか良い方法無いかな…？」

俺は頭を落ち着けようと、テーブルの上のタバコに手を伸ばした時、リビングのドアが突然開いた。

「おお。お前達、何してんだ？」

「ああ、俊哉。良い所へ帰って来た。実は…」

「何なんだ？ 一体…」

俺は俊哉に、昼間、瑞希と話していた事と、薫を瑞希に告白させようとしている事を話した。

「何？ アイツまだ、何のリアクションも取ってねえのか？」

俊哉も、竜也と同じ反応だった。

「ああ。だから、薫の口から瑞希に告白させる為にさ？ みんなから、薫の事を聞きたいんだ」

「良し。そういう事なら…」

そう言うと、俺達の話に、俊哉も加わった。

「アイツ、かなり嫉妬深いんだったらさ？瑞希が、誰かに取られそうっていうのを匂わせたらどうだ？これなら、普通の男なら誰でもムツとして、食い付くぞ？」

俺は、二人の顔を見た。

「いや…、でもな？普通の男ならともかく、薫は女の前じゃ、かなりの臆病者だからなあ…。食い付きはするかもしれんが、実際、行動に移すとなると微妙かもしれんぞ…？」

俊哉は、俺の意見に、やや否定的だった。

「うーん…。でも、アイツ、瑞希の事になると人格変わるからなあ…。ムキになって、勢いだけでってのもありそうだしなあ…」

竜也は、俺の意見に賛成のようだ。

が、結局意見はまとまらず、

「うーん…。なんか良い方法は無いか…」

と、暫く、三人で頭を悩ませる。

「薫は、瑞希の事好きで、瑞希も、薫が好きなんだろう？普通なら、話は早いはずなんだけどな…。ん？待てよ？だったら、瑞希も、薫の事が気になってるって言えば…」

「残念ながら、静流。それは、既に言った後だ…」

俊哉が、眉間にタバコを持った右手の親指を当てながら言った。

「八方塞がりか…。どうすれば…」

俺は、頭を抱えた。

「もう、俺達が強引に言わせるしかないかもな…」

なかなかまとまらない話の内容に、竜也は、やけくそになっていた。

「じゃあ、煽って強引に言わせるか？薫を呼びつけてさ…。で、俺達は、陰から薫がちゃんと、瑞希に気持ちを伝えるかどうかをしつかりと見といてさ…」

俺達は、ああでもない、こうでもないと言いながら、話し合ったが、結局、何も解決策は見つからなかった。

「とにかく、薫をここへ呼ぼう。話はそれからだ」

最終的には、薫を呼びつける事で、三人の意見はまとまった。

俊哉が、薫を呼ぶ為に電話を掛ける。

「もしもし？ ああ、薫？ 今すぐ、ウチに来い」

俊哉の命令に、薫は、

「分かった」

とだけ言ったようだ。

30分程して、薫が俺達のマンションに到着。

「来たか…」

俊哉は、薫を見るなり、

「まあ、座れよ」

と、ソファに座るように促し、コーラが注がれたグラスを薫に渡した。

「まあ、飲めよ」

「一体、何なんだ？ 俊哉兄？ 何かあるのか？」

薫は、不思議そうな表情で俺達三人を見た。

「薫は、瑞希の事をどう思ってたんだ？」

俺は、薫に気持ちを聞こうと問いかけた。

「へっ？ み、瑞希？ み、瑞希は…、えっと…別に…。その…」

薫は、しどろもどろになりながら答える。

「瑞希の事、好きなんだな？」

俺は、薫の顔を覗き込んだ。

「えっと…」

薫は、俺達三人の顔色を伺う。

「どうなんだ？」

「す、好き…だよ」

薫は、うつむきながら小声で答えた。

「瑞希には、ちゃんと薫の気持ちを伝えてやったのか？」

俺は、薫に静かに問いかけた。

「いや…、俊哉兄達から散々言われてたし…。俺も、自分から瑞希に連絡取ったり、瑞希と一緒に遊んだりしてるよ。だから、俺、瑞希ともう付き合ってると思うてるんだけど…」

薫は、俺達に正直に白状した。

「告白はしたのか？」

俺は、薫に肝心な所を聞いた。

「うーん…、ハッキリとは言っていないかも…」

薫は苦笑いを浮かべた。

「あ、あのなあ…。薫…」

俺は、苦笑いをしながら話を続けた。

「瑞希が、昼間に言ってたんだけどさ。薫からまだ告白してもらってないってさ…。ちゃんと言わねえと、薫の気持ち伝わらねえよ？」

「えっ？でも、瑞希は、分かってくれてるもんだと…」

薫の話を遮るように、竜也が割り込む。

「甘いな、薫。女は、薄々感付いていてもな？あえて知らんぷりしたりするんだよ。なんで分かるか？」

「さあ…？」

「告白と言う、イベントを一番大切に思ってるからだよ。ただ、なし崩しに、既成事実をちよつとずつ作って、なあなあで「いつの間にか付き合ってた」よりもな？相手の気持ちを、ちゃんと確認した上で、初めて付き合おうって…。女にとっちゃ、それは大切な事なんだ」

竜也が、いつになく真剣な表情で語る。

「そ…そうなのか？」

薫は、困惑した表情で、俺と俊哉を見る。

「そうそう。言わなきゃ、自分の気持ちなんて、伝わらねえし、仮

に伝わったとしても、曖昧に伝わってたんじゃ意味ねえよ。以心伝心じゃあるまいし。それに、そんな関係、今は良いかもしれないけどさ。多分、いつかは崩壊しちまうぜ？」

俺も、薫には「酷だな」と思いながらも、毅然とした口調で淡々と話した。

「ああ。大体、ちゃんと伝えてねえんだ。誰か、他の男に、瑞希取られても文句なんか言えねえよな？ 仮に、文句言ったとして、「ちゃんと告白されてないから、付き合ってたって思ってたかった」って言われてみる？ 何も言えねえだろ？」

俊哉は、うつむく薫を見ながら言った。

「ま…、まあ、確かに…」

薫は、俺達の話は理解しているらしい。

「だったら、やる事は一つだ。瑞希に早く、自分の気持ち伝えて来いよ」

俺達は、薫の背中を押した。

「自信がねえなら、俺が、瑞希の所まで付いて行ってやろっか？ただし、薫が瑞希に気持ちを伝える時は、俺は、外させてもらうけどね。そんなプライベートな内容に、赤の他人の俺が噛むなんて、野暮だろ？」

「うーん…、別に、誰かが付いて来なくても平気だし、自分から言えるけどさ…」

「だったら、早い方が良いいぜ？昼間に瑞希が言ってたけどさ。瑞希の事、好きだって言う男がいるらしいからさ。しかも、瑞希、その男に告白までされたらしいぞ？」

俺は口から出任せで、薫の気持ちを煽った。

「ウソ？マジで？それはヤダ。絶対無理。なんで、他のヤローが…」

「だったら、さっさと言うしかないだろ？今から一緒に行くか？」

焦る薫を、俺は更に焚き付けた。

「いや、大丈夫。俺だけで、行くわ。瑞希のトコ。他のヤローに、瑞希取られたんじゃないや敵わねえよ」

薫はそう言っていると、勢いよくソファから立ち上がり、足早に玄関へ向かった。

「やれやれ……。まったく、世話の焼けるヤツだよ……」

俊哉は、呆れた表情で苦笑いをしていた。

「とりあえず、今度は上手く行きそうだな」

竜也は、タバコに火をつけながら呟く。

「まあ、後は、薫次第かな……？アイツが、本気で瑞希が好きなら絶対と言おうさ」

俺は、駆け足でバス停に向かう薫の姿を、ベランダから目で追った。

外は、すっかりと夕日が沈みかけて、全ての物がオレンジ色に染まっていた。

「もう、16時半か……。アイツ、瑞希に、上手く自分の気持ち言え

るかな…?」

俺は、ケータイを見ながら、タバコに火をつけて、暫く夕日を眺めていた。

Chapter 48

数週間後。

「なあ、みんなに相談があるんだけどさ？」

俺は、一緒に住んでいる俊哉達に相談した。

「みんな働いてんのに、俺だけ働いてないって…。なんか申し訳なくてさ…。そろそろ、バイトとかしようと思ってるんだけどさ…」

俺の相談に、俊哉は不安そうな顔を浮かべた。

「…お前、大丈夫か？まだ、そんなに人前に出れないだろ？また、この前みたいに発作が出るんじゃないかねえか…？」

俊哉の、俺を心配してくれる気持ちは、ありがたかった。

でも、やっぱりそういう訳にも行かず、

「いつまでも、甘えてられないよ。みんなに悪いから…。俺だって、病気克服したいしさ…。リハビリついでに頑張ってみるよ」

と、俺は、笑顔で三人を見た。

「お前がそう言うなら…。まあ、頑張ってみろ」

俊哉は、微笑んで俺を見た。

「無理せずに、静流のペースでバイト探せば大丈夫だからな？」

「ありがとう。竜也」

「そうそう。まだ、治ってないんだから、焦る必要ないんだからな」

「ああ。分かってるよ、充。みんな、ありがとう」

俺はその日から、自分のペースで働けそうな仕事を探した。

「俊哉はスタジオ、竜也はCDショップ、充はカラオケでバイト…。みんな、音楽関係ばかりだな。俺は、どうしようかな…」

そう言いながら、近所のバス停からバスに乗り、駅の方へ向かった。

「駅の辺りなら、結構仕事あるかな…。暫く、ブラブラしてみようかな…」

駅前の通りを、一人でフラフラと歩く。

「お願いしまーす」

街頭で、ビラ配りをしている若い女性がいる。

俺は、思わず差し出されたビラを手にとった。

「居酒屋か…。俺がやりたい事って、音楽以外に何があるんだろ…」

俺は、宛てもなく街中をさまよい歩いた。

ふと気付くと、俺は、L u m i e rの前にいた。

「…瑞希いるかな？」

俺は、休憩も兼ねて、L u m i e r に立ち寄った。

「えーっと…」

俺は、ウッドデッキ上の空席を探したが、あいにく、満席だったので、店内のカウンターテーブルに向かった。

「こんにちは」

俺はそう言うと、カウンターテーブルの真ん中の席に座る。

厨房から瑞希が出て来た。

「あら？ 静流。いらっしやい。今日は、一人で来たの？」

珍しいと言った表情で、瑞希は俺を見る。

「うん。バイト探しててさ。街中ならあるかなって思ってた…」

俺は、微笑んで瑞希を見た。

「そっか。でも、無理したらダメよ？ 静流は、まだ病氣治ってないんでしょ？」

「それ、みんなにも言われたよ…」

俺は、苦笑いを浮かべた。

「今日は、コーヒーで良い？」

瑞希は、微笑んで洗い立てのカップに手を伸ばした。

「うん。後さ、ちょっと小腹空いたから、サンドイッチも頼めるかな？」

「うん。分かった。ちょっと待っててね」

瑞希はそう言うと、厨房に向かって、大声で言った。

「マスター？サンドイッチのオーダー入ったから、よろしくね」

「ああ。分かった。瑞希？誰か、知り合いでも来たのか？」

厨房の中から、無精髭の生えた、30代後半くらいの茶髪で背が高い、白いカッターに黒のスラックス姿で、腰には黒くて、長いエプロンを巻いた優しいような男性が出て来た。

「やあ。マスター」

俺は、カウンター越しにマスターに挨拶をした。

「おお。静流じゃないか。よく来てくれた。今日は、一人か？」

マスターは嬉しそうに、俺を歓迎してくれた。

「うん。ちょっとバイト探しててさ…。小腹が空いたから寄ったんだ」

俺は、マスターにそう言って微笑んだ。

「そうか。バイト探してんのか…。この辺には、あんまり良さそうな仕事無いだろ？」

「うーん…。まだ何とも…」

「それに、お前、まだ調子良くないだろ？無理すんなって。静流の顔見てりゃ、誰だって、なんとなく分かるぞ」

マスターは、冗談混じりに俺を気遣う。

「うーん…。まだ良くないと言えば良くないけどさ…。でも、このままずっと、俊哉達の世話になる訳には行かないしさ…」

俺は、苦笑いしながら、切実な胸の内の事情をマスターに説明した。

「そうか。だったら、ウチで働けよ。ウチなら、お前も気楽に出来るだろうし、お前の事情も俺達は知ってるからな。調子悪い時は、言ってくれたら、俺達がフォローしてやるからさ」

「えっ？良いの？マスター…？」

俺は、マスターの提案に驚きながらも、恐縮していた。

「ああ。お前なら良いさ。それに、もう一人欲しいなって思ってた所だ。なにしろ、四人じゃ手一杯でな？忙しくてまともに休憩なんか出来やしない…。静流は確か、料理出来たよな？この前来た時に、よく料理作ってたって言ってただろ？もし、お前が手伝ってくれば、俺達は随分助かるんだが…。まあ、後は、お前次第だ。どうする？」

マスターは笑顔で、快く俺を歓迎してくれているようだ。

「静流、おいでよ。静流がウチに来てくれたら、あたしも嬉しいし。それに、女の子のお客さん、増えるかも。静流、カッコイイから」

瑞希も、冗談混じりに笑いながら、俺を誘ってくれる。

「マスター…。ホントにありがとう。俺で良ければ、よろしく願います」

俺は、マスターに深々と頭を下げた。

「良し。決まりだな。静流？ちよつとこっちに来いよ」

マスターはそう言いながら、俺の座っている席の前に来た。

そして、俺の腕を掴んで、店の奥へ引っ張って行った。

「ちよっ…、ちよ、ちよっ…。マスター？」

何が何だか分からない俺は、とりあえず瑞希に、

「ゴメン。コーヒー後で良いから」

とだけ言い残した。

瑞希は笑いながら、

「行ってらっしゃい」

と手を振っていた。

店の奥のロッカールームに連れて行かれた俺は、マスターから、

「静流は、服のサイズはMで大丈夫か？」

と、クリーニング仕立てのカッターシャツと黒のスラックス、黒いエプロンを手渡された。

「うん。Mで大丈夫。…って、マスター？もしかして、今から働けどか…？」

俺は、マスターの顔を覗き込んだ。

マスターはニヤリと笑みを浮かべた。

「やっぱり…？」

俺は、苦笑いしながら、マスターに言った。

「静流のロッカーはここな。この中に、自分の服とかを入れてくればよ」

突然の展開に慌てる俺を後目に、マスターは淡々と説明していく。

「じゃあ、表で待ってるからな」

マスターはにこやかに、ロッカールームを出て行った。

仕方なく俺は、渡された制服に着替えた。

伸びたい放題の栗色の長い髪をポニーテールで結び、エプロンを腰に巻いた。

準備が整い、ロッカールームを出る。

恥ずかしがりながら、俺は「コソコソ」と物陰に隠れながら移動していた。

「あっ！！似合うじゃないっ。静流っ！！」

「ビクッ！！」

突然、背後から声を掛けられ、俺は思わず硬直した。

ゆっくりと後ろを振り向くと、瑞希が俺を見ていた。

「や…やあ。瑞希」

俺は、苦笑いしながら瑞希を見た。

「成り行き上、こうなっちゃってさ…」

「マスター、結構強引だからね…」

瑞希も苦笑いを浮かべた。

「ど…、どうかな？」

俺は、瑞希に問いかけた。

「すごく似合ってるよ。静流にピッタリだね。カッコイイ、カフェの店員さんの出来上がりだね」

「おっ？ 静流、似合うじゃないか。カフェの店員が様になってるじゃないか」

瑞希とマスターは、俺の姿を見て絶賛していた。

「じゃあ、さっそく…。瑞希？ 静流に仕事を教えてやってくれよ」

マスターが、瑞希に指示を出す。

「はい。じゃあ、静流？ 空いた席のお皿、下げて来ようか？」

俺は、瑞希の後に付いて行った。

空の食器を片付けている最中、客の視線が自分に刺さる事が気になった。

（うーん…、見られてるよ…）

俺は、気付かないフリをして、トレイに乗せた空の食器を厨房に運んだ。

「静流？ デッキのお客さんから、オーダー取って来てくれないか？」

マスターは、矢継ぎ早に指示を出す。

「紙とペンは？」

「カウンターの辺りに置いてないか？」

俺は、マスターの指差す方向に目を向けた。

「あつ、あった。じゃあ、マスター。行ってくるよ」

「ああ。頼んだぞ、静流」

俺は、デッキの二人組の女性客の所へゆっくりと向かった。

「いらっしゃいませ。ご注文はお決まりですか？」

メニューを見ていた女性客が、顔を上げた。

「えっと…、ミルクティー2つと、サンドイッチを2つ…」

「はい。ご注文繰り返しますね。ミルクティー2つと、サンドイッチ2つ。以上で？」

「…はい」

心なしか、女性客の方が緊張しているように見えた。

「では、少しお待ちくださいね」

俺は、そう言い残して厨房へ向かった。

「ねえ？今の人、見た？」

「見た見た。カッコイイよね…」

「うん。カッコ良かったね」

女性客の、話声が微かに聞こえた。

俺は、右手の人差し指で、頬を掻いた。

(なんか…、照れ臭いな…)

俺は、厨房で待つマスターに、取って来たオーダーを伝えた。

「マスター？ミルクティー2つと、サンドイッチ2つだって」

「了解。俺は、サンドイッチ作るから、静流はミルクティーを淹れてくれないか？」

「紅茶の葉っぱは？」

「小さいパックにしたヤツが、カウンターの下の戸棚にあるから、それを使ってくれ」

「了解。これか…」

俺は、カウンター下の戸棚から、小さく、一回分ずつに小分けにパックされた紅茶の葉を2つ取り、カップにそれぞれ入れて、熱湯を注いだ。

色が、丁度良くなる頃合いを見計らって、カップからパックを取り

出した。

小さな水差し2つに、ミルクを注いで、角砂糖が入った小瓶と、淹れたての紅茶をトレーに乗せた。

「マスター？出来たからさ、先に持って行くよ？」

「ああ。任せた」

俺は、紅茶をこぼさないよう、ゆっくりと慎重に女性客の元へ運んだ。

「お待たせしました。ミルクティーです」

俺は、二人の前に静かに、ミルクティーを並べた。

「ありがとうございます」

二人は、微笑んで俺を見た。

「サンドイッチは、すぐにお持ちしますので、もう少し待ってください」

さいね」

俺は、微笑んで女性客を見た。

「あのお…」

二人組の内の一人が、俺に声を掛ける。

「はい？」

俺は、俺に声を掛けた女性客を見た。

「お名前は、何て言うんですか？」

女性客は、恥ずかしがりながら、俺の名前を聞いた。

「霞って言います。みんなからは、下の名前で静流って呼ばれてます」

俺は、微笑んで女性客の問いかけに答えた。

「静流さんってカッコイイですね。あたし、那奈って言います」

俺に話しかけて来た、女性客も俺に名乗ってくれた。

「静流さんは、いつもここにいますか？」

那奈と名乗った女性客に問いかけられた。

「今日から、働く事になったんですよ。昨日までは、フラフラして…。それに、こっちへ来たばかりだから、何も分からなくて…」

俺は、那奈と言う女性客の問いかけに答えた。

「そうなんですか？こっちは、お仕事探しに来たんですか？」

那奈は、俺の事に興味深げな様子だった。

「実は、俺、バンドやってるんです。で、本気でやりたくて…、地元から仲間達と出て来たんです」

「そうだったんですか！？ちなみに、静流さんは、どのパートやってるんですか？」

「俺は、ヴォーカルです」

「カッコイイですね。ライブとかやらないんですか？」

那奈は、テンションを上げながら、俺を質問責めにする。

「ライブは近々やる予定ですよ。良かったら、見に来て下さいね」

俺は、微笑んで那奈を見た。

「もう、絶対行きますよおっ！！また、ここに来たら、静流さんのライブの事とか分かりますよね？あたし、毎日でも来ようかな…」

那奈は、嬉しそうにはしゃいでいた。

すると、もう一人の女性客の方も、

「あたしは、彩花って言います。静流さんのライブ、あたしも行き

たいです。ライブ決まったら教えてくださいね」

と、微笑みながら俺を見て言った。

「もちろん。ありがとう。チケットは俺が確保して、サービスしますからね」

俺は、二人に微笑んだ。

「やったあ!!」

那奈と彩花は、顔を見合わせて喜んでいた。

「そう言えば…。静流さんって彼女さんは、どうしたんですか？つてカッコイイから、彼女さん、いそうですよね？」

俺は、その問いかけに、一瞬、動揺してしまったが、

「今は、いないんです。半年前に色々あって…」

と、当たり障りのない範囲で女性客に答えた。

「そうだったんですか…。ごめんなさい…。悪い事聞いちゃって…」

彩花は、申し訳なさそうに俺に謝った。

「いや、良いんですよ。大丈夫だから…」

俺は、自分に言い聞かせるようにそう言って、二人組に微笑んだ。

「じゃあ、すぐに持って来るので、ちょっと待っててくださいね」

そう言って、俺はその場を離れた。

「何かあったの？」

厨房に戻った俺を見て、瑞希が問いかけた。

「逆ナンされちゃった」

俺は、笑いながら瑞希に言った。

「さっそく、声かけられちゃったんだ？ 静流、モテモテだね」

瑞希は、意地悪く微笑みながら、俺を冷やかす。

「別に、そんなんじゃないよ…」

俺は、苦笑いを浮かべて更に言った。

「それにさ、「彼女はどうしたの？ いそうだけど？」とまで言われちゃったよ」

俺の話を聞いた、瑞希の表情が突然、曇った。

「静流…？ 大丈夫？」

そして、瑞希は、不安そうな顔で俺を見た。

「ああ。大丈夫。適当に答えといたから」

俺は、瑞希やマスターを心配させまいと、笑ってごまかした。

「瑞希？サンドイッチ出来たから、持って行ってくれないか？」

マスターは、俺を気遣ったのか、あえて瑞希に指示を出した。

「分かった。静流は、ここにいて？」

瑞希は、微笑んで俺にそう言いながら、サンドイッチをトレーに乗せる。

「俺、別に平気だから。二人共、そんなに気にしなくて良いよ」

俺は、二人に大丈夫だとアピールした。

「お前、ここに帰って来た時、辛そうな顔してたぞ？良いから、瑞希に任せとけ」

マスターは、微笑んで俺を見た。

「しょうがないよな…。好きな女が、自分の目の前で死んでさ…。

自分は、何も出来なくて…。俺が、お前の立場なら、絶対耐えられねえよ…。それでも、お前は頑張ってる。お前は、ホントに立派だよ」

マスターは、俺に同情しながら、微笑んで俺を見た。

「俺は、麻紀の為に、絶対にやらなきゃ駄目なんだ。だから、今、こんな事でへこんでたら、麻紀に会わせる顔が無いから…。麻紀が悲しむから…。だから、大丈夫」

俺は、マスターに微笑んだ。

「そうか…。でも、大したヤツだよ。お前は…」

マスターは微笑んで俺に指示を出した。

「静流？悪いんだけど、ここの食器、洗ってくれないか？」

「了解。あのさ？マスター？」

「ん？なんだ？静流？」

「マスター、結婚しないの？今の彼女と結構長いんでしょ？」

俺は、食器を洗いながら、マスターに問いかけた。

「うーん…、忙しくて、なかなか踏ん切りが付かなくてなあ…。来
年辺りにしようかって、彼女と言ってたトコなんだよ」

マスターは、俺の問いかけに苦笑いをしながら答える。

「マスター？結婚式、俺も、呼んでよ？俺、絶対行くからさ」

「当然、ウチの従業員は呼ばないと駄目だろ？じゃないと、後で、
瑞希達に何を言われるか分かったもんじゃない…」

マスターは、苦笑いしながら、俺が洗った食器を片付けて行く。

「あはは。約束だからね？」

俺は、最後の皿をゆすいで、マスターに手渡した。

「分かってるよ。よし、終わりっ!! 静流? 外へ一服しに行くぞ?」

マスターはそう言うと、厨房の裏口から外へ出て行った。

俺も、マスターの後に付いて、外へ出る。

マスターが、俺にタバコを一本差し出した。

「ほらよっ」

「ありがとう」

俺は、もらったタバコを口にくわえ、マスターからライターを借りて火をつけた。

「ふうー…」

俺達は、暫しの休息を堪能していた。

「やっぱり、働いた後の一服は良いよな?」

マスターが、しみじみと言った。

「そうだね。俺、久しぶりに働いたから、余計にそう感じるよ」

俺は、笑いながらタバコをふかした。

「マスター？ありがとうございます。俺なんかを雇ってくれて…」

俺は、マスターにお礼を言った。

「なあに。大した事じゃない。俺に出来る事はこれくらいしかない。それで、お前の助けになるなら安いもんさ」

マスターは、微笑んでタバコをふかしていた。

「明日も頼むぞ？ 静流」

「うん。任しといて」

俺達は、微笑んでお互いの顔を見た。

ちょうどその時、厨房の裏口が開いた。

「あっ!! いたいた。もう、またサボってる…。静流まで巻き込んで…。マスター? 電話よ?」

「げっ!! 瑞希っ!!」

瑞希の声に、慌てたマスターは、口にくわえていたタバコを、ポロリと落とした。

「早く、電話出てよね? タバコは捨てとくから」

そう言いながら、瑞希はマスターが落としたタバコを拾って、水が張られた灰皿に捨てた。

マスターは、瑞希に急かされ、慌てて厨房の中へ入って行った。

「マスター、目を離すと、すぐサボるから…」

瑞希は、呆れた表情でため息をついた。

「まあ、たまには息抜きも必要だよ」

俺は、苦笑いをしながら、タバコを灰皿に捨てた。

「違うのよ。マスターの場合、仕事3、サボり7だから…」

瑞希が、うんざりした顔でぼやいた。

「あはは。マスターらしいや」

俺は、笑いながら厨房のドアを開けた。

俺達が厨房に戻ると、マスターがちょうど電話を終えたらしく、受話器を戻していた。

「おお。静流に瑞希。曇って来たなあ。雨でも降るのか？」

マスターはそう言うと、デッキの方へゆっくりと出て行く。

「天気、微妙だな…。一応、屋根張っとくか…」

マスターはそう言うと、デッキに出て、店の壁に取り付けられたハンドルを回した。

「キィキィ…」

と、言う音と一緒に、庇の影に隠れて巻かれていた、テントのような物が、梁に沿って、徐々に通りへ向かって張り出して行った。

「これでよし…、と」

マスターは満足げに、店内へ戻って来た。

「さてと、暇だな。瑞希は、今日は17時までだったな？ 静流も瑞希と一緒に上がって良いぞ？」

マスターは微笑みながら、俺達を見た。

「分かった。マスター？ 俺、明日は何時に来れば良いかな？」

俺は、翌日の出勤時間をマスターに確認した。

「ん？明日は、朝の9時で良いぞ。静流と瑞希は、明日、9時～17時だからな」

「了解」

「ふわぁ～ぁ…。17時まで、後、一時間か…。さてと、俺は、コーヒー豆でも挽くかねえ…」

マスターはアクビをしながら、カウンターの隅に置いてある、コーヒー豆を挽く為のコーヒーミルに手を伸ばした。

豆をコーヒーミルの中へ入れて、ハンドルをゆっくりと回す。

「ゴリゴリゴリゴリ…」

コーヒー豆が、すり潰されて行く、乾いた音が響く。

「じゃあ、俺は、紅茶の葉っぱでも詰めようかな」

俺は、カウンターの下の戸棚から、紅茶の葉っぱが入った缶と、小分けにする為の小さなパックを取り出し、少し大きめのスプーンですくって、パックに詰めた。

それを、瑞希が次に使いやすいように、整理して箱に詰めて行った。

ピークを過ぎたカフェには、暫く穏やかな時間が流れた。

17時。

バイトの上がりの時間になった。

「お疲れさん。いきなり働かせて悪かったな、静流」

マスターは、苦笑いしながら、俺に言った。

「ううん。気晴らしになったし、これから働けるから嬉しいし、それに、楽しかったしね。マスター、ホントにありがとう」

俺は、マスターに笑顔で答えた。

「良かった。喜んでもらえて何よりだ。そうだ。静流のオーダー、すっぱかしてたな…。悪い…。今日は、俺のオゴリだ。食ってけ」

マスターは苦笑いしながら、挽き立ての豆でコーヒーを淹れてくれた。

「ありがとう。マスター」

俺は、笑顔でカウンターに座った。

「瑞希も、何か食ってけ。俺が、オゴるからさ」

「やったあ。マスター、太っ腹だね。ありがとう」

嬉しそうに瑞希は、俺の横に座った。

マスターは、微笑みながら俺達を見て、厨房に戻った。

ロッカールームから、瑞希と引き継ぎの、バイトの若い女性が出て来た。

彼女は、ショート黒髪で、切れ長の目が特徴的な知的な美人といった印象だった。

瑞希は、その女性に俺を紹介する。

「おはよ。この人、あたしの友達の静流って言うの。今日から、ここで働く事になったから。仲良くしてあげてね？」

「はじめまして。霞静流です。静流って呼んでくれたら良いから。よろしくね」

俺は、その女性に笑顔で挨拶をした。

「はじめまして。あたしは、品川希です。希で良いよ。よろしくね」

彼女も、笑顔で答えてくれた。

「おっ？希も来てたか？希も何か飲むか？今日だけ特別にオゴってやるから」

「なあ？瑞希？今日、マスター何かあったのか？」

俺は、小声で瑞希に問いかけた。

「多分、パチンコか何かで勝ったんだよ。いつもは、ケチだもん…」

瑞希は、上機嫌なマスターを横目で見ながら、俺に耳打ちをした。

「ふうーん…」

俺は、上機嫌なマスターの仕事を、カウンター越しに眺めていた。

「ここ良い？」

俺のが座っている席の横に、希が来て言った。

「うん。良いよ。マスター、今日は、上機嫌だね？」

俺は、希にそう話しかけた。

「そうそう。昨日、パチンコのお店から出て来るの、あたし見たよ。あたし、ちょうど友達と買い物しててさ？マスターが上機嫌で、お

サイフの中身確認しながら歩いてたのを、たまたま見ちゃった」

「瑞希の予想は当たりだね」

俺は、苦笑いをしながらコーヒーを口に含んだ。

「ほらっ。みんなで仲良く食えよ」

マスターは、大きな皿に盛られた、綺麗な色とりどりの具が挟まれたサンドイッチを、俺達の前に置いた。

「マスター？昨日勝ったんでしょ？いくら勝ったの？」

俺は、ニヤリとしながら、マスターに問いかけた。

「な…、何で知ってるんだ？」

「希が見たってさ」

俺と瑞希は、希を指差して言った。

「俺は、いつも希に見られてるな…。さては、希は、俺の事…」

「そんな訳ないでしょ？マスターの行動範囲が、単純で狭いだけ。そんなの、あたしじゃなくても、誰だって見るわよ…」

希は呆れた顔をして、マスターに反論した。

「うう…。俺は、冗談で言ったのに…。希って、相変わらずキツイよな…」

マスターは、カウンターの隅にしゃがみ込んで、一人でブツブツ言っていた。

「この二人、いつもこんなだから…」

瑞希は、苦笑いしながら俺に言った。

「ほらっ。男なら、ウジウジしない。さっさと仕事するよ？」

ミルクティーを飲み終えた希は、いじけるマスターの襟首を掴んで、厨房の中へ入って行った。

「マスター、タジタジだね…」

俺は、苦笑いを浮かべて、バイトに逆に指示される、可哀想なマスターの後ろ姿を見ていた。

「マスターには、希くらいの子がちょうど良いよ。すぐサボるんだから」

瑞希は笑いながら、マスターと希のやり取りを見ていた。

暫くして、瑞希が思い出したように言った。

「静流、薫の事ありがとね」

「ああ。あれね。大した事じゃないよ。結局、俊哉達も手伝ってくれて、説得したんだから。それに、報告は薫から聞いているから」

俺は、瑞希に微笑んだ。

「ホントにありがとね」

「うん」

コーヒーを飲み干した俺は、瑞希に言った。

「そろそろ、着替えて帰ろうか？」

「うん。そうだね」

空のカップと皿を、厨房へ運んだ。

「マスター、ご馳走様」

俺達は、マスターにお礼を言った。

「おお。お疲れさん。後で洗っとくから、その辺に置いていてくれ」

マスターはそう言いながら、冷蔵庫を開けて、食材の確認をしていた。

俺は、マスターに言われた通り、流し台の上に空の食器を置いた。

それぞれのロッカールームに入って、着替え、

「お疲れさまでした」

と、L u m i e rを後にした。

辺りはすっかりと、日も落ちてしまつて街中の色とりどりの照明が煌々と光っている。

「瑞希は、迎えが来るの？」

「うん。薫が、迎えに来てくれるって」

瑞希は笑顔で答える。

「薫、いつ来るって？」

「19時くらいになるって。今、18時半過ぎたから、あともうちよっとかな？」

瑞希は、腕時計を見ながら答えた。

「そっか。夜道は危ないから、薫来るまで、一緒にいてあげるよ」

「良いの？」

「ああ。大丈夫」

俺は、笑顔で答えた。

薫が来るまでの間、俺達は、近くのコンビニや、周辺の店を見て回った。

19時を少し回って、L u m i e rの前に薫が来た。

「おっ？ 静流？ こんな所で、何やってんだ？」

「ああ。今日から、ここで働く事になってな？ 瑞希と一緒にバイト上がったんだけどさ。夜道は危ないから、薫が来るまで一緒に待ってたんだよ」

俺は、事情を薫に説明した。

「そうだったのか…。それは、悪かったな。ありがとう。後、バイト見つかって良かったな」

薫は、微笑んで俺を見た。

「ああ。やっと、ちょっとだけ安心したよ」

「でも、静流は、まだ全快じゃないんだから、無理すんなよ？俺達には、お前は必要なんだからな？」

「ああ。分かってる。ありがとな、薫」

「ああ。静流も、色々ありがとな」

「ああ。じゃあ、二人の邪魔したら悪いから、俺、帰るわ。瑞希、お疲れ。薫？瑞希と仲良くしろよ？」

俺はそう言いながら、背中越しに二人に手を振って、バス停に向か

った。

バス停に、ちょうど来ていたバスに乗り込み、俊哉達のマンションに帰った。

「ただいま」

リビングのドアを開けると、三人が揃って酒を飲んでいた。

「おお。遅かったな。何やってたんだ？」

俊哉の問いかけに、

「今日から、L u m i e rで働く事になってさ…」

俺は、事の顛末を一部始終、三人に話した。

「そうか。良かったな。あそこなら、俺も安心だ」

俊哉は、微笑んでタバコに手を伸ばした。

「まあ、無理はするなよ？」

「そうそう。静流いる時に、俺達が邪魔しに行つてやるからさ」

竜也と充が、口々に言った。

「充？邪魔するなら来んな。邪魔したらつまみ出すからな？」

俺は、笑いながら充に言った。

「まあ、お前もここへ座れ。飲むぞ？」

俊哉が、俺に手招きをしてソファへ座るように促した。

「ああ。みんな、心配掛けて悪いな…」

「何言ってるんだ、静流？困った時は、お互い様だろ？俺達は、これと音楽で生きてんだ。今更、気を遣うな」

三人は、口を揃えて言った。

俺は、本当に心の底から、いろんな人達に支えられている事を実感した。

そんな人達の、笑顔や期待を裏切らないように、自分なりに精一杯やろうと、これまで以上に思った。

そしていつの日か、麻紀に、笑ってまた会えるように…。

（麻紀、見ててな？俺、絶対にプロのミュージシャンになるから…）

四人の、楽しそうな声が、夜の静寂に飲み込まれて行った。

夜空は、いつの間にか雲が晴れて、蒼白い満月が昇っていた。

Chapter 49

それから、月日は過ぎて…。

俺達「B・R a - Z E」は、精力的にライブをこなし、少しずつだが確実に、バンドの知名度と、ファンの人数を増やして行った。

B・R a - Z E 単独のライブをやっても、会場が満員になるくらいにまで、バンドが成長した頃の、ある日のライブの打ち上げでの事。

「今じゃ、関東でも俺達の名前は広まった。でも、俺達は今、やっとスタートラインに立てたんだ。俺達は、まだまだ行ける。まだまだ、気は抜けないぞ？ そうだろ？ お前達？」

俊哉が、俺達に檄を飛ばす。

「ああ。そうだね。俺達は、まだこれからメジャーにならなきゃいけない。インディーズの状態で、知名度が上がっても、それだけじゃ、やってる意味がないし…。それにもっと、いろんな人達に、俺達の音楽を聴いてもらいたいしね」

俺は、じっと前を見つめて、静かに口を開いた。

「とにかく、これからライブをこなしたり、音楽イベントなんかにも参加したりして、今度は、レコード会社の連中に、俺達の名前を売りつけてやろうぜ？」

竜也は目を輝かせ、左の手の平に右拳を軽く叩きつけた。

「俺も、もっと体力とパワーを付けないとね。もっと、ドラムの音に厚みが欲しいし。とにかく、俺達の音、もっと重く、それに、もっと綺麗に出したいよね？」

「そうだな…。それに、充の「うるさいドラム」が無いと、やっぱり、B・R a—Z Eじゃないよな？」

俺は笑いながら、充を見た。

「やっぱり、誰か一人でも欠けると、B・R a—Z Eじゃないよ。俺は、この五人で、この先の、俺達の未来の景色を見たいんだから。その為だったら、俺は、どんな努力だってするよ」

「そうだな。薫の言う通りだ。俺達は誰一人、欠けちゃいけない。五人が揃って初めて一つだからな」

俊哉は、薫の意見に微笑んで言った。

「…でも、一人一人は、全然バラバラで、まとまりはないけどね」

俺は、茶化すように笑いながら言った。

「静流と充が、わがまま過ぎるんだよ。大体、静流は遅刻魔な上に、気に入らねえと、とことん拒絶しやがるし、充は自分の欲望のままに動くし…。お前達、ちょっとは自重しろよっ!!」

俊哉は呆れた表情を浮かべながら、俺と充にするどいツツコミを入れた。

「へ？」

何の事だか分かっていない充。

「あはは。やっぱり、このメンバーは楽しいわ。いつまで経っても飽きが来ねえよ。なあ？薫？」

「確かに、そうだね。こんなに楽しいメンバーで音楽がやれるなん

て、俺、想像した事なかったよ」

竜也と薫は、笑いながら俺達を見ていた。

「とにかく、これから俺達五人が、もっと上手く連携しないとな。じゃないと、先は無いと思えよ？」

俊哉の一言で、全員に気合いが入った。

「もっと上のレベルを目指して、いつかはみんなで、高みに上り詰めてやろうぜ？」

「おうっ!!」

それから、三ヶ月後。

都内の、夏の音楽イベントに、B・R a - Z Eの出演が決定した。

それと同時期に、スタジオのオーナーから、あるレコード会社からの、

「一度会って話がしたい」

との、要請があった事を聞いた。

俺が東京へ出て来て、ちょうど一年が経つ頃の事だった。

「俊哉？どうするんだ？話、聞くのか？」

俺は、俊哉の考えを聞こうと、俊哉に問いかけた。

「ああ。一応、聞くつもりだ。こんなチャンス、滅多に来ないからな。お前達はどうしたいんだ？」

「当然。こんなデカイチャンス、棒に振れるかっての」

俺達は、声を揃えて言った。

「決まりだな」

俺達は、そのレコード会社の代表者と思われる男性に、後日、連絡を取った。

その男性から、「新宿駅傍の、ホテルのカフェで会おう」とのアポを取り付けた。

俺達は、レコード会社の男性と約束した日、指定された場所に、予定より10分早く到着した。

黒ずくめの俺達が、ホテルのカフェにゾロゾロと入って行く。

端から見れば、それは正に、異様な雰囲気と言うか、他の人間を圧倒するかのような、そんな威圧的なオーラを放っていた。

スーツに身を包んだ、一人の男性が、ためらいもなくこちらに近付いて来る。

「はじめまして。B・R a - Z Eの人達ですよね？」

その男性は、細身の長身で、ウェーブが掛かった少し長めの明るい茶髪で、見た目の若さからは、年齢はとても想像がつかなかった。

「そうです。あなたが、スタジオのオーナーが言っていた…？」

その時の俊哉は、

「本当に大丈夫か？」

と、言わんばかりの、半信半疑の表情を浮かべていた。

「はい。申し遅れました。私、「BLAST Records」の富永圭一と申します。つい、2年前に新規でレーベルを立ち上げまして…」

そう、その男性は微笑みながら、俺達一人一人に名刺を手渡して行った。

「桜井俊哉です」

「霞静流です」

「小野瀬竜也です」

「天城薫です」

「朝霧充です」

俺達は、それぞれに自己紹介をした。

「これは、ご丁寧にありがとうございます。ここじゃ、なんですから、とりあえず、奥の席にでも座りましょうか？」

俺達は、その男性に導かれ、カフェの一番奥の大きな席についた。

「ご注文は？」

上品なウェイターが、俺達が席につくや否や、注文を取りに来る。

「みなさん、コーヒーで？」

富永さんは、俺達を見た。

「はい」

俺達五人は、声を揃えた。

「じゃあ、ホットコーヒーを6つで」

富永さんが、ウェイターに告げる。

「かしこまりました。では、暫くお待ちください」

そう言うのと、ウェイターは一礼をして、俺達の席から離れて行った。

「いやあ、さっきのお話の続きなんですけどね？」

富永さんは、微笑みながら話を続ける。

「私、このレーベルを立ち上げる前は、大手のレーベルにいたんです。でも、いろんなしがらみや、私がやりたい事と、上の見解とじゃ、かなりの食い違いがありました……。私、本当はね、レーベルに所属してもらってる、アーティストの人達の思いや意見、やりたい事を尊重してあげたいんです。ですけど、今のこのご時世ですから、売れる曲作りばかり推進して、個性の欠片もない、それこそ、ホントに似たり寄ったりの「それ、何かのパクリなんじゃないの？」みたいな、「売れば、何でも良いや」的な、アーティストやオーディエンスを無視したような、音楽業界の風習や、レーベルの経営のやり方に嫌気が差してたんです。それで、自分で一からやろうと……」

で、私自身、自分の信念に基づいて、所属してもらえるアーティストの人達には、その人達の思うように、やってもらおうって…」

富永さんは、笑顔で自分の信念や、俺達、ミュージシャンに対する思いを話してくれた。

「私、実を言うと、この今の業界の風習や、レーベルの利益優先の経営方針をブッ壊したいんです。私からでも、少しずつでも、変えて行きたいなって…」

富永さんは、少し淋しそうな表情を浮かべた。

「富永さん…？俺達も、富永さんと同様に、今の音楽には満足していないんです。どれ聴いても似たり寄ったりで、大して感動も出来やしない…。いくらCD出そうが、ライブやろうが、それじゃ、金を出してまで聴いてくれる人達が可哀想で…。そんな物に金を出す価値なんか、とてもじゃないけど、見出だせる訳がない。俺達が、昔、味わった「感動と興奮」、それから「元気付けてもらえる事」。そんな事を、もう一度、今の若い人達に味わってもらいたいです。「鳥肌が立つ程の音楽は、まだまだあるんだ。全然、死んじやないんだぜ？」っていうのを見せたいんです。俺達一人一人、それぞれの気持ちや意見が違ったとしても、俺達は、自分達の信念のままに活動しています。だけど、その信念が、いつかは絶対、みんなの心に響いてもらえるって…。少なくとも俺達は、そう信じています」

俊哉は、俺達の気持ちを全て代弁してくれるかのように、俺達の思いも、富永さんに伝えてくれた。

「やっぱり、あなた達に話して良かった。私の想像通り…、いや、それ以上かもしれない。今の業界に、そんな熱い思いを持った人が、はたしてどれだけいる事か…。私自身、「そんな人達は、もういないかもしれない…。みんな、解散したりして、過去の物になってしまった…」と、思っていました…。でも、まだまだ探せばいたんですね。あなた達のように…。やっぱり、私のレーベルには、あなた達の力が是非、必要です。あなた達の話聞いて実感しました。もし良かったら、あなた達の力、私に貸してもらえませんか？」

「こんな、わがままな俺達でも良いんですか？」

俊哉は、驚いた表情で富永さんを見た。

「わがままなんて、とんでもない。あなた達は、自分の信念に一切妥協を許さない。「妥協を許さない事」と「わがまま」は別物ですよ？」

富永さんは、微笑いながら俺達を見た。

「そうだ。あなた達、今度のイベントでライブやるんですよね？だったら、私のレーベルから出演という事にしませんか？そうすれば、

CDをその会場で大量に売りに出す事も可能ですよ。それに、他のインディーズのバンドさんよりも、レーベルの名前が付いてる分、オーディエンスに対するインパクトも、十分ありますしね」

富永さんは、笑顔で淡々と話したが、俺達は内心、

「おいおい…。この人、サラリと恐ろしい事、言ってるよ…」

と、苦笑いを浮かべるしかなかった。

だが、こんなに大きなチャンスは滅多にあるはずも無い。

俺達にとっては、これが最初で最後のチャンスかもしれない。

俺達は、五人の顔を見合わせた。

「うんっ!!」

そう頷いて、五人で富永さんに頭を下げた。

「俺達で良ければ、是非、お願いしますっ!!」

頭を上げた俺達の気分は、とても爽やかで、今までやって来た事が「無駄じゃなかった。間違いじゃなかった」と実感した。

富永さんは、笑顔で俺達の顔を見て言った。

「私自身も、実は、B・R・A・Z・Eのファンなんですよ。初めて、あなた達の曲に触れた時に、「これだっ!!」って鳥肌立っちゃって…。それから、頻繁に、あなた達のライブに通ったり、情報収集したりなんかしてて…。あなた達の作る音楽は素晴らしいですよ。センスもあるし、技術もある。それに、カリスマ性までも…。だからでしょうか？意地でも、あなた達に、私のレベルに来て欲しかった。嫌がられても、拒否されても、蹴られても、殴られても、意地でも説得しようって覚悟してましたから。あはは」

富永さんは、笑いながら俺達の加入を喜んでくれていた。

「そんな、大げさですよ。殴る蹴るなんて、そんな大それた事、出来る訳ないし…」

俺達は、富永さんの話に苦笑いをしながら答えた。

「後、イベントで売るCDですけど、何か音源があれば、私にくだ

さい。私が、責任を持って作らせますから」

富永さんは、笑顔で俺達に優しく言った。

「ありがとうございます。じゃあ、また選りすぐりの曲を幾つか持
って来ますね」

俊哉は、笑顔で富永さんに音源の持ち込みを約束した。

「ちなみに、私の事務所、ここから近いんですよ。行ってみますか
？」

富永さんの提案に俺達は、

「ええ。是非」

と、事務所へ案内してもらおう事にした。

「じゃあ、会計済ませて来ますね」

そう言って、富永さんが席を立とうとした。

「待ってください。俺達も出しますよ」

俺達は、自分の財布を出そうと、それぞれのポケットを探った。

それを、富永さんは笑顔で、俺達五人を制止した。

「良いですよ。ここは、私が出しますから。みなさんはゆっくりしててください」

そう言い残して、富永さんは、会計をする為にカフェのレジへ向かって行った。

俺達は暫く、俺達のこれからの事について話し合っていた。

「お待たせしました。じゃあ、行きましょうか？」

富永さんの後に付いて、俺達もホテルを後にした。

外は春霞が掛かり、柔らかな日射しが俺達を包む。

ホテルから、10分程歩いた所で、全員が足を止めた。

そこは、摩天楼が立ち並ぶオフィス街のど真ん中だった。

「へえ…。高けえなあ…」

俺達は、空を切り刻むように並んだ、ちぐはぐな高さのビルの屋上を見上げて、圧倒されていた。

「私の事務所、ここの10階なんです」

富永さんは、俺達の右手にそびえ立つ、ほぼ、全面ガラス張りのビルを指差して言った。

俺達は、富永さんに付いて、ビルの中へ入った。

広いロビーの床は、大理石のような鏡面状の石のタイルが敷き詰められ、3階部分までが、吹き抜けになっていた。

2階、3階の吹き抜けの部分に面したフロアの中央部分からは、空中に飛び出すように、緩い螺旋状の階段が取り付けられていた。

俺達は、吹き抜け部分を横切り、正面入口に向かい合った、建物の奥の壁に設置されたエレベーターに乗った。

エレベーターのタワーは、全面がガラス張りで、みるみる内に、地上から離れて行く。

「私のレーベルに所属してもらってるアーティストさんなんですけど、実は、まだ少ないんですよ…。やっぱり、新規のレーベルじゃ、知名度なんかの問題もあるんでしょうね…」

富永さんのぼやきを聞きながら、俺達は10階にある事務所へと上がって行く。

10階に到着すると同時に、エレベーターの扉が開いた。

「事務所は、この右手の一番奥です」

富永さんに導かれ、俺達は、エレベーターホールから右手の一番奥の部屋へとゆっくりと向かった。

濃い水色の絨毯が敷かれた廊下は、大きな窓に面していて、窓は天井から床までがガラス張りになっていた。

俺達の足下の遥か下には、アリ程の大きさに見える、道行く車や人達が見える。

六人は、一番奥の部屋の前に立った。

扉を開けると、そこは、とてもレコード会社とは思えないくらいに、殺風景な静まり返った部屋だった。

ただ、見晴らしは最高に良い場所ではあった。

事務所の奥の、応接用の椅子に、一人の若い女性が腰掛けていた。

「やっと帰って来たのね。あら？その人達は誰？」

その女性は、俺達の気配を察知し、こちらを振り向いて言った。

「ああ。前に言ってた、B・R・A・Z・Eの人達だよ。今日から、ウチに所属する事になったからね。仲良くしてやってね？美羽ちゃん？」

富永さんは、その女性に俺達を紹介した。

「もしかして、中山美羽ちゃんじゃない？」

充が、その女性を見るなり声を張り上げた。

「充？知ってんのか？」

俊哉が、驚いた表情を浮かべた。

「俊哉、知らないの？今、有名な新人女性ミュージシャンだよ？その歌唱力の高さから、いろんなメディアが注目してるって」

「悪い、充…。俺も、知らなかった…」

「静流も知らなかったの？ダメだなあ」

充は、口を尖らせながら俺と俊哉を見た。

「俺達の中じゃ、ミーハーなお前しか知らねえよ…」

俊哉は、苦笑いを浮かべながら、充に言った。

「悪い…。実は、俺も知ってる…」

「俺も。美羽ちゃん可愛いから、初めてテレビで見た時から、ずっと気になってたし」

竜也と薫が口々に言った。

「ほらっ。そういう事に疎いのは、俊哉と静流だけだって。いかに、他の事の興味がなか、よく分かるよ」

充は、ここぞとばかりに、俺達を畳み掛ける。

「うるせえなあ…」

「フフフツ。あなた達、面白いのね。それに、すごく仲良しみたいだし」

美羽は、俺達を見ながら笑っていた。

「あたし、中山美羽。今、彼が言ってた通りよ。みんなよろしくね」

美羽は、微笑みながら俺達に挨拶をしてくれた。

長いストレートの金髪と、大きな目が特徴的な、いかにも「可愛いお人形さん」と言う表現がピッタリの女性だった。

「俺達はB・R a - Z Eと言うバンドをやってるんだ。俺は、バンドのリーダーで、ベースの桜井俊哉。よろしく」

「俺は、ヴォーカルの霞静流だよ。よろしくね」

「俺、リードギターの小野瀬竜也。よろしく」

「同じく、ギターの天城薫だよ。サイドギターがメインなんだ。よろしくね」

「俺、ドラムの朝霧充。夢は、XのYOSHII君やLUNA SEAの真矢君みたいな、凄腕のドラマーになる事。よろしくね」

俺達は、美羽に、口々に自己紹介をした。

「みんなよろしくね」

美羽は、微笑みながら俺達と握手を交わした。

俺は、ふいに俊哉を見た。

俊哉の様子が、いつになくおかしい。

俊哉は、握手をされた直後から、心なしか、顔が少し赤くなり、ソワソワした雰囲気醸し出していた。

（そうか…。こんな感じの子、確か、俊哉のツボだったよな…。ウチの姉ちゃんもこんな感じだし…。まあ、姉ちゃんは黒髪だけど…）

俺は、俊哉の気持ちを察知して、俊哉の顔を覗き込んだ。

「…な、何だよ？ 静流？」

自分の気持ちを悟られないように焦る俊哉。

俺は、そんな俊哉を見て、

「ニヤリ」

と、笑った。

俊哉が、自分の気持ちを俺に悟られたのが悔しいのか、ムツとした表情で俺を見た。

「クククッ…」

俺は、口に手を当て、笑いを堪えるのが精一杯だった。

「…後で、覚えとけよ」

俊哉が、ボソツと呟く。

富永さんと美羽は、そんな俺達を、笑いながら見ていた。

「そう言えば、あなた達は見た感じ、音楽のジャンルがヴィジュアル

ルロックって印象だけど、ライブだと、やっぱり化粧とかするの？」

美羽は、俺達に興味津々な様子だった。

「いや、俺達は化粧はしないんだ。確かに、昔はそういうバンドは多かったけどね。俺達は、見た目のインパクトで勝負はしないからあくまで、音楽で勝負したいからさ」

「静流は、ああ言ってるけどさ…。実は、俺達、化粧が誰一人として、ロックに出来やしないんだ。子供の落書きかってくらいに下手クソでさ…」

「あつ、竜也っ！！何、暴露してんだよ。せつかく、俺が良い事言ったのに…。台無しじゃねえか」

「しょうがねえだろ？ 事実な事実なんだからよ」

「ああ…、もう…、うるせえなあ…。どっちだって良いじゃねえか。化粧が出来ようが出来まいが、音楽には関係ねえよ。俺達は、「純粹に音楽で勝負する、ノーメイクのヴィジュアルロック」で良いだろ？ 細かい事、いちいち気にするな。そんなんじゃ、大成出来ねえぞ？」

俊哉は、俺達の言い合いを強制終了させる為に、俺と竜也の間に割って入り、話を勝手にまとめてしまった。

「フフフツ。あなた達、ホントに面白いね。あなた達がそんなだから、あなた達のファンも、自然とあなた達の世界に惹き込まれちゃうのかもね。あたしも、あなた達みたい楽しい仲間、好きだから。なんとなく、ファンの人達の気持ち、分かる気がするわ」

美羽は、俺達を微笑みながら見て言った。

「良いでしょ？美羽ちゃん？彼らだから出来る、彼らの世界…。俺達は、いつの間にか、彼らに惹き込まれてしまう…。彼らには、人を惹き付ける、特別な何かがあるんだよ」

富永さんは、微笑みながら、「自分の目に狂いがなかった」と言わんばかりに、得意げに美羽に言った。

「そうね…。社長にしては、珍しく当たったんじゃないの？」

美羽は、笑って富永さんを見た。

「美羽ちゃん…、「珍しく」は酷いなあ…。俺、こう見えても、目利きだけはしっかりしてるんだけど…。後さ、何回も言ってるけ

ど、俺は、社長って言われる程、偉くもなんともないし…。いい加減、名前で呼んでよ…」

富永さんは、苦笑いを浮かべながら、事務所のパソコンへ向かった。

「考えとくわ」

クスクスと笑い、美羽は、事務所の給湯室へと入って行った。

「富永さん？俺達は、どうすれば…？」

俊哉が、パソコンに向き合った富永さんに問いかけた。

「ああ…。その辺に適当に座ってください。今から、ウチとあなた達の契約書みたいな物を出しますから」

「それは、一般企業で言う所の「雇用契約書」みたいな…？」

「いやいや、そんな大げさで、堅苦しい物じゃないですよ。簡単には、「あなた達のフォローを、私達が全力でやります。その代わり、あなた達には、あなた達と、そして、音楽を手にする人達が満足出来る物、ライブにおいては、空間ですね。それらを作って頂く」と

：。そんな内容が書かれた書類にサインを頂くだけです。私達に雇用関係はありません。むしろ、一緒に仕事をする、同志とか仲間と言った関係に近いかもしれませんね。ですから、私達とあなた達は、対等な一人一人の人間として、これから接して行くような形になります」

富永さんは、微笑みながらプリンターに手を伸ばす。

「へえ。今までの、「縦社会大好き日本」とは、全然違う考え方だ。なんか、新鮮だし、堅苦しくなくて良いですね」

「言ったでしょ？「この世界をブツ壊したい」って。それは、「今までの日本の古臭い悪い習慣も」って事です。だから、私はそんな古い企業風土は捨てて、欧米的な企業風土を、更に進化させたような企業風土を目指してるんです。出る杭を片っ端から打ってたんじゃない、せっかくの財産を潰してしまうじゃないですか？今までの日本って、かなりの財産を無駄に潰して来た気がします。例えば、無駄な大金を、能無しな、ただ椅子に座ってふんぞり返ってるだけのオッサン達に使い過ぎてしまったとか。これは、とんでもない無駄遣いですよ。そんな能無しに無駄銭払うより、新しい才能に投資した方が、将来の財産に成り得るかもしれない分、よっぽど価値がありますよ」

「と、言う事は、俺達は、富永さんに俺達のどうなるか分かりもしない、不安定な能力を買われた…と？」

「そんなに、自分達を過小評価しないでくださいよ。あなた達には、未来がある。あなた達は、まだ粗削りかもしれない。だけど、磨けばきっと、誰よりも輝く気がします。私は、あなた達のフォローをする事は、全然、無駄とは思いません。むしろ、ここで磨く事を止めて、足を止めてしまう方が、時間の無駄です。だから、心配しないで、あなた達は、今まで通りに上を目指してください。そうすれば、きっと、ダイヤなんかよりも輝けるはずです。あなた達なら、きっと出来るはずです。一緒に頑張りましょう。私達のレーベルの人間も、また、同じ考え方で動いていますしね」

富永さんは、五人分の書類をプリンターから取り、俺達の前に持ってきて来た。

「じゃあ、これに一通り目を通してもらったら、一番下の欄にサインをお願いしますね。その後は、私に予定はありませんから、今度のイベントの打ち合わせでもしましょう」

俺達は、富永さんに言われるがままに、書類に目を通し、サインをした。

「全員、書きました」

俊哉が、全員の書類を集めて、富永さんに渡す。

ちょうどその時、美羽が給湯室から、人数分のカップに注がれたコーヒーと紅茶を持って出て来た。

「ねえ？少し、休憩しない？」

「ああ、美羽ちゃん。ありがとう。悪いね…、こんな事までしてもらって…」

富永さんは、苦笑いを浮かべながら、頭を掻いた。

「仕方ないわよ…。みんな、営業とかで出払っちゃったんだもの。あたしのマネージャーも、今、打ち合わせに行ったきりだしね」

美羽はそう言いながら、俺達が座っている、事務所の机の上に、コーヒーカップを置いて行った。

「そう言えば、圭ちゃん？」

「け…、圭ちゃん？」

富永さんは、口に含んだコーヒーを吹き出しそうになった。

「あら？「社長」は嫌だったんじゃないっけ？「富永さん」とかだと堅苦しいでしょ？だから、圭ちゃん。それとも、何か、文句でも？」

美羽は笑いながら、富永さんを見た。

「もう、何でも良いです…。文句も無いです…。美羽ちゃんに、お任せします」

そう言いながら、富永さんは苦笑いを浮かべ、コーヒーカップを口元に運んだ。

「あたしの、今度のコンサートの予定はどうなったの？」

「ギクッ」

富永さんは、美羽の問いかけに、一瞬、固まった。

「…まさか、忘れてたって訳じゃないよね？それに、忘れてたなんて、言わせないわよ？」

「いやあ…、それは、もう…。忘れるはずもないよ…。ただ、忙しくて、ちょっと…。日程のやり取りやなんか…。」

美羽の鬼気迫る尋問に、酷く怯えたように、富永さんの返答が徐々に、尻すぼみになって行く。

「やっぱり、忘れてたんじゃない…。早く、予定立ててよね？もうすぐ、新曲のレコーディングもあるんだから」

美羽は、酷くご立腹の様子だった。

そんな美羽に対して、富永さんは、

「…はい。やります。早急にやります。やらせて頂きます。日程にも余裕を持たせるし、会場もちゃんと押さえますから…。だから、どうか、雷を落とすのだけは、ご勘弁を…」

一生懸命に平謝りをしていた。

「次、忘れたら、覚えててね？」

美羽の微笑みからは、不気味なオーラが発せられていた。

「…はい。どうか、お許しを…」

それは、何の関係もない俺達ですら、背筋が凍り付くような感覚の恐怖を覚えた。

(こ…、怖ええ…)

美羽のそれを、ともに浴びせられた富永さんは、当然、たまったものではないはずだ。

「ごめんね。こうでも脅さないと、圭ちゃん、すぐ忘れちゃうから」

美羽は、さっきとはまた違う、別人のような微笑みで、俺達を見た。

「あはは。富永さんも、きっと忙しいんだよ。しょうがないよ」

俺達は、苦笑いしながら、富永さんをフォローした。

そう言いつつも、五人で引きつった顔を見合わせた。

(女って…、怖えな…)

「じゃあ、あたし、ちょっと出掛けるから。じゃあね、みんな」

美羽は、笑顔で事務所を出て行った。

俺達は、「やれやれ」と胸を撫で下ろした。

「じゃあ、気を取り直して、打ち合わせでも始めましょうか？」

富永さんは、それまで座っていた自分の席から、笑顔で俺達の元へ向かって来た。

「富永さん？別に、俺達に敬語じゃなくても良いですよ。なんか、逆にこっちが気を使っちゃって…」

俺は、苦笑いしながら富永さんを見た。

「ですよ？だって、あなた達と美羽ちゃんは、同じくらいの歳だし…。じゃあ、お互いに敬語、取っ払っちゃいましょう。その方が、私もやり易い」

富永さんは、どうやら、本当に、俺達と対等に接してくれるようだ。

「じゃあ、富永さん？今度のイベントでバラ蒔く音源だけ…。あれ、俺達は、インディーズとしてのベスト盤みたいな形にしたいんだけど、どうだろう？」

俊哉が、さっそく、富永さんに提案する。

「おっ！！それ良いね。俊哉、良いアイデアじゃん？」

俺は、俊哉の意見に賛成した。

「だな。ベスト盤みたいにするなら、俺達のファンは、喜んで買ってくれるだろうな」

竜也も、賛成らしい。

「ただし、どういう編成にして、どうバラ蒔くか…、だ。「何曲収録するのか？」とか「会場限定販売」なのか、「一般販売」も視野に入れるのか…」

俊哉は、真剣な表情で俺達を見た。

「もし仮に、それでやるとして、レコーディングするのに、君達のイベントの為の音合わせに影響は？」

富永さんは、俺達への影響を気に掛けていた。

「それは、大丈夫。音合わせしながら、レコーディングすれば、一石二鳥で出来るから。ただ問題は、録音が、まともに出来るスタジオを長時間押さえないきゃいけない事なんだよな…」

「俊哉君。それなら、多分、大丈夫。君達のホームグラウンドの、渋谷の「music place」なら、オーナーが俺の友達だから、長時間の録音も、なんとか出来ると思う。B・R・A・Z・Eとしては、何曲くらいを想定してるんだい？」

富永さんは、微笑みながら言った。

「俺が考えてるのは、12〜13曲だけ…」

「なあ？俊哉？アルバムの真ん中くらいと、ラストの曲の後に、隠しのボーナストラック入れたらどうかな？多分、発見した人は、サ

プライズのボーナストラックに喜ぶかもしれないし」

「へえ。静流君、そのアイデア良いね。俺も、どさくさに紛れて、自分の分を確保しとこうかな…」

「あはは。富永さんも、物好きだなあ。じゃあ、特別に、富永さんの分だけ、俺達五人のサインでもCDケースに入れとこうか？」

「えっ？マジで？良いの？竜也君？」

「別に、大丈夫だと思うよ。それくらいなら、簡単な事だからさ」

「そうだな。竜也の言う通り、その程度の事で喜んでもらえるなら、俺達は幾らでもやるよ」

「ああ、俺達は大丈夫。俊哉と竜也が言うようにさ。なんなら、100枚限定でサイン入れちまおうか？それを、先着で売ってさ」

「だったらさ？一人、20枚ずつにサインしてさ、合わせて100枚にしない？で、その20枚のCDの中に、サインした人が作詞、作曲、演奏した曲が、ラストの後に一曲、隠しボーナストラックに入れてるようにしてさ。例えば、この案の言い出しっぺの、静流のサインしたCDなら、静流が作詞、作曲して、自分でギターを弾

きながら歌ってさ。静流バージョンみたいな感じで、俺達、五人分を作る。手が込んで面白いかもよ？」

「充？それ、面白いけど、めんどくさくないか？」

「いや、薫。手間は掛かるけど、それも面白いかもな。誰かが、五人分それぞれのCDを、5枚買いつける事もあるかもしれないが、話題性があって良いかもな」

「そうそう。俊哉の言う通りかも。事前に、スタジオとかで宣伝しなくてさ。後から、どう違うのか聞かれたら、「聴けば分かります。CDのケースを開ければ分かります」って答えれば良いしね」

「静流？だったら、「先着1000枚限定」って言わずに、最初から1000枚限定にしないか？その方が、買う人も喜ぶだろう？」

「そうだな。竜也の言う通りかもね。ちよつと、俺達の手間は掛かるけど、買ってくれる人が喜ぶなら、それはそれでアリだな」

「じゃあ、今、静流君と充君が言った案の、それぞれのサインと曲入りのバージョン5種類、200枚ずつ、最後に竜也君が言ったように、合計1000枚限定販売って事にしようか？」

「富永さん？その方向で調整とCDの編集、出来る？」

「俊哉君、大丈夫。時間はまだあるし、これからやれば、夏には、十分に合うと思うよ」

「良かった。じゃあ、俺達は、イベントに向けて、CDの為の選曲と、新曲を作ったりするから。後は、富永さんに任せて大丈夫かな？」

「ああ。任せといて。君達は、何の心配もしなくて良いから、曲作りの方を任せたよ？」

「もちろん。お互いに協力して、イベントは絶対に成功させよう」

俺達は、イベントに向けての協力する事を約束し、当日に販売するCDの制作を、富永さんに依頼した。

「富永さん。また今度、音源を持って来るから、その時にまた、ライブの演出なんかを打ち合わせしよう」

「分かった。じゃあ、また選曲出来たら、教えてくれよ。こっちもそれまでに、色々と手配するからさ」

「ああ、ありがとう。じゃあ、富永さん。またね」

そう言って俺達は、事務所を後にした。

その夜。

俺は、一人で部屋のベランダにいた。

今にも吸い込まれて行きそうな、星空を見上げた。

「星が綺麗だな……。いつか、今日みたいな星空、麻紀と見てたっけ……。麻紀？聞こえるかい？」

俺は、胸元の形見の指輪を握り締め、夜空に向かってゆっくりと話かけた。

「見てたかもしれないけどさ……。今日、俺達の夢が、今まで以上に近付いて来たんだよ？やっと、麻紀とした約束、果たせそうだよ……。俺は、もっともっと歌って、俺達の曲、麻紀に届けるから……。声が枯れても、俺は、歌い続けるから……。麻紀と、大事な人達の為に……。だから、もう少しだけ、俺に力を貸して……。？」

俺は、夜空を見回した。

「頑張ってね、静流。頑張ってる静流、あたしは大好きだよ」

いつか麻紀に言われた言葉が、頭の中に甦る。

「麻紀……。ありがとう。俺達は、もっと有名になって、絶対に、聴いてくれる人達にとっての世界一のバンドになるから……。俺が好きなLUNA SEAや、麻紀が大好きだったGLAYみたいに……。絶対に、あんな風に大きくなるから……。だから、見ててね。いつか、また会う時には、いっぱい、俺のお土産話、聞かせてあげるから……」

俺の頬を、冷たい雫が伝う。

その時の俺の涙は、麻紀との約束を果たせる喜びと、自分達の夢が叶うと実感出来た喜びの涙だった。

夜空には、幾千、幾億の星が瞬く。

幾千の星空の下、喜びと優しさの雫が、星々の光で銀色に輝いていた。

Chapter 50

俺達は、富永さんの音楽事務所と契約した、その翌日から、さっそく、CDのレコーディングと、イベントの準備に取りかかった。

アルバム本体に収録する曲目は、五人で慎重に話し合わなくとも、すぐに決定した。

というか、全員がほぼ、同じ曲を選択していた為、そこまでじっくりと話し合う必要が無かったのだ。

唯一、話し合いらしい話し合いと言えば、収録する曲順くらいで、充の「強い要望」と、俊哉の「熱いこだわり」との折り合いを付ける程度の事だった。

そのおかげもあってか、各々のバージョン用CDの為の曲を、じっくりと考えて作る時間と、イベントの為の音合わせの時間、そして、音合わせと並行して、イベントで限定販売するアルバムの為のレコーディング作業の時間に割く事が可能になった。

それらの事に専念出来る時間は、俺達にとっては、確かに少ないけれど、それでも、夏の音楽イベントに向けて、今まで以上に内容の濃い物となった。

そして、その時間の余裕のおかげで、俺は、今まで心の中で温めて来た曲を、アルバムのボーナストラックの為に、音源化させるべきかどうかについて深く考える事が出来た。

「今の弱い自分の心と、まだ、何かが足りない自分の力で、はたして、この曲が上手く歌えるのか？上手く、自分の気持ちを表現しきれるのか？」

さらには…、

「この、俺のバージョンのアルバムを、手に取って聴いてくれる人達の心に、この曲の意味するメッセージは…、俺の気持ちは届くのだろうか？」

そして…、

「この曲は、俺にはまだ早いかもしれない…。まだ未熟な俺じゃ、きっと、心の中の全てを伝えきれない…」

「いや、この曲は、現時点での試作品として、やってみるべきだ。何も、今すぐに完成させなくても良いじゃないか…。俺が、ある程度レベルが上がったら、その時にまた作り直してみれば良い…」

このやり取りを、頭の中で何度繰り返しただろう。

そんなやり取りを繰り返しながらも、俺はある日、無意識の内に、ギターを手に取っていた。

そして、自分の頭の中にある、今まで温めて来たメロディを、ゆっくりと奏でる。

右手の人差し指と親指の指先で、軽く摘まれたピックの先端は、ギターの弦を優しく撫でるように上下に動く。

それと同時に、ギターのネックを支える左手は、指先全体が、まるで氷の上を滑るかのように、滑らかに、優しく弦を押さえながら、フレットの間を移動する。

そして、それらの動きが組み合わさった、ギターからこぼれるメロディは、聴く者全てに、まるで、弱くネジを巻いたオルゴールのような弱々しさと、さらには、今にもフェードアウトして消えてしまいそうな、そんな儚さすらも覚えさせた。

弱くて儚い…、そして、切なくて哀しい…、今にも消えてしまいそうな、アルペジオの旋律…。

けれど、ギターのアルペジオが奏でる儚いメロディの所々には、優しさと温かみすらも感じ取れた。

「これなら…、イケるかも…」

俺は夢中で、今弾いたばかりのコードを、一つ一つ丁寧に拾い上げ、何も書かれていない白紙のルーズリーフに書き留めて行った。

今すぐにでも掴まないと、風に吹かれて消えてしまいそうな、まるで、薄い朝靄あさぐものようなそんなメロディ。

そんな切なくて儚いメロディを、なんとか逃がす事なく、全てルーズリーフに書き留める事が出来た。

そして、俺は、ルーズリーフに書き留められたばかりのコードを、静かに見つめ直した。

じっくりとルーズリーフを見つめ直した後、今度は、そのコードに従い、もう一度、ゆっくりと同じメロディを弾き直す。

何度も何度も、繰り返し弾き続け、修正に修正を重ねて、やっと出

来た試作品。

俺は、その曲を、

「Minstrel Song」
ミンストレル・ソング

と名付けた。

「とりあえず、試作品は出来た。今度は、歌詞だな…」

俺は、頭の中に浮かぶ言葉を、先程、ルーズリーフに書かれたばかりのコードの下之余白の部分に、ひたすら書き連ねた。

まるで、子供の言葉遊びのように、次から次へと湧き上がる言葉を、ただ、思いつくままに、夢中で書き込んで行く。

書き連ねた、それらの言葉を、今度は、意味が通るように繋げていく。

そう。

それはまるで、夜空に散りばめられた幾千の星々を、線で繋いで、星座にするように…。

無造作に書き連ねられた言葉達もまた、夜空の星座のように形となつて、段々と表れて来る。

「よし。大体、こんなもんかな…」

今度は、メロディに従いながら、歌詞を見つめる。

曲を見つめながら、俺の頭の中に浮かんで来たのは、元気だったあの頃の、麻紀の優しい笑顔だった。

「ああ…。そうか…。俺が書きたかったのは…、歌いたかったのは、これだったんだ…。ずっと、頭の中で引っ掛かってた…。このメロディは、きつと、麻紀に聴いて欲しくて、ずっと、頭の中に響いてたんだ…。天国の麻紀の為に…」

俺は、自分自身の中で、この曲を作るべきか、作らざるべきか、ずっと迷っていたが、試作品ではあるが、この曲が「作品」として、なんとか形になった時、初めて、自分の無意識の感情を思い知った。

そして、その時、その曲が示す、もう一つ意味が俺の中に見えて来

た。

「これは、俺の「遺書」として遺しても良さそうだな……。やっぱり、まだ早いかな……。俺が、遺書を遺すには、まだ早すぎる。何も出来ない……。麻紀との約束が……。姉ちゃんや、巧兄、俊哉達との約束が……。まだ、俺は全然、守れてない……」

俺は、出来たばかりのその曲を、なんのためらいもなく、時が来るまで封印する事にした。

俺が、コードと歌詞が書かれたルーズリーフと、ギターを片付けようと、手を伸ばした時。

突然、部屋のドアを軽く叩く音がした。

「コンコン……」

「静流？ ちょっと良いかな？」

部屋のドアをノックした主は、俊哉だった。

「ああ。大丈夫」

俊哉は、俺の返事を聞き、ゆっくりと部屋に入って来る。

「何やってたんだ？」

「ああ。CDの曲作ってたんだ。ボーナストラック用のね」

俺は、そう言いながら、俊哉に出来たばかりの、コードと歌詞が書かれたルーズリーフを見せた。

「ふうん…。見て良いのか？」

「ああ。構わない。それよりも、逆に、俊哉にその曲について、何か感想とか聞きたいくらいだからさ」

俺は、苦笑いをしながら俊哉に、その一枚のルーズリーフを見せた。

「そうか。じゃあ…」

俊哉は、そう言いながら、俺の作った曲を眺めた。

「なかなか、良い出来じゃないか。これは、単体で発表しても良いな」

俊哉は、微笑みながら俺にルーズリーフを返した。

「いや、実はさ……。今の俺には、その曲はまだ早い気がするんだよね……」

俺は、自分自身の心の迷いを俊哉に話した。

「お前の気持ちだから、迷ったり、封印したりするのは仕方が無いかもしれないけど……。俺は別に、今、発表しても良いと思うぞ？ 今のお前の気持ちを表現するには、ピッタリの曲だし、今のお前の気持ちは、今のお前にしか歌えないんだから……。それに、あえて、未完成のままボーナストラックとして収録しといて……。わざとタイトルや曲の詳細な情報を非公表にして、ファンには、静流の意味深なメッセージとして残すってのも良いかもしれない……。それで、また時間が経った頃に……。俺達のレベルが上がった時に、正式に完成させて、タイトルと一緒に全て発表してしまえば、謎が解けたファンも、喜ぶんじゃないか？ 大体、封印してしまうには、惜しすぎる曲だぞ？」

その時の俊哉の一言で、俺の心の中に立ち込めた迷いの霧が、晴れて行くかのようにだった。

「まあ、一つの案としてだけどな？その曲自体を聴いてみたい。一回弾いてもらえないか？」

俺は、俊哉に言われるがまま、出来たての試作の「Minstrel Song」を俊哉に弾いてみせた。

俊哉は、静かに目を閉じ、一つ一つのメロディを耳で拾って行く。

俺は、そんな俊哉の心の奥底まで、一つ一つのメロディが響き渡るように、ありったけの感情を込めてギターを奏で、優しく歌った。

曲の演奏が終わると、俊哉は目を閉じたまま、静かに、一雫の涙を流した。

「お前の気持ち…、痛い程、伝わって来たぞ…。俺にも、お前の心の奥が、少しでも覗けたような気がする…。それと、お前の気持ちに分かって、少し安心した…」

俊哉は、ゆっくりと目を開け、淋しそうな表情で窓の外の曇り空を見上げた。

その時の俺には、俊哉の言った意味が理解出来なかった。

（俺の気持ちが分かって安心した？ どのような意味だ…？）

俺は、首をかしげながら、ルーズリーフをバインダーに挟んだ。

「それはそうと、俊哉？ 何か話があるんだろ？」

「ああ…、そうだった。忘れてた。あのな？ 今から、富永さんの事務所へ行くんだけどな？ お前も来るか？」

「ああ。どうせ暇だし、この曲を手土産に持って行っても良いかもね」

俺は、笑いながらそう言って、俊哉に付いて、富永さんの事務所へ行く事にした。

「ちょっと準備するから、待っててくれないか？」

俺は、俊哉にそう言うと、急いでギターと、出来たばかりの「Mistrel Song」が書かれたルーズリーフを、ギターケースに押し込んだ。

俊哉と一緒に、マンションを後にする。

外は、まだ雨は降り出しそうにはないが、どんよりと曇っている。

近所のバス停からバスに乗り、終点の駅へ向かう。

駅前のバスの終点で、バスを降りた所で、俺達は、偶然、瑞希に出会った。

「あつ。静流に俊哉兄。こんにちは。どこに行くの？」

瑞希は、バスから降りたばかりの俺達に気付き、嬉しそうに声をかけて来た。

「おっ？瑞希じゃん。俺達か？俺達は、今から事務所に行くんだよ。俺は、暇だから、ただ、俊哉に付いて行ってるだけなんだ」

「そうそう。こいつの病気の場合、気晴らしも必要だからな。俺が出る用事があったから、ついでに連れて来たんだ」

俊哉は、苦笑いを浮かべながら、瑞希に言った。

「ご迷惑掛けてすみませんねえ…」

俺は、唇を尖らせた。

「あははは。冗談だよ。悪かった、静流。それより、瑞希はどうして、ここに？」

「あたし？あたしは、今からバイトなの。バイト先に行くのに、いつも、ここ通るから」

「ああ、そうだったのか。引き止めて悪かった。気を付けてな」

「ありがとう。俊哉兄」

「瑞希？後で、俺達が寄るかもしれないから、マスターによろしく」

「静流？来たら、きっと、マスターに手伝わされるよ？」

そう言いながら、瑞希が笑った。

「えーっ！？俺、今日バイト、休みだぞ……？」

「フフフツ。じゃあ、またね」

「ああ。また」

そう言って、俺達は瑞希と別れ、それぞれ、別々の方向へと歩いて行った。

俺達は、駅の切符売場で切符を買った。

改札を抜けて、電車のホームへ。

「俊哉？今日は、富永さんの事務所に、何の用事なんだ？」

「ん？ああ、販売用のCDを、もう1000枚、増やしてもらおう
と思っただよ。その話し合いに行くんだよ」

俺は、何故増やすのか不思議に思って、俊哉に尋ねた。

「ん？増やして、売る宛てでもあるのか？」

「ああ。竜也のバイト先のCDショップが、俺達のCDを取り扱ってくれるらしくてな。つい、昨日の夜、その話を聞いたんだよ。だからな…」

俊哉は、嬉しそうに声を弾ませていた。

「えっ？マジで？スゲー…」

俺は、その話が夢のように思えて、ただ、他人事のように驚く事しか出来なかった。

「他人事じゃないんだぞ？もっと喜べよ？」

俊哉は、苦笑いを浮かべながら、俺を見た。

「だって…。実感が湧かねえしさ…」

俺は、口を尖らせた。

「まあ、無理もないよな？ 事務所と契約出来ただけでも、夢みたいな話だしな…」

そう言いながら、俊哉は、自販機の前に立ち、コーヒーのボタンを押した。

「ほらよっ」

俊哉は微笑みながら、俺にコーヒーを、優しく下手に投げた。

「おっと…。サンキュ。俊哉」

「ああ。どういたしまして」

俺と俊哉は、ホームのベンチに腰掛け、コーヒーを飲みながら、暫く、行き交う人々や電車を眺めていた。

「なあ？ 静流？ お前は、これからどうしたい？」

俊哉は、急に真剣な眼差しで、俺に問いかけた。

「どうしたいって、どういう意味だ？」

俺は、質問の意図が分からず、俊哉に思わず聞き返した。

「俺達は、インディーズレベルとは言え、一応は目標にしていた、「レコード会社との契約」は果たせたよな？でも、竜也は、あくまでも「メジャーレーベルへの移籍」にこだわってるみたいだけどな……。俺達は、もちろん、今まで、全員の意見が一致しない限りは、どの案も没にして来たよな？」

「ああ。そうだね。……もしかして、俊哉が、俺を外に引っ張り出してまで聞きたいのは、このまま、俺達が、「富永さんのレベルにいるのが良いのか、それとも、5年先、10年先にメジャーに移籍してるのが良いのか……、どっちが良いか？」そう言う事か……？」

「ああ。その通りだ。俺は、メジャーになれば、確かに、プロモーションの関係や、資金繰りの関係で有利な事は分かっている。ただ、富永さんが、この前、俺達に話してくれたように、メジャーには、俺達を縛り付ける、いろんな制約が出て来る。そうになると、当然、俺達のやりたい事、伝えたい事の範囲が狭くなって、結局、何もかもが中途半端に終わる気がしてな……？その点、全部が自己責任になっちゃってしまうけど、富永さんの所なら、俺達のやりたい事、伝えたい事が、納得の行くまで出来るだろ……？」

「まあ、そうなるよね」

「だろ？それに、これからの時代は、きっと、メジャーとインディーズの垣根が、曖昧になって来るような気がするんだ。もし、そうなったとしたら…。もう、どっちだって良いだろ？大体、違いつて言っても、「レコード協会に入ってるか、入ってないか」と「所属するミュージシャンの人数」くらいだけでさ…。メジャーは、俺達のリスクは少ないけど、俺達の儲けがピン撥ねされたり、制約やしがらみにがんじがらめ。それに比べてインディーズは、リスクはデカいが、儲けもデカい。それに何より、何するにも、俺達の自由だ。簡単には言ってみたけど、静流？お前ならどうする？」

「そうだな…。俺は、自由が好きだしな…。しがらみや制約は、必要最小限で良いからなあ…。重すぎるのは、苦痛以外の何物でもないし…。だったら、インディーズレベルのままで良いような気はするし…。別に、インディーズだからって、ライブが出来ない訳じゃないし、CDが出せない訳でもない…。何の問題も無いとは思うけど…。金の問題は別としてさ…。そう言う俊哉は、一体、どう考えてるんだ？」

「俺も、静流と同じだ。インディーズでも、全然、問題は無いしな。それに、インディーズは、これから伸びる気がするし…。俺達が、学生だった頃とは、少しずつ状況は変わって来てるし…。今は、CD出しても売れない時代になって来てる。それはきっと、メジャーでの規制と、社会の風潮なんかで、音楽のレベルが低下してる証拠だ。こんな時にメジャーに行っても、あんまり魅力は感じられないから…。だったら、俺達の好きなように出来る富永さんのレー

ベルで、俺達と一緒に、ついでに、「レーベル自体もデカくする」
って言う夢も出来るしな」

俊哉の話からは、かなり先の事まで見据えているのが窺い知れた。

「で、これから俺達は、その話をしに、富永さんの所へ行く…、と
？」

俺は、俊哉の考えている、将来のビジョンが、ほんの少しだが見えて来た。

「そう言う事。ホントは、全員で行きたかったんだけどな？けど、
みんなバイト行ったからなあ…」

俊哉は、残念そうに呟きながら、コーヒーを口に含んだ。

俺達は、暫く黙ったまま、行き交う人々を見つめていた。

「…なあ？俊哉？」

俺は、二人の間の沈黙を破るように、俊哉に、静かに問いかけた。

「ん？なんだ？」

「みんなが、どっちが良いって言うか聞いてみたいよな？」

「そうだな。竜也が、ホントに、メジャーにこだわってんのかどうか、知りたいしな…」

「大体、俺の性格じゃ、メジャーよりもインディーズの方が向いてる気がするしね…」

「まあ、お前の性格じゃ、きっと、レーベルの人間とケンカして、即、移籍ってのがオチだもんな？」

俊哉は、意地悪く笑って俺を見た。

「よく言うよ…。俊哉だって、すぐケンカに加勢するクセに…」

「ははは。確かに、そうだな」

「いつだったか、ライブの時に、俺が、観客とケンカした時だって…」

俺は、懐かしい昔話を思い出した。

「ああ……。そんな事もあったな……。大体、あれは、俺達にケンカ売ったヤツらが悪い。俺の仲間をバカにしたヤツを、黙って見過ごせるかっての」

「俊哉が、俺のケンカに加勢して、結局、充まで巻き込んで……。指くわえて見てた、あの時のギター、ケンカの後、ビビって辞めたんだもんな。あはは」

「そうそう。充も、お祭り気分で、ケンカに混ざってたもんな。静流は、ブチ切れて、テンパっちまって……。最終的には、関係無いヤツにまで絡んでたよな……。？おかげで、俺達は、暫く、「音楽が上手い」じゃなく、「ケンカが強い」で有名になったんだからな。あははは」

「そうそう。街とかで、目が合うだけで、避けられたり、いきなりケンカ売られたり……。そう考えると、俺達、大人しくなったよな？」

俺は、昔の出来事を懐かしみながら、微笑んだ。

「確かにな。あの時は、今の俺達の姿、想像すらしてなかったしな」

「ここまで来れたのも、充や竜也、姉ちゃんや巧兄、それと、一番はやっぱり、麻紀のおかげだろうな…」

「ああ。俺達は、周りの人に、いっぱい助けられて、支えてもらった。だから、これからは、俺達が恩返しをする番だな。静流？しっかり、頑張ろうぜ？それで、お前は、天国の麻紀ちゃんを、いっぱい喜ばせてやれ」

「ああ。分かってるよ、俊哉」

俺達は、微笑みながら拳を付き合わせた。

「さて…と。そろそろ行くか？」

俊哉は、コーヒーの空き缶を持ち、ベンチから静かに立ち上がった。

「ああ。行こう」

俺達は、次に、ホームに入ってきた電車に乗り、富永さんの事務所へ向かった。

それはまだ、メジャーデビューが、プロを目指す「ミュージシャンの卵達」にとつての「大きな目標」と、プロのミュージシャンとしての「大前提」として掲げられていた時代の事だった。

そして、俊哉の言った事は、そう遠くない未来、徐々に現実の物となって行った。

Chapter 51

俺と俊哉は、新宿駅から、富永さんの事務所まで歩いた。

駅から通りに出たところで、俺のある直感が働いた。

「雨の匂いがする…。そのうち、多分、降って来る…」

俺は、ポツリと呟いた。

「ああ？マジかよ…？お前が、そう言い出すと、絶対、雨降るからなあ…」

俊哉はそう言いながら、どんよりとした曇り空を見上げた。

「大丈夫だよ。この調子なら、雨はまだ、一、二時間は降らないから…」

俺は、苦笑いを浮かべ、空模様を気にする俊哉に言った。

「どっちにしろ、早く行かないとな？」

俊哉は、そう言いながら、歩く速度を速めた。

俺は、俊哉の後を、足早に付いて行く。

それから、10分も歩かない内に、俺達の視界に、BLAST RECORDSの事務所が入る、全面ガラス張りのビルが飛び込んできた。

俺達は、並んで正面入口から建物の中へ入る。

エレベーターに乗り、10階へ向かう。

そして…。

「コンコン…」

俊哉が、軽くドアをノックする。

乾いた音が、静かな廊下に響き渡った。

「失礼します」

俺達は、事務所内に入って行く。

「ああ。俊哉君、静流君。お疲れ様」

事務所で働く、若いスタッフが声を掛けてくれる。

「お疲れ様。今日は、富永さんは？」

俊哉は、スタッフに微笑みながら問いかける。

「ああ。今、ちょっと用事があるって出掛けたよ。多分、すぐ戻らんじゃないかな？もし、時間があるなら、あそこのソファに座って待っててよ」

スタッフは、事務所の奥にある、応接用のソファを指差して言った。

「ああ、ありがとう。じゃあ、待たせてもらうよ」

そう言いながら、俺達は、事務所の奥のソファの所へ向かった。

「二人共、コーヒーで良かったかな？」

「いや、忙しそうだから良いよ。後で、自分で淹れるから」

俺は、そのスタッフに微笑みかけた。

「悪いね…。今、いろんなイベントが重なってて、ちょっと手を焼いてるから…」

申し訳なさそうに、俺達に謝った後、そのスタッフは、思わず愚痴を漏らした。

「大変だね。俺達も、みんなの足引っ張っちゃってるしね…」

俺は、苦笑いを浮かべ、そのスタッフと暫く会話を続けた。

「さてと…、じゃあ、そろそろ仕事戻るから。二人共、ゆっくりしててよ」

そう言うと、その若いスタッフは、また慌ただしく、自分の事務机へと戻って行った。

俺達は、暫くボーッとしたまま、慌ただしく動き回るスタッフ達を眺めていた。

すると…。

「ただいま。どう？間に合いそう？」

ドアが開いた音がした直後、どこかで聞いた声がした。

ただ、俺達がいる所は、事務所の入口からは、ちょうど死角になっていた為、声や物音でしか様子を伺う事が出来なかった。

「ああ、お疲れ様です。なんとかかなりそうですよ」

「ああ、良かった。ありがとう。無理言って悪いね…」

「いえ。それよりも…、社長？俊哉君と静流君が来てますよ？」

「え？ ホントに？」

聞き覚えのある声は、あの、富永さんだった。

青い絨毯の上を、靴の踵が擦る音が、俺達の元へゆっくりと向かって来る。

「やあ、ごめんね。待たせちゃったみたいで…」

富永さんは、にこやかに俺達を迎えてくれた。

「いや、大丈夫だよ。それよりも、忙しいんだね？」

俺は微笑みながら、富永さんを見た。

「ああ…、いろいろと重なっちゃってね…。全部、俺の段取りが悪
いから…」

富永さんは、そうおどけながら、俺達の正面のソファに座る。

「まあ、暇すぎるよりは、良いんじゃない？」

俺は、苦笑いを浮かべた。

「まあね…。それよりも、今日は、どうしたんだい？」

富永さんは、俺達が事務所へ来た理由を問いかけた。

「ああ。実は…」

俊哉が、本題に入る。

「俺達のCDを、もう1000枚増やして欲しいんだ」

富永さんは、俊哉の言葉に目を丸くした。

「ん？何かあったのかい？」

「ああ。実はさ、竜也のバイト先のCDショップが、俺達のCDを置いてくれるって…」

俊哉は、嬉しそうに笑顔で富永さんに報告をした。

「え？そりゃ、すごい。じゃあ、さっそく手配しないとね」

富永さんも、嬉しそうに声を弾ませた。

「ああ。後は、俺達のそれぞれの曲を作るだけさ」

俊哉は、不敵に微笑みながら富永さんに言った。

「準備は、進んでるようだね。安心したよ」

「ああ、もちろん順調だよ。富永さん？それに、俺達は、俺達を信じて待っててくれる人達を、絶対に裏切ったりはしないから」

俺は、微笑みながら富永さんを見た。

「そうそう。今日は、富永さんにお土産があるんだ。俺のバ―ジヨンのCDに入れる予定の試作品なんだけど…」

そう言いながら、俺は、ギターケースを開けて、ギターとMins
treel Songが書かれたルーズリーフを取り出した。

そして、そのルーズリーフを富永さんに見せた。

「…見て良いのか？ 静流君？」

富永さんは、少し遠慮したように言った。

「ああ。構わないよ。富永さんの感想を聞きたいから」

富永さんは、俺が差し出したルーズリーフを手に取り、暫く黙り込んで、曲のコードと歌詞を見つめていた。

そして、一言、こう言った。

「静流君、ちょっと聴かせてもらえないかな？」

「ああ、良いよ。分かった」

俺はそう言うと、ゆっくりと、ギターのアルペジオを奏でる。

麻紀の笑顔が、声が、あの時のまま、俺の頭の中に甦る。

俺は、

「麻紀に届け」

とばかりに、ありったけの思いを込めて歌った。

切なくて儂い、そして温かいアルペジオ…。

そのメロディに乗せて、優しく囁きかけるように歌う。

俺の目に、麻紀が笑顔を浮かべて、この曲を聴いている光景が浮かぶ。

（麻紀…。これが、俺の気持ちだよ）

俺の気持ち、麻紀に届くように…。

その一心で作った、まだ未熟な俺のMinstrel Song。

俺は、未熟ななりに、今の自分の力を精一杯に出して演奏した。

愛する麻紀へ、俺の思いを伝える為に。

演奏が終わり、一呼吸置いて、辺りを見回した。

気が付くと、慌ただしく動いていたはずのスタッフ達も、それぞれの手を止めて、俺の歌を聴いていたようだ。

「パチパチパチパチ…」

辺りから、拍手が鳴り響く。

「すごく、綺麗な曲…。だけど、すごく悲しい曲だね…。あたし、つい、涙出ちゃった…」

若い女性スタッフは、涙を拭いながら、呟いた。

「静流君…。この曲、静流君のバージョンだけにを入れるのは惜しい

…。いつそのこと、全部のCDに入れてしまおうよ。この曲は、いろんな人達に聴いてもらうべきだよ」

富永さんは、Minstrel Songを痛く気に入ってくれた様子だった。

「実は、この曲は、ある女性の為に書き下ろした曲なんだ…」

俺は、麻紀の事を事務所にいる、全ての人達に話した。

「俺は、その子に一つでも多く、歌を届けなきゃいけないんだ…。それに…」

俺は、麻紀の死のショックから、突然、発作に襲われたりする病気になってしまった事も伝えた。

現在で言う所の、

「PTSD（心的外傷後ストレス障害）」

と言う名の病気の事を。

当時はまだ、病名や症状自体が広く一般的には伝わっていなかった為、普通に生活をしている人達には、全くと言って良い程、馴染みが薄い状態だった。

ただ、病気自体を簡単に言うならば、「トラウマ」だが、一般的にトラウマと言えば、

「精神に異常を来す程の重症の物ではなく、過去の失敗や、苦い経験等での思い出により、敬遠したくなる、または、敬遠するような出来事。もしくは、同じような経験を繰り返す事」

と言う誤解を生みやすく、それ故、

「単に、病気のフリをしているだけだ」

とか、

「そう言ったら、誰かが同情して助けしてくれると思っている」

等と、理解されない事が多かった。

更に俺の場合は、PTSDに加え、鬱病にも罹っていた為、他人に、俺の病気について話をする場合、余計に話はややこしくなった。

それでも俺は、

「嫌われても良い。気持ち悪がられても良い」

と、覚悟を決めて、その場にいた全員に、カミングアウトをした。

「こんな俺だからさ……。みんなに、「変なヤツだ」とか、「気持ち悪いヤツだ」とか思われたって仕方ないよね……。死んだ彼女の事ばかり考えてさ……。もう、この世界にいない彼女に縛られてさ……。情けないよね……。でも……。それでも俺には、彼女は、世界で一番大切な人だったんだ……。大好きだった……。幸せになれるって信じてた……」

俺は涙を堪え、声を震わせながら、麻紀との全ての事を話した。

俺の話が終わると、全員が、言葉を失ったようにうつむいて、暫く、沈黙の時間が続いた。

そして、その沈黙を破るように、富永さんは、ゆっくりと口を開いた。

「そうだったのか…。いや、どうりで、静流君にしか表現出来ない訳だ…。俺が最初に、君達の音楽に出会った時、君達の音楽には、「優しさと儚さ」が、感じられたんだ。今日まで、その感覚が「何だったんだろう？」って思ってたんだけど…。やっと分かった…。そんな事があったなんて…。辛かったな…。静流君。俺は、君に、何て声をかけてやれば良いのか…」

富永さんは、そう言いながら、頭を抱え、うつむいてしまった。

「別に、同情とかしてもらいたいとは思ってないんだ…。ただ、普通に接して欲しい…。俺を特別扱いしないで欲しい…。腫れ物にでも触るような対応をしないで欲しい…。それだけなんだ…」

そう言い終わった途端、俺は、急に胸が締め付けられ、呼吸をする事が難しい程の苦しみを覚えた。

「くっ…」

顔をしかめ、うつむきながら、段々苦しくなって行く自分の胸に手を当て、そして、力強く服ごと胸を掴んだ。

（や…、ヤバい…。まただ…）

そう思った瞬間、俺は、自分の背中に、優しい温もりを感じた。

「静流。落ち着け…。もう良い…。もう喋るな…。よく頑張って言っただな。もう安心しろ。後は、俺が引き受ける」

優しくて温かい感触の主は、俺の横に座って、ずっと黙って俺の話聞いていた俊哉だった。

俊哉は、俺の背中を優しく撫で、俺が、過呼吸に陥らないように、気持ちを落ち着かせてくれていた。

「そう言う訳だ。これ以上、静流に負担は掛けられない。俺は、静流のやりたいようにやらせてやりたい。だから、富永さんと契約したんだ。富永さんの熱い思いなら、きっと、静流の病気も受け止めてくれると思ったから…。だから、もし、富永さんが、みんなが、静流を受け入れてくれるなら、俺達は五人で、その時々、俺達の精一杯の事をやって、力を、技術を出し切ってベストを尽くす。それで、ゆくゆくは、この事務所自体も、メジャーのレーベルに負けないくらいにデカくしようって…。少なくとも、俺と静流は、そう思ってる。だから、みんな…。俺達に、みんなの力、貸してもらえないかな…?」

「俊哉…? ごめん…、俺の為に…」

俺は、俊哉の思いを知って、涙が出そうになった。

「良いって。気にするな。言っただろ？俺達は五人で一つだ」

俊哉の笑顔に、俺は今までに無いくらいの安心感を覚えた。

「俊哉君、静流君。もし、仮に、俺が…、俺達が、静流君の病気の事を聞いて、受け入れられないのなら、最初から君達にオファーはしなかったよ。俺には、初めて君達を、静流君を見た時から、影が感じ取れた…。それも、深く暗い影が…。そんな事は承知の上で、あわよくば、「静流君の影を、俺達がなんとか消してやりたい…」。そう思ったから…。だから、君達と話をしたんだ。ここに居る人間は、誰一人として、静流君を「変なヤツだ」とは思わないし、ましてや、「気持ち悪い」だなんて微塵も思っていない。むしろ、君の話が、気持ち聞いて、安心したくらいだよ。なあ？みんな？」

富永さんは微笑みながら、俺達の話の黙って聞いていたスタッフ達に、話題を振った。

「もちろんだよ。静流君。出来る事なら、協力するから。だから、俺達みんな頑張りようっ!!」

「そうそう。天国の彼女さん、いっぱい喜ばせてあげなきゃね？」

「俺だって、この事務所好きだからな？デカくしたいって思ってるのは、お前達以上だぜ？病気がなんだとか、そんな細かい事、いちいち気にしてられるかよ」

そう口々に、事務所のスタッフ達は、俺達に温かい言葉を投げ掛けてくれた。

「…だってさ。これで、納得出来たかな？」

富永さんは、俺達に微笑みかけた。

「ああ。ありがとう。富永さん、みんな…。恩に着るよ」

俊哉は、俺の気持ちを代弁するかのように、みんなに感謝の気持ちを伝えた。

「俺達は、大事な事を共有する者同士。だから、まあ、これから家族みたいなもんかな？」

富永さんは笑いながら、俺達に優しく語りかけた。

「ありがとう。みんなを裏切らないように、これから、俺達もベストを尽くす。だから、みんな、これからよろしく」

俊哉は俺の代わりに、事務所の全員に深く頭を下げた。

俺は、俺の為に、ここまでやってくれる俊哉に、ただ、ただ、脱帽し、頭が上がらなかった。

心の底からの、俊哉への敬意と、そして感謝の気持ちで胸がいっぱいになり、無意識の内に涙が溢れていた。

「静流君？良い仲間を持ったな？」

富永さんは、そんな俺に、優しく微笑みかけてくれた。

「…うん」

俺は、こぼれる涙をそっと指で拭いた。

「それとき、富永さん？」

俊哉が、急に話題を逸らすように言った。

「ん？何だい？」

富永さんは、俊哉の方を向いた。

「富永さんは、これからのインディーズとメジャーについてどう考えてる？」

俊哉は、ついさっき、駅で俺と話していた話題を、富永さんに振った。

「うーん……。簡単に言えば、多分、そう違いはなくなるんじゃないかな？例えばだよ？今、メジャーにいる、プロのアーティスト達を見てて、「売れてるな」とか、「良い曲だな」って思える曲やアーティストが無かったり、いなかったとする。片や、インディーズには、良い曲や、売れてる人達がいたとする。君達が、仮に聴く側の立場だったら、どっちを取る？この際、CDの流通量や、プロモの規模に関しては無視して考えてみて？」

富永さんは、真剣な表情で俺達を見つめた。

「そりゃ、もちろん、自分が良いって思う方だよな…」

俺は、率直な意見を言った。

「だよね？それが、一人や二人とかの少数なら、メジャーには到底敵わない。だけど、これが大人数になったとしたら…。どうだろう？」

「そりゃ…、作る側も、それを売り込む側も、売れる数が多い方を選ぶよな…？」

俊哉は、当たり前過ぎる内容の話を、首を傾げていた。

「そうっ！！そこだよっ！！」

富永さんが、語気を強める。

「へっ？」

俺達は、突然の富永さんの大声に意味が分からず、思わず目が点になった。

富永さんは、そんな俺達にお構い無しに話を続ける。

「大体、いくらメジャーにいるアーティストだからって言っても、売れてる時は良いけど、売れなくなったりしたら、そのアーティストはレーベルから弾き出されてしまうか、それ相応の扱いになってしまいかどっちかなんだよ。表現悪いけど、当然、その穴を埋めようとメジャーのレーベルも、より売れる方法なんかを探すから、自然とインディーズにも目が向いちゃったりする訳だ。要するに、メジャーだろうが、インディーズだろうが、「売れる」か「売れないか」だよ。「メジャーだから売れる」とか、「インディーズだから売れない」って訳じゃないんだよ。「売れる物は売れる」。きつとこれからは、この考えが基本になりそうだよな？まあ、全ての原則だけど…。だから、メジャーのレーベルも今まで通りに、インディーズから逸材を引き抜くだけじゃなくて、メジャーのレーベル自体が、インディーズのレーベルを吸収して、自分達のレーベルの下に付けたり、自分達でインディーズのレーベルを立ち上げて、「メジャーレーベルなのに、インディーズ？」みたいな不思議な事が有り得たりね…。そんな事がこれから、頻繁に起こるような気がするんだ。逆もまた然りでね。売れてるインディーズのレーベルが、ある日突然、メジャーのレーベルに格上げになるかもしれない…。その内きつと、戦国時代みたいに、全てがごちゃ混ぜになってしまつて、メジャーとインディーズの概念が曖昧になってしまふような気がするんだ。それも5年、10年の内にね」

富永さんの言った事は、正に、俊哉が感じ取っていた事と同じだった。

「ただ、メジャーとインディーズだと、表現によっては規制に掛かったり、掛からなかったりとか、プロモ関係や、利益とリスクとかで話は変わって来るから、やっぱり、違う所はハッキリと違うと思うけど。基本的には、自由度だと、メジャーはインディーズには勝てないし、信用度で言えば、インディーズはメジャーには勝てない。まあ、一長一短だよ。どっちを取るかは、結局、アーティスト達の裁量に委ねられるんだから…」

富永さんは、そう言いながら、タバコに火をつけた。

そして、また思い出したように口を開く。

「あっ！！誤解が無いように、一応言っとくよ。今の話の内容は、「俺が」じゃなくて、「業界が」だから…。俺は、「ウチに所属してくれてるアーティストの気持ちを尊重する」って言う信念は曲げないからさ…」

富永さんはそう言いながら、苦笑いを浮かべた。

「良かった…。富永さんが、俺と同じ考えで…」

俊哉は、安堵の表情を浮かべ、微笑んだ。

「どういう事？」

富永さんは、不思議そうな表情で俊哉を見つめた。

「ああ。いや、さっき、ここに来る途中で、静流とその話をしたんだ。これからのメジャーとインディーズについてさ。それこそ、インディーズとメジャーのハッキリした違いはあっても、その垣根自体が曖昧になりそうだって。俺は、理由までは深く考えてなかったけど、富永さんの話を聞いて、俺の仮設に理由が付いた。やっ」と確信したよ。「きっと、俺達の仮説は間違いない」って。富永さんの話の最初の質問には、「何の関係があるんだ？」って、合点が行かなかったけど、話を聞いてる内にそれも分かったよ。やっぱり、富永さんに話して良かった」

俊哉は、微笑みながら、富永さんを見つめた。

「俊哉君達なら、きっと、気付くと思ってたよ。これからの、音楽業界について…。ただ、俺の予想よりも早く気付いたみたいだから、びっくりしたけど…」

「あはは。富永さんは、初めて会った時から、俺達と同じ匂いがしたから…」

俺は、笑いながら運命の出会いを痛感していた。

正に、この二人が言ったように、これから先、この業界に变革が訪れるのだった。

この時はまだ、インディーズのCDは、レンタルはおろか、一般的に流通する事すら難しい時代だった。

それから、数年の内に少しずつではあるが、インディーズの曲も取り扱うショップが増えて行くのだった。

まるで、オーディエンス達の需要に合わせるかのように…。

Chapter 52

「…と、言う訳だから、俺と静流の答えは、「BLAST Recordsに、ずっと所属する」つもりだよ。今のメジャーは、俺達の肌には合わない。それこそ、今の音楽シーンが90年代のような時代なら、話は別なんだけども…」

俊哉はそう言いながら、タバコをくわえ、オイルライターでタバコに火をつけた。

『カチンッ。シュボッ…』

『パチンッ』

数秒間の無言の空間に、オイルライターの外装の乾いた金属音が響く。

「フゥー…」

俊哉は、長い金色の前髪を左手で掻き上げながら、煙を天井に向けて吐き出した。

「まあ、俺も昔はバンドやってたから、君達の気持ちはよく分かるんだよ。俺も、正直、今の業界にも音楽にも、あまり魅力は感じられない。世間が流行に左右され過ぎてる。下らない、「子供のお遊戯」みたいな物ばかりが流行ってしまっ、本当に能力のあるメジャーのアーティストさん達や、魅力のある音楽が、一部のふざけたお遊びみたいな物達に埋もれてしまっ、ホントに可哀想だよ」

富永さんはそう言いながら、ソファからゆっくりと立ち上がった。

彼の表情には、どこか淋しさが漂っていた。

「でもね？ 富永さん？」

俺は、俺達に背を向けて立ち上がった富永さんの背中に、静か語り掛ける。

「ん？ 何だい？ 静流君？」

事務所の窓に向かって歩き出していた富永さんは、俺の呼び掛けに足を止め、振り返って俺を見つめた。

「俺達は、信じてる。いつかはきっと、また実力が物を言う世界に

なる事を。そりゃ、流行り廃りはあるけどさ。結局、流行りなんて、一時的なものでしょ？良い曲は、いつまでも変わらず聴いてもらえる。カラオケとかで歌ってもらえる。一時的に流行った物は、時間が経てば忘れ去られてしまうか、「ああ。そんなのもあったなあ…」程度で、きつと軽々しく扱われて終わりだと思うんだ。だからよく、「そう言えば、あのバンド消えちゃったね。どこ行っただら？」、「さあ？」って言う事が起こるんじゃないかな？ホントに技術があるミュージシャン達なら、解散してから長い時間が経ったり、世代が変わったりしても、「名前は知ってる」とか「あつ。この曲、どっかで聴いた事ある」って、言われるから。これが、ホントに魅力のある音楽であり、ミュージシャンなんじゃないかと思うんだ」

俺は、自分の思っている持論を率直に富永さんに語った。

そして、富永さんは俺の持論に対して、こう話しながら、窓の方へと静かに歩き出す。

「…確かに。静流君の言う通りかもしれない。流行りに乗るだけなら、簡単な事かもしれないね。仮に、流行りに乗っかって有名になったとして、その先、自分達の知名度を維持し続ける事の方が難しく、並大抵の事じゃないからね。大体は、流行りが終わった途端、完全に無かった事として、「流行りと一緒に時間の流れに飲み込まれて、フェードアウト」なんて事の方が多い世の中だしねえ…」

富永さんはそう言い終わると、静かに窓のブラインドを上げ、外の景色を見つめていた。

「そうだよね……。だけど、俺達にとっては、それは絶対に避けなきゃいけない事なんだ。だから、自分達の作る曲に、一切の妥協は許されない。流行りだろうが何だろうが、そんな事には流されないで、常に上を見て、自分達の技術を磨いて、そして、遊ぶにしても、命懸けで遊ばなきゃ。じゃないと、聴く人の心には響かない。聴く側の立場に立って、心に響く音楽を作る。俺達が昔聴いて、影響をモロに受けた大物ミュージシャン達の音楽みたいに、今度は、俺達がそれを作って行かなきゃいけない。そして次の世代へ、また俺達の心や思いを繋げて行かなきゃいけない。こうやって、良い音楽は伝えられて行くんじゃないかな？」

俺の持論を、更に援護するかのように、俊哉の持論も続いて展開される。

「そう……。静流の言う事は間違いじゃない。だから、今の音楽シーンの大物ミュージシャン達や、解散して伝説にまでなっちゃった化物バンドさん達は、それをやり続けたから……。自分達の追い求める音楽に妥協を許さなかったから……。そう成り得た。聴く人の心に響く音楽を作ったから。自分達の心が、思いが、聴く人に届いたから。だから、今でも、その人達の作った命が籠った曲達を聴く人は聴いてる。それも、半端じゃない数の人間がな……。仮に、過去に解散して伝説になったバンドが一回だけでも復活したとして、ドームでライブでもやってみろ？きつと、即日、S O L D O U Tで、即満員だぞ？」

俊哉は独り言のようにそう言って、ソファの背もたれに寄り掛かり、天井を見上げ、溜め息と一緒にタバコの煙を吐き出した。

「そうだね。俊哉が言うように、良い物は時間が経っても良い物だもんね……。だからって言って、俺達は大物ミュージシャン達の音楽その物をパクってる訳じゃない。そりゃ、影響は受けてるから、多少、雰囲気なんかは似てしまうだろうけど……。俺達が、大物ミュージシャン達からパクるべきは、偉大なミュージシャン達の、「音楽への真面目な姿勢や生き様」なんだ。良い所は見習ってパクらないとね。そうしてれば、その内きつと、自分達のオリジナルの生き様なんかも、見えて来る気がするんだよね……」

持論を展開していく内に、俺の心の中に、「自分の生き様」のような物が、朧気ながら見えて来た気がしていた。

「君達は、大物ミュージシャン達と同じような匂いがするよ。俺には、君達が、大物ミュージシャン達が過去に成し得た偉業を、同じように再現出来る可能性が感じられるんだ。音楽のセンスもある、技術もある、カリスマ性もある。そして、何より、自分達の追い求める音楽に、聴く側から見ても、妥協が一切感じられない。俺は、君達のそういう、「音楽に対して、純粹で一途」な所に惚れたんだよ」

窓の外を見つめながら話していた富永さんは、微笑みながら振り向いて、俺達を見つめた。

「でもな？富永さん？結局の所、最後に評価を下すのは、富永さんでもなく、俺達でもない。紛れもなく、俺達の音楽を聴いてくれる人達なんだ。だから、俺達は、自分達に自己評価をするなら、絶対に満点にはしない。俺達自身が満点にしちまうと、そこで終わりだからさ。仮にみんなが、俺達に満点を付けたとしても、俺達自身の評価は90点。ずっと上を目指し続けるのなら、それで良い。みんなの期待を、良い意味で裏切れるように、俺達は、常に満点を取っちゃいけないんだ。だからと言って、自己評価が低すぎても、自分達に自信が持てなくなってしまうし、それに自信の無い気持ちなんて、ファンにはすぐに感付かれてしまうからそれも駄目だ。ファンは、何でもお見通しだからな。ごまかしは効かない。だから、そう言う意味でも90点なんだ」

俊哉は瞑想するように、両膝の上に両肘をつき、両手を組んで、うつむくように自分の眉間を、組んだ両手に当てていた。

「俺達は絶対に、これからの音楽シーンの頂点に立ってやる。とことんまでやるからには、そのくらいの意気込みは必要だからね。だけど、俺達はそれでも止まらない。止まらない。まだまだ、今度は、俺達に音楽の楽しさを教えてくれた、生き様を見せてくれた大物ミュージシャン達を超えられるように……。その時は、俺達を引っ張ってくれた富永さん達に、いの一番に、良い景色を見せてあげるからさ」

俺はそう言いながら、力強く拳を握り締めた。

「ありがとう。楽しみにしてるよ。それに、静流君達がそうだったら、亡くなった静流君の彼女さんも、きっと喜んでくれるはずだから…」

「ああ。富永さんの言う通りだな。俺達は、大切な人達の笑顔に会う為、大切な人達に元気と勇気をあげる為に、しっかりやらないとな。な？静流？」

富永さんと俊哉は、微笑みながら俺を見つめていた。

「…ああ。俺は、俺に与えられた事を、ただ命懸けでやるだけさ」

俺は、二人に微笑み返しながら静かにそう言った。

「さてと…。じゃあ、用事も済んだし、帰るとするか？」

俊哉は立ち上がりながら、俺に合図を送るかのように微笑みかけた。

「うん。じゃあ、富永さん。また」

俺はそう言いながら、ゆっくりと立ち上がり、ソファに立て掛けた自分のギターが入ったギターケースを左肩に掛けた。

「ああ。わざわざ来てくれてありがとう。二人共、気を付けて」

富永さんは、微笑みながら俺達を見送ろうと、俺達の後を付いて来る。

それに釣られるかのように、事務所のスタッフ達までも俺達に付いて来る。

「みんな、ありがとう」

俺と俊哉は、富永さんや、事務所のスタッフ達の見送りで、事務所を後にした。

エレベーターホールでエレベーターを待つ間、俊哉が俺に問い掛ける。

「静流？どうする？L u m i e rにでも寄って行くか？」

エレベーターに乗りながら、俺は俊哉の問い掛けに答える。

「ああ。ついでに、三人にも招集掛けようぜ？どうせ、みんなあの辺にバイト先固まってんだからさ」

俺はそう言いながら、ケータイを取り出し、

「バイト終わり次第、全員L u m i e rに集合！！来ないと、俊哉兄さんの雷が落ちる、落雷警報が出てるぞ」

と、打ち込んだ。

「ら、落雷警報って…。お前なあ…」

俺のケータイのメール画面を見た俊哉は、苦笑いを浮かべた。

「良いじゃん。これなら、一発でみんな来るしさ。ほら、昔から言うじゃん？「鶴の一声」ってさ」

俺は笑いながら、その内容のメールを、竜也と充、薫のケータイに一斉に送信した。

「これで良し…と」

そうこうしている内に、エレベーターは1階に到着した。

ビルの正面玄関から外へ出ると、ここへ来る前の曇り空と打って変わって、街は綺麗なオレンジ色の夕日に染まっている。

雨上がりの外の空気は、冷んやりしていて、ほんの少しだけ重く感じられた。

通りの路面が濡れている事を考えると、雨が降っていたという事実だけは分かった。

「ラッキーだったな…」

俊哉は、夕日を眩しそうな顔で見ながら、そう呟いた。

「俺の天気予報は、また当たったみたいだな」

俺は笑いながら、ビルの正面玄関の3段しかない階段を飛び降り、通りに出た。

「ホント、お前の天気予報は正確だよ。…降るか降らないかで言う

とな」

俊哉は足下を確認するようにゆっくりと階段を降り、意地悪く微笑みながら、俺を横目で見た。

「さすがに、降る量までは分かんねえよ…。もし、分かったとしたら、テレビの天気予報は要らねえじゃん？」

俺は、苦笑いを浮かべながら、駅へ向かって歩き始めた俊哉の後を追った。

「ははは。まあ、そうだな」

俊哉は、背中越しに笑いながら言った。

夕日を見ながら、俺達は、駅までゆっくりと歩いて行った。

電車に乗り、渋谷へと戻る。

俺達は、駅からLumierまでの道のりを脇目も振らず、歩いて行った。

Café de Lumière。

「よっ。二人共、お疲れっ」

薫が、ウッドデッキの上から、通りを歩いていた俊哉に気付いて手を挙げる。

「おお。お前達早いな…」

俊哉は足を止めて、微笑みながらデッキの上にいる薫達を見上げていた。

俺が俊哉の声に反応し、ウッドデッキを見上げると、一番通り側の席に、既に竜也と薫が座っていた。

俺は二人を見るなり、デッキの上へ向かって小走りをした。

「俊哉、早く上がろうぜ!!」

カフェの入口で一旦立ち止まり、俺は俊哉の方を振り向いて叫んだ。

「ああ」

俊哉はそう言って、俺の後をゆっくりと追うようにデッキの上に上がり、先にデッキに上がった俺達の元へと向かって来る。

「お前達は、集合掛けたらすぐに来るから優秀だな」

俊哉はそう言いながら、微笑んで薫と竜也を見つめた。

「そりゃ、あんなメール来たら、誰だって来るって」

竜也は苦笑いを浮かべながら、コーヒーを口に運んだ。

「あれは、勝手に静流が送ったんだ。俺は一切関係ねえよ……」

俊哉は苦笑いを浮かべ、そう言いながら、椅子の背もたれに手を掛けた。

「またお前か……。お前は、絶対に俺を嵌めるよな？」

竜也は、しかめっ面で俺を一瞥した。

「あははは。まあ、大事な話があったから、早い方が良いだろうって思ってたさ」

俺は笑いながら、膨れっ面の竜也の横に座り、竜也の肩を軽く叩いた。

「ったく…。お前には、敵わねえよ…」

竜也は、溜め息をつきながら俺を一瞥した後、苦笑いを浮かべてコーヒーカップに手を伸ばした。

ちょうどそこへ、瑞希が嬉しそうな表情でやって来た。

「いらっしやい。待ってたよ」

瑞希は満面の笑みを浮かべ、俺と俊哉を見つめた。

「瑞希？俺達にもホットコーヒーをくれるかな？」

俺は、瑞希に微笑み返しながらコーヒーをオーダーする。

「うん。ちょっと待っててね」

瑞希は嬉しそうな表情で、店内のカウンターへ向かって行った。

「充はまだか？」

俊哉は席に着いたままそう言って、通りを行き交う人を見回した。

「ああ。バイトがちょっとだけ延びるって言ってたぞ」

竜也はタバコに火をつけながら、俊哉にそう言った。

「そうか。じゃあ、もう少し待つか」

俊哉はそう言って席を立ち、店内のトイレの方向へ向かって行った。

「なあ、竜也、薰？」

俺は、二人に声を掛けた。

「なんだ？」

竜也と薫が、俺の顔を見つめる。

「新曲出来たぞ」

俺は微笑みながら、ギターケースの中から、あのルーズリーフを取り出した。

そして、それを二人の手元に静かに置いた。

「見て良いのか？」

竜也と薫が声を揃えて、俺の顔を覗き込む。

「ああ、もちろん。二人の感想を聞かせて欲しいんだ」

俺はそう言いながら、二人に微笑みかけた。

「じゃあ、静流がそう言うなら…」

竜也はそう言って、ルーズリーフを静かに開いた。

そして、二人は新曲の Minstrel Song が書かれたペー
ジを食い入るように覗き込む。

「…これって、麻紀ちゃんの事？」

竜也はそう言いながら、俺の顔を覗き込む。

「ああ。俺の頭の中にずっと引っ掛かったメロディと言葉を形に
したら、結局、麻紀の事になっちゃってさ…」

俺は、頭を掻きながら苦笑いを浮かべた。

「お前、麻紀ちゃんの事、よっぽど好きなんだな…？」

竜也が、意地悪く冷やかすように俺に微笑みかける。

「良いじゃねえか、別に…」

俺は、照れ臭さをごまかすように口を尖らせた。

「でもさ、静流の麻紀ちゃんに対する気持ちが籠ってて、すごく良いと思うよ。俺は、この曲、好きな部類の曲だな。ちょっと切なくて悲しいけど…」

薫は微笑みながら、薫自身のありがたい率直な感想を俺に聞かせてくれた。

「ありがとう。薫。でもさ、俺、いつまでも未練がましくて、恥ずかしいよね…?」

俺は、苦笑いを浮かべて薫を見つめた。

「バカだなあ、静流は…。どこが未練がましいんだよ？それだけ、麻紀ちゃんの事、大切なんだろ？この曲は、静流の優しさの塊だよ。良い事じゃないか。女の子を泣かせたり、女の子を取っ替え引っ替えするようなヤツなんかより、ずっと立派だよ」

薫は、俺の気持ちを理解してくれたような微笑みを浮かべていた。

「ありがとう。薫…」

俺が、次の言葉を言い出す前に竜也が割り込んで来る。

「お前が、それだけ優しいから、麻紀ちゃんはお前を選んだんだろ？もっと自信持てよ？お前の気持ちは、誰よりも俺達の方が分かってる。そりゃ、俺達でも麻紀ちゃんには敵わねえけどな。だけど、お前がそんなじゃ、麻紀ちゃんが泣くぜ？もっとさ、楽に行こうぜ？お前の事をバカにしたり、変な目で見るヤツは、俺達が正義の鉄槌を食らわしてやるからさ。安心しろ。それに俺も、この曲気に入ったぞ？既に、どんなアレンジ加えてやろうかウズウズしてるんだ。帰ったら一緒にアレンジしようぜ？」

竜也は、満面の笑みを浮かべ俺に優しい言葉を掛けてくれた。

「そうそう。竜也や薫の言う通り。お前のフォローは俺達がしてやる。だから、お前は、お前の思う曲を、詞を作れば良い。お前に危害を加えるふざけたヤツがいるんなら、この俺様がブッ飛ばしてやるさ」

俺の目の前には、夕日に照らされた笑顔の俊哉が立っていた。

「みんな…。ありがとう」

俺は麻紀がいなくなってからというもの、どうも涙腺が緩んでしまったようだ。

知らず知らずの内に、生温い雫が頬を伝っていた。

「別にいじめてんじゃねえんだから泣くなよ…」

竜也は、俺を笑わそうとわざとらしく意地悪を言った。

「はは…。そうだね」

俺は涙を手の甲で、

『ゴシゴシ』

と拭い、三人に微笑んだ。

遠くから様子を伺っていたように、タイミング良く瑞希が、二人分のコーヒーを俺達の所へ持って来た。

「静流？新曲出来たんだって？あたしにも聴かせてよ？」

瑞希も微笑みながら、俺を見つめる。

「ああ。分かった。じゃあ、充が来たらみんなに聴かせるよ」

俺は微笑んで、四人の顔を見た。

四人が俺を見つめる顔は、どこか温かくて優しさに満ちていた。

俺はきっと、他の誰よりも恵まれているのかもしれない。

俺が生まれた時から、全ては始まっていて、本当の親に捨てられた事は不幸では無く、幸せの始まりだったんじゃないか。

こうして、俺には困った時、辛い時に支えてくれる仲間がいる。

そして、短い時間だったけど、麻紀は俺にたくさんの「愛」をくれた。

俺に、「人を愛する事」を教えてくれた。

願わくば、麻紀とずっと一緒にいたかった。

俺の全てが朽ち果てるまで、麻紀の笑顔を見ていたかった。

けれど、それは決して叶わぬ夢であり、現実はとても厳しい物だった。

地獄に落とされた気分に戻って、暗闇で一人もがき続けた。

それでも、俺を見捨てずに手を差し伸べてくれた人達のおかげで、今の俺は地獄から少しずつ這い上がり、そして、幸せの方へ向いて歩き始めたのかもしれない。

今の俺がここにこうしていられるのは、ここにいる俊哉、竜也、薫、瑞希…。

それに、バイト中の充に、どこかでサボっている、Lumierのマスター、地元で俺を応援してくれている、姉や巧兄…。

俺達を引っ張ってくれた、BLAST Recordsの富永さんと事務所のスタッフ達…。

そして、誰よりも一番、俺の心の中で、俺の傍でずっと俺を支えてくれている麻紀と…。

俺は、いろんな人に助けられてここにいる事を実感した。

きつと、

「ありがとう」

と、何万回言った所で言い足りないくらい、俺は、いろんな人達に助けてもらっている。

こんな弱い俺を見捨てずに、温かく見守ってくれている人達の為に、

「俺の恩返し」

と、

「ありがとう」

を込めて…。

俺は、胸を張って朽ち果てられるように…。

「みんな、ありがとう。俺、不器用だけど、またみんなの足を引く張るかもしれないけど、頑張って生きるから。恩返し出来るように生きるから。だから、みんな…。これから、よろしくね」

俺は、ありのままの気持ちを、大声で伝えた。

四人は、初めは目を丸くしていたが、

「ぷっ…。くっ…。あははは…」

と、嬉しそうに笑いながら俺を見つめていた。

「俺、なんか変な事言った？」

四人の笑顔を見た俺は、何故笑われたのか理解出来ず、自分の頭の上に「？」が飛んでいるような気がした。

「何を今更「ありがとう」なんて言ってるんだよ？「ありがとう」なんか要らねえよ」

俊哉は笑いながら、俺の頭を軽く叩いた。

「そうそう。俺達は、仲間なんだ。遠慮は要らねえ」

そう言いながら、竜也まで俺の頭を叩く。

「静流？俺達は兄弟みたいなもんだ。困ってる兄弟を見捨てる程、俺は冷酷じゃないぜ？」

薫は俺に肩組みをして、耳元で囁く。

「そうそう。困った時はお互い様。それに静流は、あたしの大切な友達だし、憧れの人でもあるんだからね？ほらっ。笑って？」

瑞希は微笑みながら、俺を上目遣いで見つめた。

「悪かったよ…。みんな…。俺、もっと強くなるよ。強くなって、みんなに心配掛けないようにするから」

俺は、苦笑いを浮かべながらも心の中は、すごく晴れやかな気分で満たされていた。

「みんな、ホントにありがとう…」

俺は、心の中でそう呟いた。

ビルの谷間に沈みかけた夕日は、俺達五人の笑顔を暖かなオレンジ色に写し出した。

暖かい夕日の温もりと、温かい人の温もりを、自分の心と肌で感じていた。

優しい夕日に照らされて、幸せに向かって、俺達は、ゆっくりと歩き始める…。

Chapter 53

「それにしても、充のヤツ遅せえなあ…」

俊哉は、ケータイの待受画面の時計を見ながら、タバコに火をつける。

「フー…」

と、その時。

「ハアハア…。お待ちせ…」

俺達は声のする方へ、目を向けた。

目を向けた先には、疲れ果てた様子の充がいた。

充は、デッキの階段の所で前屈みになり両膝に両手をついて、肩で息をしていた。

「お前、汗びっしょりじゃないか…」

俊哉は心配そうな表情で、充に近付いて行った。

「ああ…。バイト終わって、全力ダッシュで来たから…。ハアハア…」

充はそう言って、微笑みながら顔を上げた。

「別に、そんなに慌てなくても良いだろ…」

俊哉は苦笑いを浮かべて、平手で充の背中を軽く、

『ポンポン』

と、叩いた。

「いやあ、待たせ過ぎると俊哉が怒るから…」

充はそう言いながら、俺達の所へ千鳥足のような足取りでゆっくりと近付いて来た。

「ちゃんとした理由があるんだから怒る訳ねえだろ…」

俊哉は苦笑いを浮かべながら、ゆっくりと充の後を追った。

「理由があっても、俊哉は絶対怒るね」

口を尖らせながら、充は俊哉を見つめた。

「お前のいつもの理由は、理由になるかよ。お前のは、ただの子供の言い訳」

俊哉はそう言いながら、充の額を人差し指で軽く小突いた。

「フンッ」

充はふてくされた表情で、そっぽを向いた。

「じゃあ、みんな揃ったし、始めるか？」

俊哉は、ふてくされた充の機嫌を取る事無く、さっさと本題に入る。

「そう言えば、なんで俺達はここに呼ばれたんだ？」

竜也の疑問に答えるように、俊哉は話を始める。

「今日はな……。富永さんの事務所へ、静流と二人で行って来たんだ。そこで話した事を、お前達に早く言いたくてな……」

俊哉はコーヒーを飲みながら、ゆっくりと落ち着いた口調で話す。

「内容は、この先の音楽シーンについてと、俺達のスタンスについてだ。まずは、これからの音楽シーンについてからだ」

俊哉の真剣な表情を見た竜也、充、薫は、身を乗り出すようにして、俊哉の顔を見つめる。

「うんうん」

「まず、お前達の意見を聞きたい。メジャーとインディーズについてな。お前達の気持ちを聞かせてくれ」

俊哉は三人の気持ちを、余程知りたかったのだろう。

いつもなら、

「まず俊哉が俊哉の持論を説明し、俺達が納得し、それぞれの意見を出し合う事」

が、俺達の話し合いの基本の構図だが、あえて今日はその構図を、俊哉自らが破り捨てた。

「うーん、メジャーとインディーズの違い……。そうだな……。簡単に言えば、プロとアマチュアの違いなんだろうけど……。やっぱり結局の所、金だろうな……。アマチュアでも……。まあ、売れなくはないし、ライブ出来ない訳じゃないけど、やっぱりプロには勝てないし……。俺の中じゃ、「メジャー＝プロ」みたいな方程式が成り立ちまってるからさ……」

竜也は苦笑いしながら、右頬を右手の人差し指で掻いた。

「俺も竜也と一緒にだな……。」「インディーズ＝まだ名前が売れてない」感があるし、昔からのしきたりじゃないけど、そこまで行ってやっとなスタートな感じがするし……」

充も、竜也とほぼ同じ考えのようだ。

だが、薫はそんな二人とは少し違った。

「二人が言ったそれは、大いにあると思う。けど、それだけじゃない気がする。メジャーとインディーズのはっきりした理由って言うのは、「売れる」「売れない」でも、テレビに出てるからどうか言う物でもないと思うんだよね。メジャーでも、売れない曲は売れないからさ。要は、目で見て分かるそんな単純な所じゃなく、もっと別な所に答えがある気がするんだよね…」

薫はそう言いながら、頭の後ろで両手を組み、椅子の背もたれに寄り掛かって空を見上げた。

「そう。竜也や充が言った事は間違いじゃない。正解の一つだ。でも、それだけじゃない。薫の思ってる事の中に答えがある。それはな…。基本的には、メジャーとインディーズのミュージシャン達の違いはそんなに無いんだ。ただ、それぞれの所属するレベルに違いがあるんだ」

俊哉は、淡々と話を続ける。

「メジャーと、インディーズ違い…。それは、「所属するレベル

が、レコード協会に加盟しているか否か」だけなんだ。それぞれのミュージシャン達の活動内容自体に、そんなに大差は無いんだ。まあ、儲けがどうか、知名度なんかは、別としてだけどな」

俊哉は、竜也、充、薫の顔を順々に見回した。

「えっ？ たったそれだけの事？」

竜也は、狐に摘ままれたような表情を浮かべて俊哉に聞き返す。

「ああ。それだけだ。だけどな？ たったそれだけの事が、メジャーとインディーズにとっての大きな違いだった。「レコード協会に加盟している事」だけで、メジャーの信用度はインディーズに比べて遥かに高い。それに、メジャーのプロモーション力にしても、自分達に降りかかるリスクにしても、インディーズのそれとは違いがありすぎる。インディーズはメジャーと比べると、信用度やプロモーション力は確実に劣る。その代わり、売れたら儲けはデカイ。が、売れなかった時の、自分達に返って来るリスクもデカイ。だから、みんな安定したメジャーにこだわった。これが今までのメジャーとインディーズの定義のような物だ」

俊哉は、さつき富永さんの事務所で、俺達が話していた内容とほぼ同じ事を、竜也達に話した。

「なるほどな…。で、これからはどうなるんだ？」

竜也は、先が気になるのか、答えを急かすように言った。

「まあ、落ち着け。ここからが重要なんだ。今までの話は、「メジャーとインディーズの違いについて」だ。今から言う事が、これから先に起こりそうな予感がするんだ。良いか？率直に聞く。今の音楽シーンで、何でも良い、テレビとかで印象に残ったとか、街角とかで通りすがりに聴いて思わず足を止めた…。そんな曲があったか？」

俊哉は真剣な眼差しで、竜也達三人を見つめた。

「うーん…。そう言えば、あるような無いような…」

竜也は腕組みをして、難しい表情を浮かべながら首を傾げる。

「俺は、美羽ちゃんの曲くらいかな…」

充が、ポツリと呟く。

「俺も、思い当たる節はそんなに無いなあ…」

薫も難しい表情で、ただ、コーヒークップを見つめたまま、微動だにしなかった。

「ほらな？ お前達が思う事は、少なからず、他人も思う訳だ。これが現実だ。これが何を指し示すのか…」

俊哉は、三人の答えが最初から分かっていたような口振りで淡々と話す。

「それはな。要するに、売れてないし、目立ってないんだよ。メジャーの曲が。90年代のCDの売れ方と明らかに違う。音楽離れもあるんだろうが、それだけじゃない。金を出してまで聴きたいと思える物が無いのさ。どの曲聴いたって似たり寄つたりの生温いラブソングか、どっかで聞いた事があるような、パクリみたいな曲…。こんなのが出回ってるからさ。「売れば何でも良い」こんな考え方しか持っていない今のメジャーのレーベルに、到底良い曲なんか作れるはずもない。そりゃ、そうさ。ミュージシャンの気持ちやファンの気持ちは無視して、自分達の利益だけ追っ掛けてんだ。当然の結果だろう。聴く側にもそんな浅ましい気持ち、簡単に見抜かれちゃう。だから、命懸けでやってるインディーズが、今はじわじわだけど、人気が出始めているんだよ。儲けなんかじゃなく、ただ単純に一曲一曲毎に、そのミュージシャンのひた向きさや、魂が籠ってるからな」

俊哉はそう言うと、落ち着かない様子でコートのポケットを探り始めた。

「チッ……。タバコが無くなっちゃった……。誰か、タバコくれないか？」

俊哉はそう言いながら、タバコの空箱を握り潰した。

それを聞くや否や、竜也が俊哉にタバコを差し出した。

「ほらよっ」

「悪いな、竜也」

俊哉は微笑みながらそう言って、口にタバコをくわえる。

「ああ。構わねえよ。それよりも、俊哉の話、もっと聞かせてくれ」

竜也は俊哉の話に、人一倍興味津々なようだ。

「ああ。じゃあ、続けよう。インディーズが売れ始めると言う事は、

自然とみんなの目がそこに向く訳だ。まあ、当然と言えば当然か。人は、人気がある方へ勝手に動いてしまうからな。それと、メジャーにはいろんな制約があつて、俺達の行動や表現に縛りが出て来る。だけど、インディーズにはそうした、明確な縛り事が無い。ただし、プロモーション力や、金銭的なリスクに関してはメジャーが有利な事は間違いない。じゃあ、何故、不利と分かつてるインディーズにミュージシャン達が振り向くのか…。それはやっぱり、自分達の気持ちに正直に向き合った結果だろうと俺は思う。メジャーには表現に制約が出ると言っただけ、俺達がもしメジャーにいたと仮定して、曲を作る上で表現が適さないとかで、変えざるを得ない状況になつたとしたら…？」

俊哉は、真剣な眼差しで話に耳を傾ける三人に話題を振った。

「そりゃ、俺達の気持ちが上手く伝えられないって事だから、結局、曲の中身は中途半端な物になってしまうかもしれない…」

竜也は神妙な表情を浮かべ、静かに呟く。

「そう。と言う事は、ファンにも意味は理解されないまま…」

俊哉の言葉に何か閃いたような表情で、薫が割り込む。

「そうか。だから、売れないんだ。俊哉兄が聞いた、「心に残った

曲は？」ってのは、そう言う意味か。確かに、これじゃいつまで経っても売れないよな。だから、過去に売れた曲を引き合いに出して、「似たようにすれば売れるんじゃないか」って言う、業界の悪い癖が悪循環になって、似たり寄ったりのパクリみたいな曲ばかりになってしまっただけ。正に、ドツボに嵌まったって感じだな。」

言い終わった後の薫は、どこかすっきりしたような表情だった。

「まあ、おそらくはそんな感じだろう。と、なると…、自分達の信念を曲げたくないミュージシャン達の中には、表現に縛りが無いインディーズにあえて留まろうとする者達も出て来る訳だ。まあ、大体のミュージシャンはメジャーを選ぶだろうけどな…。それに聴く側も、より良い物を探すから、インディーズにも目が向いて来る…。その結果、メジャーよりもインディーズが売れると言う事が起こり得るかもしれない。メジャーならCDが売れた場合、その儲けの何%かはレーベルがピン撥ねしちまう。…が、インディーズなら話は違う。売れなきゃ、損害は俺達が被るが、売れたら、売れた分から諸々の経費を差し引いた分が俺達の物になる。さて、お前達なら、どっちを取る？ちなみに、俺と静流は同じ答えだった」

俊哉は話の内容に段階を付け、少しずつその段階を踏みながら話をし、そして三人の本当の意見を聞き出そうとしていたようだ。

「そうだな…。そう言われると、インディーズにも魅力はあるよな…。メジャーの憧れはあるけど、結局やる事が一緒なら、どっちでも良いやって気にもなるし…」

薫は腕組みをしながら口を尖らせ、語尾を弱めて難しい表情を浮かべて考え込んだ。

「俺は、正直に言うよ。俺は、音楽は好きだし、何よりもこのメンバーが大好きだ。だから、メジャーだろうが、インディーズだろうが、五人で音楽をやれるなら俺はどっちだって良いよ」

充は無邪気な笑顔で、俺達と純粋に音楽が出来る事だけに幸せや、やりがいを見出だしたようだ。

「そうか…。充、ありがとな。俺だってこのメンバー以外で音楽をやる事は考えられない…。俺が音楽を辞める時は、みんなが音楽を辞める時だけだ…」

俺は、充に微笑みながらそう言った。

「何言ってるんだ。俺と静流は幼馴染みだし、それに親友だろ？それに、このB・R・A・Z・Eは、俺にとっては家族みたいなもんだ。そう思うのは当たり前じゃないか」

充は満面の笑みを浮かべて、俺を見つめた。

「そうだな」

俺は充の言葉が嬉しくて、ただ一言だけそう発し、微笑みながらうつむいた。

「竜也はどうだ？」

俺と充のやり取りを黙って見ていた俊哉は、微笑みながら竜也に問い掛けた。

「俺は…」

竜也はそう言うのと、うつむいて考え込んだ。

俺達は、竜也の気持ちを焦らさないように、静かにそっと見守っていた。

そして、暫く経ってから竜也は重い口を開いた。

「俺は、ずっとメジャーにこだわってた。何にも知らなくて、ただ、メジャーになれば売れると思ってた。違ったんだ…。俺の考えは

…。俊哉の話を聞いて、俺はやっと目が覚めたよ。メジャーだから売れるんじゃない、実力で売らんだって。俺だって、みんなと音楽をやりたいって気持ちは、このメンバーの誰にも負けない自信があるし、それに何よりも、俺自身がBーR aーZ Eじゃなかったら、俺が俺じゃない気もするし…。でも、もし、俺にチャンスがあるなら、メジャーに行きたいと思ってる。もちろん、この五人揃ってだけどな。俺達がどこまで通用するのか、いつかメジャーに行っ確かめたいんだ…」

竜也は顔を上げて真剣な眼差しで、俺達の顔を見ながら自分の気持ちを話した。

「そうか…。なら、良かった。竜也の本当の気持ちが聞けて、俺は安心した…」

俊哉は微笑みながら、静かに呟いた。

「どういう意味だ？」

竜也は不思議そうな表情を浮かべ、俊哉に問い掛ける。

「俺はな…。いや、俺と静流はな、竜也の本心を聞きたかったんだ。メジャーに対する思いを…。もし、竜也が適当な事を言うんじゃない、俺達の絆に亀裂を生むかもしれないし、生半可な覚悟でやってたん

じゃ、どのみち成功なんかしないからな。でも俺達は、竜也の気持ちを信じていたからな。疑っていた訳じゃない。だから、先走っちゃったけど、既にメジャーも視野に入れた手も打ってあるんだ」

俊哉は、竜也の本心を聞けて嬉しそうな表情で微笑んだ。

「えっ…？じゃあ、俺のメジャーに行きたいって気持ち、見抜かれてたのか？」

竜也は、俊哉に自分の気持ちを見透かされた事に対して驚いたのか、目を丸くして聞き返した。

「ああ。薄々はな…。静流がこっちに来た日、俺達のこれからの話をした時からな。でも、「簡単にメジャーを考えてたんじゃあな…」って思ってたんだよ。竜也の熱い気持ち、俺は受け取ったぞ。俺達五人で、メジャーの音楽シーンをいずれ変えてやろうじゃないか」

俊哉は微笑みながら、竜也に自分の右手を差し出した。

「俊哉…。ありがとう。俺、思い切り頑張るからさ。もっとレベルも上げるから、みんなでメジャーに行こうな？」

竜也は、差し出された俊哉の手を強く握り返し、今までに無いくら

いの嬉しそうな表情で俺達を見つめた。

「当然だろ？富永さんにも言っている。静流の病気の事も受け止めてくれるって言ってた。だから、俺達がああBLASTを、メジャーの世界へ押し上げるのさ。これで晴れて俺達はメジャーデビューって訳さ。富永さんは、信念は曲げないらしいからな。メジャーになっても、インディーズのように俺達の思うままに曲が作れる。どうだ？竜也？」

俊哉は得意気に胸を張って、竜也に微笑みかけた。

「インディーズのレーベルも、俺達と一緒にメジャーの世界に……。か。面白そうだな。俺達の野望が全て実現出来るのか。それなら、ずっと富永さんのBLASTへ所属したままで、ついでに恩返しも出来るんだな？そりゃ、良いなあ……。だったら、このままチンタラやってる暇はねえなあ……。良しっ。帰ったら早速、静流の新曲のアレンジしなきゃな」

竜也は満面の笑みを浮かべ、俺を見つめた。

「まあ、そう言う事だ。それに、今言ったような話がもしもこの先ずっと続くようなら、さっきも言ったが、俺がこれから起こりそうな事として思ってる事、つまり、近い将来きつとメジャーとインディーズの垣根も曖昧になると思うんだ。「メジャーだろうが、インディーズだろうがどっちだって一緒だ」って状況にな……。もしそう

なったら、「売れてるインディーズのレーベルがメジャーに」なんて事が起こる可能性が無い訳じゃない。その時は、俺達がBLASTと手を組んで、その波に一番に乗っかるんだ。俺達とBLASTが、これからの音楽シーンを引っ張って行くんだ。その為には、俺達は誰一人として欠けちゃいけないんだ」

俊哉は自分にも言い聞かせるように、俺達に檄を飛ばした。

「メジャーとインディーズの概念が曖昧に…、か」

竜也は、感慨深い表情で空を見上げた。

「そう。だけど、メジャーとインディーズの根本的な事、要するに、メジャーでの制約や、インディーズでの金銭的なリスクは今まで通り変わらないだろうと思う。でも、プロモーションに関しては、インディーズも必死になってやるだろうから、インディーズのプロモーションは、今よりはきっと良くなるはずだと思ってる」

俊哉の持論は、留まる事を知らない程に展開される。

「もし、俊哉の言う事がホントに起こるなら、それはそれで楽しいかもな」

竜也は微笑って、タバコに火をつけた。

「ああ。それに、富永さんが言ってたぞ？メジャーのレベルが、インディーズのレベルを立ち上げる可能性もあるってな。だから、その逆もあり得て良いはずだ。そうなったとしたら…、ホントにメジャーとインディーズの概念があやふやになっちまう。それはそれで竜也が言うように、多分、俺達にとっては楽しくなるだろうけどさ。まあ、先の話だから、保証はどこにも無いがな。それに今は、まだメジャーにアドバンテージがありすぎる。だから、余計にその話の信用性には「？」が付くけどさ…」

俊哉は微笑いながら、とっくに冷めてしまったコーヒーを口に運んだ。

「じゃあ、もしその時が来たら、俺達はその時に生き残って頂点に立つ為に、今から気合いを入れとかねえとヤバいって事か…」

竜也は、遠い目をしてそう呟いた。

「まあ、当然そうなるよな。だからその時の為に、俺達は力を合わせてレベルを上げとかないと…」

俊哉はそう言いながら残りのコーヒーを飲み干し、空になったカップを静かにテーブルの上に置いた。

「ああ。俺達は五人で一つだ。五人で絶対に頂点に立つ」

俺はそう言いながら、他の四人の顔を見渡した。

「俺達の音楽は、俺達にしか作れない。みんなの持てるだけの力を出し合って、とことんまでやりつくしてやろうぜ!!」

竜也は、握り拳を空に向かって突き上げた。

「よし。そうと決まったら、俺達も頑張らないとな？ 充？」

薫は、横に座った充を見つめて微笑った。

「ああ。俺は、もっとドラムを上手く叩けるようになってやる。世界一上手いって言われるようにね」

充は微笑みながら、人差し指でテーブルを叩き、ドラムを叩く真似事をした。

俺達の野望に向けて、また一段と五人の絆が深まって行った。

「俺達が必ず、これからの音楽シーンの頂点に立つ」

これを合い言葉に、俺達はより一層、音楽に対して本気で取り組む決意を固めた。

「ところで、静流の歌、そろそろ聴かせてもらっても良いか？」

竜也は、俺の曲が余程楽しみだったのだろうか。

突然、話題をガラリと変える発言をした。

だが俺には、無邪気に微笑む竜也の表情から、純粹に音楽が聴きたいという風な空気が感じ取れた。

「ああ。分かった。そんなに楽しみにしてくれてたのか…」

俺は竜也の気持ち嬉しくて、微笑みながらテーブルに立て掛けたギターを手に取った。

「当たり前だろ？音楽を聴くのは、俺にとってはガソリンの補給み

たいなもんだ。音楽から力をもらってそれを俺の燃料にして、音楽を作ったりギターを弾いたりするんだからな」

竜也は微笑みながら、

「まだか？まだか？」

と、言った表情で俺を見ていた。

「じゃあ、瑞希も呼んで聴かせてあげよう」

俺がそう言うと、他の四人が店内のカウンターに向かって一斉に、

「瑞希っ！！」

と、名前を呼んだ。

俺達の声聞いた瑞希は、カウンターからゆっくりとこちらへ向かって来る。

「なあに？」

瑞希は微笑みながら、俺達に問い掛ける。

「今から、新曲を演奏するから、瑞希も聴いてくれないか？」

俺は瑞希に微笑みながら、問い掛けた。

「うん。聴く聴く。早く聴かせて？」

瑞希は無邪気に笑いながら、俺のギターを見つめていた。

「じゃあ…」

俺はそう言っていると、手書きのコードを見ながら、ゆっくりと優しくギターの弦を弾く。

アルペジオのスローバラード。

切なくて儂い曲調のアルペジオに、俺は耳元で囁くような歌声を乗せる。

五人は静かに、俺の曲に耳を傾けていた。

目を閉じて聴く者がいれば、曲のテンポに合わせて首を揺らす者まで、それぞれが好きなようにリラックスして俺の曲を聴いてくれている。

そして、ギターを演奏しながら歌う、俺の肩に寄り添って座る麻紀の幻も見える。

（麻紀……。聴いてくれてありがとう）

俺は微笑みながら、足でリズムを取り、優しくギターを奏でる。

俺は目を閉じ、自分の世界に浸る。

俺の目には、元気だったあの頃の麻紀が浮かぶ。

麻紀の笑顔を思い出し、歌に俺の気持ちを乗せて……。

俺は目を静かに開き、エンディングのメロディを奏でた。

ギターの音色がフェードアウトして小さくなって行った。

ギターの音色が消えた瞬間、辺りからは盛大な拍手が響いた。

『パチパチパチパチ…』

俺は、拍手の音が明らかに多い事に驚いて、辺りを見回した。

いつの間にか、通りを行く人達が足を止め、デッキの席に座っていた他のカップルまでも、俺の曲に聴き入ってくれていたようだ。

「…静流。俺、感動しちゃった…。素晴らしいな…」

竜也は目を潤ませながら、俺の肩に腕を掛けた。

「ああ。こんな曲、俺は当分聴いてないぞ。ホントに綺麗なバラードだな」

薫も微笑んで、俺に拍手を送ってくれた。

「うう……。静流う……」

充は、どうやら感動し過ぎたのか、目から涙をこぼし、鼻からも雫をこぼしていた。

「充？どうでも良いけど、鼻水まで出てるぞ？」

俺は苦笑いを浮かべながら、充に突っ込んだ。

「グスッ……。悲しいけど、良い歌だね……。麻紀ちゃん、きっと喜んでるよ……。最後の歌詞、静流の気持ち、いっぱい詰まってた……。あたしには、分かったよ……」

瑞希は目を赤くして涙を流し、声を震わせて静かに言った。

周りからも、なかなか鳴り止む事の無い拍手の音が響く。

「静流？分かったろ？これが心に響く物だ。お前の麻紀ちゃんを大切に思う気持ちが、この人達の心に響いたんだよ。今のメジャーには無い、お前の魂の籠った力作だ。こんな曲達を、これから俺達は作って行くんだ」

俊哉は微笑んで、俺に言葉を掛けた。

「うん。俺の作った曲で、こんなに喜んでもらえるなら、俺はいくらだって作るし、歌い続けるさ。みんな、どうもありがとう」

俺は、俺の作った曲を聴いてくれた人達に感謝を込めて、深く頭を下げた。

「ライブ行くからね」

「頑張れよ」

「良い歌、聴かせてもらったよ」

「ありがとう」

周りの観衆からは、俺にとってプラスになる、いろんな温かい声が投げ掛けられた。

俺はその言葉に、立ち上がって改めて感謝の気持ちを込めるように、大声で叫んだ。

「どうも、ありがとうっ!!」

『パチパチパチパチ…』

盛大な拍手が、カフェ全体と目の前の通りを包み込んだ。

俺達はこの日を境に、また少しずつ新しいファンを獲得して行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8516k/>

夏恋 - minstrel song -

2011年4月13日21時00分発行